

かつたのです。貴女の同情的な眼が愛撫に他ならなかつた。私の苦悶を見て注ぐ貴女の涙が愛撫に他ならなかつた。併し、誰だつて、貴女を見て愛を感じずに居られやうか？ たつた今此所に集まつた七人の患者は、みんな貴女に戀を抱いて居るんですよ、コラリイさん。ヤ・ボンは、貴女の歩いた跡の土を崇拜します。たゞ、みんな心の底に秘めて居るだけ。誰も口に出す事は出来ないのです。私は士官です。だから躊躇も、思ひもせずに打明けます。信じて下さい」

コラリイは、燃えるやうな頬を手で抑へ、前かゞみに成りながら、黙つて居た。彼は鳴りひびくやうな聲で言葉をつづけた。

「躊躇も思ひもなく言ふと言つた意味は分りましたかね。え、分らない？ もし私が大戦以前に今のやうな不具者であつたら、決してこんな自信を以て戀しはしなかつたらう、そして、戀を打明けるにも卑下したり、自分のさうした振舞ひに就てもお詫びを乞うたりしたでせう。けれど、今はさうぢやない……あゝ！ 信じて下さい、コラリイさん、貴女といふ婦人、そして自分の愛する婦人に面と向つて居たつて、

私は決して自己の不具など顧みないのだ。ほんの一瞬間だつて私が貴女の眼に、滑稽にも不遜にも映らうとは感じないのだ」

彼は息をつぐやうな様子で言葉を切つた。それから立上つて、話を進めた。

「それは、屹度斯うなくちやならないのです。戦争で不具になつた者が、決して自分を流浪人や尻振り鴨や、癪病人と同等に思つて居ない事をみんなが諒解しなければならぬ。彼らは自分を常態の人間だと信じて居るんですよ、さうだとも、常態の人間だ！ 片脚が短いつて！ それが何だ？ それが人間の脳や情操を缺かすつても言ふのですか？ それでは、戦争が私の片脚や片腕を、いや、たとへ両腕を奪つた爲めに、私はもう拒絶される覺悟と、憐愍を受ける豫想とを持たずには、婦人を愛する權利がないのだらうか？ 憐愍！ だが、私共は婦人から憐愍を受けようとは思はない、又、強ひて愛して貰はうとも努めなければ、婦人が不具の私共を親切に扱つて呉れるからと言つて、仁恵だと解したくさへない。婦人から、廣く世界から、路上に出會ふ人々から又我々と同

じ不具の人々から、我々が要求するのは、不具者も他の人間と同様、絶體に平等視されん事なのだ。幸運な生れ合せや臆病風に救はれて我々の受けた宿命を受けずに済んだ普通人と差別を付けて貰ひたくないと言ふことだ」

士官は、暖爐の飾臺を、もう一度暇つた。

「さうだ、絶體的平等！ 我々人間は誰も彼も、片腕なからうが、片脚失はうが、片眼つぶれやうが、両眼無くしやうが、跛足であらうが畸形であらうが、みんな一緒に誰と比べても靈肉に於て正に同等に善である主張するのです。恐らく、不具者の方が他の奴より優れて居るかも知れない、どうです！ 曾つて兩脚を以て敵に突進して行つた者が、その脚を失くしたからと言つて、事務室の火に脚を暖めて居る人間と比べて、人生に於て劣等だと言へやうか？ 何と言ふ馬鹿らしい！ 我々は他の者と分け隔てなく、太陽の下に席を與へられたい。それは我々の必然で、どうして獲得し、保存するかも今に分るんだ。我々が參與を拒まれる幸福ごとはない、又、どんな爲事だつて、少しの練習と訓練とで、我々に出来得ない爲事もない。ヤ・ボンの右の片腕は廣い世界のどんな

兩腕にも匹敵して居ます。そして、ベルナル 大尉の片脚は、歩かうと思へば一時間に五哩も歩かせて呉れます」

さう言つて彼は笑ひ出した。

「右腕と左腕、左脚と右腕、使ひ方さへ知つて居れば、どつちを残して置いたつて同じ事では無いですか？ どんな時に不具が不便だと言ふのです？ 地位を得るとか、種族を保存するとかの問題にしても、我々以前と何の變りもないぢやないですか？ それ所か、以前にも優るほどです。我々が國家に贈る子供たちは今までも同じやうに、しつかりした子供で、手もあれば足もあり其の他何でもある……膂力と精神力との偉大な遺傳をやるのは言ふまでもありません。我々が主張するのは此處に在るのだ、コラリイさん。我々の木製の脚が身を支へるに足るだけだとか、松葉杖では骨肉を備へた脚のやうに直立する事が出来ぬとか、そんな風に考へて貰ひたかないのです。我々のやうな者に對する奉仕が一種の犠牲だとも、又少女が盲人と結婚するの光榮を有したからとて、英雄的行動だと稱める必要があるとも考へない！

「も一度言へば、我々は埒外の被造物ではないのだ。誰が何

と言はうとも、我々は敗残者ではない。これは、次の二三時代をかけて、何人も拜跪すべき眞理です。貴女にも會得がゆくでせうが、佛蘭西の如き、往來で何千何百と言ふ不具者に會ふ國では、完全な人間と言ふ概念は、今までのやうに嚴密な限定を持たなくなるだらう。目下起らんとしつゝある人道の新形式に依れば、此の世に兩腕の男も居り片腕の男も居ると言ふのは、それは丁度色白の男もあれば淺黒い男もあり、有髯の男も居れば剃り落とした男も居ると言ふ位の意味にしか成らないのだ。そして、それが又何の不自然さもなく考へられるやうに成るに違ひない。さうしてあらゆる人が、四肢を完全に備へる必要なくして、思ふまゝの生活に入る事が出来るやう。そして、何しろ私の生命は貴女の中に捲き込まれ、私の幸福は貴女の手の中にあるんですからね。コラリイさん、此の上私は貴女に打明けるのを延期するにも及ぶまいと考へたのです。好し、これで済んだのだ！ まだ仲々話したい問題は澤山あるのですが、一日位で言ひ盡くせる物ぢやあるまいし、言ひ盡くせるものか？」

彼は、結局コラリイの沈黙に根氣負けがして言ひ詰まつて

しまつた。

愛すると言ふ最初の一言から彼女は身動きもしなかつた。始終兩手で額を押へ、微かに肩を震はせて居る。

彼は身を屈めながら、限らない優しみを待つて、しなやかな女の指を退けて、彼女の顔の覆ひを取つた。

「何故、君は泣いてるんです、コラリイさん？」

彼は、もう相手を君と呼び出したが、彼女は氣にも止めなかつた。一人の男と、その男の傷の上に身をかゝめた女との間には、或る特殊な關係が生れるのだつた。そして、ベルワル大尉は特に此の關係に馴れて居た。とは言ふものゝ、やはり方はまだ慇懃を極めて居たから、非難の的になるやうな物ではなかつたのである。

彼は訊いた。

「私が、君を泣かしたの？」

「いゝえ」と彼女は低い聲で、「妾をびつくりさせたのは、貴方の全體ですわ。運命に屈しないで運命を支配なさるのは、貴方の愉快な、誇らしい處世法です。貴方の内の一番惱ましい物が、何の困難もなしにその惱ましい状態から、抜け出る

事が出来るのです、そして妾は、この無關心ほど美しく、魅力ある物はまだ見たこともありません」

彼は彼女の側に坐つた。

「ぢやア、あんな事を言つたからつて、怒つてるんぢやないの……私の言つた事で？」

「貴方を怒りましたつて？」と彼女は相手の言つた事を、わざと他の意味に取つたやうな態度で答へた。「だつて、どんな女だつて、貴方と同じ考へ方をしますもの。どんな女だつて、戦争から歸つた人の中でも、一番残酷な目に會つた人に、屹度一番優しい心を注いだらうと思ひますわ」

彼は頭を振つた。

「分らないですか、私はそんな優しい心以上の物で、もつと決定的な答が欲しいのです。もう一度言つてきかせやうか知ら？」

「いゝえ」

「ぢやア、答へは……？」

「妾のお答へはね、どうぞ、もう二度とあんな事を言つて下さいませぬ、と言ふのです」

彼は壯重な容子になつて、

「それを禁止するんですね？」

「禁止しますわ」

「それでは、今度會ふまでは、二度と此事は言ふまい」

「二度とお目に掛る事はございますまい」

この言葉に、ベルワル大尉は非常な興味をおぼえて、

「おや、おや！ では、何故二度と逢へないの、コラリイさん？」

「何故つて、妾はお目に掛りたくないのですから」

「で、その理由は？」

「その理由ですつて？」

彼女は相手に目を呉れながら、ゆるやかに言つた。

「妾は結婚した女です。」

ベルワルは、此の告白にも別に動搖した模様もなく、却つて此の上もなく靜穩な語調で口を開いた。

「美しい、ぢア貴女は再婚するが好い！ 屹度貴女の良人は老人で、貴女は少しも愛がないのでせう、それを老人は、貴

女に誰か他にいい人があるからだと解してるんでせうね……」

「御冗談は止して下さいまし、どうぞ」

彼は立上つて去らうとする彼女の手を押へた。

「貴女の言ふ通りだ、コラリイさん。非常に眞面目な詞なのに、もつと眞面目な態度を採らなかつたのは、重々悪るかつたです。これは我々、二人の生命に就ての問題です。私はね、その二つの生命がだんく近寄り合つて、貴女の力ではどうする事も出来なくなつてゐるのを、しみじみと感じるのだ。それだからこそ、貴女の答が的外れるのだ。もう貴女に要求しない。たゞ運命に待つばかりだ、私たちの結びの神は、運命だ」

「いゝえ」と彼女は言つた。

「いや、さうだ」と彼はきつぱり言つた。「それが物事の運ぶ筋道だ」

「違ひますわ。そんな風に物事を運ぶ筈がありません。貴方は名譽にかけて、もう二度と妾に逢はないやうにしてやる、妾の名前さへ聞かないやうにすると、仰言つて下さるのが本筋道だ」

當です。いつまでも友だちとして、と言つて下すつたら、もつと嬉しかつたでせうに。ですが、貴方がなすつた告白で、二人の間にはスツカリ城壁が出来てしまひました。妾は一生、誰も要りません……誰も」

此の宣言は、彼女も可成り手剛く言つたのだつた。そして、それと同時に、攪まれた手を振りほどかうと試みた。が、パトリス・ベルワルは、相手の努力に逆らひながら言つた。

「それは間違つてるよ……あんな危険に身を晒す権利は、貴女にはない……どうぞ、考へて下さい……」

彼女は、彼を拂ひ退けた。その拍子に、暖爐の飾臺の上に置いてあつた手提袋を叩つた。袋は敷物の上に轉がり落ちて、口を開けた。二つ三つの物が、その口から滾れ出たのを、彼女が拾ひ上げる、それをパトリス・ベルワルも床に膝を突きながら、一緒に拾つてやつた。

「ほら、此所に。こんな物を忘れて」と彼は云つた。それは麥稈眞田の小さな箱で、矢張り口を開けて居た。中から珠數子玉が覗いて居る。

二人とも黙つて立ちつくした。ベルワル大尉はその珠數を調べて見た。

彼は囁いた。

「何と言ふ、不思議な符合だらう！……これも紫水晶の珠數だ！此の古風な金線の細工は！……私と同じ材料で、同じ細工だとは妙だ！……」

彼はギョツとした。その様子が大ききよなのでコラリイも訊かずに居れない。

「何故、どうなすつて！」

彼は、指のさきで、中でも一番大ききやうな一つの珠數玉を持つて居た。その球は珠數玉の環飾と、もう一つの短い念珠の間をつなぐものであつた。此の大きな珠は、抓みの金細工の所から殆んど水平に、半分に切斷されてあつた。

「偶然の符合だ」と彼は言ふ。「私も全く考へも及ばない、思ひ掛けもない事だ……然も事實は今に直ぐ証明を與へて呉れるのだ。が、それより先に、一つ訊きたい、誰にこの珠數を貰つたのです？」

「誰にも貰ひません。これまで、肌身はなさず持つて居たの

ですわ。」

「併し、貴女の手に入る前に、誰かほかの人の持ち物だつた筈だか？」

「阿母さんの物でした」

「え！阿母さんから貰つたのですか？」

「さうですわ。阿母さんが遺して呉れた他のいろいろの寶石と同じ事ですわ」

「阿母さんは歿くなつたの？」

「え、妾が四つの時に死にました。母の記憶と言つては、ほんの微かな物しかありません。ですがそんな話が一體珠數と何の関係がありまして？」

「何故なら」と彼は言つた。「私の紫水晶の珠も二等分されてゐるからです」

彼は上衣をめぐつて、チヨツキのポケットから自分の懐中時計を取り出した。

時計には小さな革紐や銀鎖で付けた澤山の小飾りが下がつて居た。

その小飾の中の一つは、半分に割れた紫水晶の珠であつ

た。矢張り、コラリーイのと同じやうに金の抓みの所から平つたく割れて居る。二つの珠の本來の大きさは同じであるらしい。二つながら同じ色を持ち、同じ金細工に抓まれて居る。コラリーイもベルグルも、お互に意味深く、眼と眼を見合せた。

「ほんの偶然ですわ。たゞそれだけの事です……」

「私もさう思ふ」と彼は言つた。「然し、此の半分づゝが、お互にしつくり接觸するものだとすると……」

「そんな筈はありません」彼女は言つたが、争ふべからざる證明が、ほんの一寸した實行で目前に果され得るのだと思つて、我ながらギョツとした。

けれども、士官は實行して見ることに決めてしまつた。彼は珠數を持つた右手を、小飾りを持つ左手の上に重ねた。兩手は互に觸れる。ためらふ内に、ピッタリと止つた。接合したのである。石の斷面の凸凹は、一々正確に照應して居た。各々の凸起部面が、相手の凹面に出會つて、シツクリ嵌まつた。紫水晶の半分づゝ——即ち同じ紫水晶を半分に分つた二つであつた。接ぎ合せて見ると、互にピッタリとして同じ一つの珠玉を成すのであつた。

感激と神祕とに壓迫されて、二人は長い間呆然として居た。やがて低い聲で、

「私だつて、此の小飾りが、何所から傳はつたのか、能く知らない」とベルグル大尉は云つた。

「ズツと子供の時から、私はいつも此珠が厚紙箱の中にいるんながらくた物に交つて、あつたのを見て來たものだ。時計の鍵だの、古い指輪だの、古風な印章だのと一緒にあつたのです。二三年前に、その中から私は此の小飾りを取り出して來たのです。何處から傳はつた珠か、私には分らないが、私が知り得る限りでは……」

彼は二個を引離して、吟味しながら、斯う結論した。

「私が知り得る限りでは、疑ひもなく、珠數の中の一番大きな珠が、或る日抜け落ちて割れた。そして割れた一片が、金篋を着けたまゝで、私の今持つてる小飾りに付けられるやうな仕儀に成つたのに違ひない。だから貴女と私とは、二十年前に誰かの所有だつた一つの物の半分づゝを持つてる譯ですね。」

彼は女の側に寄りそつて、同じく低めた聲に一層眞面目な

調子を含めながら、

「たつた今、物事の運びが二人の間に次第に結んで行くと言ふ信念と、運命に對する誠實とを私が宣言した時、貴女は反對しましたね。斯うなつても未だ否認するのですか？ だつて、何と言つても、これは我々二人の生命が、過去に於て既に、何か神秘的な一點で互に繋がれて居り、そして、未來にも再會するばかりでなく、永久に離れる事が出来ぬと言ふ事を證據立てる、奇怪な突發事件です。その上に目前の事實です。だから別に遠い未來を待つまでもなく、私は今日、危険が貴女に迫つて居る今日、友情的助力を提供するのです。考へて下さい、私はもう戀を、と言つてるのではない。たゞ友情を、と言つてるのだ。受けて呉れますか？」

彼女は、あの二片の紫水晶が互にピッタリと接合したと言ふ奇蹟に、此上もない動搖を感じて、大尉の聲も耳に入らなほど取亂して居た。

「受けて呉れる？」と彼は繰返した。

一寸間をおいて、彼女は答へた。

「いゝえ」

「ちやア、あれほど運命の要求をまぎ／＼と見て居りながら、まだ腑に落ちないと言ふのですか？」と彼は上機嫌で云つた。

「妾たちは、二度と逢つてはなりません」と彼女はキツパリ言つた。

「成程ね。ちやア私は機會を待つことゝしよう。何、直きに機會は來ますよ。それに、自分から逢ふ手段はめぐらさない」と約束もしておいて上げませう」

「それから、妾の名前を探すこともね？」

「よろしい、それも約束した」

彼女は手を與へながら言つた。

「左様なら」

「御機嫌より。」と彼は答へた。

彼女は立つた。そして、扉の所まで來ると、ふと躊躇ふ氣色を見せた。彼は暖爐の煙突のそばに身動きもせず立つて居た。

もう一度彼女は言つた。

「左様なら」

彼も、もう一度言つた。

「御機嫌よう、コラリーさん」

言ひ交はしたのも瞬間のことだつた。彼はもう引止めようとはしなかつた。そして彼女は出て行つた。

たゞ、往來に向つた扉口を彼女が出て締めた時だけは、ベルグル大尉も窓のそばに行つた。彼はコラリーが樹間を遠ざかり行く姿を見た。その姿も、あたりの暗黒にまぎれていと小さく見える。彼は胸をキユウツと緊められる思ひをした。又二度と逢ふことがあるだらうか？

「逢へるか知ら？ さうだとも！」と彼は叫んだ。「なアに、明日は多分逢へるさ、俺は神の寵兒の筈ぢやないか？」
で、ステツキを取上げると、自ら誇りとする木の脚から踏み出して、出發した。

その夜、附近の料理店で夕食を済ませて、ベルグル大尉はニューリイに行つた。保養院は病院に連絡したもので、メイヨット並木街に建つてブウロウニユに面した氣持ちの好い別荘であつた。紀律もさほど嚴格に施行されない。大尉は夜間どんなに遅く歸つても好かつたし、誰だつて婦長から易々と

出入許可證を貰ふ事が出来た。

「ヤ・ボンは歸つて居ますか？」と彼は婦長に訊いた。

「え、戀人と骨牌をやつて居ますよ」

「あの男だつて、戀したり、戀せられたりする権利がありません」と彼は言つた。「私に手紙が来て居ませんか？」

「いゝえ、小包が一つ来たゞけですわ。」

「誰から？」
「どこかの使ひが持つて來ましてね、ベルグル大尉さんへ」と言つたゞけですよ。貴方の部屋に妾が持つて行つておきました」

大尉は此の家の上層にある自分の寢室に行つて紙で包んだ上を紐で縛つた小包を卓上に見た。めくつて見ると、中から箱が出て來た。箱の中には二個の鍵があつた。大型の錆び付いた鍵で、形と言ひ製造と言ひ、確かに古い物に違ひない。一體これは何を意味するのか？ 箱の上には何の所書きも記號も入れてない。何かの間違ひで今に判つて來るのに違ひない、さう思ひながら、彼は鍵をポケットに納めた。「色々、をかした事ばかりあつた日だ」と彼は思つた。「寢

るに如くはなしだ」

然し窓帷を締め窓ぎはに立つた時、彼の眼はふと、一條の薔花火を見た。薔花火はブウロウニユの樹立を超えて、濃かな闇の彼方、可成り遠くへまで届いて居た。

そこで、彼は思ひ出したのである、あの料理店で窃み聴きした會話、コラリーを誘拐しようと思つた二人の男の口を洩れた、あの「輝く雨」といふ言葉を……

錆びた鍵

パトリス・ベルグルが九歳の時、彼はそれまで父と一緒に居た巴里から、倫敦の佛蘭西塾に入らせられた。倫敦のその學校には、十年間居た。

最初のうちは、父親からも、毎週音信があつた。所が、或る日のこと塾長は彼を呼んで、彼が孤兒であること、だが教育費だけの用意は拵へてあつたこと、そして、丁年に達したら或る英人の公證人から父の遺産を受取ることになつて居ることを言ひ聞かされたのである。遺産は約二十萬フラン位あ

ると言ふことだつた。

自分で贅澤な趣味を覺えるに間もない若い男、然も兵隊に取られてアルゼリアにやられる時、まだ無資産の身分で既に二萬法の工面を才覚した程の者が、二十萬法の金などで満足出來やう筈はなかつた。

そこで彼は先づ此の遺産を浪費してしまふことに決めた。浪費して了つたあと、初めて働き出した。活動的な資性と發明的な頭腦を持つて生れた男として、これと言ふ特殊な技能は無かつたものゝ、發案と分解を要するあらゆる物を手掛ける事が出來、才氣満々として企業をするに必要な智識と執行力を併有して居た。だから、巧みに人の信頼を誘ひ、欲しいだけの資本を狩り集めて様々の事業を計畫した。

電気事業と言はず、水源地の賣買と言はず、植民地の動力供給や、商船の新航路や、探鑛會社などの組織と言はず、何でも彼でも遣つてのけた。數年のうちに、彼はさうした事業を一ダースも成立させたが、それが又、みんな成功したものである。

世界大戰の開始が、彼には驚天動地の冒險に思はれた。彼

は全心全霊を傾けて、自ら軍役に身を投じたのであつた。植民軍の一軍曹として出征した彼が、マルヌの一戦では一躍中尉の榮職に登つた。九月十五日の戦で上脚に負傷を受け、即日それを切斷された。二ヶ月後の彼は跛足にも拘らず、或る機密なさしがねから、佛軍で指折りの航空士官の飛行機に、観測者として同乗した。所が、一月十日、爆弾を見舞はれて此の二英雄の功績も幕を閉じたが、其の時、既に大尉だつたベルヴルは、頭に重傷を負うたため除隊され、シャン・ゼリゼエ並木街の病院に送還される事となつたのである。丁度それと相前後して彼が小母ちゃんのコラリイと稱ぶあの女が、特志看護婦としてその病院に入つて來たのであつた。

病院で彼は頭蓋を穿たれた。手術は成功したが餘病が併發した。苦痛は可成り激しかったのだが、何の弱音も吐かなかつた。その上、實際自分自身の機嫌を好く作つて病友の氣力を引立て、やつた。だから病友はみんな彼を熱愛した。極端に惨めな際會にも、快活に絶えず幸福さうな態度を持し乍ら、みんなを笑はせたり、慰めたり、勵ましたりした。

或る日、機械仕掛の擬足を賣り込まうとして彼を訪れた製

作人に對して、彼がとつた應待振りには患者の誰の心にも忘れに忍びぬ思ひ出して残つて居る。

「あゝ、あゝ！ 擬足の足かね！ で、義足を何に使ひますかね、君？ そいつを身體にくつ付けて多分、私は脚の一切れだつて失くして居ませんよ、といふ顔をしようとも云ふのだらうね。そんなら君は何かね、君が脚を切られたら取だと思ひだから、私、此の佛蘭西の士官も、不名譽として不具を秘密にしなければ成らないと考へるんですかね？」

「どう致しまして、大尉さん。併し……」

「で、君のその機械のお値段は幾許なの？」

「五百法です。」

「五百法！ ぢやア君は、私が擬足のために五百法も費へる身分だと思ふんですか？ 何百何千の不仕合せな兵隊が私と同じやうな負傷を受けながら、然も木製の脚を武士の誇りにしようと言ふ今日、私だけそんな無駄費ひが出来ると思ひますか？」

其の場に居合せた人々は、悉く喜びの情に浸された。コラリイでさへ、微笑と共にそれを聞いた。さうして、小母ち

やんのコラリイから、たつた一つの微笑を買ふために、パトリス・ベルヴルが惜しむ何物があつたらう？

彼が打明けた通りだ。彼女の人を魅する美しさ、飾り氣のない優雅さ、柔らかな眼の光り、患者の上をおほふあの母の添乳のやうに慰め深い優しさ、それらの物に初めて接した時から、彼は彼女に戀を感じたのであつた。最初から彼女の魅力は彼の身心に食ひ入ると共に、限なくその中に燃え擴つてしまつた。彼女の聲は彼に新しい生命を與へた。彼女の眼の輝きと、にほやかな姿とは彼を惚然とさせた。それ程までうつは抜かしても、彼はなほ危険の眞中にあるに違ひない此のかよわい女のために、力の限り身を捧げようと言ふ、大なる希望に溢れて居るのである。

そして今、事實は果して彼女に危険が迫つて居る事を證據立てたのだ。危険が具體的に實現されやうとした時、彼はコラリイを敵の掌中から奪還するの幸福を有した。今宵第一戦の結果は祝福すべきであつた。とは言へ、争闘はまだ終結を告げたと考へる事は出来ない。攻撃は必ず反覆されるであらう。そして現在既に、今朝コラリイに對してなされたあの策

戦と、「輝く雨」を使つた今の一種の信號との間に、何らか密接な關係があるか否かを、考へなければならぬ彼の立場ではないか？ 料理店であの男共が口に出した二つの事實は、同じく謎めく腕計の一部分づゝを作るのではあるまいか？

烽火は遠方で光明をつゞけた。

パトリス・ベルヴルの判断に従へば、烽火はセイヌの川岸、多分左をトロカデロ、右をバツシイ停車場とした兩極點の中間の、何れかの地點から投ぜられて居る物に違ひない。

「一哩、遠くて二哩のことだ、鳥が飛ぶやうに」と彼は獨りで呟いた。「行つて見たら好いぢやないか、直ぐ分るだらう」

二階の、とある扉の鍵穴から、微かな明りが瀟過されて居る。ヤ・ボンの部屋である。そして婦長の話に依ると、ヤ・ボンはいま戀人と骨牌をやつてるのだつて。彼はその中に這入つて行つた。

ヤ・ボンはもう骨牌をやめて居た。取亂した骨牌を前にして、安樂椅子の中に熟睡して居るのである。彼の空つぽのまま、左から垂れ下つて居る袖の上には、一人の女の顔が凭れ

掛つて居る。女の顔は吃驚りするほど平凡で、ヤ・ボン自身の肩と同様に厚ぼつたい肩の間から、黒い歯並みを表はし、油壺から出たやうな、黄色い、てかてかした皮膚をして居た。アンゼエルと言ふ名の下働きの女で、ヤ・ボンの恋人なのであつた。彼女は大きな、いびきをかいて居た。パトリスは満足げに、彼等を眺めた。此情景は、彼の持論の眞理を證據立てる物であつた。もしヤ・ボンにして、好いて呉れる人を發見したのだつたら、如何に悲惨な顔形を持つた英雄と雖も皆平等に、あらゆる戀愛の歡喜を切望して好いことに成りはしないか？

彼は此のセネガアル兵の肩に手を觸れた。ヤ・ボンは眼を覺ました。そして微笑した。いや、寧ろ大尉殿の臨席を豫見して、眼さめぬ前から、とつくに微笑して居たと言ふ方が好い。

『お前に頼みたいのだがね、ヤ・ボン。』

ヤ・ボンは喜悅の餘り聲を發して、アンゼエルを突き飛ばした。彼女はテーブルの上へ突き倒されたまゝ相變らずいびきをつゞけて居た。

家の外に出た時、パトリスはもう烽火を見る事は出来なかつた。烽火は黒々とした森の後ろに光を隠して居た。彼は並木街を通り抜けて、それから時間を節約するため、ツン・チエウルの鐵道を利用して、アンリ・マルタン街まで行つた。此所から彼は、パツシイに通じるトゥル街を下つて行つた。路々、彼はヤ・ボンに、考へて居る事を話してつゞけて来た。が、いくら話したつて此の黒坊に大した事が了解されないのは、彼もよく知つて居た。併し、これが彼の習慣なのであつた。ヤ・ボンは一方に彼の戦友であると共に他方では彼の従卒である。まるで犬のやうに忠實であつた。主人の士官が負傷したと同じ日に腕を失ひ、そして同じ日に頭をやられたのだ。だから彼は、一生同じ經驗を士官と共にするのが、宿命だと、ひそかに信じて居た。既に二回まで同じ日に負傷したことが嬉しくて溜らないと同様に、ベルナル大尉と同じ日に死ぬるのだつたら、またどんなに嬉しいヤ・ボンだつたらう。一方、大尉は、彼のあはれに無言な奉仕に對して、いつも暖かさを以つて報いた。皮肉な、時には氣短かな半面も出すが、それが却つて黒坊の愛情を昂めることに成

るのだつた。ヤ・ボンは、意見を徴せられることのない相談を持ち掛けられたり、相手の不機嫌に入つ當りされたりするに堪へられるために出来上つた、受動的な忠僕だつた。

『これに就てお前は、どう思ふ、ヤ・ボン君？』と、大尉はヤ・ボンと腕を組んで歩きながら訊いた。

『俺は、烽火も誘拐もみんな連絡のあることゝ考へるのさ。お前もさう思ふね、どうだい？』

ヤ・ボンは二種の唸りを持つて居る。一つは『然り』と言ふ意味、一つは『否』と言ふ意味。でその時の唸りは、

『然り』

『その通り、もう疑ふ餘地もないね』と士官は宣言した。

『で、小母ちゃんのコライイが二度目の危険に陥つてるものと考へなければならぬ。その通りか知ら？』

『然り』とヤ・ボンが唸つた。いつも是認を與へるのが彼の主義だつた。

『大に好し。所で、今度は、あの烽火の雨の意味が何に存してるか、それを見究める順番だね。最初一寸、斯うも思つたね、あのツエツペリンが、一週間前初めて巴里の空を見舞つ

た時……お前、聞いてるのかい？』

『然り』

『これは第二回のツエツペリン襲來に關する、賣國奴の信號ぢやないかと……』

『然り』

『馬鹿。さうぢやないんだよ。俺が料理店で盗み聞いた處に依ると、信號は戦争前に二度も揚げられたのだ、して見ると、どうしてそれがツエツペリンに關係があるものか。それに、果してあの火花が信號に決まつてゐるかどうか？』

『否』

『否、つて一體何の意味で云ふんだい？ ほかに何の意味がある、此の野郎？ 舌を引つ込めておとなしく俺の云ふ事を聞いてゐるア好いんだ、何が何やらさつぱり分つちや居ないんぢやないか……俺だつて、實際云ふと分らないんだ、告白すると、全く五里霧中なんだ。神様、よくもこんがらがつた爲事ですな、こんな問題を解くのは、私も至つて不得手です！』

パトリス・ベルナルは、トゥル街の行づまりまで來ると、

一層迷つてしまつた。眼の前に路は幾條にも岐れて居る。が、どの路を採つて好いか分らないのである。そればかりか、既にパツシイの中央に来て居るにも拘らず、暗い空の何處にも花火の明りは見えなかつた。

「もう消えてしまつたらう」と彼は云つた。「無駄な努力を費したと云ふものだ。お前が馬鹿だからよ、ヤ・ボン。もし俺が、お前を戀人から引離して来る手間を惜しんで居たら、十分間に合つたのに。俺だつて、アンゼルの魅力を嘘だとは云はないよ、併し、結局……」

彼の態度が、次第々々に一層迷つて来る様子だつた。機に應じて成されたので、十分な調査を準備して居ない此の遠足から、何の効果も生れて来ないのである。もう止めてしまはるかかと考へた時、トロカデエロの方面から、フランクリン街頭に一臺の、扉を閉ぢた自動車が疾驅して來た。

車上一人の男が、傳話管を口に當てながら、斯う叫んだ。「左へ寄れ……それから真直ぐに、止まれと云ふまで」さうだ、此聲こそ、ベルグル大尉が、今朝料理店で聴きおぼえた、外國訛と同じ訛を持つて居るやうな氣がした。

「驚いろのフェルト帽を被つた乞食めなのか知ら」と彼は呟いた。「コラリーイを誘拐しようとした男の一人の？」

「然り」と、ヤ・ボンが唸つた。「さうだ、烽火の信號は、つまり此の邊りに彼が出現することを語るものだ。自動車の轍の跡を見失はないことだ。お前行つておいで。ヤ・ボン」

然し、ヤ・ボンの足は、さう急ぐ必要がなかつた。自動車はレイヌアール街まで行つた。そして街角から三四百ヤード彼方、左側のとある建物の、大車寄せの前で、將に停車しよるとする時、ベルグル大尉も追つ付いて來た。

男が五人飛び降りた。そのうちの一人が戸口の鈴を鳴らした。三四十秒經過した。と、又二度目の鈴の鳴るのが、パトリに聴えた。五人は互にヒタと身を寄せながら、鋪石路の上に立つて待つて居た。遂に、三度目の鈴が鳴ると共に、締まつて居た扉の一つに設らへた、小さな耳戸が開いた。ふと静まつた。一人が何事か言つた。やがて耳戸を開けた一人が外に出て、來意を訊ねて居るらしかつた。所が、突然

その中の二人が、閉ぢた扉に激しく突當つた。と、扉は開いて彼らの突進に任させた。五人とも中に這入つて行つてしまつた。

扉が閉まると同時に、大きな音響がした。ベルグル大尉は、忽ち四圍の情勢を見てとつた。

レイヌアール街は、古い田舎路である。昔はセイヌ河が裾を洗ふ岡の中腹、パツシイの村の家だの庭苑だの、間を曲りくねつたものであつた。所々は、不幸にもだん／＼舊態を失つて田園らしい景色を留めて居るのはほんの僅だつた。樹立の間にかくれて古い家屋が立つて居る。大小説家バルザックが住んだ家も、忠實に保存されてゐる。例のアルセヌ・リユパンが、古い日時計の破片中から、ある收税者のダイヤモンドを發見した神秘的な庭も、此の街の中に在るのである。(「リユパンの告白」参照)

自動車は、五人が強行して這入つた家の前に、まだ横付けのまゝで居た。その爲パトリヌ・ベルグルは、近くに進行して行くことが出来なかつた。家は長い外壁の中に出て居り、どうしても第一帝政時代誰かの私宅であつた遺物らしい。非常

に長い面で、二列の丸窓が付いて、下層室の丸窓は格子で張り、二階は固い鐵戸が閉つて居た。もう一つ、遙か下の方に、分離した羽と言つた調子に、離れ家が建つて居た。「こつち側では、何もする事がない」と大尉は言つた。「まるで金城鐵壁のやうに固いんだからな」

レイヌアール街から、その昔、領地の檢分に用ひた細い幾つもの小徑が、川の方につゞいて居るのだつた。路の一つは、家の前の外壁に添つて居た。ベルグルは、その路の方を、ヤ・ボンと共に進んで行つた。小石が汚くゴロゴロして居り、一足ごとに狭くなつて行つた。さうして街燈の明りがその上を微かに流れて居た。

「ヤ・ボン、手を借して呉れ。壁が高過ぎるのでね、が、多分、軒燈の柱を傳へば……」

黒坊に助けられて、街燈の上に登つて行き、片手を伸した時、外壁の此の邊一帶に、硝子の破片を逆立てゝあるため、手を掛けるのが絶體に駄目であるのが判つた。そこで、彼は再び下に降りて來た。「遠慮なく言へばヤ・ボン」と彼は腹立たしさに言つた。「お

前は、それならそれと知らして呉れても好かつたんだ！一寸のことで、お前のために、俺は此の手をめちゃく〜に壊す所だつた。何を考へてるんだ？ 實際、お前が何のために、やつきとなつて俺に付いて来るんか、とんと判断に苦しむよ」

路が曲ると、其所には光りが届かない。で二人は全く暗黒の中に居ることが出来た。それでベルナル大尉は、その中を手捜りしながら進んで行かねばならなかつた。彼は黒坊の手が、肩の上に觸れて來たのを感じた。

「どうしたと云ふんだ、ヤ・ボン？」

ヤ・ボンの手は士官を外壁に押し付けた。成る程、其所に丁度、朝顔形の凹みがあつて扉口が付いて居るのであつた。

「ふむ、成る程」と彼は言つた。「これは扉口だ。お前、俺に見えなかつたと思ふのかい？ おや〜、ヤ・ボン君の外に眼のある人間は居ないと見えるね！」

ヤ・ボンは彼の手に、マッチの箱を持たせた。彼は、一本、又一本と摺つて、その扉を吟味した。彼は、一「俺がお前に何を話したい？」と彼は齒の間で言つた。「どう

する事も出来ないよ。部厚な材木の上に鐵の横棒や栓がさし込んである……見ろ、こつち側には何の把手もない。只鍵穴があるばかりだ……あ、俺の要るのは鍵だ、この穴にしっかりと當嵌まるやうな鍵だ！……たとへばだ、あの、今先刻、組合小使ひが保養院に持つて來て呉れたやうな鍵……」

云ひかけて、彼は黙つた。と、あてにもならぬ空頼みが、頭の中を過つた。だがそれでも彼は、どんなに當てにならぬ事でも、思ひ付くまゝの事を、兎に角やつて見ねばならない立場だと感じた。そこで、彼は歩み退つた。鍵は持つて居るのだ。彼はポケットからそれを取出した。

そして、又新しくマッチを摺つた。鍵穴が照らし出された。試みの最初として、鍵をその穴に突込む。左にまはすと、錠の中にめり込んだ。手で押すと、扉はそのまゝ開いた。

「一緒に來い」と彼は云つた。

黒坊は一步も動かなかつた。黒坊は愕然として居る、その譯はパトリスにも判つた。打明けて言ふと、パトリス自身も同様に駭いて居るのだつた。何の豫告もなしに、どうした奇

蹟で此の鍵が、現在此の扉の鍵であつたのだ？ どうした奇蹟で、誰とも知らぬ、此の鍵の送り主が、詳しい教示もない癖に此の鍵を使用する破目に至ることを豫知し得たのか？ 實に奇蹟だ！

併し、パトリスは、悪ふざけた機會が、彼を騙つて此處に至らしめた謎を解くのは暫く措いて、先づ實行に取掛ることに決心した。

「ついて來い」と、彼は勝ち誇つた調子で言つた。木の枝が顔を打つたので、見ると彼は芝生の上を歩いて居るのであつた。だから、足のさきには庭園があるに違ひなかつた。

眞暗な芝生のどこに路があるのやら分らない、それほど闇は深かつた。そして、二三分間歩いて行くと、ふと彼は石に躓いた。石の上は水で覆はれて居た。

「え、糞！」と彼は呪ふ叫びをあげた。「スツカリ濡れちやつた。貴様が悪いんだぞ、ヤ・ボン！」

言ひも終らぬうちに、庭の遠い隅にあたつて、猛烈に吠える犬の聲、そして、それが忽ち、激しい速力で近付いて來る

のを聞いた。番犬が、彼らの關人を知つて追つて來るのだとは、パトリスにも判つた。流石勇敢なパトリスも身振ひした。と言ふのは、完全に眞闇な中とて此の攻撃の氣配は肺腑に沁みるものがあつたからである。どうしたら防げるか？ 射せばみんなに知れる、然も、拳銃一つのほかに、彼は何の双物も持つて居ないのであつた。

犬はヒタ押しに突進して來た。唸り聲から推しても猛犬に違ひない。森林を踏みにしつて殺倒する野猪を思はせた。多分、鎖を引切つて來たのであらう、曳摺る鎖が犬と共に鳴つて來た。應戰だ、とパトリスは身を固めて待つた。が、ふと闇を透かして見ると、自分の前方にヤ・ボンが身を挺して、護衛に當つて居る。と見る間に、忽ち衝突が其所に起つた。

「おい、こら、ヤ・ボン！ 何故俺の前に出るんだ？ 好い

んだ、野郎、俺がやる！」

二個の争闘者は、草の上にドット倒れた。黒坊を救ふために、パトリスは身をかどめて目を凝らした。猛犬の毛が手に觸つた。次いでヤ・ボンの背物だ。だが、互に固く纏れなが

ら、轉々として狂闘する凄まじさに、彼も手を出す術がなかつた。

それに、争闘は永く續かなかつた。數分間後には、どちらも動かなくなつてしまつた。重なり合つた中から、ヒイ／＼締めつけられる悲鳴が洩れた。

「大丈夫かい、ヤ・ボン？」と、大尉は心配で耐らなさうに、訊いた。

黒坊は唸りを一つ發して立上つた。マッチを摺つてパトリスが見ると、ヤ・ボンは伸ばした片手のさき、彼自身が身をを守る唯一つの武器だつた片手のさきに、巨大な犬をぶらさげて居た。犬は、ヤ・ボンの執念深い指にむづと握まれた喉を、ゴロ／＼鳴らして居た。頸から、千切れた鎖がさがつて居る。

「有難う、ヤ・ボン。危い所を助けて貰つたね。放してやつても好からう。もう向つて來ることは出來ないだらうから」

ヤ・ボンはその通りにした。が、疑ひもなく、餘りひどく絞め付け過ぎたに違ひない。犬は、暫く草の上で身を藻掻いて居たが、やがて二三度呻くと、そのまゝ動かなくなつてし

まつた。

「可愛想な畜生！」とパトリスは言つた。「俺達が泥棒で、犬はそれを追ふと言ふ義務を盡しただけなんだ。おや、俺たちの義務を始めよう、ヤ・ボン。尤も、どうして好いのか、お先き眞闇のやうな物ではあるがね」

何か、窓硝子のやうな、光る物があつて、それで歩行を導かれて行くまゝに、彼は岩に彫られた階段を通つて、幾つも續く臺地を過ぎ、遂に、家の建つた土地の上に出た。家は此處から見ても矢張り、窓と言ふ窓はみんな丸く、見上げるやうな所にあること、往來に面した部屋と同じことで、鎧屏が閉してあるのだつた。が、彼が下の方から先刻認めた一つの窓だけは、光の洩れるに任かせてあつた。

ヤ・ボンには、茨のかけに身をひそめるやうに云つておいて、彼一人家の方に行つた。耳を澄ますと、微かに人聲がする。鎧屏がピツタリ閉まつてゐるので、見ることも聞くことも出來ないのが判つた。

だが少し行くと四ツ目の窓を超えた處に、梯子があつた。梯子の頂きには扉口がついて居た。

「庭の木戸の鍵を送つて呉れた以上は」と彼は呟いた「家から庭に出る此の扉口だつて開かない譯はない」

扉は開いた。家内の人聲は、今や、ハツキリ聽えて來るやうになつた。ペルブルは其所で、人聲が階段口を通じて來ること、そして、此の家の使用されてゐぬ方面に通じらしい其の階段が、頭上の仄かな明りで目に見えて來ることを知つた。

彼は上つて行つた。第一階に、少し開いたまゝに成つて居る扉があつた。開いた所から身を滑り込ませて、それから中に這入つて行くと、其處は一つの大きな部屋の外廊になる臺の上だつた。

此の外廊は天井まで届く書架の外側になつて、部屋の三方に添ひながら、床と天井との中途に當る高さを繞つて居る。外廊の兩端から下の室内へ向つて鐵道の螺旋梯子が付けてある。此の外廊には、その欄干の横棒に凭れさせながら、積み重ねた書籍が、幾山となくあつた。それでパトリスは十呎乃至十二呎も下に當る、室内の床に居る人たちの眼から、身を匿し得たのである。

書物の堆積の二つを、彼はそつと掻き分けた。すると、人聲は俄かに高聲となつた。先づ人間が五人居るのが認められた。物狂はしく喚き立てながら、彼等は第六人目の男を罵つてゐるのであつた。その男は身を防くに腕を上げる暇もなく、忽ち床上に突轉ばされた。

ペルブルの最初の衝動は、其處に突入して行つて、犠牲者を救ひ上げたい、と言ふのに在つた。呼べば今にでも躍り込んで來やうあのヤ・ボンと協力すれば、彼等五人を脅し付け、事勿論容易であらう。どうして、それを實行しなかつたか、その理由は、五人が何の武器をも使用して居なかつたこと、そして別に殺人に及ぶらしい氣配も示して居なかつた事に在つた。

犠牲者が身動きする力も盡き果てたのを見て、彼等は喉と、肩と、頤とを押しつけてゐるだけに甘んじた。此の次何が起るか、パトリスは眼を睜つて見詰めて居た。五人の中の一人が、素早く寄つて來て、命令の口調で言つた。

「縛つちまへ……猿轡を嵌めて……いや、叫びたければ叫ば

せて置いてもいい、何處にも聴えはしないんだからな」
パトリスは直ぐ、今朝料理店で聴いた聲の片方だと認め
た。その聲の持主は瘦せて背の低い男で、オリブ色の顔色
に、残酷な表情を持つて居た。

「たうとう見付けてやつたぞ」と其の男は言つた。「悪黨め！
今度こそは言はずにや、措かないんだ、何も彼も用意は出
來てるかい、諸君？」

他の四人のうちの一人が、苦々しげに咆哮した。

「出來ました。そして直ぐ、どんな邪魔があらうとも！」

此の最後の發言者は、大きな濃い口髭を生やして居た。そ
してパトリスは、料理店で窺み聴いた會話の主の、片割れ、
すなはち、取りも直さず、コライイの誘拐者の一人を認め
た。逃げ終せた方の一人である。彼の薙色のフェルト帽が、
椅子の上に置いてあつた。

「何も彼もだね、ブウルネフ。どんな邪魔があつてもかい、
え？」と、首領は齒をむき出しながら言つた。「好し、爲事を
始めるとしよう。おい、そんならお前は、どうしても秘密を
吐くのが厭だと言ふのかい、エツサアレの奴め？ もつと黙

つてやらうか」

彼らの動作は、すべて前々から準備され、各部分が注意深
く手配りされて居たものらしく、爲事の運びが怖ろしく敏捷
で、合理的な形式を成して居た。

男を縛り上げてしまふと、みんなで低い凭れの安樂椅子の
上に昇ぎ込んで、繩を胸や胴にまはして絡み付けた。彼の脚
は、兩方縛り合はされたまゝ、安樂椅子と同じ高さの、他の
椅子に結び付けられた。足のさきだけが、その椅子の向うに
突き出た。そして、犠牲者の靴と沓下が脱がされて了つ
た。

「轉ろばせてやれ！」と首領が言つた。

煙突を外に見る四つの窓があつた。その中の二つの間に、
大きな爐が設けてある。石炭の火が赤々と燃えて居る中に、
火床の灼熱が白くなつて居る部分もあつた。みんなは、犠牲
を載せた二つの椅子を押して、彼の裸足が、燃える炎から二
十インチばかりの近さに成るまで持つて行つた。

猿轡が嵌めてあつたが、男は苦痛の呻きを氣味悪く立て
た。それと共に、彼の足は、結び付けてあるにも拘らず、互

に收縮し合つたり、纏れ合つたりした。

「もつとやれ！」と、首領は猛烈に叫んだ。「もつとやれ、も
つと近くに！」

パトリス・ベルワルは拳銃を握り締めた。

「おゝ、俺もやつてやらう！」と彼は自ら呟いた。「あの可哀
想な奴を助けてやらなければ……」

だが、さう云つて、身を乗り出し、正に實行に取掛らうと
したその瞬間、身體を動かした拍子に、ふと彼は最も怖るべ
き、最も奇怪な光景を見た。

彼と反對の側、其所は矢張り彼が今居る外廊と相通じて居
る臺上に、女の頭が欄干に密着したまゝ、はげしい恐怖に打
たれながら、燃ゆる炎の前で行はれて居る下方の慘狀を、瞠
つた眼で物狂ほしく見下ろして居るのだ。パトリスは見た。
小母ちゃんのコライイを。

焔を前に

小母ちゃんのコライイ！ コライイは、彼女の誘拐者が闖

入して來た此の家に潜伏して居たのだ。何か、説明し難い事
情に迫まれて、彼女自身、此の家に身をかくして居たのだ。
彼の最初の考察、それは少くとも、謎の一つを解き當てた
物だらうが、それに依ると、彼女も矢張り小徑から這入つて
來て、あの榎子から屋内に忍び込み、それが自然、ベルワル
のために道を開いておいて呉れた事になつたのだつた。だ
が、もしさうだとしたら、どうして彼女は又此の企畫方法を
知り得たのだらう？ そして、何より又、何故、此所に彼女
が來るやうに成つたのか？

これらの疑問は、たゞベルワル大尉の胸中に起るだけで、
別に解答を考へようとはしなかつた。彼は、それよりも、あ
のコライイの喫驚した表情に、スツカリ心を奪はれてしまつ
てゐるのだつた。その上、初めのよりもつと大きな、第二の
悲鳴が下方から聴えた。彼は、爐から吐く炎の舌を前にして
犠牲者の顔が苦惱にうごめくのを見た。

だが、その時、パトリスも、コライイの出現に制せられて、
受難者の救助に飛び込まうと言ふ考へを失つて居た。彼は只
管らに彼女の姿勢に做つて、身動きもせず、彼女の注意を

促すやうな事は、何事をも爲すまいと、決心した。
「宜し！」と首領は云つた。「引戻してやれ。もう御馳走は澤山だらうから」

彼は犠牲者のそばに寄つて行つて、

「さア、親愛なるエツサアレ君」と彼は訊問した。「君は何と考へるね？ 幸福かい？ で、判つてるだらうが、我々の拷問は、まだこれ初歩なんだぜ。もし白状しなかつたら、佛蘭西革命時代、ほんとの「火あぶり役」がした通りの、拷問の大詰めまでやらなくちゃならない譯さ。さう成るに決つてるんだからさ、多分、君も白状するだらうね？」
答へはなかつた。首領は呪咀の言葉を一つ吐いて語を續けた。

「どういふ考へなんだ？ 厭だと云ふのか？ だが、強情野郎、云はなけア、どうなるか知つてゐるだらう？ それとも、遁れる路があるとも思ふのかい？ 遁れる路、成程ね！ 気が狂やがつたな！ 誰が助けて呉れるんだ？ お前の下男かい？ 門番も下男も料理番も、みんな俺の鼻薬が利かせてあらア。一週間分の心付けをやつてゐるんだ。だから皆外出た。

「どういふ考へなんだ？ 厭だと云ふのか？ だが、強情野郎、云はなけア、どうなるか知つてゐるだらう？ それとも、遁れる路があるとも思ふのかい？ 遁れる路、成程ね！ 気が狂やがつたな！ 誰が助けて呉れるんだ？ お前の下男かい？ 門番も下男も料理番も、みんな俺の鼻薬が利かせてあらア。一週間分の心付けをやつてゐるんだ。だから皆外出た。

連れて来て呉れ！」

四人は、コライイが立つて居る足の下に當る所の、扉口から出て行つて了ふが早い首領は犠牲者の上にヒシと身を屈めながら、言つた。

「二人だけになつた、エツサアレ。俺は二人だけで話したかつたんだ。此の機會を利用してようぢやないか」

彼は一層身を屈めて囁いた、それで、何を言つてるのやら、パトリスには聴き取り難くなつてしまつた。

「あの男たちは、みんな莫迦だよ。あんな奴は俺の指一本でどうにもなるのだ。俺の本心は、ほんの表面だけしか彼等には打ち明けてないんだ。だがお前と俺とはね、エツサアレ、和解しなくちゃならない仲だ。それがお前は不承知だと云ふ、だからその報いが今来るのだ。さあ、エツサアレ、頑固は好い加減に止して、淡白りやれよ。もう筈に嵌まつて遁れ路はないんだからな、お前を殺さうと生さうと、俺の自由だよ。ねえ、どうせお終ひには包み切れないのなら、拷問で身體を痛め付けられないうちに、俺と手打ちをする事だ。半分宛、山分け、ではどうだい？ 其所ら邊で融け合つて、落

して了つてるぞ。下女かい！ 板場かい！ そんな奴は家の隅

ついで眠つちまつてるさ。そして、お前は現在その口で、ど

んな聲を出したつて、奴等の所に聴えつこはないと、何れも

何れも云つたぢやないか。そのほかに誰が居る？ お前の女

房かい？ 女房の部屋も此所から大分離れてるよ。女房にも

聴えないかね？ ぢや、お前の秘書のシメオン爺は？ たつ

た今、彼奴が俺たちに前門を開けて呉れた時、縛つておいたん

だよ。さア、ゆつくり爲事は出来やうと言ふものだ。おい、

ブウルネフ！」

大きな口髭の男が、依然として椅子に手を掛けて居たの

が、彼の方に近寄つて来た。

「何用です？」

「ブルウネフ。あの秘書は、どこへ押し込んでおいた？」

「門番の詰所に」

「で、エツサアレの女房の寢室も何處だか知つてるだらう

ね？」

「さア、貴方に教へて頂いて居ますから」

「よし、四人とも、みんな行つてこい、そして夫人と秘書を

付からぢやないか？ 俺の獲物を片手お前に遣るさ、だから

お前は俺に片手呉れるんだ。力を併せたら屹度こつちが勝

つ。敵味方と別れたら、だんく前途多難だ、どつちが障害

を突き抜いて勝利者となるか、誰に判らう？ だから俺が繰

返して言ふことだ、山分けとね！ 答へろ。諾か否か」

彼は狼嚙をゆるめてやつて、答を待つた。今度は、犠牲者

が何やら云つたらしかつたがパトリスには聴えなかつた。

が、相手の、首領は、忽ち肝癪玉を爆烈させてしまつて、

「やい？ お前のいふ條件つたら何だ？ 神に誓つて貴様と

言ふ奴は因業野郎だ！ そんな申し出を俺に提出するとは！

そんな事はブルウネフや、彼奴の仲間が有難がることさ。彼

奴らなら承知もしやう、だが、俺には、此のファキイ大佐に

は不足だ。黙れ、莫迦、此の野郎、俺はもつとキツパリ言ふ

んだぞ！ 山別けなら承知だ、が目腐れ金は厭だ、眞平だ！」

パトリスは熱心に聴入ると共に、目をコライイの方に注い

で、放さなかつた。彼女の顔は、なほ悲痛に歪みながら、同

じく、一個所に釘付けにされた表情を帯びてゐた。

再び彼は犠牲者の方へ眼を歸した。犠牲者の身體の一部分

は、暖爐の飾臺の上の鏡に映つて居る。此の男の着て居る物は、青天鷲絨で拵へた喫煙服で、年は五十歳位に見える。スツカリ禿げ上つた頭に、肉付きの好い顔、大きな曲り鼻、太い眉毛の下に、底深く光る兩眼、そして、だぶくの頬は濃い、半白の鬚で覆はれてゐた。彼の肖像が、彼の左手、第一と第二の窓の中間に掛つて居るので、それに依つてパトリスは、彼の容貌を一層手近に觀察することが出来た。肖像は殆ど狂暴に近い表情を浮べた、強い、精力家の顔付きに描いてあつた。

「これは東洋的な顔だ」とパトリスは獨語した。「俺もこんな顔を、エジプトやトルコで見た事がある」

これらの人間の名がみんな——ファキイ大佐、ムスタフア、ブウルネフ、エツサアレ——話の中に出るそれらの名前の抑揚と言ひ、彼等が採る身のこなしと言ひ、容貌と言ひ、姿と言ひ、すべてが會つて彼が近東の諸國で得た印象の數々を想ひ起させる物だつた。アレクサンドリアの宿屋や、ボスホオルの岸べや、アンドノリオブルの市の日や、或は又エーゼ海に棹さす希臘舟の上などで、よく見馴れたものだつた。

すべてレヴレチン型だ、が、バリーで素養を作つたレヴレチン型であつた。エツサアレ・知事とは、經濟界の立物で、パトリスも能く聞く名前だし、ファキイ大佐のことも聞知してゐる。大佐の物言ひや發音振りは、俄仕立のバリー子である證據だつた。

所が、扉の外から人聲がして來だした。荒々しくその扉が開いて、四人の男が歸つて來た。四人は縛つた男を引張つて來た、室に這入るなり、床の上に突轉ばした。

「さア、シメオン爺を連れて來た」とブウルネフと呼ばれた男が叫んだ。

「細君は？」と首領が訊いた。「妻君を連れて來て貰ひたかつたんだがね！」

「え、歌目です」

「と言ふと何だ？ 逃げつちまつたのか？」

「左様です。窓越しに」

「併し、そんなら追ひ掛けたら好いんだ。庭の外には出られないからな。番犬が吠えたのは、たつた今さつきぢやないか。」

「ぢやア、外に逃げ出したと思はないですか？」

「どうして？」

「小徑に出る門からは？」

「出來るものか！」

「何故？」

「もう何年も開けたことのない門だ。鍵だつて無いんだからな。」

「それは左様かも知れない」とブウルネフは調子を合せた。

「何にしても、提灯をつけたり待伏せを作つたり、近所近邊の隅々まで騒がして女一人を探す譯にも、行きますまいし……」

「成る程。だが、あの女を……」

ファキイ大佐は激怒したらしい。彼は俘虜の方に眼を轉じた。

「りだ……」

パトリスは怒りの拳を握り締めた。今こそは判つた。コラ

リイは自分の邸内に身を匿くして、彼所に居るのだ。五人の男が不意に亂入したので吃驚りして、彼女は身を以て窓の外に攀ぢ登り、臺地を傳つて階段の所まで來た。そして日常居住の部屋の外側に當る建物の一部分に來て、書齋の外廊に避難した。其處から、良人の上に演ぜられる兇行を目撃することが出来たのだつた。

「彼女の良人だ！」とパトリスは身慄ひと共に考へた。「彼女の良人だ！」

で、此上どう疑問を差し挟んで見た所が、着々目前で行はれてゐることが、忽ちにしてその疑問を一掃して呉れるのだつた。何故なら此の時、首領の男が、急にニヤリ／＼とし出して、「さうだ、エツサアレの老爺、白狀するとあの女は、口

で言へない程俺の心を奪つたのだ。それにね今晚少し前に、取つてやらうとしたのだが失敗した。だから今晚おそくには

屹度、と祈つた譯だ。今晚こそ、お前と取引を済ませ次第、も

つともつと心持の好い何事かを、お前の女房と済ませようと

「傍俸だね、悪たれ爺め！ 貴様の女房が俺の網の目を逃れ

出たのは、これで二度目だぞ！ 今晚の出來事を、あの女から聞いたかい？ あゝ、もしあの時、あの餓鬼士官など通り掛つてゐなかつたらなら……だが俺は屹度あの士官めを、とつ掴まへて、邪魔しやがつた御禮は、今に存分にしてやるつも

考へたんだよ。言ふまでもない、俺の力に降参さへしたら、あの女はほんの人質として貰ふだけさ、直ぐ返上してやるよ——あの所々の特殊な協定さへ済ませて呉れたらね——お、ほんとに安全に、無傷のままに返して上げるさ、俺を信用おし！ だから、早く真直ぐに言つちまはないかい、エツサアレ、お前は熱烈にコラリイを愛してるんだからな！ それがほんとでもあるさ！」

彼は彼の右手に寄つて行つて、スキツチを捻つた。すると、第三と第四との窓間にある反射蓋付きの電燈が点つた。其所には、こちらのエツサアレの肖像と一對を成す肖像畫があつた。が、それには覆ひが掛けてある。首領がその覆ひ幕を引き落とすと、コラリイの肖像が、まともに灯の光を浴びて現れた。

「あらゆる君主を見下ろす女！ 偶像！ 魔女！ 眞珠の中の眞珠！ 銀行家エツサアレ・ベイが至高のダイア！ 美しい女ぢやないか？ お前に聞くんだよ。あの優美な顔の輪廓と、あの瓜核顔の純眞さと、可愛い首と、そして花やかな肩とを讚美しろ。エツサアレ、俺たちの國には、お前のコラリ

イの足もとに寄れる女も居ないんだ！ 俺のコラリイだ、今に見ろ！ あの女が何處に居るか、俺は知つてるぞ。コラリイ、コラリイ……」

パトリスは眼をあげて、コラリイを見た。彼女の顔は、恥しさに赧くなつて居るやうだつた。彼自身も、侮辱の言葉の一つ一つに憎悪と憤怒を覺えて身震ひした。コラリイは他人の妻だつた、此の事が彼の狂暴な悲哀を呼ぶに十分だつた。そして此の悲しみに加ふるに、彼女が斯うして此等の人々の目前に身を曝らしながら、何物でも、最強者たる事を實證した人に身を任せる救ひのない餌食の如く、観念して居る様子を見ると齒擧ぐくて耐らなかつた。

同時に、何故彼女が此の室から逃げ出さないのか、不思議に堪へなかつた。庭の外から出られない物としても、邸内のことなら何處へ走らうと自由だし、窓を開けて、救ひを呼ぶことも出来る譯だつた。何でそれが出来ないのか？ 勿論、彼女は良人を愛して居ないのだ。もし愛して居るなら、良人を救ふために、どんな危険をも冒す筈だ。だが、彼女は、ど

うしてあの男が苦しめられるまゝに放任して置けるのだらう、もつと悪いことには、彼の苦痛を眼前に見、忌はしい光景を凝視しながら、彼の苦悶の呻めきに耳を傾ける事がどうして出来るのだらう？

「馬鹿は好い加減に切り上げよう！」と、幕を元の所に引戻しながら、首領が言つた。「コラリイ、あの女は最後に俺に恵まれた贈物だ。だが、俺はその前に先づお前に勝たなければ成らない。みんな、仕事を始めろ、そして此奴の仕事させやうぢやないか。先づ第一に、もう二十インチ火に近着けろ、それ以上には及ばぬ。宜し！ 燃えるかね、エツサアレ？ 何にしても、お前の辛棒出来ない熱さだ辛棒しろ、老爺」

彼は俘虜の右腕の繩を解いてやつて、身體の脇に小さな卓子を引き寄せ、その上に紙と鉛筆を載せながら、言葉をつづけた。

「此所に書く道具を置いてやつた。猿轡で物が言へまいから、書くがい。何を要求されるか判つて居よう。判つてるかい？ 二三行書けば好いのだ、そしたら許してやる。賛成

か？ 厭だつて？ おい、もう三インチ近着けろ」

彼は其所を離れて、秘書の上に身を屈めた。一層明るい灯の下に居たので、パトリスが能く見ると此の秘書こそ、時時コラリイを病院に送り迎へする老人であつた。

「お前はな、シメオン」と彼は云つた。「別に虐めはしないよ。お前の御主人に忠實なもの、主人がお前に何の秘密も話さないのも、俺は能く知つてるよ。それに又、今夜の事をお前が一言も他に洩らす筈のないのも確かだ。何しろ、お前が、ほんの一言でも他に洩らしたら、俺たちよりも一層お前の主人が破滅を招く基となるんだからな。これはお互に諒解して居る事さ。さうだらう？ ふむ、何故答へないんだ？ みんなが繩で、お前の喉を、少し強く締め過ぎたのかな？ 待つて居れ、少しばかり空気を吞ませてやらう……」

一方では、爐ばたの醜惡な犯行が續行されて居た。あの輝かしい炎が、灼熱した兩足を透かして見えるかと思はれたり、受難者は、死物狂ひに身を藻掻きながら、足を曲げようとして、後ろに退きさうとしたりした。そして、猿轡の奥から、不活潑な、休みつこのない呻吟が洩れて来る。

「お、耐らない！」とパトリスは思った。「斯うして、あの男の焼肉を拵へようと言ふのか？ 鶏肉を炙串にさしたやうに」

彼はコラリイの方を見た。彼女は身動きもしなかつた。彼女の顔は人間らしさを飛越えた表情を示し、眼は怖しい光景に夢見るやうになつて居た。

「もう二インチ近くへ！」と首領は部屋の片隅で、シメオンの縛めを解きながら叫んだ。

命令は實行された。犠牲者のあげた悲鳴は思はずパトリスの血管中を凍らせた。だが、その時、彼は今まで左程氣にも止めず、又少くとも重大視して居なかつた或る事實が眼に付いた。俘虜の手は勿論神経的な引吊りで連続的に微動する結果だが、小卓子の大理石の頂面に置いた腕のさきで、自然に向側の端つこをヒシと握むやうに成つて居た。さうして、だんだんと、苛責者共に氣の付かない間に、彼らが専ら彼の脚の位置に氣を奪はれて居る一方、また愚圖ぐつとシメオンに取掛つて居る首領にも氣取られぬうちに、此の手は蝶番で開閉される抽斗しを開けた。抽斗しの中に手を入れたと思ふと、

拳銃を取出した。慌て、抽斗しを元の所に押し戻すや否や、彼はその武器を椅子のうちに匿くしてしまつた。

此の動作は、と言ふより動作が示す意志は無鐵砲も甚だしい。何故なら、もうすべてが最後で、今の絶望的な状態のもので、此の男が五人の、一人残らず自由で武装した人間を向うに廻して勝てる筈はないのだつた。それにも拘らず、鏡に映つた彼をパトリスが見ると、彼の顔には、狂暴な決断の色が浮んで居るのであつた。

「もう二インチ」とフアキイ大佐は彼の方に引返して來ながら言つた。

彼は肉の工合を調べて、笑ひながら、

「皮膚の所々が火脹れして、血管が今にも破裂しさうだ。エツサアレ、いつまでも強情は張れないだらう。たうとうお前も年貢の納め時が來たやうだね。もう、少しは書き出したかい？ 違ふ？ ぢや、書かないつてんだな？ まだ助けを待つてるのか？ 女房を萬一の手頼りにでもしてるのかい？ おい、お前の女房はね、たとへ逃げ出して行つたとして、人には何も言はない！、それは今に判るよ、好し、ぢや

ア貴様は、俺を瞞着する氣か、それとも？ ……」

彼は突然こみ上げた憤怒の聲を荒らげて、

「彼奴の足を、火の中に突込んでしまへ！ 直ぐに、焼肉の好い匂ひを嗅がせて呉れ！ あゝ、貴様は俺に反抗するんだな、反抗するか？ 宜し、一寸待ちやがれ、死に損ひめ、疊んでやるぞ？ 耳を一つ宛斬りさいなんでやらうか。貴様も知つてる、俺たちの國の殺し方だ！」

斯う言つて、胴衣から短刀を抜き出すと、短刀は爐の炎を受けて、ギラリと光つた。顔は動物的な慘酷に溢れた醜さである。狂暴な叫びと共に腕を振上げて、嚴肅に、相手の上にし掛つた。

だが、エツサアレの動作は、それよりも素早く、彼の正面に向いた。

急に狙つた拳銃から、ドンと一發放たれた。短刀は大佐の手から滑り落ちた。なほ二三秒、眼は光を失ひながらも、片腕を高く振上げたまゝ、彼は威嚇的な見得を崩さなかつた。恰も、今どんな打撃を受けたのか、知らないものゝやうに。併し、やがて、ドツと犠牲者の上に重い身體が倒れ掛つた。

そしてエツサアレが、更に他の一人の兇漢に狙ひを向けようとした瞬間、その身體の全重量で、彼の拳銃を持つ腕を痺れさせた。

大佐はまだ呼吸があつた。

「お、畜生、畜生！」と彼は叫んだ。「殺したな！ ……だが、殺したのが貴様の破滅に成るんだぞ、エツサアレ！ ……斯う成つたらと思つて、用意はしてあるんだ。もし俺が今夜、宅に歸らなかつたら警視總監宛ての書函を投函するやうに言ひ残しておいて來たのだ…貴様の大叛逆が曝れて了ふぞ…貴様の経歴がみんな…貴様の計畫を…お、悪魔！ ……大莫迦めが！ ……妥協するのは何でも無かつたのに…」

そのほか、二三言、聴き取れないことを云つて、床の上に轉り落ちた。すべては終つた。

麻酔状態の一瞬間。それは此の突然の悲劇から生れた驚駭ではなく、寧ろ、首領が臨終に言ひ残した啓示から起り、あの書翰と言つた一語に心を扶られた結果であつた。勿論、その手紙は犠牲者の身の上ばかりでなく、侵入者たち全部の連累するものに相違ないのであつた。ブアルネフは、エツサア

レの手から拳銃を奪ひ取つた。後者は、椅子も今は位置を外れて居たので、やつと脚を曲げるのに成功して居た。誰も彼も、身動きさへしない。

それと共に、此の場の光景の端々から起る恐怖感、ヒツソリとした沈黙のために、一層深刻化されて行くやうに思はれた。床の上には、敷物に血を流しながら死骸が横たはつて居る。それから餘り距離に、シメオンが動かぬまゝに倒れて居る。なほ俘虜は縛られたまゝ、今にも肉の咬はれるのを待ちながら、炎の前に置かれてある。そのまはりには寄りそひながら、あの四人の屠殺者たちは、此の次に何を爲すべきか、途方に暮れて居るに違ひない。が、どんな方法でも盡して、敵手を打負かさずには措かぬといつた頑固な決心が、みんなの顔付きに現れて居るのだつた。

仲間は一樣にブルネフに眼を注いだ。彼は、如何なる障碍をも突抜けて進む種類の人間に見えた。背の低い、頑丈な、精力的な身體付きをした男で、上唇は、あの、パトリス・ペルアルの注目を惹いた濃い口髭で掩はれて居た。首領に比べると、慘忍相もさう深刻でない代りに、物ごしの品も

悪く、鷹揚ぶりも劣つて居た。が、冷淡さと我利らしい點に於ては遙かに勝つて見えた。

大佐が死なうが死ぬまいが、部下は氣にも掛けて居ない。今現在勤めて居る役割に忙しくて、何ら惻隱の情を死者に持つ餘裕もないのだつた。

遂に、ブルネフは、次に起こす動作に就て、決心が着いたらしかつた。扉のそばに置いてあつた薫いろのフェルト帽を取上げ、その裏綿を引つくり返へして、小さな糸巻きを取出した。これを見て、パトリスはハツとした。糸巻きに巻いてあるのは、細い赤色の紐だ、ヤ・ボンに纏まへさせて来た、あの最初の共犯者の首に巻いてあつたのと、正確に同じ紐であつた。

ブルネフは、紐を糸巻から伸ばし出しながら、二つの締め金を付け、己れの膝に纏つて紐の強さを試めしたあとで、エツサアレの所に歸つて来た。まづ、猿轡を取りはづしてから、紐をエツサアレの首に絡ませた。

「エツサアレ」と、彼は落着いた聲で云つた。此の方が大佐の暴戾的な嘲罵より餘程身に沁みる聲だつた。「エツサアレ。

俺は、お前を何一つ苦しめようとは思はないよ。拷問は厭な手段だからな。で、俺はそんな物に手頼りはしない。お前は、お前で、爲すべき事を知つてるし、俺は俺で、俺の爲すべき事を知つて居る。お前の方は、たつた一言で好い、俺の方は、たゞの一動作で好い。それで事は済むんだ。お前がこれから言ふ言葉は、然りか、否か、どつちかだ。その然りか、否かに従つて俺の果す動作は、つまりお前を許すか、それとも……」

二秒、彼は言葉を切つた。それから、キツパリ宣言した。

「それとも、お前を殺すかだ」

簡単な語句、然し簡単に言つて退けはしたものの、その調子には十分、二度と後へは引かぬ金鐵の響きがあつた。エツサアレが、もはや絶對的服従のほか、通れる路のない破局に面接して居るのは明かであつた。一分間も掛らぬうちに、發言か、死かの境目であつた。

パトリスは、もう一度コライイの方に目を注いだ。彼は、もし彼女の何處かに、消極的な恐怖以外の何物かの感情が現れて居たら、直ぐにでも救ひに飛び込まうと身構へた。けれ

ども、彼女の態度は少しも變つて居なかつた。して見ると、彼女は最も悪化した此場の有様、良人の死をさへ意味する此の光景を黙視して居るとしか思へない、それゆゑ、パトリスは手を引いてしまつた。「諸君も俺に賛成かい？」と、ブルネフが仲間を顧みながら訊いた。

「勿論」と、仲間の一人が答へた。

「ぢや、諸君は此の責任を分擔するね？」

「分擔するとも」

ブルネフは、両手を持ち上げて、互に交又した。そのため、紐がエツサアレの首のぐるりに絡み付くこととなる。そこで、彼は紐を徐々に引つ張つて、締め付ける感じを首へ與へながら、無感動な様子で訊いた。

「然りか、否か」

「然り」

一度に、満足の嘯きかさめいた。部下たちは固唾を呑んだ。そしてブルネフは、是認の態で打ちうなづきながら、「あゝ、ぢや承知したんだな……危い所だつた……エツサアレ、お前ほど地獄の近くへ行つた者は、二人とあるまい

ぜ」

「まだ紐の端は手から離さないで、語をつゞける。」

「大によし。云つて呉れ。だが、俺はお前を知つて居る。屹度お前の答へは俺を驚かさだらう。何故つて、俺は大佐にも話したほどだぜ、いくら殺されると判つたつて、とても秘密を白状するお前ではあるまいとね。その通りだらう？」

「いや」とエツサアレが答へた。「殺されたつて、拷問されたつて言ふものか。」

「ぢやあ、何か他の物を提供しようと言ふのかい？」

「さうだ。」

「こんなに、一寸死刑を猶豫してやるだけの値打ちのある物か？」

「さうだ。俺は先刻、此の條件を、一寸大佐の耳にまで入れてやつたのさ、丁度お前たちが向うの部屋に行つた留守の間にね。が、何しろ彼奴は、お前たちを裏切つて、俺と二人だけで、内密に山分けにしようと言ひ張つてね、俺の出した他の提供物を拒絶したんだよ」

「俺なら、どうして拒絶しないと云ふんだ？」

「取らなけれア、お前の損だからさ。そして、大佐が受けなかつた物が、お前の氣に入るからさ」

「融合だな、さうだらう？」

「さうだ」

「金か？」

「さうだ」

「ブルネフは、肩を聳かした。」

「二三千法の小切手が關の山だらう。おい此のブルネフや、俺の仲間が、そんな莫迦だと思ふのかい？……こら、エツサアレ。どうして貴様は融合はうなど考へるんだ？俺たちは、殆ど完全にお前の秘密は知つて居るんだぞ……」

「秘密の何たるかは知つて居る。だが、それを如何に利用するかは知つて居まい。それを、どう言ふ風に取扱つて好いか知りもしない、そして、それが又肝腎の所なんだ」

「それア、こつちで發見するさ」

「出来るものか」

「成る程。併し、お前さへ殺したら、すぐ發見出来るんだ」

「殺す？ 大佐が準備して置いて呉れた報告のおかげで、數

時間後には、お前たちは追跡されるんだぞ、逮捕されるのも、殆ど明瞭だ。どんな事があらうとも、お前たちは探索をつゞけて行ける筈がない。だから、もう處置を擇ぶ暇もないんだ。俺が提供するのは金だ。でなければ……監獄か」

「で、もし其の金を受けたら」とブルネフは訊いた、語調が訴へるやうな調子に變つて居る。

「何時拂つて呉れる？」

「今、直ぐ」

「金が此所にあるのか？」

「有る」

「目腐れ金だらう、先刻も言つたやうに？」

「いや、お前の望み以上、遙かに多額の金高だ、何倍か分らぬほど多額だ」

「いくら？」

「四百萬法だ」

良人と女

一同は電氣に打たれたやうに、驚愕した。ブルネフは進み寄つて、

「何だつて、もう一度云つて見ろ？」

「四百萬法と云つたのだ。つまり、お前たち四人に、四百萬法やるのだ」

「へえ！……ほんとに言ふんだね？……四百萬法？」

「四百萬法、それが俺の言つた金額だ。」

數字が餘り巨大だ、そして提供するにしても眞に意想外だったので、仲間共もパトリス・ベルブルも同様の感に打たれた。彼等は、猝に陥るおそれを感じた。だからブルネフは言はずに居られなかつた。

「これは意外の提供額だ……どうして其所まで決心したのか、俺には不思議だよ」

「もつと少くとも承知するつもりだつたのか？」

「さうさ」とブルネフは素直に言つた。

「因果なことに、それより少くは、俺に出来ないんだ。俺は命を助かる只一つの方法しか持つて居ない。それは金庫を開いてお前たちに提供することさ。そして金庫の中には千法

紙幣で百萬法づゝチャンと四束あるんだからな」
ブウルネフは、驚愕の情を取去ることが出来ず、だんく〜
疑ひ深くなつて来るばかりで、

「四百萬法だけ取つてしまへば、俺たちも其の上あとに文句
を付けないと言ふことが、どうして分つたんだ？」

「あとに何の文句だ？ 場所の秘密か？」
「さうだ」

「何故つて、お前たちは秘密を言ふ位なら死んで了ふ俺だと
承知してゐるからだ。四百萬法が最大限だ。欲しいかい、欲
しくないか？ その代りにして貰ひたい約束もなければ、誓
言も要らないんだ。何故なら兎に角お前たちは懐中がふくれ
たら、初めて考へ付く事が一つあらう。犯行を證據立てる殺
人などで、不利に陥るのは止めて、片付けてしまひたいと言
ふ一念だけになる」

此議論に返答をさし挟む餘地はない、ブウルネフは論争を
止めて呟いた。
「金庫は此の部屋の中にあるのか？」

「さうだ。第一と第二の窓の中間で、俺の肖像畫のうしろに

在る」

ブウルネフは、肖像を取り外して、
「何も無いぞ」

「それで好いんだ。破目板の中央に當つて型形で金庫の輪廓
が浮いて居る。眞中に、薔薇の形をした物があるだらう、木
ぢやない、鐵で出来てるんだ。そんなのが他に四つ、破目板
の四隅にある。その四つは皆、連続した刻み目で、鍵の合言
葉にはまるやうに右手に動かすのだ。合言葉はO R Aだ」
「つまり、コラリイと言ふ文字の頭から四つ字を取つたんだ
ね？」とブウルネフは、エッサアレの説明に従つて、その通
りにしながら訊いた。

「いや」とエッサアレ・ベイが言つた。「O O R A Nと言ふ文
字の、最初の四字だ。其所まで、もうやつたか？」

一寸の間を置いて、ブウルネフは答へた。
「うん。やつた。所で鍵は？」

「鍵は無い。今度は中央の薔薇形を捻るんだ。コオランの第
五番Nの字、Nといふ字を出せば好い」

ブウルネフは、此の五番目の薔薇形に取掛つた。と忽ち、

軋る音がした。

「扉を引くんだ」とエッサアレが言つた。「それだ。金庫は深
く出来て居ない。前壁の石の二つに彫り込んであるんだか
ら。手を突込んで見ろ。紙入が四つあるだらう」

何か驚嘆すべき事が起つて、ブルウネフの探索は阻止せら
れ、その上、エッサアレが突然に展開する陥穽の中に陥され
る。パトリスがそんな事を豫期したのも、無理はない、他の
四人の仲間たちも、此の不愉快な考へを泛べたらしく、みん
なの顔色が灰色になつた。その間、ブウルネフは頗る慎重
に、疑ひ深さうに動いて居るのであつた。

遂に、彼は振返つて、エッサアレの所まで進んで来てその
側らに坐つた。彼の手には、紙入が四つあつた。四つとも、
素敵に容積高で、結び紐で束ねてある。紐の結びを解いて、
一つの紙入を開いた。

彼の膝は、その上に展げた高價な荷物の壓迫に打ち戦い
た。その一部分から、紙幣の大きな一重ねをつまみ上げた
時、彼の手は熱を病む老人の手のやうに震へた。
「千法紙幣」と彼は呟いた。「千法札が十束だ」

獸的に、互に戦闘の準備に取掛つた男のやうに、他の三人
の各々が、紙入を一冊づゝ擲んだ。そして中に手を入れて呟
いた。

「十束だ……千法札だ……」
と、中の一人が、息詰まるやうな聲で叫び立てた。

「切り上げよう！……逃げろ……」
突然の恐怖が、彼等の頭を混乱させてしまつた。彼等が逃
走しない間に取返へすだけの奇策が無い限り、エッサアレが
そんな大財産を皆に引度す筈があらうとは、考へられないの
であつた。それは確かな想像だつた。天井がひとりでに彼等
の頭上へ落ち掛るかも知れない。壁が迫つて来て、彼等を壓
迫する一方、謎のやうな敵の身體だけは安全に生き残らせる
やうな仕組みがあるかも知れない。

パトリス・ベルナルも、これに就ては何の疑ひも持たなか
つた。兇變は次第に迫つて来た。エッサアレの復讐は避く可
らざる手近にある。彼の如き人間、欲するがまゝに戦闘者と
成り得る男は、背後に、何らかの奇策がなくては、さう容易
く四百萬法の金を剝奪され、罷む者ではない。今日はずる分

色々の悲劇的場を見、数々の脅迫暴行を目撃したが、その何れよりも今こそ眞に彼の昂奮を狂暴にする物が現れるだらう。彼はコラリイの顔も、自分と同じやうに憂慮に溢れて居るのを見た。

一方、ブウルネフは半ば平靜に復して、仲間を顧みながら言った。

『そんな馬鹿な事を云ふな！ 此奴はシメオンと一緒に、縛めを解いて追跡して来るぢやないか』

片手は紙入を握んで居るので、他の片手だけ使つて、みんなでエツサアレの片腕を、椅子に縛り付けた。すると、彼は腹立たしさに反抗した。

『莫迦野郎共が！ お前たちは、自分でも能く知つてゐる通り、あの重大秘密を俺から奪ひ取る目的で来た癖に、たつた四百萬法ばかりの目腐れ金に気が狂つてしまつたのだな。何がしたいと言ふんだい、大佐の方が、もつと氣骨があつたぞ！』

彼等がもう一度猿轡を嵌めたあとでブウルネフは、拳固を固めて酷く殴り付けた。それゆゑ、彼は氣絶して了つた。

『これで退却も安全』とブウルネフは云つた。
『大佐の死骸はどうしよう？』 仲間の一人が云つた。『此の儘、打棄つておかうか？』
『仕方があるまい？』
が、明かにこれは不聰明だと氣が付いたらしく、彼は云ひ足した。

『いや、待て、それは不可ん。此の上エツサアレと協定するのは此方の利益でもないがね。どうしたら好いかは、エツサアレも同じこと、先づ第一に俺たちは出来るだけ早く此所を逃げ出すのだ。そして、あの大佐の糞手紙が警視廳に届かないうちに手配りすることだ。さうだ、今夜の十二時までに関に合ふやうにだ』

『で、それから、どうしたら好い？』
『先づ大佐の死骸を俺たちと一緒に自働車で運び出すのだ、そして途中で捨て、しまふのさ。巡査がどうにか處置して呉れるだらうよ』

『で、大佐の書類は？』
『自働車の中でポケットを調べて見よう。手を借せ』

流血を止めるために、死骸の傷口を繻帯をして、みんなは手取り足取り大佐を擔ぎ上げ、そして外に出て行つた。が、さうして居る間にも、誰一人、ほんの一瞬間でも紙入れから手を放した者は無かつた。

パトリス・ベルヴルは、彼等が次の部屋を通つて行くのを聞いた。そして、ドシン／＼反響する廣間の床を踏んで行くらしい足音がした。

『今こそ、エツサアレか、シメオンのどつちかが仕掛鉤を押す、そして悪漢共が網に掛るのだ。』

エツサアレも身動きもしなかつた。

シメオンも身動きもしなかつた。

パトリスは、彼等が立去るに伴ふ、あらゆる音響を聞いた。車寄せの扉が軌り開く音も、自動車が動き出す汽關の響も、走り去る爆響も。

そして、それでお終ひだつた。何事も起らなかつた。兇漢らは四百萬法の金を握つて、何處ともなく逃走してしまつた。

長い沈黙の時がつゞいた。パトリスはまだ昂奮から醒めな

いのである。また、戯曲が大詰の幕切れに達したとは信じられない。で、彼は更に、どんな事が起つて来るか判らない怖しさの餘り、コラリイに自分の居る事を知らせようと決心した。

新しい事件が、彼を引き止めた。コラリイが立上つたのである。

彼女の顔には、もはや何の恐怖の色も、脅迫感の影もなかつた。だが、パトリスが恐らく一層驚嘆したのは、彼女が突然邪惡な精力に鼓舞されて来たのが見えたからであつた。そのため、彼女の兩眼には、今まで曾てなかつた光を宿し、眉毛と脣とが痙攣を起して居る。コラリイは、何か事を起さうとして居るのだ、彼にはそれが、あり／＼と分るのであつた。

『何をしようといふのだ？ これが悲劇の幕切れか？』
彼女は、外廊の、かなたの隅を目掛けて歩き出した。其所には二つの螺旋形の梯子の一つが掛つて居る。彼女は靜かに、その癖足音を窺まうとするでも無く、梯子を降りて行つた。

彼女の良人は、足音を聴かずには居られなかつた。その上、彼が頭を上げて彼女の歩いて来るのに眼を注いで居るのが、鏡に映つてパトリスの方から見えた。彼女が椅子の付け根に立つた。が、その態度には、何の逡巡の色も無い。彼女の意の在る所は疑ひもなく明瞭だ。たゞ彼女は、爲さんとする所を、實行に移す最良の方法を考へて居るだけだつた。

「あゝ」とパトリスは全身ぞつとしながら呟いた。「何を前にはしようといふのだ、小母ちゃんのコラリイさん？」

彼は吃驚した。コラリイの眼の、その變な凝視の物凄いい光の中に彼女が良人に對して爲さんとする秘密な決心が現れて居た。大佐の手から滑り落ちたまま、床上に轉つて居る短刀の上に、彼女はヒシと目を据えたのであつた。良人を突き刺すのだ、それ以外の目的で彼女が短刀を拾ひ上げようとは、パトリスには微塵も考へられなかつた。殺人の意志は、彼女の青黒い顔の上になまざりと表れて居る。だからこそ、まだ彼女が一糸をも動かさない間に、エツサアレは發作的の恐怖に襲はれ、あらゆる筋肉を緊張させながら、

動作を阻む縛めを引千切らうと焦り出した。

彼女は進んで行つた。そして、もう一度立止ると、突如として身を屈め、短刀を握つた。躊躇なく彼女は更らに二歩進んだ。その結果、エツサアレが横はる椅子の右の脇に来ることに成つた。彼は、たゞ妻を見るために首を少し曲げる事が出来るだけだつた。さうして、恐怖の一分間。良人と妻と互の眼がピツタリ相合つた。

今、殺さんとする妻の頭腦を、殺されんとする良人の頭腦を、互に過る渦巻く想ひ、怖れ、憎しみ、定めなく相矛盾する情熱、それは暴風の如く、パトリス・ベルワルの意識の底深くに映じ傳はるのである。彼はどうしたら好いのか？ 今眼前に演じ出されやうとする悲劇に登場して、彼はどうした役を勤める可きであらうか？ 妨害すべきか？ 取返しの付かない行爲を犯すコラリイを、引止めるのが彼の義務だらうか？ それとも又、彼の銃銃一發を以て、彼の頭を粉碎し、自分自ら犯人となる可きであらうか？

然も、實に最初から、彼は只一つの感情に、あらゆる他の感情と共力して、次第に彼を痲痺させ、内心、争闘をすべて層大きく、背高く伸びたやうに見えた。何か不可見な力が、彼女に力を付け、その全存在を緊張させて、彼女の意志の指さす所に、あらゆる精力を喚起せしめるかと思はれた。今、刺すのだ。何處を刺すべきか、彼女の眼が探して居る。所が、彼女の眼はだん／＼弱くなると共に、だん／＼黒味を失つて行つた。パトリスには彼女の視線に、或る躊躇の色が入つて来たと思はれた。いつもの優しさが彼女に返つて来たのではない、たゞ少しばかり、女らしい美しさが蘇つて来たのに違ひない。

幻惑に陥らせてしまつたところの、只一つの感情に導かれて来たのだつた。最高潮に達した好奇の感情である。それも日常よくある、醜惡な秘密をあばいて喜ぶやうな好奇心とは違ふ。實際それは、事件の急轉直下に驅られ、突然、再び人妻として眼覺めた瞬間、驚くべき冷靜さを以て限りなく怖しい決心を固めた女、――愛する女の神祕な靈魂に透徹せんとする好奇心であつた。そこで、又色々、他の疑問が、ひし／＼と心に迫つて来るのであつた。何が、彼女に斯る決心を成さしめたか？ 復讐か？ 刑罰か？ 憎惡心の満足か？

パトリス・ベルワルは元の場所にヂツとして居た。コラリイは手を振上げた。眼前の良人は、最後の努力を示す、あの絶望的な動作を此上試みようともしなかつた。彼の眼には、哀訴も、脅迫も、影さへ浮べて居ない。觀念して、彼は待つのである。

彼等から遠くも離れて居ない所に、老シメオンはなほ縛られたまゝ、半ば肘をついて身を起しながら愕然として此の光景を見詰めて居た。コラリイは再び手を振上げた。彼女の全姿勢が、常より一

「あゝ、小母ちゃんのコラリイ」とパトリスは呟いた。「お前は再びお前らしさに立ち歸つたんだ！ お前こそ俺の能く知つてる女だ。殺すのがどんなに正しいと考へられても、お前は殺さないだらう……俺もさうあつて貰ひたいのだ」

しづ／＼と、彼女の腕は下方に垂れ下つた。顔付きがゆるんだ。彼女を騙つて殺人にまで及ばさうとした、あの魅惑的な目的から、脱した時、彼女はどんなに大きな救ひの感じを味つたか、パトリスにも想像する事が出来た。彼女は呆然として己れの短刀を眺めた、まるで惱ましい悪夢から眼覺めた

者のやうに。さうして、良人の上に身を屈めながら、縛めを解き初めるのであつた。

だが、さうしながらも、彼の身體に觸れたり、恐らくは又、彼の視線に會つたりするのを避けて居るところを見ると、厭で厭でならないのであつた。繩は一本々々、絆ぐされて行つた。エツサアレは自由の身と成つた。

次に起つたことを、何と考へても豫期し得られぬ事だつた。妻に對して一言のお禮も言ふ事なしに、一言の憤りも亦言ふ事なしに、此の男は、たつた今、此世からなる地獄の責苦に逢ひ、その身體の苦痛のまだ癒えぬ此の男は、慌て、裸足を踏み締めながら、卓上電話に馳せ付けたのであつた。

それが丁度、飢餓に迫つた者が、不意とパンの一切れを見付け出して、自らを救ひ、生命をつなぐよすがごと、嬉々としながら掴み取る時の様子そのまゝであつた。せき上げる呼吸に喘ぎ喘ぎ、エツサアレは受話器を外し、番號を呼んだ。

『本局のね、四〇・三九番』
さて、それから妻の方を、無頓着に振り向いて、『あつちへ行け』と云つた。

彼女は耳に入れぬ様子だつた。老シメオンの側に膝まづきながら、同じく縛めを解いてやつて居た。

電話口にかゝつて、エツサアレは焦れ出してしまつた。『もしく？……もしく？……すぐ呼び出して貰ひたいんだ、どうぞ宜しく、來週ぢやないんだぜ……急ぐんだ。四〇・三九……急ぐんだ、こら！』

さうしてコラリイの方を向くと、嚴かな聲で繰返した。『あつちへ、行つてろ！』
彼女は行きたくないと言ふ顔に、一方また話を聞いて居たと言ふ様子をした。彼は彼女の方に向つて、拳を振りながら、再び云つた。

『行け、行け……此所に居て貰ひたくないんだ。シメオン、お前もあつちへ行け』
老シメオンは立上ると、エツサアレの方に進んで行つた。恰も何か言ひ出したい様子で、そして反抗するらしい氣勢に見えた。けれど、彼の動作は、どうしようもハツキリ決まつて居なかつた。そして、暫く考へて居た末に、扉口の方に引返し、何とも云はずに出て行つた。

『あつちへ行け、ねえ、おい。行つてろ！』とエツサアレは繰返した。彼の全身が脊かしの身振りを採つた。

併し、コラリイは一層彼の近くに寄つて行つて、頑固に、挑戦する如く腕を組んだ。丁度その時、エツサアレは相手に呼びかけられたらしく、彼は訊いた。

『そちらは、四〇・三九番ですか？ え、成る程……』

彼は躊躇した。コラリイの居る事が、明かに此上もなく不愉快らしい。そして、彼は彼女に知らせたくない事を、言はうとして居るのに違ひなかつた。だが、勿論、時間が迫る。突然、彼は決心した、そして受話器を二つともピツタリと耳に當てながら、英語で話し出した。

『君はグレゴアール君か？……こちらはエツサアレ……もしもし……左様だ、レイヌアール街から掛けてるんだ……時間がない、お聞き……』

彼は腰かけて話しつゞけた。
『好いかい。ムスタファが死んだ……大佐も死んだ……黙れ、口を出さずに聞いて居れ、でなけア破滅だぞ、お前も一緒に……お聞き、彼奴らがみんな遣つて來たのだ。大佐

と、ブルネフとそれから悪漢共が揃つて來やがつた。そして暴力と脅迫で俺から奪ひ取つて……大佐は殺してやつたがね、たゞ困つた事は、大佐め、俺たち皆を引つくるめて、訴狀を警官に出す手筈を済ませてるんだ。手紙は直ぐ投函されるだらう。だからお前に知らせしておくがね、ブルネフとあの三人の悪黨は姿を晦まさうとして居る。今頃は家に歸つて、書類を整理してるだらう。で、屹度一時間か二時間のうちに彼らはお前の手に入ることに信じて居る。お前の所こそ彼奴らが必ず選ぶ避難所さ。お前と俺とが知合ひとも知らずに、彼奴らはさう目論見を立てる。これには疑ふ餘地があるまい。屹度お前の所に……』

エツサアレは言葉を切つた。しばらく考へて、又つゞけた。
『彼奴らが寢室にして居る各室共通の合鍵は、まだお前、持つてるだらうね？ さうかい？……巧い。それから、その寢室の壁の戸棚を開く合鍵を持つてるだらう。持つてるかい？……宜し宜し。では、彼奴等が眠ると直ぐ、いや、それより彼奴らが熟睡するのを見澄すと直ぐ、忍び込んで、戸棚を

探して呉れ。どの戸棚にも決まつて、彼奴らの強奪品の分け前が這入つてゐるに違ひないから、直ぐ、譯なしに探し出せるよ。お前も知つてゐる、あの四つの紙入れさ。お前の袋に入れ、ね、出来るだけ早く逃げ出して、俺に逢ひに来てい」

又再び、彼は黙つた。今度は、エツサアレが聴いて居るのである。彼は答へた。

「何を言つてゐるんだい？ レイヌアール街だつて？ 此所？ 此所で俺に逢ひに来る？ どうしたんだ、お前、氣でも狂つたのか！ 今俺が此所に愚圖々々して居られると思ふのか、大佐が告訴したのだぞ！ 違ふよ、あの停車場附近の旅館に行つて、俺を待ち合はせて呉れ。十二時か午後の一時まで、俺も行く。多分、少しは遅れるかも知れないがね。心配することはない。ゆつくり飯でも食つて居れ、話はその時する……もしも！ 分つたか？ 好し好し。何も彼も好都合に運んで見せよう。ぢや、一先づ左様ならだ」

「どうして俺が誰なんか吐くものか？」彼はせうら笑つた。「もし俺が、お前が初めから此所に居合せて居たのを知らな

かつたら、お前の前で電話など掛けはしなかつたんだ。」

「妾は二階に居たのです。」

「ぢやア、何も彼も聴いたんだね」

「え、」

「何も彼も見ただね」

「え、」

「そして、彼奴らが俺にした拷問も見、俺の悲鳴も聞いて居りながら、お前は俺を救はうともしなかつた、拷問からも、死からも！」

「え、妾は眞實を知りましたから」

「何の眞實だ？」

「恥度とは思ひながらも、今までさう信じ切るのは怖しかつた眞實です」

「何の眞實だ？」と、彼は聲を高くして、繰返した。

「貴方の叛逆罪に就ての事實です」

「氣狂ひめ。叛逆罪など犯した覚えはないわ」

「お、口さきで胡麻化さないで下さいまし！ 實際を申しますと、眞相が全部は妾にも判つては居ません。あの人たち

の言つたことや、貴方に要求することが、みんな諒解された

のでもございませぬ。けれど、貴方を脅して聞出さうとした

秘密は、國事犯の秘密なのでした」

「人は只、自分の國家に對してのみ反逆を行ひ得る」と彼は

「佛蘭西人ですとも！」と彼女は叫んだ。「佛蘭西人とされ、

佛蘭西人とお成りなすつたのです。妾といふ佛蘭西人と結婚

なすつて佛蘭西に住み、そして財産も佛蘭西でお拵へなさい

ました。その佛蘭西を、貴方は裏切らうとなすつて被在る」

「莫迦なことを言ふな！ それが誰の利益に成るんだ？」

「そんなことは妾存じませぬわ。何ヶ月となく、實際何年と

なく、大佐やブウルネフや、あの昔のお仲間たちと貴方御自身

とで、素破らしい所業に——さうです、素砂しいと言ふのが

其の人たち自身で言つた言葉ですわ——お忙しかつたのでし

た。それが、今では、共同の事業から利益をお互に争つて被

在るのです。そして、他の人たちは、貴方がたつた一人で其

の利益を横領なすつて、御自身の物でない秘密を獨占して被

在るのを攻撃してゐるんですから、妾は、叛逆よりも、一層汚

れて、厭らしい他の物、拘摸の組合みたいな物を見せつけられる譯なんぞございますわ？」

良人は、拳で椅子の肘を叩いた。

「澤山だ！」と彼は叫んだ。

ユラリイはちつとも動じる氣色がなく、

「澤山ですつて」と反響的に言つた。「仰る通りです。妾たちの間に言ふ可き言葉はこれで澤山でございます。それに、

何よりも重大な事が一つございます。貴方の逃走、といふ事

です。これが何よりの問はず語りですわね。警官を恐れて被

在るのです」

彼は再び身を反せられた。

「俺は誰も怖くない」

「成る程ね、でもお遁げなさるのね」

「さうだ」

「ぢやア、早くお話を付けませう。何時御出發ですか？」

「今、直ぐ、十二時に」

「で、もし逮捕されなさいましたら？」

「屹度、逮捕されはしないよ」

「ですけれど、もしもおされなすつたら！」

「さうさせて置くさ」

「少くとも訊問や吟味があるでせうね」

「いや、事件は直ぐ暗黙に葬られるよ」

「さう御望みなさるだけでございませう」

「さうだと信じるのだ」

「まア！ で勿論佛蘭西から逃げてお了ひなさるんでせう

ね？」

「出来るだけ早くさ」

「何時までに？」

「二三週間のうちに」

「どうぞ其日にはお知らせ下さい。その日から妾は生返るの

でございませうから、お知らせ下さい」

「出發の日には通知をやらう。だが、それは他に理由がある

からだ」

「どういふ御理由？」

「その知らせで、お前が俺を追驅けて来るやうにさ」

「貴方を追驅けて？」

彼は冷酷な微笑を投げた。

「お前は俺の妻だ」と彼は言つた。「良人が行く所に、妻もつ

いて来るのだ。そしてお前も知つてる通り、俺の宗教では、

良人は妻の上にあらゆる権利を持つて居る、生殺與奪の權も

その中にある。さうだ、お前は俺の妻だからな」

ユラリイは頭を振つた。そして得も言へぬ侮蔑的な調子で

答へた。

「妾は貴方の妻ぢやございませぬ。貴方は厭らしい、怖しい

方だと申すほか、何の感情も持つて居りませぬ。もう二度と

お目に掛りたくないのです。ですから、どんな事がありまし

ても、どんな脅しをされましても、妾は二度とお目には掛り

ませぬ」

彼は立上つて、つか／＼と彼女のそばに歩み寄つた。そし

て身を屈め、脚をぶる／＼震はせながら喚き立てると共に、

再び握り締めた拳をふるはせて、彼女の方に突出した。

「何だ、お前の言ふことは？ 何を言ひたいんだ？ 俺は、

俺は貴様の御主人様だ、通知した時に、俺の所へ来いと、御

主人様が命令するんだ」

「私は参りませぬ。神様のみ前に誓ひますわ。望み通りに必

ず救はれると誓ひます」

彼は憤りに驅られて、足を踏み鳴らした。顔は憎悪に曲

がりながら、吠え立てる。

「と言ふのは、此處に残つて居たいと言ふ意味だな！ 成る

程、お前には俺の知らない理由があらう、だが、直ぐ想像の

つく理由だ！ 心の交渉だらう、貴様の意中に誰かが出來た

んだな、屹度……黙れ黙らんか？……いつも／＼俺を嫌つて

たちやないか？……貴様の嫌悪は、今日始まつた事ぢやな

い。初めて俺を見た昔からの事だ、結婚以前にさへ避るこ

とだ……一人はまるで不倶戴天の仇同志のやうに暮して來

た。俺は貴様を愛した。貴様を尊敬もした。たつた一言か

けて呉れる言葉で、俺は貴様の足もとに膝まづかすには居ら

れなかつた。貴様の足音をきいただけで俺の心の随まで震へ

た……それなのに、お前の俺に對する感情は、恐怖のほか何

物もなかつたのだ。そして、俺が居なくなつたら、お前は新

生涯の第一歩に入るのだと空想してゐるんだな？ どうして。

それより先きに、俺の手で殺してやるぞ、俺の美人！」

彼は拳を解いて、擡げた手でコラリイの両肩を首に押し付けるやうにしながら、恰も見付けた獲物を締め、窒息せしめんとする一刹那の如く、引摺んだ。神經的の戦慄から、彼の顯と顯とがカチ／＼鳴った。汗の玉が禿げた頭の上で光つて居る。

彼の前に、コラリイが無感動に立つて居るのが、大變小柄に、弱々しく見えるのだつた。パトリス・ベルアルは脾肉の嘆に堪へない。彼は何時でも行動が執れる用意をして居たが、彼女の冷靜な面上には嫌悪と輕蔑のほかの何の表情をも讀むことが出来なかつた。

遂に自己を制し得たエツアサレが言つた。「俺の所に來るやうに成るよ、コラリイ。好きであらうが嫌ひであらうが、俺はお前の良人だ。俺を殺さうといふ邪慾で、短刀を振り上げたお前が、その目的を捨てる何の力も無かつた時、たつた今、お前は俺の妻だと感じたのぢやないか。いつだつたかも、其の通りさ。獨立したいといふ發作は直ぐ消えて、お前の主人である男の懷中に歸らなくちやならないんだ」

「妾は何處までも、貴方と闘つて行くつもりです」と彼女は答へた。「此の家で闘ひますわ。貴方が折角お築きなすつた賣國的の所業を、妾は屹度破壊して見せます。何の憎しみもなしに破壊します。何故つて、妾には憎む力も、もうないのですから。けれども絶え間なしに破壊して行つて、お仕上げなすつた悪事を無駄にして御覽に入れます」

彼は聲を低めて答へた。「俺には憎む力がある。覚えてろ、コラリイ。お前が何の怖れもなくなつたと答へた瞬間こそ、俺がお前に爪を伸した瞬間だぞ。用心しろ」

彼は電鈴を押した。老シメオンが現れた。「下男二人は逃げ出したつてね？」とエツアサレが訊いた。そして答へを待たずに言葉を續けた。「好い厄介拂ひだ。下女と料理人があれば、俺の用は間に合ふ。彼奴らは今夜の物音を聽かなかつたかい？ 聽かないだらうね、彼奴らの寢室は遠過ぎるからね。何も用はないが、俺が出たあとで、彼奴らの監視を頼んだぞ」

をしたが、直ぐ又秘書の方を顧み、「俺は六時までには起きて、用意をしてしまつて置かなければならない。それにスツカリ疲れた。俺の部屋に連れて行つて呉れ。それから又此處へ戻つて、灯を消しといへ呉れ」

シメオンに身を支へられながら、彼は出て行つた。パトリス・ベルアルは、コラリイが良人の前で弱みを見せまいとして最善を盡し得たのを認めると同時に、彼女の精根も遂に枯れ果て、歩く力も失つて居るのを見た。氣を失ひかけて、彼女は膝を折つた、十字を切りながら。

二三分間さうしたまゝで、やがて立上ることが出来た時、彼女は自分の所から扉口に行くまでの中頃の敷物の上に、彼女の名を書いた一片の紙きれが落ちて居るのを發見した。拾ひ上げて讀むと、

「小母さんのコラリイさん。争鬭は、貴女には餘りに過激過ぎた。何故此の私に、貴女の友人に、訴へないのか？ 合圖をして下さい、私は貴女のそばに居る」

最後の努力を振り起こして、彼女は部屋を出て行つた。パトリスが、あれほど希つた合圖もせず、行つてしまつたのであつた。

七時十九分

保養院に歸つたパトリスは、その後熟睡する事が出来なかつた。絶えずうつら／＼として居るうちに壓し付けられたり、追掛けられたりする感覚に惱ませられた。まるで何か怖い獸人の夢魔にでも襲はれて居るやうな心地であつた。彼も渦中に投じて、魅魔に掛つた見物人と、救はれやうのないひと役とを勤めたあの事件の、物狂はしい幕々が、いくら眠らうと努めても、眼の前に永久にちら付いたり、一方では又、その幕々が一層狂暴な緊張を加へて發展したりするやうな印象から遁れ得なかつた。良人と妻との間に起つた別れ話も、まだ梟が付いて居ない。それどころか、コラリイが招いた危険の方へ刻々に近寄つて行くのであつた。新たな危機は八方から降りかゝる。さうしてパトリス・ベルアルは、それ

を先見することも、況して鎮定することも我が力に及ばないのを、自ら嘆息した。

二時間ばかり目覚めたまま、横たはつた未だ彼は電燈のスキツキを捻つて灯りを點けた。そして忙しく、今日十二時間内に起つた出来事を書き始めた。斯うでもすれば、少しでも解き難い謎の結び目をほぐす事が出来るかも知れない。さう願つたからである。

六時が鳴ると、彼はヤ・ボンの部屋に行つて、起してやつて、自分の部屋に引張つて来た。あつけにとられてゐる黒坊の前に立ちながら、彼は腕組みして云つた。

「ぢやア貴様は仕事をお終ひだと思つてゐるんだな！ 俺が暗の中で轉々としてゐる間に、此の先生は樂々と寝てゐたんだ、樂々とね！ お前には面白い、融通の好い、良心があると思える」

融通の好い、と言ふ言葉が、セネガアル兵には素破しく可笑しかつた。彼の口は、いつもより一層大きく開いた、と思ふと一聲、嬉しがりやの唸りを發した。

「好いよ、好いよ」と大尉は云つた。「もう何も云ふ事はない

さ、一度お前が物を云つて呉れさへしたら、それで好いんだ。さア、椅子に腰掛けて、此の、俺が書いた報告を読んでごらん。そして天晴れな意見を聴かせて呉れ。何だつて？ 字が讀めないんだつて？ いやはや、成る程！ ぢやア、セネガアルの學校の腰掛で、洋袴を摺り切らせるほど辛棒したのは、何の役に立つんだ！ 可笑しな教育だな、ほんとによ！」

彼は吐息をついて、原稿を掴みながら、

「聽いて、考へて、議論して、推理して、結論を付ける。簡單に事件を説明すれば、斯うなんだ。先づ此處に、エツサアレ・紅華といふ男がある。銀行家で、途方もない金持ちだが、此の男も悪い悪黨で、一度に佛蘭西も、埃及も、英國も、土耳古も、勃牙利も、希臘も、みんな裏切る奴だ……それは、彼の一味が彼の足を焼いた事實で分つたのだ。それゆゑ彼は一味の一人を殺し、他の四人の毒手からは、數百萬法もの代償で遁れ得た。がその數百萬法は、他のもう一人の一味に五分間もたないうちに取返して来るやう命令した。そして、是等の驚くべき秘密は今朝十一時までは、明るみに出な

い。何故なら、十二時になれば、警官が事件に干渉することになつてゐる。好し」

パトリス・ベルグルは、一寸息をついて、再び語り出した。「次ぎには、小母ちゃんのコラリイだ——正直な話、何故とも判らないが——此の女は悪漢エツサアレ・ベイと結婚してゐる。彼女は良人を悪むが上に、殺したいとまで思ふ。良人は彼女を愛するが上に、彼女を殺したいと思ふ。此所に又、一人の大佐がある。此の男も彼女を愛し、また其のために自分の生命を失ひ、ムスタアアといふ男を殺した。ムスタアアは大佐の命で彼女を誘拐しようとし、同じく、そのためにセネガアル兵に喉を締められて生命を落したのだ。最後に、一人の佛蘭西の大尉がある、義足を付けた奴で、御多分に洩れず彼女に惚れてゐる。が女は袖にする、何故なら嫌ひな男とでも、結婚してゐるからだ。でも、此の大尉と彼女とは前世の約束か、お互に同じ紫水晶の球の半分宛を持つてゐる。その他に、組合小使が持つて来たさびた鍵、赤い絹紐、締め殺された犬、赤い石炭の燃えた爐格子。そして、もし俺の説明の中の一言でも、貴様が諒解しようと出しや張る

なら、俺は此の木の脚で殴り付けるぞ。何故なら、貴様の隊長である俺だつて、何が何やら分らないんだからなあ」

ヤ・ボンは口を開けるだけ開けて、傷口を缺かせて、そして片方の頬を二段に分けながら咲笑した。大尉から命令があつた通りに、彼は仕事の事に就ては何物をも諒解しなかつた。そればかりか、パトリスの言つた大部分が判らないのである。けれどもパトリスが話して呉れるのなら、どんな亂暴な調子でやつ付けられても好い、彼は其の度に、歡喜で身を震はすのだった。

「それで好し」と大尉は云つた。「今度は、論議し、推理し、結論を付けるのが俺の番に成つた」

爐の飾臺に凭れた彼は、兩肘を大理石の棚について、手と手で頭を押へ付けた。生れ付きの心の素敏さから生れる快活も、此の時に限つて皮相な快活であつた。心の底深く何を考へよう、たゞ悲しみに溢れた沈思と共にコラリイの上を思ふばかりである。彼女を守護すべく何が出来るのだ？ 數々の企畫が思ひ浮んで来た。その中のどの企畫を採つたら好いのか？ あのグレゴアールと言ふ男の名に突き當るま

で、電話帳を漁つて見ようか？ その男にブルネフ一味の者が避難するのだから。それとも警官に訴へ出ようか？ 再びレイヌアール街に引返して行かうか？ 分らない。さうだ。もし闘争の中に猛烈な情熱を以て飛び込むだけで済む行動で好いのなら、彼はその行動を探る能力があつた。だが、その行動を準備し、障害を突破し、暗黒面を破壊し、そして彼自ら言つたやうに、不可解物を透視し、不可解物を掴み得ることは、それは彼の能力の及ばない所にあつた。

突然、ヤ・ボンの方を顧ると、彼は相手の沈黙に、自分も打ち洗みながら立つて居た。

「そんなに凋れて、一體どうしたんだ？ こんなに俺まで憂鬱いで来たのは、無論お前のせいだ。お前はいつも物事の暗い方ばかり見て掛るから駄目だ……黒坊根性……あつちへ行け」

ヤ・ボンは這々の體で立去らうとした。丁度その時、扉を叩く音がして、誰か、聲を掛ける者があつた。

「ベルグル大尉さん、お電話ですよ」

パトリスは急いで出て行つた。こんなに朝早く、此の地球

上の誰が彼に電話を掛けたのだ？

「誰から？」と彼は看護婦に訊いた。

「存じません、大尉さん……男の聲ですよ。急用があるらしいんです。長いこと鈴が鳴りましてね、妾は階下の臺所にゐたんです」

パトリスの眼前に、レイヌアール街の、あのエツサアレの家の廣い部屋で見た電話のまぼろしが、彷彿として現れた。今の電話と此のまぼろしとの間に、一味の連絡がありはしないかと、彼は胸を突かれる思ひがした。

階段を一またぎに飛び降りて、廊下を行つた。電話は、小さな待合室を通り抜けて、リンネル入れに造り替へられた部屋の中にある。彼は入ると、中から扉を閉めた。

「もし……！ ベルグル大尉です。何ですか？」

聲、男の聲、まだ聴き覚えのない聲が、息もつかず、喘ぐやうな調子で答へた。

「あ……！……ベルグル大尉……貴方ですね……斯うなんです……が、遅過ぎたかも知れないので心配で堪らない……言ひ終る時間があるか無いかも分らない……鍵と手紙は受取

りましたか？……」

「貴方は誰です？」とパトリスは訊いた。

「鍵と手紙は受取りましたか？」と向うの聲は言ひ張つた。

「鍵は受取りました」とパトリスは答へた。「併し、手紙は知りません」

「手紙は知らない？ おや、それア大變です！ ぢやア、貴方はまだ知らない……」

噎れた叫び聲が、パトリスの耳朶を打つた。その次に彼が聞いたのは、向うの電話口に起る止切れ／＼の物音であつた。言ひ争ふ聲であつた。やがて、その男のらしい聲が、自ら電話器に密着したやうに響いて来た。そして彼は明らかにそれが喘いでゐるのを聞いた。

「遅かつた！……パトリス……貴方ですね……あのね、紫氷晶の頸飾り……さうだ私が下げてゐる……あ、遅かつた？……頸飾り……私は、それアほんとに心から……パトリス……コラリイ……」

すると、再び大きな叫喚、心に突き入るやうな叫び、そして入亂れた物音が次第に遠くなつて行くうちに、次のやうな

聲を彼は聴いたやうに思つた。

「助けて……！……助けて……！……これも微かに微かになつて行く。ピタリと静寂に返つた。と、突然カチツといふ音がした。殺人者が、向うの受話機をかけたのである。

すべては、二十秒間の出来ごとであつた。が、彼は此上もなく固く受話器を握り締めて居たものらしい。離さうとした時、指をゆるめるのに骨が折れた程だつた。

彼は見ても外聞もなく、啞然として其處に佇んだ。窓を超して、庭の彼方の建物の一つに時計がある。眼を凝らして見ると、七時十九分を指してゐた。そして機械的に、彼は、七時、十九分なる数字を繰返して呟き、それが何か記録的な價値を持つものだと、理屈を付けた。それから自ら問うて見ると……これは全るで夢のやうな情景だつたので……果して實際のことだらうか、ほんとに彼の身の内で痛み惱む心の底深くで、幻影が行つた犯罪ぢや無かつたらうかと。

だが、叫び聲はまだ耳の底に残つてゐる。彼は突然、再び受話器を取つて耳に當てた。絶望しながらも何物か當らない希望に縋り付く人のやうに。

『もし〜！』と彼は叫んだ。『交換局ですか？…先刻、こちらに電話を掛けたのは、誰でした？…あゝ、もし〜？ 貴方はあの叫び聲を聞きましたか？…あゝ、もし〜？…もし〜！』

返事は無かつた。彼は肝癢を起して、交換手を罵つた。それからリンネル部屋を出て行くと、出會ひ頭にヤ・ボンがゐたのに衝き當つた。

『あつちへ行け！ お前の罪だ。勿論、お前は居残つて、コラリイを守つてやらなくちやならなかつたのだ。今から彼所へ行つて、俺の命令通りにしろ。俺は警察に訴へに行くんだ。もしお前が俺を引止めなかつたら、事はもう疾くに済んで、こんな悲境に陥ることはなかつたんだ。行つちまえ！』

彼はさう云つたが、直ぐヤ・ボンの背をつかまへて、

『いや、動くな。貴様の計畫は馬鹿氣てゐる。此所に居れ。さうじやない、俺のポケットの中に居れとは云はない！ 餘り性急すぎる奴だな、貴様は！』

彼はヤ・ボンを外に追ひ出して、またリンネル部屋に入つて來た。そして、彼方此方歩き續けながら、荷々しい身振り

や、腹立たしい言葉で、昂奮を陽に表現した。それにも拘らず、此の混亂の最中に、一つの考へが次第に氷解して來た。と言ふのは、結局、レイヌアール街の家で今殺人が起つたと彼は想像してはゐるものゝ、別に確かな證據がある譯ではない、といふことだつた。彼の記憶のうちで、いつも同じ悲劇的な土臺の上に、同じ幻影ばかりを見詰めて時を失する事、さうした弱點に乗ぜられないやうにしなければ成らない。言ふまでもなく、戯曲はまだ引續いて行く、これは彼の最初考へた通りである、だが、恐らく戯曲の引續いて行く方向は、コラリイを他所にし、又は遙かに掛放れた所に在るのだらう。

で、此の考察の緒口から更に新しい考察に移つて行く。何故、事件を手取早く諒解して了はないのか？ と。

『さうだ、何故しない？』と彼は自らに問うて見た。警察の手を煩はす前に、俺に電話を掛けて向うの番號を調査し、さうして逆戻りに發端の方へ探索の歩を向ける、それは後日に見通しては成らない一階段なのに、どうして俺は直ぐに、レイヌアール街に電話を、出鱈目の名で、出鱈目の用事で、掛

けないのだ？ そしたら、考へ方を教へられる便利もあらうし……』

パトリスは、此の測量が餘り手頼りにならないのを感じた。もし誰も向うの電話に出て來なかつたなら、その家で果して殺人が行はれたかどうかの判らないのは勿論、それだからと言つて、誰も其所にゐないんだと決めてしまふ事すら出來ないではないか？

けれども、何かしなくつちや成らない。そこで彼は決心した。彼は電話帳で、エツサアレ・ベイの番號を探し出した。で、思ひ切つて交換局を呼び出した。

待つ間の、はり詰めた氣持ち、それはとても耐らないものだつた。次に、キエツとした感覚が頭から足のさきまでを、びくつかせるのを意識した。電話はつながられた。誰かゝ、向うの電話に出て答へた。

『もし〜？』と彼は言つた。

『もし〜、誰方？』

それは、エツサアレ・ベイの聲だつた。これは頗る自然のことだ。丁度いま、エツサアレは書類を

整理して、高飛びの準備をしてゐる最中でなければならぬ。さうは思ふものゝ、パトリスはタジ／＼として、何と言ひ出さうか判らなかつた。と、思ひついたまゝの最初の言葉が、

『そちらは、エツサアレ・ベイさんですか？』

『左様、貴方は？』

『赤十字病院の患者で、今保養院の方へ廻されてゐる者ですが……』

『ベルワル大尉さんですか、多分？』

パトリスは、絶對的に驚愕した。では、コラリイの良人は、自分の名前まで知つてゐたのか？ 彼は口ごもつた。

『左様です……ベルワル大尉です』

『まあ、これは好かつた！』と、エツサアレ・ベイは嬉れしさうな語調で叫んだ。『たつた今、さつき、貴方に、保養院に電話を掛けた所ですよ。ベルワル大尉さんにね……』

『おゝ、貴方でしたか！』とパトリスは、どこまで吃驚りさせられるか判らないで、口を挟んだ。

『さうです。ベルワル大尉さんに、御禮を申し上げたくて、何

時御面談出来るか、伺ひたいと思つたものですからね」

「貴方でしたか！……貴方でしたか！……」と、パトリスは、いよ／＼氣も轉倒して繰返した。

エッサアレの語音は、可成りのまご付きを表はしてゐる。

「左様、先刻は變な混線でしたかね？」と彼は言つた。「困つたことに、私は交換手に切られてしまつたのです。と言ふより、他の電話に横から邪魔されたのです」

「その時、お聴きでしたか？」

「何を、です。ベルグル大尉さん？」

「叫び聲を」

「叫び聲？」

「少くとも、私にはさう聴えました。が、電話の接続が、大變不明瞭で」

「私が聴いたのは、たゞ、誰かゞ、大變忙しさに、貴方に何か訊いてゐただけの事です。そして、私は別に忙ぎの用でも無かつたのですから、電話を離して、お禮を申上げる歡びを延期した譯なんです」

「お禮をですつて？」

「さうです。愚妻が昨夜暴行を受けたさうで、その節貴方に助けて頂いた次第を、スツカリ聞きました。それで、是非お目に掛つて、感謝の意を表したいと思ひましてね。面談の日の御約束が願へませうか？ 病院では如何です、さうですね、今日の午後三時と言ふことにしては？」

パトリスは答へなかつた、此の男、今にも逮捕されやうとして高飛びの準備をする最中に示す大膽さ、流石のパトリスも呆氣に取られてしまつた。同時に、エッサアレの眞の目的が、何の強ひられる所もなしに、自分に電話を掛ける所にあつたのと思つて、不思議に堪へなかつた。だが、ベルグルが黙つてゐても、銀行家は別に當惑もしないで、話をつゞけた。そして、彼が言ひつゞけた質問に對して、彼自ら、易々諾々として解答する自問自答を以て、此の謎のやうな電話を切つた。

併し、何にしても、パトリスは餘程らくな氣持になつた。彼は自分の部屋に歸ると、寢臺の上で寝ころんで、二時間ばかり眠つた。それから、ヤ・ボンを呼んで來た。「今度は」と彼は言つた。「お前の神經によく統一を付けて、

さつきのやうな馬鹿をやるんぢやないぞ。貴様は愚物だよ。が、そんな事は言ふまい。朝飯は食つたかい？ まだどつて？ 俺も食はない。醫者に逢つたか？ 逢はない？ 俺も逢はないで。それに、外科醫は、此の面倒臭い繻帯など、今日から取つちまつて好いと約束をして呉れた所だ。嬉しいのは貴様にも分らう。一本の木の脚、それは結構さ。だが、顔にガアゼの繻帯は、人を戀する男には眞平だ！ さア、しつかり！ 用意が出来たら、病院へ行くんだ。小母さまのコレイも、彼所では面會謝絶と言ふ譯に行かないんだ！」

パトリスは燥いだ。一時間の後、ヤ・ボンに言つた通り、ボオル・マイヨオの方へ向つて二人が歩いて行つた時、暗雲は次第に散じて行き始めた。

「さうさ、ヤ・ボン、さうだよ。俺たちの立場は斯うなんだよ。先づ第一に、コレイは決して危険に瀕してはゐない。俺の希望通りに、争鬭の方向はコレイの上から、餘程遠くに離れて行つてしまつた今では、言ふまでもない、彼奴らの何百萬法を中心に、仲間同士の喧嘩に成つたのだ。さつき俺に電話をかけて、斷末魔の聲を聴かせた、あの不幸な男、あ

れは勿論、あの親しげな口調と言ひ、俺の幼名を言つた所と言ひ、誰か、未見の友人に違ひない。この男こそ、庭木戸の鍵を送つて呉れた人なんだ。困つたことに、鍵と一緒に來た手紙の行衛が分らないんだ。たうとう彼も俺に一仕始終を打明けずにはゐられなくなつたのに違ひない。丁度その時、彼は攻撃されたんだ。誰に殺されたんだ？ 多分、あの一味の奴の誰かゞ、事件の暴露を怖れる餘りに殺したのだらう。そこで、ヤ・ボン。これは午後の空のやうに透徹してゐる。さう思つて來ると、俺の想像の正反對の眞相だとは直ぐ判る。が、俺はかまはない。重要なことは、シツカリ一つの假定の上に立つと言ふ事だ。眞であらうが、誤であらうが構はない。それに、よし俺の理論が誤謬の上に立つてゐようと、その責任を貴様の上に轉嫁する權利だけは、保有して置くぞ。だから、貴様にも判るだらう、どんな立場に貴様がゐるか……」

マイヨオ門から彼等は自動車を雇つた。ところが、偶然にも、パトリスの自動車はレイヌアール街の方を廻つて行つた。その街が、パッシイ街と交叉した所まで來ると、コレイ

イが老シメオンを伴にして、今レイヌアール街をはづれようとしてゐるのを見つけた。

彼女は辻自動車を呼び止めて、その中に乗り込んだ。シメオンは運転手と並んで腰かけた。

やがてシャン・ゼリゼエの病院に着くまで、パトリスはその跡をつけた。着いたのは十一時だった。

『巧く行つたぞ』とパトリスは云つた。『良人が遁走の最中にも、あの女は日常生活を變へないといふんだな』

彼とヤ・ボンとは、附近の料理店で晝食をとつた。始終病院が目の届く所に在る範圍で、その邊をぶら付きまはつた。

パトリスは直ぐ老シメオンを認めた。兵隊共がいつも待ち合はすあの硝子張りの庭の隅にゐるのであつた。顔は半分、此の老人常用の襟巻で埋めてゐる。そして、大きな黄色い眼鏡を掛けて、彼がいつも腰かける椅子の上で、パイプを燻らしてゐた。

コラリイはと見ると、彼女は自分が當番の第二階の一室で、とある患者の側らの椅子に坐してゐた。患者は、片手を

彼女が思ひ切つて、室内に這入つて行かうとした、その時、一人の女が階段を上つて来て、歩きながら呼び立てた。

『奥様は何處?...急用です! シメオンさん!...』

老シメオンも、その女と一緒に階段を上つて来てゐた。そして、室内の遙か向うの方に坐してゐるコラリイを指さした。女はその方に走つて行つた。

コラリイに何やら二三言囁くと、彼女は吃驚した様子で、直ちに扉口の方に駆け寄つた。パトリスの側を通り抜けて、階段を走り下る。そのあとを、シメオンと女とが續いた。

『辻自動車を雇つておきましたよ。奥さん』と、女が息せき切つて囁いた。『家を出ると巧い工合に一臺見付けたものだから、そのまま乗つて参りました。早くしなければ間に合ひませんわ...警部さんに言付かつたのですが...』

その時、階段を降りて来たパトリスは、只それだけを聞いただけであつた。併し、その最後の言葉が、彼に決心させた。彼は走りながらヤ・ボンを引摺まへて、自動車に乗り、運転手に、コラリイの辻自動車を追跡しろと命じた。

彼女の両手に任せながら、スヤ／＼と熟睡の最中である。

コラリイは大變疲勞してゐる。パトリスの眼にはさう見えるのだつた。眼のまはりの黒い輪も頬の今まで見ない蒼白さも、その疲勞を物語るものだつた。

『可哀想な子が!』彼は思つた。『あの悪魔共が寄つてたかつて、お前を殺してしまふのだ』

今になつて昨夜の光景を思ひ浮べて見れば分るのである。何故彼女は私的生活に就て秘密を固守するのか。何故、少くとも、小さな病院の世界だけでは、人々に小母さんと呼ばせて單に親切な姉妹であるに甘んじてゐるのか。彼は了解した。彼女の八方に張られた犯罪の網に氣兼ねして、それで良人の名も秘し、住所の番地も語らないのであつた。そして、謙遜と決斷とで身を守り、一身を能く防ぎ得て流石のパトリスも、敢て彼女に近着き得ず、入口に足を棒立ちにするばかりは無かつた。

『さうだ。確かに』と彼は、そつと相手に氣取られずにコラリイを窺見ながら、ひとりごちた。

『別に名刺を差出すにも及ぶまい』

『新事實だよ、ヤ・ボン。新事實だよ!』とパトリスは云つた。『筋道は益々混雜して来た。あの女は勿論エツサアレの下女の一人だ。そして女主人に裁判官の命令を傳へて来たのだ。だから、大佐の訴への効能が表れて来たのだね。家宅捜査、判官の吟味、コラリイを疲れさせさらゆる物が行はれる。そして貴様も厚かましくも俺に、氣を付けろと忠告する! こんな時に、俺があんな女の智慧に任せて置けると思ふのか! 何て單純な性質の男だ。あはれなヤ・ボンは!』

ふと、思ひ付いて、彼は叫んだ。

『神様! どうぞエツサアレのやうな悪黨が甘んじて繩に付くやうな事が、ありませんやうに! それア大變だ! だが、彼女は、もつとく自信を持つてゐた。多分、彼女、ゆつくり時間を構へ過ぎたのだらう...』

自動車の疾走中、此の怖れがベルグル大尉を終始刺激した。そこで、彼は最後の抑制力をも放棄した。遂には、彼の確信は絶對の物となつた。エツサアレの逮捕なくしては、あんな女中の態度や、コラリイのあんなにも慌てた出發があらう筈がなかつた。さうした状態で、どうして彼が事件の眞中

に飛び込まずにはいられよう？ 彼の指示によつて、警官は必ず注目せざるを得ぬに違ひないのだから。何よりも、且つ、事情の如何に従つて、暴露の態度を加減すれば、彼はコラリイの立場に有利な證言を成す事も出来るのだから……

二臺の自動車は、殆ど同時にエツサアレ家の門前に停車した。其所には、既に他の一臺が横付けになつてゐる。

コラリイは飛び降りると、車寄せの門の中に消えてしまつた。女中もシメオンも、同じく鋪石路を傳つて入つて行つた。

『ついで来い』と、パトリスは、セネガアレ兵に云つた。表戸が開いてゐたので、パトリスは入つて行つた。

大きな廣間に、二人の巡査が突立つてゐた。パトリスは彼らに向つて、慌しく手を舉げて會釋しながら、わざと、家内の一員だと言ふ顔をして、そして、自分がなくては、どうしようにも他の人では仕様がな、それ程重要な關係人物であるといふやうな態度を作つて、彼等の前を通り抜けた。

床を踏む自分自身の足音に、彼はブウルネフやその仲間、逃走した時のことを思ひ出した。彼は容易に進んで行つた。

た。左手に客間がある。此の部屋こそ、書齋の隣室で、あの仲間共が大佐の死體を運んで通つた所だつた。

書齋から人聲がする。彼は客間を横切つて行つた。その瞬間、彼はコラリイの恐怖を帯びた叫びを聞いた。

『おゝ、神様、こんなことが……』

二人の巡査が、入口の所にゐてさへぎつた。

『私はエツサアレ夫人の親族の者です』と彼は云つた。『たつた一人の親族で……』

『私共は役目だから、大尉……』

『それは勿論、承知してゐます。どうぞ氣を付けて、誰も入らせないで下さい！ ヤ・ボン、此所で待つてをれ』

そして、彼は入つて行つた。

併し、その大廣間には、六七人の紳士がかたまつてゐた。勿論、警察委員と司法官とで、彼の行方に何物か、こちらからは見えない物の上に身を屈めてゐた。その人々の間から、突然コラリイが現れて足音あらく、手を絞りながら、彼の方向に向つて来た。女中が直ぐコラリイを背後から抱き止めた。そして椅子に坐らせてしまつた。

『どうしたんです？』とパトリスは訊いた。

『奥さんは氣絶なさりさうです』と、女中はまだ昂奮がをさまらず答へた。『おゝ、妾まるで頭が滅茶苦茶ですわ！』

『ですが、何故？ どう言ふ譯で？』

『これですもの……まあ考へても……この有様は……妾だつて見てゐられませんか……』

『どんな有様？』

紳士の一人が、群から離れて、近付いて来た。

『エツサアレ夫人は病氣ですか？』

『何でも無いのでございますよ』と女中が云つた。『氣絶の發作で……何しろ此の不幸に關り合はれたのですから』

『動けるやうになつたら、直ぐ、あちらへお伴なさい。もう奥さんにお訊ねすることはないから』

それから、パトリス・ベルブルの方に向つて、疑はしさうに、

『大尉さん？』

パトリスは、わざと分らないやうな顔を作つた。

『承知いたしました、エツサアレ夫人は直ぐ彼方に伴れて參

りませう。お言葉では、夫人の臨席が必要もないやうです。ら。たゞ、私はそれより先きに……』

彼は對話者をよけて、横に寄ると、裁判官共の輪が、少しすきを開けてゐるのを認めたので、その方に歩を運んだ。

今、彼が目撃する所こそ、コラリイの氣絶發作と、女中の昂奮との理由を語るものであつた。彼自身も亦、身の肉が餘りの慘狀にうねり立つのを感じた程、それは昨夜見たより、なほ無限に怖い光景だつた。

床の上、暖爐の近くで、殆ど昨夜拷問に掛けられたと同じ場所に、エツサアレは仰向けに倒れてゐた。前日と同じ服装で、網ジャケツに青天鵝絨の喫煙服を着けてゐる。頭と肩とにナプキンが掛けてある。が、臨席の一人が、無論警察醫であらう、片手でナプキンを取除き、片手で顔を指し示しながら、低めた聲で、何やら説明を與へてゐた。

そしてその顔は……だが顔とも言へぬ、それは名状すべからざる肉塊であつた。半面は黒焦げとなり、半面は、皮膚と骨との破片や、髪の毛や、破裂した眼球などをこね交ぜた血染めの綿といふより外はない。

「おゝ」とパトリスは思はず叫んだ。「何て怖い！ 彼は殺されたのだ、そして頭を炎の中に突込まれてしまったのだ。そこを發見されたんだな？」

先刻彼に物を言ひ掛けた男は、此の中でも重要な人物らしかったが、此の時、つか／＼と彼の側らに寄つて云つた。

「誰方ですかね」と彼は訊いた。

「ベルナル大尉と申します。エツサアレ夫人の友人で、夫人のおかげで生命を助かつた負傷兵の一人です……」

「お間違ひはありません、が」と重要人物は答へた。「併し、此の場は御遠慮願ひたいのです。警部、どうぞ、みんな此の席を立退くやう御命令下さい、たゞ醫師のみは別として、それから戸口を守らせて下さい。どんな口實の下にも、出入を禁じて……」

「だが」とパトリスは云ひ張つた。「私はお知らせしたい、非常に重大な報告を持つてゐるのです」

「有難く承りませう、大尉さん。併し後程にして下さい。今は何にも言はずに出て頂きたいのです」

零時二十三分

さて此の家の、玄關の大廣間は、表はレイヌアール街に面し、裏は庭の一番上層の臺地にまでつゞくのであつた。幅の大きい階段で、部屋の半分を占められてゐる。正に此の廣間で、エツサアレの家は二つの部分に分割されてゐるのだ、そして一つの部分から、他の一つの部分へ行くには、どうしても此所を通らねばならないのであつた。

左手に、客間と書齋があり、それに續いて家人用の階段を付けた。獨立した一棟があつた。右手は玉突部屋と食堂とで、どちらも天井が低いのである。その階上、市街に面した方にエツサアレの寢室があり、庭を見下ろす側にコラリイの寢室があつた。

裏は雇人部屋で、老シメオンも矢張り其所で寝起きしてゐるのだつた。

パトリスは、セネガアレ兵と一緒に、玉突部屋で待つやうに云はれた。そこで十五分間も待つところへ、シメオンと女中

とが這入つて来た。

老秘書は、使用主の死に全く腰を抜かしたものらしく、苦しげな息の底にやつと身を支へながら、物言ふたびに怪しい身振りをした。パトリスは彼に一仕始終を訊ねた。すると、老人は耳もとに口を寄せて囁いた。

「まだ濟んだのぢやありません……怖い事が何か知ら残つてゐる……怖い事が……今日……今に……今に……今に……」

「今に？」とパトリスは驚いた。

「さうです……さうです」と、老人は震へながら答へた。彼はそれ以上何も話さなかつた。女中の方は、パトリスの質問を、待つてゐましたとばかりに話した。

「一番初めに驚いた事は、檀那、今朝に成つてコックも、下男も、門番もゐなかつた事です。三人とも遁げて了つてゐたのです。その次ぎには、六時半でした、シメオンさんが来ましたね、御主人様の御吩咐で、檀那様は書齋に被在るが、誰も入つて行つてはならないこと、朝御飯にだつて、お呼び立てに行つてはならないことを、妾共女中に云ひ渡したんです。奥様も、御氣分が餘りおすぐれで無かつたやうで

す、七時にチヨコレエトを召し上りました……十時には、シメオンさんのお伴でお出掛け、それから御寢室を御掃除申上げてからあとは、妾どもは臺所から一步も外に出なかつたので御座います。十一時、それから十二時……で、丁度十二時が鳴つた時でした。表戸の所で、鈴が大きく鳴つたのです。妾は窓から外を眺めてゐました。自動車が出来て来て、紳士が四人乗つてゐましたので、玄關へ参りますと、警察の人達がこれ／＼の者が檀那様に會はせると仰言るのでございます。妾は御案内致しました。ところが書齋の扉には錠がおりて御座いました。妾どもはノックも致しました。答へは御座いません。扉をゆすりもしました、答へは御座いません。たうとう、一人の檀那が、よく心得た方でした、錠穴を堀り抜いて……すると……すると……何を見たと思召す？……それとも、いや……とても、そんな酷い事を見たとはお思ひに成らないでせう。何故つて、その時には、お氣の毒にまだ檀那様のお顔は、まるで爐格子の下敷きに成つてらつしやつたやうな物ですからね……おゝ、爐格子めが、何てまア、屹度罰當りに違ひありませんわ！……何故だつて、檀

那様を殺したのですもの。ねえ檀那？ 警官の一人が、檀那様は痲痺で、火の中に墜ち落ちてお亡くなりなすつたと云つたのを、妾はちやんと聞きました。妾の、間違ひつこない考へでは只……」

老シメオンは、何も云はずに耳を傾けてゐた。顔は矢張り襟巻で半分埋めたまゝ、たゞ剛い灰色の鬚と、黄色の眼鏡にかくした眼だけが、襟巻の外に出てゐた。だが、女中の話がかくして来ると、ちよつと北叟笑みして、パトリスのそばに寄つて来た。そして耳に口寄せながら囁いた。

「怖い事があるんです……怖い事が……コライイの奥様を……早くあの方を逃がして上げて下さい……逃がして下さい……さうでなかつたら、あの方に不可いことに成りますよ……」

パトリスは身震ひして、彼に訊かうとした。併し、何の答も得られなかつた。それは老人はもう其所にはゐなかつた。一人の巡査が老人を迎ひに来て、書齋に連れて行つたのであつた。彼の訊問は長く續いた。そのあとで料理人と女中との陳述

があつた。次ぎがコライイの訊問で、これは彼女の部屋で行はれた。

四時には、他のもう一臺の自動車 came。パトリスは、二人の紳士が廣間に通つて行くのを見た。誰も彼も、此の二人には恭々しく頭を下げた。それは司法大臣と、内務大臣とであつた。彼等は書齋で三十分ばかり、何やら凝議してゐたが、やがて又辭し去つてしまつた。

遂に、五時少し前に、一人の巡査がパトリスを迎ひに来て、二階に導いた。巡査は一室の扉をそつと叩いて、身を横に引いた。彼は小さな婦人私室に入つて行つた。其所には、あか／＼と燃えてゐる薪のそばに、人が二人坐つてゐた。一人はコライイで、彼はその方に向つてお辭儀をした。もう一人は彼女の向ひ側にあるのは、此の家に彼が到着した時話し掛けて来たあの紳士で、これが訊問の全部を指導してゐるらしいのである。

彼は見た所五十歳ばかり、頑丈な身體付きで顔に威厳がある。擧止はのろかつたが、眼は聰明な輝きを持つてゐた。「豫審判事でいらつしやいますか？」とパトリスは訊ねた。

「いや」と彼は答へた。「私はデマリオンといひます。退職判事ですが、此の事件に關して、特別に解決を依頼された者です……起訴のためとお考へでせうか、さうではない、何故なら、私の考へでは特別に起訴する材料のない事件と思ひますから」

「何ですつて！」とパトリスは仰天して叫んだ。「起訴する材料がありませんつて？」

彼はコライイを見た。彼女は注意深く、彼の上を目を注いでゐた。それから、眼を轉じて、彼女はデマリオン氏の方を眺めた。彼は云つた。

「私は信じます、ベルナル大尉さん。我々が云ふべき事を云つて了つた時は、即ちあらゆる點に於てお互の意見が一致しなければならぬ事を……丁度夫人と私の意見が、既に一致してしまつて居るやうにです」

「私だつて、それは信じます」とパトリスは云つた。「併し兎に角、その一致すべき諸點が、澤山謎のまゝで残ることを怖れるのです」
「勿論ですとも。併し、私共は説明を發見しなくてはなりません。

せん。お互の力で、發見出来るでせう。で貴方の御存じの事を言つて頂きたいものです」

パトリスは、一息を吞んで、語り出した。「私の驚き加減を體よく匿さうとも存じません。私のお話は可成り重大な物です。でも此所には誰もそれを速記して呉れる人がありませんね。宣誓の上に立つ證言の數に入れて頂けないのですか。どうしても参考の資を提供する陳述にはならないのですか？」

「貴方自身で、大尉さん、貴方の言葉と諷刺との價値を、相當と思ふだけお付けなさるが好い。さしあたり、これは豫備的な會話、もしくは事實に關する意見の交換、といふことにして置きたい……エツサアレ夫人の申された所から考へると、貴方も、矢張り夫人と同じ報告以上には出られませぬ」

パトリスは、直ぐには答へなかつた。コライイと判事との間には、何事か私的に諒解が成立つてゐるのだ。そして、その諒解の席上に於いて斯る熱情を表はすは自分は、すべてが關入者の役を勤めてゐることに成る。あの二人は大迷惑で、出て行けがしに思つてゐるだらう。パトリスは漠然、そんな印

象を受けたのであつた。そこで彼は、判事の方から手を出して来るまで、遠慮の態度をつとめることに、決心した。

『勿論』と彼は云つた。奥さんは貴方に仰言つたでせう。では、私が昨日、料理店で窃み聴きした會話に就ても、もう御存じなんですか？』

『知つてゐます』

『そして、エツサアレ夫人誘拐の企畫も？』

『え』

『それから殺人事件は？』

『知つてゐます』

『エツサアレ夫人は、昨夜起つた、エツサアレ氏に對する脅嚇事件の光景をお話しなすつたのですか。拷問の詳細、大佐の死、四百萬法の讓渡、エツサアレ氏とグレゴアルとか云ふ人物との間に取交はされた電話の會話、そして最後に、夫人が良人から受けた脅しの言葉、みんなお話しに成つたのですね？』

『左様です、ベルナル大尉、私はみんな知つてゐます、といふのは、貴方の御存じのことは皆知つてゐるといふ事です。』

その上にまた私は、自分でやり遂げた調査で、いろいろの事を發見して知つてゐますよ』

『左様でせうとも……左様でせうとも……』とパトリスは繰り返へした。『成る程、私のお話も此の上は無駄な物に過ぎませんね、そして貴方が、事件の結論に必要なあらゆる要點を自家藥籠中におさめてゐらつしやるのも、よく分りました』

そして、答へるといふより、寧ろ疑問の調子で、

『で、どう言ふ御推理にお達しでせうか、伺ひたいのですか？』

『實際をいふと、私の推理なる物は、まだあやふやなんです。ですが、何か反證の擧げられない限りはエツサアレ氏が夫人に宛て、今朝十二時頃に書いた手紙の、生々しい文句に手頼るだけで甘んじなければなりません。此の手紙は、私共が現場に這入つた時、氏の机の上に、まだ書きさしのままであつたのを發見したのです。エツサアレ夫人は、私に讀んで聞かせると仰言つたのです。そして、もし必要なら貴方に内容を知らせてもいいさうです。讀みますよ』

デマリオン氏は、聲を上げて、その手紙を讀み出した。

——今日、四月四日正午。

コラリイよ、

昨日、お前が俺の出發の理由を、俺の思ひ掛けもない所にこぢ付けたのは、全くお前の思ひ違ひだよ。で、恐らく、俺もお前に指摘された濡衣に就て、もつと明確に辯解して置かなかつたのは悪るかつたに違ひなからう。俺が出發する唯一の原因は、實に俺を八方から狙ふ仇敵に在るのだ。それが如何に猛烈であるかは、お前も見通した。あらゆる手段を盡して俺から劫掠せんとする敵に對し、俺の救はれる道としては、遁走の他にはなかつた。これが即ち、俺の家出の理由である。併しコラリイよ、どうぞ俺がハッキリ言つた希望に就ては、忘れないでゐて呉れ。俺の呼出のあり次第、お前は俺の所へ來なければならぬ。もしその時お前が、巴里から離れなかつたら、俺の正當な憤怒に對して、何物もお前を救助することとは出來ないぞ。何物もだよ、俺が死んだとて、お前の救ひにはならないのだよ。復讐手段のあらゆる配置を、俺は済ませてゐる。されば、たとへ不慮に際會するとも……』

『手紙は此處で終つてゐます。』とデマリオン氏はコラリイに手紙を手交しながら、『それから、どうとも否定出來ない證據で、此の最後の一行が、エツサアレ氏の惨死の直ぐ前に書かれたことが判る、何故なら、氏は倒れる拍手に、机の上の時計をひつくりかへしてゐる。時計は零時二十三分を指したまゝで止まつてゐます。確かに氏は氣分が悪くなつて、立上りかけた瞬間、發作的に眩暈をおぼえて床の上にとろんだのだと、私は斷定するんです、不幸にも、燭が直ぐ近くにあつた。中には炎が燃えてゐた。氏は頭を爐格子に打つたのです。その傷の結果が——外科醫の診査で判つたのですが——氣絶させるほど酷かつた。そこで、身近の炎が、自然と追つて——御覽になつた通りの効果を致した譯です』

パトリスは呆氣にとられ乍ら、此の豫期しなかつた説明を聞いてゐた。彼は呟いた。

『では、御意見に依るとエツサアレ氏は過失で死んだんですね？ 他殺ぢやないのですか？』

『他殺？ 無論違ふ！ そんな理論の出る緒口すらありません』

んよ』

『でも……』

『ベルグル大尉さん。貴方は或る聯想に囚はれてゐるんです。それは私も、全く以て尤もな聯想だとは思ひますがね。何しろ貴方は昨日から引續いて、悲劇的突發事件の目撃役ばかり勤めて來てゐなされる、だから、想像が最も悲劇的な解決、他殺、といふやうな方向に向ひ易いのも頗る自然な事です。たゞね——お考へなさい——どうして殺人の必要が此所にあつたか？ 下手人は誰か？ ブウルネツか、その仲間か？ 殺人の目的は？ 彼等は紙幣の御馳走で満腹してゐるんです。よし、たとへグレゴアールといふ人間が、その大金を奪還しに來たに違ひない所で、彼等はエツサアレ氏を殺して又取返へさうとは、無論しないでせう。それに又、どうして彼等は此の家の中に入り得たか？ そして、どうして出て行つたかです……いや、大尉さん、憚りながら、エツサアレ氏は、偶然に死んだのに違ひありませんよ。此の事實は否定出来な。い。そしてこれが警察醫の意見でもあるのです。醫者は此の意見の上に立つて、報告書を作製しました』

パトリスは、コラリイの方を顧みた。

『エツサアレ夫人の御意見も、それに御同意ですか？』
彼女はかろく顔を赧らめて、答へた。

『はい』

『そして、シメオン爺は？』

『お』と判事が答へた。『老シメオンは氣も轉倒の有様だ！ 彼に聴くと、何もかも又再び起つて來るやうな氣がするでせう、つまり、エツサアレ夫人は、まだ危険に瀕してゐる。だから、直ぐにも夫人を逃がさなければ成らない、と云ふのです。老人からは、これだけしか聴く事が出来なかつたのです。併し、彼は私を締め切りの庭木戸の所に引張つて行つたのです。これは、レイヌアール街から直角に折れた小徑に面したもので、此所で彼は、最初斃死した番犬を指して見せ、次ぎに、木戸と書齋の側の梯子との間に残つてゐた、幾つかの足跡を見せました。が、此の足跡に就ては貴方も能く御存じです。ね？ 貴方と、部下のセネガアレ兵との足跡です。番犬の死骸は、これはセネガアレ兵さんの仕業と見る事が出来ますが、違ひますか？』

パトリスには判つて來た。判事の默示も、説明も、コラリイとの意見一致も、すべてが次第々々にその計畫のある所を明かにした。彼は正直に疑問を發した。

『それでは、殺人はなかつたのですか？』

『有りません』

『ぢや、此の上豫審調査もない譯ですな？』

『有りません』

『で、もう問題にしないこと、沈黙を守ること、手短かに言へば、忘れ去つてしまふこと、ですな？』

『正にその通りです』

ベルグル大尉は、いつもの癖で、部屋の中をあちこち歩き初めた。今にして、エツサアレの云つた豫言が思ひ起こされるのであつた。

『俺は逮捕されはしないよ……よし逮捕されるにしても、そのまゝ釋放される……事件は直ぐ暗黙に葬られて了ふさ……』

さう云つたエツサアレに、間違ひはなかつた。判事は黙してゐる。そして、コラリイも沈黙してゐる外は無かつたので

ある。

こんな風な事件の取扱はれ方には、パトリスも心の底から腹が立つた。コラリイと判事との間に何事か協定の纏まつてゐるのは明かである。彼は、判事がコラリイを欺いて、強ひて彼女をしてその利益を放棄し、他の考察に従はしめたのであるまいか、と疑つた。そんな目的を完き物にするためには、判事は先づ第一に彼、パトリスといふ難關を越えなければならぬ。

『ふむ』とパトリスは獨語した。『俺は此の獵師めに、全く病氣にさせられるわい、此奴の冷酷な反語的な方法にさ。先生、俺をこのさき、どう莫迦にしようといふのだ？』

彼は併し、自制して、わざと判事と妥協したいやうな氣振りを見せながら、彼の傍らに腰を下した。

『お許し下さい』と彼は云つた。『お逆ひして、さぞ無禮な奴と思召したでせうがね。併し、私のさうした舉動は、單に、エツサアレ夫人が、今までより一層生活が寂寥である今日の同情や感慨から出たばかりぢやありません。そんな同情や感慨は、却つて此の際、以前より一層強く、エツサアレ夫

人の拒絶される所でもあるらしいのですがね。そのみならず、私は又、我々をお互に結び付け、そして我々の目も届かないほど遠い昔に二人を繋ぐ、或る神秘的な連鎖からでも、此の舉動に出づるを得なかつたのです。エツサアレ夫人は、此の點に就て、詳細の話は無かつたですか？ 私の考へでは、此の連鎖こそ最も重要な點です。で、私は、自分を刺殺した事件と此の事とを當然、結び付けずにはゐられませんか」

デマリオン氏はコラリイを、ぢろりと見た。彼女ほうなづいた。彼は答へた。

「え、エツサアレ夫人も、その事をお話してした、その上……」

彼は再び躊躇して、そして再びコラリイに相談するやうな目付きをした。すると彼女は、サツと色を失つた。然し、デマリオン氏は、言葉を進める必要上、答へを待つた。彼女はたうとう低い聲で斯う云つた。

「ベルナル大尉さんは、私どもが見付けた物を、お知りにならないければ成らないのです。此の真相は妾と同様、大尉さんにも關係のある事で御座います。そして、妾には、自分ひと

りでそれを秘密にして置く權利が御座いません。どうぞ仰有つて下さいまし」

「私は、口で言ふ必要があるか無いか、それすら疑問にしますがね」と判事は云つた。「此の寫眞帳を大尉さんに御覽に入れたら、それで十分だと思ひます。私が見付け出した物です。これが貴方ですよ。大尉さん」

で、彼はパトリスに、大變手薄な寫眞帳を手渡した。灰と云へば云へる表紙に印度草の紐が付けてある。

パトリスは、可成りな焦心を持つて、手に執つた。が、開くと同時に彼が見た物は、實に思ひも掛けないもので、思はず叫び聲を立てた。

「これは、まあ！」

開卷第一頁に、四隅の止めで保たれて、二つの寫眞がある。右の方の一つは、英國風の學生服着た小さな男の子、左の方の一つは非常に幼い女の子が映つてゐる。どちらにも其の下に名を記してある。右には「パトリス。十歳」左には「コラリイ三歳」と。

得も言はれぬ感動を受けて、パトリスは頁をめくつた。

第二ページにも、再び二人の寫眞が現れた、彼が十五歳、彼女が八歳の時である。

そして、彼はつゞいて自分の寫眞の、十九歳、二十三歳、そして二十八歳の時のを順々に見ると共に、その各々の寫眞にいつも並んで、コラリイの、最初は小さな少女、次ぎは若い娘、そして婦人としての寫眞を眺めて行つた。

「本當とは思へない！」と彼は口ごもつた。「どうして、こんな物が？ まだ私の見たこともない自分の寫眞がある、無論、素人寫眞らしいが。それが私の一生をたどつてゐる。これは私が兵營生活時代の……これは私が馬上の妾だ……誰がこんな寫眞を註文したのか知ら？ そして、誰が貴女の一緒に集めたのです、奥さん？」

彼はコラリイの顔をデツと見詰めた。問ひ質すその視線を避けて彼女は面を伏せた、恰も、寫眞帳の頁々が證據立てる、二人の生命の密接な連鎖に、存在の奥底まで戰慄させられたものゝやうに。

と彼は反覆した。

「誰が、こんな寫眞を寄せ集めることが出来たのです？ 御

存じですか？ そして寫眞帳の出所は何處なのです？」

デマリオン氏は代つて答へた。

「探し出したのは、外科醫でした。エツサアレ氏は、シャツの下に、下綿絆を着てをられました。が、寫眞帳はその下綿絆の裏に縫付けたポケットから出たのです。エツサアレ氏の衣服を脱がせる時、綿絆の上から、ふと手が固い物に觸れたのが、これだつたのです」

その時、パトリスとコラリイの目が會つた。この二十年間、エツサアレ氏が、彼等二人の寫眞を蒐集してゐたこと、それを彼が直接肌身に付けてゐたこと、そして、その寫眞を身に付けたながら生き、身に付けたながら死んだこと、それらを思ふと、不思議な謎の意味を解く力も失つて、二人を驚愕の頂上にのぼらせてしまつた。

「仰言つてる事は、ほんとなのですか？」とパトリスが訊いた。

「私はその場にゐたんです」とデマリオン氏は云つた。「寫眞帳を見付け出す現場に立合つてゐたのです、それに、私自身、此の事を驚くに堪へたる形式で立證し、疑ふ餘地なから

しめる発見をしたのです。私は一つの頸飾りを発見しました。それは、固い一塊の紫水晶を磨いて、金線細工の筈に据えたものでした」

「へえ、何ですつて？」とベルグル大尉が叫んだ。「何ですつて？ 頸飾り？ 紫水晶の頸飾り？」

「手にとつて御覧なさい。判事は、もう一度目で以て、エツサアレ夫人に相談した上さう云つた。」

そこでデマリオンは大尉に紫水晶の頸飾りを手渡しした。それはコラリーとパトリスが、彼女は念珠の中に、彼は印章の小飾りの中に、各々半分づつ持つてゐるのを併せて成る珠玉の大きさよりも、一層大きかつた。此の新発見の珠玉は、念珠や印章の水晶を据えた細工と、正確に同じ金線細工の模様を、周囲に嵌めてゐた。

その細工が、つまみの役をしてゐるのである。

「開いて見ても宜しいか？」

コラリーがうなづいた。

彼は頸飾りを開けて見た。

中は取りはづしの出来る、硝子の平圓板で二分され、別々

に二つの縮小寫眞が入れてあつた。一つは特志看護婦の姿をしたコラリーの寫眞、一つは將校服を着た負傷兵の、彼自身の寫眞だつた。

パトリスは眞蒼な顔で考へ込んだ。やがて訊いた。

「で、此の頸飾りは何處にありました？ 貴方がお探しなすつたのですか？」

「さうです。大尉さん」

「何處から？」

判事は躊躇するらしかつた。コラリーの様子は、彼女もその詳細に就ては知らないらしいのである。

デマリオン氏も、遂に口を開いて云つた。

「死んだ人の手に握られてゐたのです」

「死者の手に？ エツサアレ氏の手に？」

思はず殴り付けられたものゝやうに、パトリスは愕然とした。そして、今は判事の上に凭れ掛るやうにながら、それを承認する前に、もう一度聞き返して、その答へを心から待つのであつた。

「さうです。彼の手にあつた。それをもぎ取るために、あの男が殺された。これは第一の否定すべからざる事實です。それから數時間も経たぬうちに、十二時二十三分に、此同じ紫水晶の頸飾りが、他の人間の掌中に発見された譯です。これが第二の否定すべからざる事實です。どうぞ此所を考へて下さい、此の二つの事實を並べて見た時、迎り着く結論は、第一の殺人、つまり私が遠方の反響で聞いた殺人は此所で行はれた、此の家で、即ち、今我々の考察の的となつて居る悲劇のあらゆる幕切れを昨夜以來見續けてゐる所の、此の同じ書齋で行はれたといふ事に成りませう」

現實にエツサアレを糾弾する新材料をなす此の啓示は、判事をいたく動かし得たものゝやうに見えた。パトリスが主張する態度の熱情的な眞卒さと、論理的な推論とを無視することは、明かにこちらの不誠實を暴露することに成るのである。

コラリーは、ちよつと横に顔をそむけたので、パトリスは彼女の顔を見ることが出来なかつた。が彼女はきつと、このやうな恥辱と不名譽を眼のあたりになされて、當惑してゐるのに違ひないと思つた。

握り締めた指を引離すには骨を折りましたよ」

ベルグルは立上つて、拳で卓上を打ちながら叫んだ。

「よろしい。では、お話を後戻りさせて、私の共同作業が有用である所以を立證するための最後の議論として、一つの事實を申上げませう。そして、此の事實は今現に発見した事に、重大なる寄與をなす物です。實は今朝、誰からか私に電話が掛つて來たのです。で、やつと私が電話口に掛るかどうかと言ふ時、電話の相手は大變興奮してゐるらしかつたのですが、突然、殺人者らしい兇漢の襲ふ所となつて、倒される所が私の受話器に傳はりました。そして、立廻りの物音と悲鳴とに交つて、私は次のやうな言葉を聞き得たのです。それは實に此の不幸な男が、私に聴かせようと焦つて發した、幾つとも知れない最後の示唆なのでした、斯う云ふんです。パトリス！……コラリー！……紫水晶の頸飾り……さうだ、私が下げてゐる……頸飾り……あゝ遅かつた！……私はほん

とに心から……パトリス……コラリー……とね。

「それが私の聴いたことです、そして、此所に見通せない二つの事實があります。今朝、七時十九分、紫水晶を下げた

デマリオン氏は意見を挿し挟んだ。

「二つの否定すべからざる事實、貴方はさう云ふんですね、ベルグルさん？　で、最初の點ですが、我々は、今朝七時十分分に殺害されたと推定する男の死體が、見付かつてゐないといふ事を忘れてはなりません」

「それは適當な方法で捜査すれば、見付かる筈です」

「成る程、では第二の點ですが、エツサアレ・ベイ氏が必ずしも殺害された男の手から取つた物で、ほかからの物ではないとばかり断定も出来ませんか？　何故なら、結局私共

は、エツサアレ氏がその時間此の家の中に、況んやその書齋の中にあるものかどうか、知る事が出来ないのですからね。」

「併し、私は知つてゐます」

「どうして？」

「二三分後に私は氏に電話を掛けました。氏は電話に出て來ました。そればかりではない、あらゆる疑問を一掃する材料ですが、氏はその前に私に電話を掛けたが、途中で線を切られて了つたと云ふのです」

デマリオン氏は、ちよつと考へて、

「今朝、氏は外出したか知ら？」

「エツサアレ夫人に訊ねてごらん下さい」

「明かにベルグルの視線を避けたい表情をして、コラリイは顔を先刻のまゝ、そむけたなりで云つた。

「外出したやうには思ひませぬわ。死んだ時着てゐました着物も部屋着でございますから」

「昨夜あれから今朝までの間にお逢ひになりましたか？」

「今朝、妾の部屋の前まで來て、七時から九時までの間に三度も扉を叩きました。が、妾は扉を開けませんでした。十一時頃、妾は一人で出掛けようとした、ところが、良人の聲がして、シメオンに伴をして行けと申すのが聴えました。

シメオンは、往來で妾に追付いて參りました。妾の知つて居ますことは、これだけで御座います」

長い、長い沈黙、三人は皆めい／＼に此の連續する怪事に就て熟考した。

最後に、デマリオン氏はベルグルといふ男の言葉の根據が、さう易々と否定し去ることの出来ない物であるのに氣が

付いて、人が、妥協する前に、論敵の最後の言葉の何であらうかを正確に知りたい時發するやうな語調になつて云つた。

「結論に入る事にしませう、大尉さん。どうもハッキリしないが、兎に角、貴方の建てた理論は私を動かさせるに足りる物です。で、ハッキリ言へばどうなのですか？　で、もし私がその理論を承認するとしたら、貴方はどうしろと云ふんです？」

「私は貴方に此の非常に單純な質問をしたい。答へて下さいますか？」

「お答へ致しませう。御質問と同様に單純なお答へです」

彼は嚴かにしてゐる判事のそばに行つて云つた。

「此所に戦闘と攻撃の戦場があります——さうです攻撃の戦場——それを私は撰ぶのです。私をいつも知つて居り、子供の時からのエツサアレ夫人をも知つてゐる、そしてどちらの上にも興味を持つる男がある。その男は又、いつも私たちの色々の年齢に應じて二人の寫眞を蒐集し、私には判らないが、私共を愛する理由を持つて居る、そして私に庭木戸の鍵を送り、私に語りかけた或る目的から、私たちを一緒にその

目的の中に巻き込まうとして居たのです、その男が、自分の計畫を實行に移さうとした瞬間に、殺害されてしまつたのです。して見ると、私には彼がエツサアレ氏に殺されたことが明白に分ります。そこで私は、そんな自分の行動の結果がどうならうとも、貴方に報告しようとしたのです。どうぞ御信じ下さい、私の要求は、事件を内密に附して頂きたくない事です。世間に訴へる道は常にあります……屋根の上で眞實を高らかに絶叫する事です」

デマリオン氏は哄笑した。

「成る程ね、併し大尉さん、貴方は屋根に上り詰めて居られるやうですね！」

「私は私の良心に従つて行動を探つてゐるのです。そしてエツサアレ夫人も、お許し下さるだらうと信じます。私が、夫人のために善かれと希つて、行動してゐることは御諒解だらうと信ずるのです。夫人は又、もし此の事件が暗黙に葬られたら、そして、もし官憲が彼女を助けなかつたなら、身の破滅だと、よく御存じなのです。敵が、彼女を脅す敵が、何とも執念深い奴であることも御存じです。彼奴らは、自分の

目的を貫くためには、そして彼女を亡き者にしてしまふには、どんな努力をも惜しまないでせう。何よりも怖るべきことは、その目的が何であるか、如何なる達見者にも見抜く事が出来ません。私共は此等の敵に對して最も恐怖すべき競技を演じてゐる、然も我々は、此の競技の懸賞が何であるかも知らないのです。たゞ官憲のみが、そんな懸賞金を發見するでせう」

デマリオン氏は二三秒間ヂツとしてゐたが、やがて、パトリスの肩に手を掛けながらしづかに云つた。

「で、もし官憲が、その懸賞金の何であるかを知つてゐたら、どうしますか？」

パトリスはびつくりして見上げた。

「何ですつて？ 貴方が知つてらつしやるとおつしやるのですか？」

「多分ね」

「教へて下さいませんか？」

「教へますとも、もし強ひて云へと云ふなら！」

「何なのです懸賞は？」

「お、澤山ぢやない！ ほんの少し……」

「然し、どの程度の少しです？」

「十億法」

「十億？」

「正にその通り。十億、併しその三分の二、と云ふのも口惜しい次第だがね！ もし四分の三でなかつたら、三分の二は戦争前に佛蘭西の國外に搬ばれて了つてゐるんです。併し、残りの二億五千萬乃至三億法と言ふ奴は、普通の十億と比べたつて、結局それ以上の値打ちの物なんです、非常に垢抜けた理由でね……」

「どんな理由？」

「實に、それが金貨だつたからで」

エツサアレ・ベイの所業

この時、パトリスは可成り氣持ちに餘裕を見出した。彼はおぼろげながらも、官憲が躍起となつて立騒いでゐる譯が判つた。

「それア、確かな事なんですか？」と彼は云つた。

「さうです。此の事件の取調べ方を、私は二年前に任命された。で私の取調べに依ると可成り多量の金貨が、佛國から輸出された事は確かです。併し、實を云ふと、その漏泄の水源が何處か、佛蘭西の國中、市街を有する市街ならどんな片田舎にでも、至る所に網を張つた者は誰か、つまり、重要缺く可らざる金屬の國外に流出された所以は、たつた今エツサアレ夫人との對話で、初めて明かにする事が出来たのです。」

「エツサアレ夫人が、御存じだつたんですか？」

「いや。併し、夫人が察知された所は非常に大なる物です。」

そして、昨夜、まだ貴方が到着されない前に、夫人が窃み聞きされた中に、エツサアレ氏と悪漢共との間に取り交はされた或る言葉がある。それを私に言つて聽かせて下すつたから、私は謎の鑰を握ることが出来たのです。私は貴方の助力なしに、ひとり此の事件を解剖して見たかつたのです——と言ふ理由も只これは内務大臣から命令されたことでもあるし、又エツサアレ夫人の希望も、私一人でやつて欲しいと云ふことだつたからでもあるが——併し、貴方の熱心さには、

私も躊躇することが出来ない。それに、貴方を放棄らうにも、とても貴方が黙つて控へてもゐないでせうからね、ベルグル大尉さん、私は明らかに、何も彼もお話することにしませう……特に、貴方の共同作業はどうして、悔り難い物でもあるからね」

「謹聽します」話のつゞきを聞きたい心でパトリスは一杯だつた。

「よろしい。策戦の張本人は此所、此の家の主人だつたのです。エツサアレ・ベイ、彼はラファイエツト街六番地にある佛蘭西東洋銀行の頭取だ、表むき埃及人の顔をして居たが、實際は土耳其人で、巴里の財界に大なる勢力を振つてゐた。英國に歸化してゐたが、ひそかに埃及の舊主國に情を通じてゐました、だから、彼は或る外國の官憲から訓令を受けてゐた。その外國が何處かはまだ明かにするのを憚らなければならぬ、が、兎に角その國が、佛蘭西の生血を吸ふ——これより適當な言葉はない。生血を吸ふやうに、彼の金庫に集る金塊を奪ひ去つて、その國へ送るやうに、エツサアレに訓令を發してゐたのです。私が見た記録に依ると、彼は斯くして

て、二ヶ年間に略七億法の金貨を流出させてゐる。遂にその最後の流出を準備してゐた最中、宣戦の布告があつた。さうなると、平和の時とは違つて、斯る巨額の金を密輸出する方法がないのは、貴方にも分るでせう。貨物列車は戦線に於て臨検される、外國行の船舶は港内に於て捜査を受ける、一言に云へば、金塊流出の道がなくなつたのです。先刻云つた二億五千萬法、乃至三億の金貨はまだ佛蘭西の國內に隠匿してある。十ヶ月経過した、遂に避く可らざる結果を惹起した、と云ふのは此のエツサアレ・ベイがこんな法外な寶を自由に處置する身で、それにしがみ付いてゐるうちに、だんく此の財寶が他人の物でないやうな氣かし出したのです。そして、最後に、自分の物にしようと思つた、が、たゞ邪魔なのは一味徒黨の奴共だ……」

「その一味が、昨夜私を見た奴共ですか？」

「左様、六人の怪しい僞紳士、わざと歸化した佛蘭西の市民です。多少假裝を巧みにした勃牙利人、もしくは、バルカンの親獨派の廻し者なのです。此の悪漢がエツサアレの銀行の各地方に亘る支店を股に掛けてゐた。銀行には又、エツサアレ

レのために、數百の手先が雇つてあつて、それが村々を走りまはり、市場を訪ひ、そして百姓連と親しんで、彼等に銀行紙幣や、國債券を提供して佛蘭西金貨と替へ、彼等が蓄へた金貨を全部せしめ上げて了つたのです。戦争が始まると、悪黨共は店を閉鎖し、エツサアレの身邊に歸つて來た、その時にはエツサアレも矢張り、ラファイエット街の銀行を閉ぢてゐたのです」

「それから、どうなりました？」

「どうなつたか、知りません。が、多分、仲間の奴共は自國の政府から、あの最後の密輸出がまだ行はれてない事を聞いたのでせう。そして疑ふまでもなく彼等は、惡黨共の力で集め得た三億法の金貨を、エツサアレ・ベイが勝手に自分の物にしようとしてゐることを、嗅ぎ付けてしまつたのです。只一つ確かな事は、此等、曩日の仲間同志に、争鬭が、猛烈な、執念深い争鬭が始まつたといふ事です。部下の連中は、掠奪品の分配を迫まる、一方エツサアレは、大金は既に國外に搬出したと空とぼけて一文も分配すまいと決心したからです。昨日こそ、争鬭の極點に達した日です。日暮れに、彼等

がエツサアレ夫人を誘拐しようとしたのは、エツサアレ氏から人質を取る目的だつた。そして昨夜……その夜のことは、貴方も目撃した通り、あれが最後の幕切れです」

「ですが、何故ほかの日にしないで、昨夜行つたのです？」

「何故なら、金貨が昨夜のうちに隠匿されてしまふといふ事を部下の奴らは十分知り抜いてゐたからです。エツサアレ・ベエが、今度最後の回送を行ふに當つて、どう言ふ方法を執るか、それは彼等も知らなかつたが、是迄はいつも回送する度に、いや金貨の袋を運搬する度に、前觸れの信號を發して居た事は知つてゐた」

「成る程、烽火の雨でせう？」

「その通りだ、庭の片隅に幾つかの古い温室があります。その上に、それを暖めるための暖爐が設けてある。此の穢い暖爐の中は、灰屑や煤で一杯なのだ、そして火を點けると、ぱち／＼火花を散らす。それが遠方からも眺められる所から合圖の用にも供せられる。昨夜、エツサアレ・ベイは自らその暖爐に點火した。仲間共は忽ち驚愕して、如何なる事があらうとも、襲来しようと思つた」

「では、エツサアレの計畫は遂行出来なかつたのですな？」

「さうです。併し、仲間の奴も矢張り失敗した。大佐は死んだ。他の奴もほんの少しばかりの紙幣を握らせられたばかりで、それも今までは、もう奪還されて了つてゐるでせう。が併し、争鬭はまだ終つたのぢやなく更らに死の苦悶が、此の争鬭の最も怖い悲劇的分子を作成したのでした。貴方の陳述に依ると、貴方を知り、貴方にも事實を知らさうと焦つた男が、七時十九分に殺された。此の男の邪魔をおそれたエツサアレ・ベエが殺したのだとは、最も自然な推定です。そして五時間後の十二時二十三分には、エツサアレ自身が殺されてゐる。一味の一人の手に掛つたと考へる他はない。これがお話の全部ですよ、ベルナル大尉さん。で貴方も知つてゐる事は全部知悉する事となつたのですが、どうです、貴方は此の件に關して、表面暗黙に附して置いて、然も一方では沈黙せずに、普通とは少し違つた方法で、調査すべきものだと考へないですかね？」

しばらく考へて、パトリスは云つた。

「え、私もそれは賛成します」

「勿論それに違ひない！」とデマリオン氏は叫んだ。「既に隠匿されて発見するあてもない金貨の物語を公表するのが、単に公衆の恐慌を起し彼等の空想を刺戟するのみで、何の役にも立たないばかりでなく、それ程巨額の金貨を二年間に流出させた程の仕事には、必ず惜しむべき幾多の人物との妥協を伴つたやうとは、想像に難くない事です。探査によると、多少名の知れた銀行や信用組合の或物などにも、無法な貸出しや無價値な取引をやつてゐる箇所があるに違ひないやうな気がする、さうした商行爲を私は迫及するに忍びないが、それこそ公表したら、莫大な損失となるでせう。そこで、沈黙だ」

「併し、その沈黙が永續しますか？」

「何故？」

「何故つて貴方、色々の死體に就て釋明を與へなければ世間が承知しません！ 第一、ファキイ大佐の死體は？」

「自殺だ、とする」

「ガラエラ博物館の庭で発見されるでせうが、或はもう発見されたかも知れませんが、マスターファアの死體はどうしま

す？」

「たゞ死んでゐたのを見付けただけのことにする。」

「エツサアレ・ベイの死體は？」

「事故の死さ」

「では、同じ働きから起つた三つの死が別々の外觀に見えるんですか？」

「別に連絡のあるらしい所は、少しもないですよ」

「ですが、世間は違つた考へ方をするかも知れません」

「斯う考へて呉れと、希ふ通りに世間は考へて呉れますよ。何しろ戦時中ね」

「新聞が書く」

「こんな事には、新聞は無能さ。検閲官はこつちの物だからね」

「ですが、もし又ほかに新しい事件が、といふより新たな犯罪が……？」

「どうして又、新しい犯罪が起るんです？ 事の落着は付いた。少くとも實行的な、戯曲的な方面ではね。立役者は死んだのです。幕は、エツサアレ・ベイの殺害と同時に降りた。」

ブルネフや、其の他の端役連は、一週間も経たないうちに、刑務所へぶち込まれたと云ふ報告が来るでせう。だから我々は今此所に幾億の金貨の前に面接して居るのだ。誰の所有でもない、何人も所有權を主張する事の出来ない、只、佛蘭西のみがその上に手を掛ける事の出来る金貨の前に。國家のために金貨を取戻すことに、私は全力を捧げるのだ」

パトリスは頭を振つた。

「エツサアレ・ベイ夫人がある。夫人の良人たる人の脅迫事件を、お忘れになつては不可ません」

「彼は死んで居る」

「いや死んで居ても、脅迫事件は残つて居ます。シメオン老人が貴方に、恐怖しながらお話ししたではありませんか」

「老人は半氣狂ひですよ」

「その通りです。でもあの男の頭は、大きな、焦眉の危険を豫想して居るのです。いや争闘はまだ終つて居ません。多分、まだくほんの序の口なんですせう」

「併し、大尉、我々が此所に居るのぢやないか？ エツサアレ夫人を護衛し警護するのを君の仕事になさい。私も、君の

申込み次第、あらゆる方法を執つて上げるから、君も全力を盡して此の仕事をやつて下さい。我々の共同動作は邪魔する物がない、何故なら私の仕事も此の家の中でやる事だし、それに若し争闘が——君は起ると期待するが、私は起らないと思ふ——争闘が、よし起るにしても、それは此の家や家の庭苑の埒内に限られる事だから」

「どうして、さうお考へです？」

「エツサアレ夫人が昨夜窺み聴かれた、數語の言葉にあるんです。大佐が何度も「金貨は此の邸内に在る！」と繰返して云つたさうです。そして又「何年も掛つて、ラファイエツト街の銀行内に在つた物を、お前の自動車が此の邸に搬んで来たのだ。グレゴアールとお前と運轉手との三人掛りで、いつも袋をかついで、左手の一番はしの格子の中に入れたのだ。それを、どうして送り出して了つたか、俺は知らない。だが、開戦當時は此所にあつた物、つまり、搬出を見合せ中だつた千八百袋が、今ではスツカリ無くなつて居る。これは貴様の手品だな、と思つたのだ。そして俺たちは夜も晝も監視を續けて来た。金貨は邸内にあるんだ」と斯う云ひ加へたの

「ださうです」

「何か貴方は手掛りでもありますか？」

「無い、が、ひよつとしたら是れが唯一の手掛りかも知れない。尤も餘り値打物だとも思つて居ませんが」

彼はポケットの中から、皺に成つた紙片を取出して、伸しながら、語をつづけた。

「頸飾りのほかに、エッサアレ・ベイの手の中に、こんな汚れた紙片があつたのです。おぼつかない字で、急いで書いたらしい數語が、認められます。兎も角、その中で判讀されるのは「黄金三角」と言ふ文字だけです。此の金の三角が何を意味するのか？これが解つたら此事件の何の役に立つか、まだ私には判らない。今の所推定し得るのは、此の紙片も亦頸飾と同じやうに、エッサアレ・ベエが今朝七時十九分に死んだ男から奪取した物であること、そして十二時二十三分に、彼自身が死んだ時、彼は此の紙片を調べて居た所だつたこと、それだけです」

「さうです、さういふ經過ですね」とパトリスが結論して言つた。「これで、如何に色々の物の關係があるかとお判りですか？」

「う。事件はたつた一つしかないとお信じなすつて好いのです」

「それはさうです」とデマリオン氏が言つた。「二節に分れた一事件だ。君は、第二節を追及なさるが好い。實の所、同じ寫眞帳と同じ頸飾りの中に、貴方とエッサアレ夫人との寫眞を見出すなんて、これ程不思議なことはない。此の問題の解決が付いたら、自然金貨の眞相も餘程解き易くなるに違ひない。では、また後ほどお目に掛りませう、どうぞね、繰返して言つておきますが、私でも私の部下でも御隨意に御利用下さい」

彼はパトリスの手を握つた……

パトリスは相手を引き止めて、

「お言葉通り、お助けを借ります。ですが、今は必要な防禦的手段を執る可き時ではありませんまいか？」

「手段は執つてある。大尉さん。邸内を占領して居るぢやありませんか」

「左様……左様です……それは判つて居ます、然し、何にしろでもです……ですが今日の危険はまだこれでお終ひでは

ない、と言ふ豫感がします、きつと……あのシメオン爺の奇妙な言葉を忘れないで下さい……」

デマリオンは笑ひ出した。

「ねえ、ベルグル大尉、私共は物事を誇張しては成らない。もし我々に闘を挑む敵が今日まだ残つて居るのだとしても、此の際、彼等の立場として相談しなくつちやならない大必要が彼らにある。いづれ明日これに就いては又お話する事にしてませう。ね？大尉さん？」

彼は再び大尉の手を握り、エッサアレ夫人にお辭儀して、部屋を出て行つた。

ベルグルは、最初、残り惜しさに、彼に従つて出て行かうと言ふ舉動をした。が、戸口の所で立止ると、つか／＼と又、元の所へ歸つて來た。彼が何を言はうと聞きさうもないエッサアレ夫人は、腰を捻つて、彼の方から顔を背けながら、身動きもせず坐つて居た。

彼は云つた。

「コラリーさん……」

彼女が答へなかつたので、彼は再び相手の名を呼んだ。

が、名を呼びながら、彼は答へて呉れぬやうに祈つた。何故なら、彼女の沈黙が、彼のために此の世で望まれる唯一の物であるやうな気が突然したからである。此の沈黙には、もはや何らの束縛感も叛逆の色をも含んで居なかつた。彼女は、彼が此所に、彼女の傍らに、頼母しい友人として坐つて居ると言ふ事實を受入れて居るのだ。そしてパトリスは心を煩はす問題の、あらゆる物を忘れた。次から次へと、その問題の周圍に積み重ねられた殺人のことも、今にしてなほ身に近付いて來る危険のことも、一切が彼の腦裡を去つてしまつた。思ふことはたゞ、目前のコラリーイが身を低うした此のしをらしさ、そればかりである。

「答へないで下さい、物を言はないで下さい。物を言ふのは私の役です。私は、貴女の知らない事を話さなければならぬ。が何故私に此の家の外に出て呉れと貴女が希望なさるか、その理由をね……此の家の外へ、そして、貴女の生活の外へ……」

彼は、彼女の椅子の背ろに手を載せた。すると丁度その手が、此若い女の髪の毛に觸はるのである。

「コライイさん。私から始終逃げて居たいのは、此家でした生活が恥しいからだ、貴女は自分でさう思ひ込んでるのせう。あんな男の妻であつた事に、顔を縮らめるのですね。それを考へる度びに、貴女は罪人のやうな気がして、煩悶したり、憂鬱になつたりするのでせう。だが、どうしてさう？それが貴女の罪でせうか？私に圖星を指されたからつて、驚かないで下さい、實際私には貴女たち夫婦間の悲惨な呪はしい過去がよく分る、屹度、何か陰謀みたいな物にかゝつて、貴女は無理矢理に結婚させられたのでせう？いや、コライイさん、まだ、もう一つお話ししたい事がある、もう一つ……」

彼はだん／＼彼女の上に身を屈めて来た。薪の焔に輝かされた美しい彼女の額を見詰めながら、言葉の調子も次第に馴馴しくなる。「君」とか「君に」とかで相手を呼ぶ語調にも、愛情のふかい尊敬の響きがこもつて居た。

「言ひませうかね、小母ちゃんのコライイさん？言ふ必要がないと言ふの？君にはもう判つたらう、そして君自身の心をはつきり読みあてたに違ひない。あゝ、まるで君は、頭

から足のさきまで震るへて居るんですね！よし、よし、お話ししよう、最初の日から君は大男の負傷兵に、見る影もなく傷付いて居る此の廢兵に戀を感じたのです。お黙り！さうだとも、私はお話ししないでおかぬ……さうです、私は諒解した。今日になつてこんな事を言はれるのは、少し不愉快だ、とお思ひだらうね。多分、私は時機を待つて言つた方が好かつたかも知れない……だが、どうして待たねばならない？私に別に要求して居るのではない？私は知つて居る、私にはそれで澤山なのです。私はもう此上言ふまい、永くいつまでも、又いつか、君の方から私に打明けずに居られなくなる日が、必ず来るに違ひないから、その日まで待つて居よう。その日まで、沈黙を守ることゝしませう。けれども我々の愛情はいつだつて二人の間に流れて居るのだ。それは甘いことですよ、私には、コライイさん、君の愛を知るつてことは、此上もなく、甘い楽しい事ですよ。コライイ……あれ！もう、泣いてるのか！これでもまだ諷だと言ふの？どうして、こんなに泣いてるのに——私は君を知つてるよ、コライイさん——と言ふのは、君のなつかしい男は、愛と優

しみに溢れて居ると言ふことだ。泣いてゐるの？あゝ、小母ちゃんのコライイさん、こんなにまで私を愛して呉れたとは、夢にも思はなかつた！」

パトリスの眼も、矢張り涙をもつて居た。コライイの涙が、蒼褪めた頬を傳つて来る。そして彼は彼女の濡れた頬を、も少し接吻してやらうとした。だが、さうした瞬間に、愛情で顔を崩さうとも、それが微塵も彼には恥しく感じられなかつた。彼女を熱情的に見詰めることが、彼の満足であつた。

が、さうして居るうちに、彼女の心が、彼の心から、ふと離れて行くやうな、彼女の目が何か豫期しない物に惹付けられて居るやうな、そして愛情の深い沈黙の最中に、彼女の耳が何物か、まだ彼の耳に入らない物に聴入つて居るやうな気がした。

そして突然、彼自身も亦、殆ど聞取り難い程の物ながらその物音を聴いた。物音といふほどの物ではない、遠い市街の騒音にまぢつて、ふと起る感覚の一種だつた。

何事が起つたのか？

パトリスが氣付かぬまに、日光はかけつて居た。そして矢張り彼が知らぬ間に、エッサアレ夫人は窓を細目に開けて居た。此婦人室が狭いところへ、薪火の暖もりで、少しむせ返りさうになつて来たからである。ほんの一寸開けたので、兩方の扉は殆どくつ付いて居るのも同じ程だつた。丁度その扉の合せ目である、彼女が目を注いだのは、そして其所から、危険が二人を驚かしたのであつた。

パトリスは突嗟の衝動で、窓の所へ走つて行かうとした。が、彼は抑制した。危険は今だ。たそがれ、少し斜に開いた戸のかげに、彼は人かげの立つのを認めた。次ぎに、扉の合せ目の間に、何か、薪の火にキラリと反射する物を見た。拳銃の銃口に似て居る。

「もし俺が、少しでも身を固めたと敵に悟られたら、忽ちコライイは打たれるだらう」

實際、若い彼女は窓の眞向ひに居た。銃口との間に何の障礙もない。そこで彼は、聲を高く、併し、少しも氣がつかぬ風で、

「コライイ。少しは疲れたでせうね。ぢやア、左様ならをし

「ませう」
同時に、彼女の椅子をグルリと廻して敵の狙いを防いでや
つた。
が、その動作をなし終るひまもなかつた。疑ひもなく、彼
女だつて銃口の輝きを見たに違ひなかつた。突然、口ごもり
ながら、激しく身を退けた。
「おゝ、パトリス！……パトリスさん！」
二發の銃聲。つゞいて呻き聲がする。
「やられたか！」パトリスは叫んで、彼女のそばに飛び付い
た。
「いゝえ。いゝえ」と彼女は答へた。「ですが、吃驚りしまし
たの……」
「おゝ、もし彼奴、指一本でも觸つて見ろ、畜生めが！」
「いゝえ、いゝえ……」
「大丈夫なの？」
三四十秒たつた。電燈のスイッチを捻り、心配して、此若
い女を眺めたが、彼女はスツカリ意識を取返へして居た。
殆ど同時に窓の所に突進して行つて、彼は扉を大きく開

け、露臺の上に駆け上つた。此の部屋は二階にあつた。壁に
は澤山の棧が入れてある。が、脚が脚だから、パトリスは下
に降りるのに可成り難儀せねばならなかつた。
下の、臺地の上で、引くり返つて居る梯子の一段に彼は足
を絡ませた。その時、巡査たちが、第一階から駆付けたので
ある。中の一人が叫んだ。
「今、あの道を人影が走つたぞ」
「どの道だ？」とパトリスが訊いた。
その人影は、小徑の方へさして、走つて居た、パトリスが
追つて行つた。だが、丁度その瞬間、あの小さな庭木戸の直
ぐ側に當つて、ワツと言ふ悲鳴が起り、つゞいて窒息するや
うな聲の喚くのが聴えた。
「助けて呉れ！……助けて！……」
パトリスが行着いた時、巡査は既に懐中電燈で地面を照し
て居た。二人が見ると一個の人影が茨の中で身を藻掻いて居る。
「木戸が開いてる！」と、パトリスは叫んだ。「刺客は逃げた
！ 追つて呉れ給へ！」
巡査は小徑の彼方に消え去つた。ヤ・ボンも其所に來たの

で、パトリスは命令した。
「出来るだけ早やく、ヤ・ボン……もし巡査が小徑を登つて
行つたら、貴様は下つて行け。走れ！ 俺は此の犠牲者を見
てやる」
さう云ふ中にも、パトリスは始終身を屈めて、巡査の懐中
電燈で、地上に身悶えて居る男を照らして見た。それは老
シメオンだ。首のまはりに、赤い絹紐を巻かれて、殆ど締め
殺されかけて居るのであつた。
「気分はどうだい？」と彼は訊いた。「俺の言ふことが分るか
？」
彼は紐を解いてやつて、同じ間を繰返した。
シメオンは色々と連絡のない言葉を發した。と思ふと突然
唱ひ出した、そして笑つた。非常に低い、突發的な哄笑で、
間々に、吃逆を交へるのである。彼は發狂してしまつたのだ
つた。
デマリオン氏が來たので、パトリスは出來事の詳細を話し
て、
「これでもまだ、事件は落着いたとお信じなさんですか

？」と彼は訊いた。
「いや。君の方が正しかつた。私の方が間違つて居たので
す」とデマリオン氏は答へた。「エッサアレ夫人の安全を期す
るために、あらゆる防禦を講じなければならぬ。邸内は徹
宵警衛だ」
數分間後、巡査もヤ・ボンも、掴まへる事が出来なくて歸
つて來た。木戸を開けた鍵が小徑の上で落ちて居た。パトリ
ス・ベルワルの所有する鍵と、その古び加減と言ひ、鑰び加
減と言ひ、全然同様の物である。殺人未遂者が、遁走の途中
投げ棄てた物であらう。
夜の七時である。パトリスはヤ・ボンと一緒にレイヌアー
ル街を出た。そしてニウリイの方角に曲つて行つた。いつも
のやうに、パトリスはヤ・ボンの腕を抱へ、身體を相手に凭れ
させながら、歩行をらくにして歩くのである。彼は言つた。
「お前の考へてる事が、俺には判るよ。ヤ・ボン」
ヤ・ボンは唸つた。
「斯うだ」とベルワル大尉は、斷定的な口調で言つた。「お前
と俺とは、始終意志が一致するんだね。先づ第一に、そして

何りもお前を驚かしたのは、巡査の無能と言ふ事さ、糞莫迦めが、とお前は言つてるかね！ お前がそんな調子で物を言つたらね、ヤ・ボン氏、それア無作法な世迷ひ語だよ。そんな言葉がお前の口から洩れたつて、僕はちつとも驚かない、たゞ、相當な罰をお前に食はしてやるだけさ。併し、もつと考へて見ようぢやないか。お前が何と言つたつて、警官は出来るだけの事をして呉れたのに違ひない。況んや、戦時中には、警官にも色々する事が多いので、ベルナル大尉とエツサアレ夫人とを繋ぐ神秘的な關係などには眼が届かないんだよ。だから、飛び出してやらなければ成らないのは此の俺さ。そして俺は、誰をも計算に入れない、只、俺自身だけを入れる。さうだ。ほんとに俺が、あんな敵に對して相手になり取つて返して、護衛の警官の眼をくぐつて忍び込んだ。そして俺とデマリオン氏との對話を窺み聞いたあとで、又もやコラリイに俺が言つた言葉を聞き、そして最後に、俺たちの耳のそばをブーンとかすめて二發の銃丸を見舞つて呉れた！ お前は何と言ふ？ 俺がその爲事に適はしい人間か

ね？ そして、あんなにこき使はれてる巡査、佛蘭西中の巡査が寄つたとて、俺に有難い助力をして呉れる事が出来るか知ら？ いや、こんな事件を解決するのに、俺が欲しい人物は、破天荒な快漢でなくちや成らないんだ。あらゆる素質を持つた、つまり、誰も此の世に見る事の出来ない人間さ」

「お前は實に澤山の善い人間を知つてる男だが、俺の欲しいやうな人物に、誰か思ひ當る者はないかい？ 萬能の天才は？ 半神の英雄に？」

「ヤ・ボンは唸つた。が、今度は嬉しうな唸りであつた。そして彼の腕を引張つた。此の男、いつも懐中電燈を持つて居るので、その時も灯を點じて、把手を齒の間に挟んだ。それから、チヨークの薄片を、短衣のポケットから取出した。汚れて、風雨に曝された白壁が、街の片側についで居た。

「ヤ・ボンは、その前に佇んで灯りを投げながら、おぼつかない手で何やら書き始めた。一字々々が、彼にとつては無限の努力を要し、そして、書き並べたそれだけの字が、生れてから今日初めて綴り得、且つ記憶して居る唯一の物のやうに見

えた。さうした調子で、彼は二つの言葉を書いた。

「——アルセエヌ・リュバン——」

「アルセエヌ・リュバン」とパトリスは、息の底で云つた。

そして、ヤ・ボンの顔を啞然として見詰めながら、

「正気で云つてるのかい？ アルセエヌ・リュバンつてい

ふ、お前の意味は何だい？ 貴様は、アルセエヌ・リュバン

を俺に推薦するのかい？」

「ヤ・ボンは頷いた。

「アルセエヌ・リュバン？ 貴様は知つてるのか？」

「然り」と言ふ印しを、ヤ・ボンがした。

パトリスは思ひ出した。病院に居る時、此のセネガアル兵

は、いつも氣の善い同僚を引張つて来ては、アルセエヌ・リ

ュバンの冒険談を、残りなく讀んで聴かせて貰つて居たもの

である。そこで彼は齒をむいて笑つた。

「成る程、貴様は、傳記を讀んでその主人公を知ると言ふ意

味で、リュバンを知つてると云ふんだな」

「否」とヤ・ボンが反對した。

「ぢや、個人的に知つてるのか？」

「然り。」

「おいとけ、大莫迦！ アルセエヌ・リュバンは死んだんだ。彼は巖頭から海に飛び込んで死んで居る（譯者註。アルセエヌ・リュバンは、リュバン物語の一冊「813」で、死んだ事になつて居る）それでも貴様、知つてるやうな振りを

するのかい？」

「然り」

「いやはや！ ヤ・ボン氏のアルセエヌ・リュバンに對する勢力は、リュバンを再び此の世に蘇らすに足る物なんだね、そして、ヤ・ボン氏が一指を動かせば、リュバンも亦消えて無くなる譯ですかね？」

「然り」

「へえ！ これまでも、俺はヤ・ボン氏は實に偉いと思つて居た。所が、もう斯うなると俺も爲す所を知らないね、只叩頭九拜、ヤ・ボン様だ。亡きアルセエヌ・リュバンの友人！ やつて見るんだ！……で我々の意志でリュバンの幽霊を呼んで来るに、君ほどの位かゝりますか？ 六ヶ月？ 三ヶ月？」

「一ヶ月？ それとも二週間もかゝりますかね？」
 ヤ・ボンは一つのしぐさをした。そのしぐさを翻譯して、
 ベルナル大尉は言った。
 「二週間ばかりかゝるつて？ 大によろし。君の友人の精靈
 を召喚するが好い。俺も彼の知を辱うするのは大に光榮
 だ。只、正直な話、貴様の知慧は餘程足りないに違ひない
 よ、俺に共同作業者が要ると考へるなんて！ それから何だ
 つて！ 貴様、俺を莫迦にするか？ 阿呆にするか！」

パトリスとコラリイ

すべてが、デマリオン氏の豫言通りに進行した。新聞は黙
 殺した。公衆は昂奮しなかつた。色々の死も、項目の異つた
 事に、それく取扱はれた。富豪の銀行家、エツサアレ・ペ
 イの葬式も、怪しまれる事なしに通過した。
 併し、葬式の翌日、警官の助力も加つて、ベルナル大尉が
 陸軍官憲に申告をした結果、レイヌアール街の邸は、新たな
 施設で面目を更めた。邸は「第二保養院」と言ふ看板を掛

けた。シャン・ゼリイゼエ赤十字病院に附屬する寄宿舎であ
 る。そして、エツサアレ夫人が、その婦長を命じられた。こ
 れはベルナル大尉及び、彼の部下、七人の負傷兵の獨占的に
 起臥するところとなつた。

だから、コラリイは後に残つた一人の女であつた。料理
 人も女中も暇を出された。七人の不具者どもが、家事萬端
 を取扱つた。君は支關番を勤め、我は飯を炊き、彼は料理を
 やると言ふ工合である、ヤ・ボンは客間の給仕に昇進した。
 コラリイの御用を勤めるのが彼の役である。夜は彼女の部屋
 の前の廊下に寝た。晝は窓の外に腰かけて、彼女の身邊を護
 衛した。

「あの女の部屋の戸のそばにも、窓ぎはにも、近寄る者がな
 いやうにしろ！」パトリスは彼に命じた。
 「誰にも這入らせるな——蚊が一匹あの女の部屋へ這入らう
 としても、掴まへてしまふのだぞ」
 それ程しても、パトリスは不安であつた。敵が示した思ひ
 も掛けぬ大膽不敵の例證は、餘りに澤山ある。だからパトリ
 スも、彼女をどうしたつて完全に保護し得たと信する點に達

する事は出来ないのであつた。安心し切つて居る其の思ひも
 寄らぬ所に、危険は常に身を忍び込ませて居るものである。
 そして、何人も、何所からそれが襲来するかを知らない故
 に、防禦を一層困難ならしめるのだ。今や、エツサアレ・ペ
 イは死んで居る。誰がその爲事を引續き行つて居るのか！
 彼の最後の手紙に宣言された、あのコラリイに對する復讐と
 言ふ爲事は、誰に遺贈されて行はれるのか？

デマリオン氏は、直ちに嚴密な捜査を開始して居た。が、
 事件の戲曲的半面は、彼には興味のない物のやうに見えた。
 パトリスの耳に死の悲鳴を傳へた男の、死體が発見されない
 のがその一、その日の終りにパトリスとコラリイを狙撃した
 兇漢は誰か、それに就ても手掛りも見付からないのが其の
 二、その兇漢が何處から梯子を持ち出して來たのか、その形
 跡すら判らないのが其三、色々と失敗したので彼はそれらの
 問題を放棄し、一切の努力を百八十袋の金貨の捜査と言ふ一
 點に集中する事にした。金貨こそ彼が關係する事のすべてと
 ある。

「どの方面から考へても、金貨は此所に無くちやならない」

と彼は言つた。庭園と家屋とで圍む四方形の外線の間に有る
 に違ひないのだ。勿論、同じ五十基の一袋でも、金貨の袋と
 石炭の袋とでは、大きさが餘程違ふ。金貨の袋の方が遙かに
 場所を取らない。併し、それにしても、千八百袋もあれば、
 さう、容易くは隠し切れない七八米立方の容積に成るの
 だ」

二日かゝつて、彼は財寶が家の中にも、家の下にも匿して
 ないのを確めた。佛蘭西東洋銀行からレイヌアール街の邸
 へ、エツサアレ・ペイの自動車に金貨を搬んで來た夜毎に、
 運轉手と、グレゴアールと呼ばれる男とがいつも、仲間共が
 言葉のはしに洩らしたあの格子をくぐらせたといふその鐵條
 は発見された。鐵條に添つて鈎が澤山ある、袋は此等の鈎に
 吊して丁度書齋の直ぐ下にある穴庫に運び込んだ物らしいこ
 とも分つた。

穴庫を捜査するにデマリオン氏と部下の探偵たちが、能ふ
 限りのあらゆる才智と苦難を盡したことは、言ふまでもな
 い。努力の結果は、疑ひもなく其場には何の秘密の形跡もな
 い事、たゞ注目すべきは、書齋から降りて居る階段だけであ

る事が判つた。階段の頂きは、書齋の敷物で匿しながら、陥
 穿用の扉を付けてあつた。レイヌアール街に面した格子の他
 に、庭の方に面した所にも格子があつた。これが第一の臺地
 と水平の高さを持つて居る。此等の二つの入口は、兩側から
 非常に部厚な鐵戸で塞いである。だから、何千何百の金貨袋
 でも、穴庫の中に積み重ねるのは、持ち出す考へさへなけれ
 ば、いと容易な事であるに違ひない。

「併し、どういふ風にして持ち出したのだらう？」とデマリ
 オン氏は審つた。「そこで神秘だ。そして何故、地下室の此の
 階段がレイヌアール街の側の方に在るのか？それがもう一
 つの神秘だ。それから、どうして又、フアキイ大佐や、ブウ
 ルネフや、その仲間たちは、搬出されて居ない。金貨は邸内
 に在る。捜査すれば發見出来る」と云つたのだらう？我々
 はもう家屋内を捜し盡した。残つて居るのは庭苑だ。庭苑に取
 掛つてやらう」

それは美しい、古色を帯びた庭苑だつた。曾つては、人々
 が、十八世紀の末の方、パツシイの水路の水を汲むに踏み馴
 らした、廣漠たる領地の一部分だつた舊態がある。二百メー

トルの間口を以て、庭はレイヌアール街から川岸にまで伸
 び、四段に續く臺地の末が、一面の廣い芝生となつて居る。
 芝生も亦庭と同じ古色を帯び、常緑の叢と、巨木の影とを
 諸所に點じて居る。

併し、此の庭の美しさは、主としてその四段の臺地から、
 川の流れや、左側の低地や、遠方の山々を見る眺望にある。
 四段の臺地は二十の階段で結ばれ、二十の小路が、一つの臺
 から他の臺を結び付ける。そしてその小路は、支へ壁の中に
 彫り込んだもので、時には頂上から足下まで、瀧の如く落ち
 る常春藤の下に隠れて居るものもあつた。

此所や彼所に、彫像が立ち、壊れた丸柱や飾柱の破片が残
 つて居た。一番上の臺地の縁に石の露臺があつて、今もなほ
 樂燒の甍で飾られて居る。その臺地には又、二つの丸い小さ
 な塔が半ば壊れたまゝ残つて居る。昔は此等の塔の面を、噴
 水が常に溢れたものであらう。書齋の窓の前には圓い水鏡が
 あつて、中央に子供の像が、琴のさきから細やかな水條を飛
 ばして居る。此の水鏡から溢れる水が小流れを成して石だゝ
 みの上を濡らす。パトリスが此所へ忍び込んだ最初の夜、足

を突込んだ水溜りは是れであつた。
 「探察する範圍が三乃至四エクタアルある」とデマリオン氏
 は呟いた。

彼は爲事を始めるのに、ベルワルの部下の不具者共を加へ
 た上に、自身の部下の六人の探偵を用ゐた。大して六ヶ敷い爲
 事ではない。いづれは何らか、一定の効果を伴ふ物に相違な
 かつた。デマリオン氏は千八百の袋が發見されずに終る筈が
 ないと、云つて罷まなかつた。地面を掘れば跡が残る。邸内
 に入り、又邸外に出る事の出来る穴を見付けたいのだ。併
 し、草の上にも、又小路の砂の上にも、近頃地面を掘つたや
 うな跡は見付からなかつた。常春藤は？ 壁は！ 臺地は？
 何も彼も探査されたが、効果は無かつた。此所彼所に、地を
 掘り下げるに際して、古い水管を發見した。それはセイヌ河
 まで續く物に違ひない。そして、昔パツシイの水をくみ上げ
 るに用ゐた水道管も残つて居る。併し穴とか、地下室とか、
 煉瓦の圓蓋とか、その他隠匿所らしい物とは、少しも見當
 らなかつた。

パトリスとコライイは、捜索の始終を見守つて居た。二人

は探査の必要を充分承知し、又一方では、此の目頃の戲曲的
 な緊張味もあるのだつたが、實際は二人の宿命の解き難い問
 題に心を奪はれて居るのだつた。そして二人の對話は、殆ど
 いつも過去の神秘の上に觸れて行くのだつた。

コライイの母親は、土耳其の港、サロニカに駐在して居た
 佛國領事の娘だつた。彼女は某所でオドラヴィツチ伯爵と稱
 する、古代塞比亞の族長で、當時可成りの歳の富豪と結婚し
 た。良人はコライイが生れて一年後に死んだ。寡婦と幼児と
 は、その時佛蘭西に居た。然も、今此の同じレイヌアール街
 の邸に住んで居た。此の邸はオドラヴィツチ伯爵が、自分の秘
 書で番頭を兼ねたエツサアレといふ、若い埃及人の手を経て
 買つて置いた物だつた。

此の邸でコライイは、幼年時代の三ヶ年を過した。所が、
 突然、母が亡くなつた。彼女は此の世にたつた一人の孤兒
 となつたのである。當時サロニカに、祖父の領事の妹が生
 き残つて居た。彼女は兄の領事より非常に若かつた。エツサ
 アレは幼いコライイを伴つて、遙かサロニカの彼女の所へ出
 掛けた。此の貴婦人がコライイの後見をする人と成つた。所

が、不幸にも彼女は、エツサアレの巧言にスツカリ參つてしまつて、自分でも色々の書類に捺印し、又彼女の小さな姪にも調印させて居るうちに、結局幼兒の財産全部が、此の埃及人の管理のうちに、少しづつ消え失せてしまつたのであつた。

遂に、彼女が十七歳の頃である。彼女は、口惜しさの忘れようにも忘れられぬ、そして生涯の致命傷として残る或る兇行の犠牲となつた。或る朝、サロニカの野原で、一隊の土耳其人に拐され、その地方の知事の邸に二週間拘禁されて、知事に凌辱の限りを盡された。エツサアレがそれを救ひ出した。が、その救助の方法が餘りにも架空的な方法だつたので、後になつて考へると、知事と此の埃及人との間には必ず密約があつたに違ひないと、屢々彼女は悚然とした。

何にしても、肉體は病み、心は傷付いた。そして、今度は伯母が彼女の自由を奪ひ、彼女を責め苛んだのである。一ヶ月後、彼女は伯母に強ひられて此のエツサアレと結婚したのであるが、既にそれまでに、エツサアレは彼女を口説いて居た、そして今はその眼に明かに、俺は生命の恩人だぞと言

ふ色を浮べて居たのであつた。それは絶望的な結婚であつた。嫌惡の情は、初めて契るその日から、彼女の顔にありありと現れて居た。コライイは、自分が憎惡する男の妻であつた。良人の愛は、それに答へる彼女の憎惡と輕侮に従つて、日毎濃やかさを増していつた。

結婚した年、二人は佛蘭西に渡り、レイヌアール街の邸を住居と定めた。エツサアレは、その餘程以前に佛蘭西東洋銀行を設立し、當時はサロニカ支店を支配して居た。それで銀行の配當の殆ど全部が彼の懐中に入るのであつた。やがてラファイエット街のビルディングを買つて本店とし次第にパリ財界の一方の立物となり、埃及からベイ（知事）の稱號を贈與さるゝに至つた。

これが、或る日パツシイの美しい庭で、コライイがパトリスに話した物語である。二人は此の不幸な過去を探訪し、パトリス自身の過去と比べても見た。が、彼もコライイもお互の歴史に共通な點を少しも發見する事が出来なかつた。二人はこれまで、世界の各々異つた場所に住んで来た。どちらの一人も、心のうちに同じ記憶を喚起する事が出来なかつた。

何故、二人が同じ紫水晶の珠玉の半分宛を持つて居るのか、何故、二人の寫眞が互に對を成し、同じ頸飾りのメダルの中に入れられ、同じ寫眞帳の頁に貼られて居たのか、その由來を諒解する何の材料をも見付ける事が出来なかつた。

「みんな判らない、だが」と、パトリスは云つた。「エツサアレ・ベイが擱んで居た頸飾りは、つまり我々の上をひそかに見守つて居て呉れた未見の友人を殺して、彼が奪ひ取つた物だ、といふことは判る。併し、そんなら、襦袢の裏に縫ひ付けられたポケットの中の、寫眞帳はどうしたのです?……」

此の質問はそれだけにして、パトリスは訊いた。

「シメオンに就いて、話して下さい」

「シメオンは、ズット此の家に住んで居ました」

「貴女が阿母さんと此邸に居た時も?」

「いえ、妾の母が死んで一二年ばかり後のことで、そして妾がサロニカに渡つた後、此の邸の留守を管理したり、荒らさぬやうに保存させるために、エツサアレが雇入れたのです」

「エツサアレの秘書もして居たの?」

「どういふ役をして居たか、詳しくは存じません。けど、エ

ツサアレの秘書でも、相談相手でも御座いませんでした。二人だけで親しく話し合ふと言ふ事もなかつたやうです。二三次度、シメオンはサロニカへ妾たちに逢ひに參りました。一度來た時の事を、妾まだおぼえて居ますの。まだ妾は、ほんの子供でしたが、何だか其の時は大變怒つた調子で喰つて掛つて、エツサアレをビク／＼させて居たやうに思ひますわ」

「何で怒つたの?」

「存じません。シメオンに就いては、妾、何にも存じませんの。あの老人は、いつも大抵ひとりぼつちでしてね、パイプを啣へてデツと考へ込みながら、庭を逍遙つたり、時には庭の樹木や草花の手入を、あの男が自分で雇つて來た二三人の植木屋と一緒にしたりするのが癖でした」

「貴女には、どう言ふ態度を執つて居た?」

「それに就ても、矢張り、これと言ふ覺えはありませんわ、お互に言葉を取交はす事ありませんでした。それに、あの男の用事が、妾に關係のある事が、滅多になかつたのです。それなのに、時々妾は、あの男が黄色な眼鏡の底から、いつも妾を探して居るやうな眼付きをするのを感じました。その

眼に、可成りな執念深さとひよつとしたら可成りな興味も含んで居たやうに思ひます。それからね、つひ近頃になつてからですの、あの男は妾の件をして病院に行くのが大變好きでね、その度に、病院でも途中でも、今までとは一層その様子が熱心に、ほんとうにうれしうに見えますの……餘りな物ですから妾も、お終ひの二三日は、何だか氣味が悪くなつて参りましたわ……」

しばらく、彼女は言はうか言ふまいかと思ひ迷つて躊躇してゐたが、やがて又語りつづけた。

「え、これは大變不明確な、ハッキリ云へない事ですけど……でも、何方にしても同じですわ……あのね、申上げるのを忘れて居た事が一つありますの……貴方、何故妾がああ病院に、貴方が負傷してお臥つてらつたああ病院に、妾が勤めるやうになつたか、御存じ？ それは、シメオンが連れて行つて呉れたからですよ。あの男は、妾が特志看護婦になりたがつて居た事を知つたものですから、あの病院を暗示して呉れたんですよ……妾たちがお互に顔を合せる都合になるのを、ちゃんと知つてした事ですわね」

「それから、ほら、……此間の頸飾りの中の寫眞、貴方は軍服で、妾は看護婦服の姿でしたわ、あれは病院の中で撮るほかはない寫眞ですわ。……所が此郎の中で、病院に行く者はシメオンの他にはないのです。

「それから先刻も申上げた通り、あの男はよくサロニカに來たものです、ですから、子供の時から、娘時代の妾まで、度々見て居る筈で、そのせつ、早取寫眞で寫眞帳の材料を取る事も出来ませぬ。さうして見ますと、誰かシメオンの共力者があつて、貴方の後を寫眞機でつけねらつたのは別人だとして、妾と貴方の間に居たと仰言るあの未見の友人、ほら、貴方に、庭木戸の鍵を送つた男が、ひよつとしたら……」

「シメオンかも知れぬ、と言ふの？」とパトリスが横槍を入れた。「餘り穿つた話ぢやないの？」

「何故ですの？」
「何故つて、その所謂未見の友は死んだ。貴方の言ふ通り、我々の仲間に介在して居た男、私に庭木戸の鍵を呉れた男、私を電話に呼び出して眞相を傳へようとした男、その未見の友人は殺されたのだ。殺された事には何の疑ひもない。私は

人間が殺される時の悲鳴を聞いた、……瀕死の悲鳴をね……人間が死ぬる瞬間に發する叫び聲を」

「それが確かだとは、決して言へません」
「いや、絶対に確かだ。私の心には、疑ひの影すらないんだ。所謂未見の友なる男は、その爲事をし終る前に死んだ。その男は殺された、そこでシメオンが生きて居る。それに又」とパトリスは續けて云つた。「それに、その男のはシメオンの聲とも違つて居たんですからね、それは聞いた事のない聲で、そして、もう二度と聴かれぬ聲だらう」

コラリイは説伏せられて、その上言ひ張りはしなかつた。二人は庭のあるベンチに腰かけながら、四月の輝かしい日光を樂しんで居た。栗の花の蕾が、枝のさきに輝いて居る。庭を繞る花床から、匂ひあらせいとうのおもくしい花の香が漂うて來る。その茶色と黄色の花は、さながら蜜蜂の軍勢かのやうに、こまやかに密集して、そよ風に吹かれて居た。突然、パトリスはハツとした。コラリイが心をゆるした親しみを以て、彼の手の上にその手を置いて居る。そして、ふと彼女の顔に眼を移した時、彼は見た、彼女が涙を流して居

るのを、

「どうしたの、コラリイさん？」
若い彼女の顔はうなだれて、頬は士官の肩に寄り掛つた。彼は動かうともしなかつた。彼女は、まるで彼を頼母しい兄のやうに取扱つて居るのだ。そして彼も、相手を驚かすのを怖れて、愛情の昂奮を示すやうな舉動をヂツと怵えた。

彼は繰返した。
「どうしたの、ね！ 何故なの？」
「お、何て不思議でせう！」と彼女は呟いた。「パトリスさん、ごらんない、あの花を」

彼等は第三の臺地に居て、第四段目の臺地を見下ろして居た。そしてその、第四段目、つまり一番低い臺地には、にはひあらせいとうの花床はなかつた。が、その代り、春のあらゆる種類の草花が咲き亂れた花壇がある。チュリップ、メエール・ド・ファミイユ、コルベイユ・ダルジャン、さうした花に取巻かれた中心に、三色堇の、丸い、大きな花床があつた。
「あれ、あれ、あそこを御らんないまし」と、彼女は腕を伸して、その堇の床を指しながら云つた。「見えまして……」

文字が……」

パトリスは見詰めてあるうちに、だん／＼判つて来た。董の花の一行を、他の董の密生する少し上を匍はせて、幾つかの文字に浮出させて居るのだ。チョツと見れば分らない。併し、だんだん眼が馴れて来ると、ハツキリして来る。そして一度び見付けたら、文字は自ら指す方向を現して、只一行にづらなる次の三語を形造るのであつた。「パトリス、と、コラリイ」と。

「あゝ」と彼は低く呟いた。「私にも判つた！」

此處に二つの名を讀む、誰か好意を持つ人の手が播いたに違ひない。董の花に結ばれた二人の名、彼らは等しく得も言はれぬ感激に戰慄した。全くこれは得も言はれぬ感激である、彼と彼女とが、いつも斯のやうにして互の繋がりを見出すとは！ 見えざる意志の力に依つて繋かれ、突發する事件に繋かれ、寫眞に繋かれ、さうして今、可憐の花から湧き上る生存の力に依つて繋かれ、神意の命ずるまゝに花と生命の中に眼覺めた二人であるとは。コラリイは身を伸ばしながら言つた。

「庭に手入れするのはシメオン爺ですわ」

「左様だ」と、彼は言つた。「然し、それだからと云つて、私の説を動かすものでないのは確かです。私たちの未見の友人は死んだ、然しシメオンは彼を知つて居たに違ひない。多分シメオンは彼と何かの目的で協同して居たので、充分事情を知つて居るに違ひない。おゝ、もしシメオンがほんとの事を教へて呉れさへしたら！」

一時間のち、日はもう地平の彼方に沈む頃、二人は臺地を登つて行つた。一番上の臺地まで来るとデマリオン氏が居て二人を手招いた。

「大變奇妙なものがあるんです、ごらん」と彼は言つた。「私が探し出したんですが、お二人のどちらにも興味を惹く物でせう、奥さんにも君にも、そして大尉さんには殊に」

彼は二人を臺地の端に引張つて行つた。其處は書齋の隣りの、突き出た部屋の前面になつて居た。デマリオン氏の言ふ所に依れば、彼等が捜査を續けて居る最中、樂燒の甕を飾つた下方の壁から、常春籐を取退けようとした時である——ふとデマリオン氏の注意力が、此の壁の數ヤード間だけ本來の

石造りより大分生新しい漆喰に塗られて居る事實に惹付けられた。

「これが、どうしたと思ひます？」とデマリオン氏が云つた。「これをやつた動機を、私は透視しなければ成らなかつた。そこで、此の漆喰塗を打壊して見たのです。すると、その下に又第二の漆喰塗がありました、これは最初のほど部厚でなく、その上、ごろ／＼石が混つてゐたのです。寄つてごらん下さい……それとも、いや、もう少し退つて立つて見る方が好いかな。さうしたら、能く見えませう。」

その第二の漆喰は、ほんとは只幾つかの小石を、或る、それ／＼の位置に保つために塗られたものに過ぎなかつた。つまり、黒板に石を嵌めた寄木細工と言つた方が早い。そしてその石が寄つて、大きく書き置かれた一列の字を形造る、それが三つの言葉を綴つた。さうして、その三語は、此所にも又、「パトリス、と、コラリイ。」である。

「どうです、これは？」とデマリオン氏が言つた。「注意下さい、此の字は何年も昔に書いた物です。丁度、壁の此の部分に絡み付いて居た常春籐の状態から考へると、少くとも、十

年前に書いた物です。」

「少くとも十年前——」とパトリスはコラリイとたつた二人になつた時反覆した。「十年前と言へば、貴女がまだサロニカに居た時で、まだ結婚前のことです、そして、誰もその頃此の庭の中に入出入する者は居なかつた……只、留守番のシメオンと、シメオンの許可で出入りした人々だけだ。」

「そしてその人々の中に」と彼は結論した。「我々の所謂死んだ未見の友人も居た。そして、シメオンは眞相を知つて居るんですね、コラリイ。」

午後おそく、彼らはシメオン爺を見た。悲劇以來いつも決まつて、彼は庭の中や、でなければ屋内の廊下を逍遙つて居るのであつた。落ち着きがなく、懊惱を現はして、そして、いつものやうに襟巻で顔を埋め鼻に眼鏡を掛けながら、誰にも意味の判らぬ言葉を呟きまはるのである。夜は隣室に居る一人の廢兵の耳に、彼がひとりで唸る鼻歌が、幾度となく聽へて来た。

パトリスは二度までも、彼と話を試みた。けれどもシメオンは只、首を振つたり、ぼんやり笑つたりするだけだつた。

問題は益々混乱して来る、そして何一つとして解決の鍵らしい物は得られなかつた。一體誰だらう？ 幼年時代から遠い昔の嚴肅な神意に依る許婚のやうに、二人を結び付ける者は？ 去年の秋、まだ二人がお互に顔さへ見知らぬ時、あの董の花床を設らへた者は誰だらう？ さうして壁の底深き所に、十年前、小石で以つて二人の名を書いた者は誰だらう？ これ二人の、求めて飽かぬ疑問だつた。お互の戀に我識らずして眼覺め、さうして、お互に共通な長い歴史こそ、突然振返つた背ろに横はる二人の問題であつた。二人が庭を踏む一歩々々が、忘れ果てた記憶の國をめぐる巡禮か。そして、小路を曲る角ごとに、二人を驚く、あの謎のやうなえにの糸を更らに新しく見付け出さうと二人はするのである。實際、此の數日間に、彼等は自分たちの名の首文字を、二度は樹の幹に、一度はベンチの凭れに、各々彫り付けてあるのを見た。そして更らに二度まで、彼等の名は、常春籜が蔽ふ古い壁の漆喰塗の背ろに記されてあつた。

此の二度發見された壁の文字は、名の下に二つとも異つた月日が書き添へてあつた、

「パトリス、と、コラリイ。千九百四年。」
 「パトリス、と、コラリイ。千九百七年。」
 「一つは十一年前、一つは八年前」と士官は言つた。「いつも私たち二人の名前だ、パトリスとコラリイ」
 二人の手は會つた。そしてお互にヒシと握り合つた。彼らの過去の大なる神祕が、お互に心に溢れながら口に出すのを憚るあの激しい戀心と同じ勢ひで、二人を固く結び付けた。

さうした二人であるにも拘らず、彼らは誰をも交へない、たゞ二人きりの孤獨を愛した。そんな譯で、或る日、エツサアレ・ベイが慘死して二週目のこと、ふと例の小徑に出る小さな庭木戸の前を通つた時、その木戸の外に出て、川岸に行つて見る事になつた。誰も二人を見て居る者はなかつた。木戸の近くから、そこに來る小路までが、背の高い叢木の屏風の蔭になつて居たからでもあるし、又、折柄デマリオン氏やその部下たちは、庭の、此所から反對の側にある温室を發掘して居る最中であつたからでもある。その温室のほかに、彼等は、いつも信號に使はれて居たあの古い爐や煙突を調査し

て居た。
 が、先きに立つて木戸をくぐり出ると、パトリスは立止つた。殆ど彼の直ぐ前に、つまり向ふ側の塀にも、此方のと正確に同様な扉が付いて居た。コラリイに其の事を注意すると、彼女は言つた。
 「少しも不思議な事はございませんわ。あれは昔、今居る私たちの庭に附屬して居た、も一つの庭の土塀ですの。」
 「だが、あの塀のうちには、誰が住んでるの？」
 「誰も住んでは居ません。庭の中に小さな家がありましたね、レイヌアール街の妾の家と並んで居りますの、けれど、いつも扉が締つて居ますわ。」
 「同じ木戸なら……多分同じ鍵だらうね。」とパトリスは、半ば獨り語のやうに呟いた。
 彼は、その扉の鍵穴へ、使ひが屈けて來たあのさびた鍵を突込んで見た。手答へがあつた。
 「よし」と彼は云つた。「連續の奇蹟はまだつゞくんだ。今度こそは、我々に幸福な物が現れるのか知ら？」
 二人の眼前に展げた狭い地帯に、草は墓るに任せてあつ

た。が、その放縱な草の眞中には、よく踏み馴らされた小路が付いて居た。まるで始終人に踏まれる路のやうに、塀の木戸から始まつて、斜めに、たゞ一つの臺地を上つて居る。臺地の上には、荒廢した一軒の離れ小屋が建て、あつた。すつかり鐵戸で締め切つてある。それは一階建てであつたが、屋根の頂上には天窗が付いて居る。

レイヌアール街に面して特に一つの門があつた。併し小舎とレイヌアール街の間には、前庭を挟んで、高い外壁が設けてあるのである。門も亦、互に釘付けされた板と柱とで、敵を防ぐやうな形に見えた。

家のぐるりを歩くうちに、右手の側に自分たちを待ち構へて居た光景を見て、パトリスは吃驚りした。綺麗に手入れされた樹立が長方形の僧庵風の囀みを作り、そしてそれに米松と黄楊の生垣をめぐらせた廊下染みたものが付いて居るのである。木葉のめぐる空地、此の沈黙と静寂の住家は、一つの小庭の景を成して居た。此所にも亦、にほひあらせいとうがあり、董があり、メエル・ド・ファミエがあつた。そして、僧庵の四隅から來る四すじの小路が、中央の盆地に出會ふ所

に、小さなお堂を支へて圓柱が五本樹つて居た。お堂の扉は開いて居る。小石と、漆喰で固めて倒れぬやうに、ひどく粗末に造り上げた物である。

此の小さなお堂の圓天井の下に、一基の墓石が立つて居た。

墓の前には、木製の祈禱椅子が置いてあり、椅子の棧の左側には、象牙の十字架がぶら下がり右側には、金細工にはまつた紫水晶の珠数がさがつて居る。

「コラリイさん、コラリイさん」と、パトリスは感動にふるふる聲で囁いた。「誰の墓でせう？」
二人は近寄つて行つた。墓石の上には、珠で拵へた花環が、幾列にもなつて並べてあつた。數へると十九ある。十九の各々の花環の日付けには、今から遡る十九年の年を一つ宛書いてあつた。花環を傍らに拂ひ退けて、彼らは墓石の銘を讀んだ。それは風雨にきたなく褪せた、次のやうな金文字であつた。

此所に眠る、
パトリス、及びコラリイの魂。

共に千八百九十五年四月十四日、
殺害された者なり。
復讐の時は來らん。

赤い絹紐

コラリイは脚も抜け落ちて了ふかの心地で、祈禱椅子の上膝まづきながら、熱烈に、そして息遣激しく祈禱した。自分自身にも判らない。誰のために、誰の魂の安息のために此の祈りを上ぐるのか？ けれども、彼女の全存在は熱と昂奮に燃え立ち、祈ることそれ自身が彼女を和らげ得る物のやうに思はれた。

パトリスは相手の耳もとで囁いた。

「貴女の阿母さんの名は何と言ふの？」

「ルイズと申しますの」と彼女は答へた。

「そして、俺の親父の名は、アルマンと言ふのだ。その人たちの墓でもないらしい。して見ると、だが併し……」
パトリスも、此上もない焦心を示して居た。身を屈めなが

ら十九個の珠数を調べて、そして墓石を又新に見直した。「何にしても、コラリイさん、此の符合は餘りに奇抜過ぎる、私の親父も千八百九十五年に死んだのです。」

「そして妾の阿母さんも、矢張りその年に死んだのですわ」と彼女は云つた。「何月何日か、確かな命日は存じませんけど。」

「今に判るよ。」と彼は言つた。「そんな物は直ぐ調べ出す事が出来る。然し、それと一緒に、今、一つの事が判然として來た。パトリスとコラリイの名を、いつも結び付けて方々に書いた男は、單に私と貴女とばかりを目指したのでもなく、又、單に未來のことばかり考慮に入れてやつたものでも無いと言ふ事です。多分、その男は、パトリスとコラリイなる者の過去をも目標に入れて書いたものに違ひない。そのパトリスとコラリイが何者かの手で非業の死を遂げたのを知り、そのために復讐を誓つた男に違ひない。歸りませう。コラリイさん。誰も私たちが此所に來たとは知らないんだから。」
二人は通路を過ぎて、小徑に面するあの二つの庭木戸をくぐつた。再び庭苑に歸つて來たのを、誰も見て居る者がな

つた。パトリスは直ぐコラリイを屋内に伴れて入つたあとで、ヤ・ボンヤ、その他の部下を驅り集めて、警戒を一層嚴にすべき事を申し渡し、自分一人で家を出て行つた。

夜は早く、再び家に歸つて來た。が、それは只、明朝成るべく早く出て行きたい爲めからであつた。漸くその翌日、午後三時、彼は久し振りにコラリイに面會を求めた。

彼女は直ぐに訊いた。

「何か發見なすつて？」

「色々と澤山發見したが、まだ現在の暗雲を一掃して呉れる物ではありません。發見した物が却つて暗雲を深うしたと云ひたい程です。けれど過去のことだけは、其の發見で生々と明るくなつたのです。」

「それで、二日前に見た事も、ハッキリして參りました？」

と彼女はせはしく訊いた。

「お聴き、コラリイさん。」

彼は彼女に向ひ合つて坐つて言つた。
「私のやつた事を一言はなくても好いでせう。一つの結果から他の一つの結果が考へ出せる、その結果だけ取り集めて

「貴女の阿母さんのためで、そして又私の阿父さんのためでもあつたのです。ドルウオ街の市役所で私は親父の姓名を知ることが出来た。私の親父は、アルマン・パトリス・ベルツルと言ふのです。矢張り、千八百九十五年、四月十四日に死んで居る。」

「さうです。私は貴女の阿母さんの死亡届の寫しを取つて来たよ。コラリイさん。阿母さんは千八百九十五年の、四月十四日に致くなつて被^レ在^ルる。」

「おゝ！」と彼女は云つた。「それが丁度、あの墓の日附けです！」

「同じ日附けだ。」

「ですが、コラリイつて名は？……妾の父は、いつも母をルイズと言つてましたが」

「貴女の阿母さんの名は、ルイズ・コラリイ・オドラウイツチ伯爵夫人と言ふのです。」

彼女は齒の間で呟いた。

「あゝ、妾の阿母さん！ 妾のあはれな、いとしい阿母さん！ では、殺されたのは妾の阿母さんなのね……あの時私が祈つたのは、阿母さんのためでしたのね？」

「その質問には、まだお答へが出来ない」と彼は答へた。「が、私は一つの、一層解き易い問題を考へて見たのです。そして解く事が出来た。これも亦、事件の要點を確實に知らせる物です。私が知りたかつたのは、あの離れ小舎が誰の物か、と云ふ事でした。外面、レイヌアル街から見ても、それは少しも判らない。前庭に付けた外壁と門とは貴女も見ただせう。別に變つた物はない。が、所有地番號は私の望みに

トリスに投じた疑問だつた。

「その質問には、まだお答へが出来ない」と彼は答へた。「が、私は一つの、一層解き易い問題を考へて見たのです。そして解く事が出来た。これも亦、事件の要點を確實に知らせる物です。私が知りたかつたのは、あの離れ小舎が誰の物か、と云ふ事でした。外面、レイヌアル街から見ても、それは少しも判らない。前庭に付けた外壁と門とは貴女も見ただせう。別に變つた物はない。が、所有地番號は私の望みに

を満たす十分な手掛りでした。私は收税所に行つて、此の地所の税金がオベラ街の、或る公證人の手で收められて居る事を知つた。そこで又公證人を訪れると、公證人が言ふことに……」

彼はちよつと息をついて、言つた。

「小屋は、二十年前に、私の父が買ったものです。二年後、父が死んだ、そこで小屋は、勿論、父の不動産の一部で、現在の公證人でなく、その先代の手で賣却せられ、シメオン・デイオドキスと稱する希臘人の所有に移つた。」

「あの男です！」とコラリイは叫んだ。「シメオンの姓はデイオドキスと言ひます。」

「さうだ、シメオン・デイオドキス」とパトリスは話をつづけた。「此の男は私の父の友人だつた。何故つて、私の父は、シメオンを以て、唯一の遺言執行人とした。その上にシメオンは、此の公證人と倫敦の公證人との手を通じて、私の學費を送つた。そして、私が丁年に達した時、二十萬法と言ふ遺産額を渡して呉れたのださうです。」

二人は長く沈黙に耽つた。色々多くの事象が、次第に明

かになつて来た。が、まだハッキリとは掴まへ所がない、まるで夕霧にかくされたやうな物である。ところが、その中でたつた一つ、一際鋭く輪廓を浮き出した物がある。と言ふのは、パトリスが呟くやうに云つた言葉だ。

「貴女の阿母さんと私の阿父さんとは、戀に陥ちて居たのです。」

それは、考へるだけで、二人の間を二層固く結び付けるものだつた。二人は深く感動した。二人の戀は、他の二人の戀の寫眞であつた。自分たちと同じやうな試練に搏き碎かれ、そして自分たちより一層みじめな悲劇を演じ、最後に流血の悲惨に死んだ、他の二人の戀の繼承であつたのか。

「貴女の阿母さんと私の阿父さんとは戀に陥ちたのだつた」と彼は繰返して言つた。「私の考へではあの二人は、阿母さんごつこする子供みたいに愛し合ふ、ほんとに仲のいい戀人同志だつたんだね。何故なら、水入らずの時二人の名の呼び方が、お互にはかの人が餘り使はない、幼な名を使つていたとしか見えないからね。それで、お互に、それが又君と私との名でもある第二の幼名を呼んだ譯です。或る日、阿母さん

が、紫水晶の珠數を取り落とした。一番大きい球が、二つに割れた。私の父がそれを拾つて、小飾りにして時計に着けたのだ。二人とも、寡婦と鰥夫のことだ。貴女は二歳で、私が入歳、父は愛する女に全身を捧げるしるしに、私を英洲に送つて、あの小舎を買つた。さうすると、丁度、貴女の阿母さんの家は小舎の隣だから、思ひのまゝに逢ひに来ることが出来たのです、あの小徑をわたり、同じ鍵で、二つの木戸をくゞつてね。で、二人が殺害されたのは、確かにあの小舎の中か、そのまはりの庭の中かに違ひない。殺人の證跡はきつと残つてゐるに違ひないから、今に判るでせう。シメオン・デイオドキスが、敢へてあんな碑文を墓に書いて居る所を見ると、その證跡もあの男は發見して居るに違ひない。」

「では、犯人は誰ですの？」と、若い女は息を詰らせながら訊いた。

「考へたら判る筈です。私にも判る。あの憎い男の名が思ひ浮ぶでせう。確證がないから、おほつびらには言へないけれど。」

「エツサアレ！」と、彼女は悲痛の聲を絞つた。

「十中八九はね」

彼女は手で顔をかくした。

「いゝえ、いゝえ、……そんな事はありません……妾の母を殺した人の妻になつたなど、そんな事のある筈がありません」

「篤があの男の名に入つて居るだけで、貴女は決してあの男の妻ぢやない。貴女はあの男の死ぬる前に私の目の前で、さうあの男に宣言した。誰か殺したのか、斷言する事の出来な事は言はない事にしよう。が、あの男が貴女の巧妙な怨敵である事だけは記憶して居りたいのです。それから又、私の父の友人で、遺言執行人たるシメオン、戀人同志のあの離小舎を買つたシメオン、二人のために復讐を誓つた碑文を書いたシメオンが、貴女の阿母さんが歿くなられた數ヶ月後に、エツサアレに頼んで邸の留守番をさせて貰ひ、彼の秘書となり、さうしてだん／＼と彼の生活の中に立入つて來た、此の事も忘れないで置ませう。シメオンの唯一の目的は、復讐の手を斯うして伸して行く所にあつたのだ。」

「併し、少しも復讐した形跡はありません」

「それに就いて、私たちが何を知つてると言ふの？ エツサアレが、どんな工合で死んだか、ほんとに私たちに判つてるか知ら？ 勿論、シメオンが殺したのぢやない。何しろ彼は兇行當時、病院に居たんだからね。けれど、殺すために、死を惹起さす仕掛けを作つて置く事は出来る筈だ。それに、復讐の形式や手段は、數限りなくあるんです。最後に、シメオンが私の父の命令に甘んじて従つたのは、重々推察出来る。だから、彼が先づ、私の父と貴女の阿母さんの、望みを仕上げるのを第一の目的としたのは、疑ふ餘地がありません。その望みと言ふのが、私と貴女との運命を結合させたいと言ふことですよ。コラリーイさん、彼の一生を支配したのも、此の目的だつたのです。私が子供のいたづらから、色々寄せ集めたがらくた物の中に、ほら、貴女の念珠の珠と合せて一つになる、あの半分の紫水晶を入れて置いて置い、明かに此の男だつたのです。私達の寫眞を聚集した者も此の男だつた。そして最後に彼は、我々の未見の友であり、保護者となつて、鍵を手紙に添えて送つて呉れた。尤も、手紙は不幸にして、私の手には入らなかつたが。」

「では、パトリスさん、その未見の友が、貴方に瀕死の叫び聲を聴かせた男が、死んで居るとは、もうお信じに成らないの？」

「それは私にも判らない。シメオンは、たつた一人で仕事をやらねば成らぬと言ふ譯もない。相談相手とか、仕事の助手とか言ふ者を雇つて居たかも知れない。で、多分、七時十九分に死んだのは、此の助手といふやうな男ではなかつたでせうか。私には判らない。あの呪はれた朝起つた出来事は何も彼も神祕のどん底に埋れてしまつてる。只一つ、十分信じてもいい事は、此の二十年の長い間、シメオンは人知れず、そして辛棒強く、我々のために働いて呉れた、殺人犯人を打ちひしぐため全力を盡して呉れた。そして其の、シメオン・デイオドキスなる男は生きて居る、と云ふ事です。」

「生きて居る、だが氣が違つた！」パトリスは更らに足した。「だから私たちは、彼に御禮を言ふことも出来ない、又私の知りたい歴史に就て質問することも、貴女に迫つた危険に就て訊くことも出来ない、けれども、けれども……」

又落膽するには決まつて居るとは思つたが、パトリスはも

う一度計畫を進めて見ようと決心した。シメオンは、もと召使の溜りだつた離れ屋の一隅に寢室を持つて居た。その隣室は、二人の負傷兵の部屋に當てゝある。パトリスは寢室にシメオンを訪うた。

彼は、半ば眠りながら、庭を見下ろす椅子の上に居た。パイプを口にくはへたまゝ、ひとりでに煙ゆつて行くのに任せて居る。部屋は狭くて、家具も少かつたが明るくて掃除が行届いて居た。人の目にも立たず、此の老人の一生の大部分は此所で過ごされたのだ。シメオンが留守中、デマリオン氏は度々此の部屋を訪れた。パトリスもさうだつた。二人とも各違つた目的の立場から。

注目するに足るたつた一つの確見は、筆筒の向ふ側の白い壁紙に描いてあつたおぼつかない鉛筆の圖形だつた。三つの線が相交して、大きな等邊三角形を現はして居る。此の幾何學的な作圖の中央に、金箔で次のやうな言葉が記されてあつた。

『黄金三角。』

その他には何もない。デマリオン氏の捜査の進行させる上

に、手掛りとなるほどの物は微塵も無かつた。パトリスはつか／＼と老人の側に進んで行つて、肩を叩きながら、

『シメオン！』と云つた。

相手は、黄色の眼鏡を彼の方に向けた。眼鏡こそ、此の老爺の眼をさへぎつて、靈を見詰め、遠い記憶を見返す力を奪ふのだと考へて、パトリスは此の眼鏡を掴み取つてやりたい衝動を感じた。

シメオンは間の抜けた微笑を洩し始めた。

『成る程これが』とパトリスは思つた。『これが親父の友人であるのだな。此の男は、俺の親父を愛し、その希望を尊重し、親父の思ひ出に忠實ならんがために墓を建て、その前に祈つて誓つたのだ。それなのに、心は何處に逃げたのだ！』

さうした言葉も無駄だとはパトリスも悟つて居るのであつた。然し、老人のうつろの頭に、彼の隣が反響しよう筈はないにしても、眼だけは、記憶を呼ぶ感受性に強いとは、重々有りさうな話である。彼は白紙の上に次のやうな言葉を書いた。シメオンは幾度となく、その上を見詰めた。

『パトリスとコライイ、——千八百九十五年四月十四日。』
老人はその上を見た。頭を振つた。そして憂鬱な、間の抜けたクツ／＼笑ひを繰返した。

士官は更らに新しい一行を附加した。

『アルマン・ベルナル。』

老人は、同じ魯鈍さを表すばかりだつた。パトリスは試験を續ける。そして、エツサアレ・ベイとか、フアキイ大佐などの名も書いた。三角形も描いて見た。老人は諒解出来ないで、矢張りクツ／＼笑ひをやつて居た。

が、ふと其の笑ひの中の一つのあどけなさが失くなつた。パトリスが、悪黨一味の、ブウルネフと言ふ名を書いたのである。すると老秘書は、何か記憶に動かされたやうな容子をした。彼は立ち上らうとして、又もとの椅子の上に倒れた、やつと又立上ると、壁の釘から帽子を取つた。

部屋を出て行くのを、パトリスが追うて行くと、彼は邸を出て右に曲つた。アウチエユへ行く方向である。

催眠術に掛つて、何所とも知らぬ方向を指して行く昏睡の人のやうな歩き方で、彼は動いて行つた。ブウランザイリエ

の街に添つてセイヌ河を渡ると、グルネルの岸の方へ折れ曲り、悠然と行つた。

やがて本通りに出た時、彼は立止つて、腕をさし伸しながら、パトリスにその通りしろと合圖した。

二人は新聞賣場のかげにかくれた。彼は頭をまはした。パトリスも彼の動作に倣つてその通りをした。

向ふ側、此の本通りから、とある横町に曲る角に、カツフエがあつた。舗石道の一部分を取入れて鉢植えの灌木を以て往來と仕切つて居る。それらの鉢のかげに、四人の男が席をとつて、飲んで居た。其の中の三人はパトリスに背中を向けて坐つて居る。只一人が、こつちを向いて坐つて居る。然もそれが、ブウルネフである事は一目で判つた。

その時には、シメオンは、ズツと先きの方を歩いて居た、もう自分の役は済んだ、あとはお前に任かせて置くさ、と言つた風である。パトリスが見廻はすと、郵便局があつたので素早く飛び込んだ。デマリオン氏が、レイヌアール街に居るからである。氏に電話を掛けて、ブウルネフを見つけた事を告げた。直ぐ駆け付けると言ふ、デマリオン氏の返事であつ

た。

エツサアレ・メイの惨死以来のデマリオン氏の探査は、フアキイ大佐の部下四人に關する點にまでは手が届きかねた。成程、彼等はグレゴアールなる男の隠遁所と、例の寢室や壁戸棚は発見し得た。然し、見付けた時には空屋だつたのである。一味共は姿を晦まして居た。

『シメオン爺は』とパトリスは獨りで思つた。『一味共の習慣を知つて居たのだな。彼は屹度、彼奴共が一週の或る日を定めて、規定の時間に、此のカフェーで會合する習慣を持つてゐる事を知つてゐたのだ。そして、突然ブルネフと俺の書いた名前を見て、思ひ出した物と見える。』

數分間後、デマリオン氏は部下たちと自動車で馳せ付けて來て、飛び下りた。仕事は長く掛らなかつた。カツフェの表口が包圍されると、仲間共は何の抵抗もしなかつた。デマリオン氏はその中の三人を、嚴重な護衛のもとに留置場に送り、ブルネフ一人をカフェーの特別室に引張り込んだ。『一緒に來給へ』と彼はパトリスに言つた。二人で訊問しませう。』

パトリスは拒んだ。

『エツサアレ夫人は、邸で一人に成つて居ます。』

『一人？ いゝえ、君の部下が、みんな居るよ。』

『成る程、然し、もし貴方がお宜しかつたら、私は寧ろ引返して行く方が好いと思ひます。夫人を殘して來たのは初めてですし、それに、蟲の知らせもあるやうですから。』

『一寸、四五分間の手間ですよ。』とデマリオン氏は言ひ張つた。『逮捕されると、やけ糞半分に思ひ切つた事を言ひますからね。』

パトリスは彼に従つた。併し、ブルネフと言ふ男が、直ぐ參つて了ふたちで無いのはぢきに判つた。二人の脅しに向つても、たゞ肩を聳かしただけであつた。

『駄目ですよ』と彼は言つた。『私を脅しに掛けようたつてね。私は何も危い橋を渡つた覺えがありません。銃殺ですつて、さう仰言るんですか？ 莫迦な！ 此の佛蘭西ではね、餘り小つぽけな事で人間を殺すことは成らなくなつてゐるんです。そして私共は四人とも、中立國の臣民ですからね。訊問？ 宣告？ 入獄？ そんな事はない！ 貴方たち御自身で

事を暗黙に附してお了ひに成つた事を、お忘れです、それ、ムスタフアやフアキイや、エツサアレの惨死を黙殺なさつたのも、別に、何の合法的理由なしに事件を復活せしめるなどと云ふ目的で成された譯でもありません。いゝえ、私はとんと平氣ですよ。高が悪く行つた所で、軍事監禁所位の者ですからね。』

『ぢやア、拒絶するんだな？』とデマリオン氏が言つた。

『少しも！ 監禁を有難くお受けしますよ。が、軍事監禁所にしても、人間の取扱ひ方は數限りなくある。で、貴方の御肝入りで、どうぞ戦争が濟むまで、正當に心持ちよく取扱つて頂けるやう、お願ひしたいのですよ。が、それよりも先づ、貴方が私に就てどんな事を御存じなのですか？』

『何も彼も、大抵は知つてるよ。』

『それはお氣の毒な、では、私も思つた程でもないやうですな。先夜の、エツサアレの宅での行動を御存じですか？』

『知つてる。四百萬法の取引だらう。あの金はどうなつた？』

ブルネフは狂暴な身振りをした。

『私たちがから奪ひ取つた！ 盗み去つた！ 陥穿だつたのです！』

『誰が奪つた？』

『グレゴアールと言ふ奴です』

『グレゴアールつて何者だ？』

『この畜生のことは以前から知つては居ます。時々エツサアレの運轉手を勤めたのは、此の男だつてえ事も、嗅ぎ出ししました。』

『では、銀行から彼奴の邸へ金貨を搬入するのを助けたのも此の男なんだね』

『さうです、そして私共は又、想像、いや、こんな事も知つてるんです……此所が肝心なんです、貴方もこれだすは信じて好い、グレゴアールと言ふ奴は……女ですぜ！』

『女！』

『正にさうです、彼奴のお妾です。證據は澤山ある。が彼奴は頼むに足る才物でしてね、男のやうに強い、仲々物に動じない女です。』

『その女の住所を知つてるか』

「知りません」

「金貨に就てだが、何處にあるか、何の手掛りも持つて居ないかね、何の想像も？」

「持ちません。金貨はレイヌアール街の家か、庭の内かに在るのです。一週間と言ふもの、毎晩邸に運び入れるのを、私共は見つたのです。その後、外に出したのを見ません。毎夜私共は監視して居たのです。袋は邸内にあります。」

「エッサアレの殺害に就ても、手掛りはないかい？」

「ありません。」

「嘘は言ふまいね？」

「何のために私が嘘を言ふのです？」

「もし殺人の犯人が、君だつたら？……君たちの仲間だつたら？と思ふんだが」

「私共も、屹度さう晩まれて居ることだと思つて居ました。偶然で幸ひに、兇行當日、私共は現場に居なかつたものだから。」

「その證據が出せるか？」

「反證こそ學らないでせう。」

「その事はあとで調べて見よう。では、此の他に言ふ事はなにか？」

「有りません。然し、私に一つ考へがあります……と言ふより疑問ですが、これはお答へ下さらうと下さるまいと御勝手です。誰が私共の事を密告したのですか？ そのお答へに依つて、事件の解決の重要な鍵が得られるかも知れません。何故なら、私共が、毎週一日、四時から五時まで、此のカップエで會合するのを知つて居るのは、たつた一人の人間があるだけです。それを知つて居る、たつた一人の人間こそ、エッサアレ・ベイです。そして、エッサアレ自身も、度々此所に來て、私共と相談したものです。所が、エッサアレは死んで居る。では、誰がやつたのです？」

「シメオン爺だ。」

「ブルネフは仰天して叫んだ。」

「何ですつて！ シメオン！ シメオン・ディオドスキ？だ」

「さうだ、シメオン・ディオドスキ、エッサアレの秘書だ。」

「あれが！ おゝ！ この怨みを、彼奴に返へさすに置くのか！ 因業爺め……いや然し、シメオンが知つてゐる筈がをやつて、逃げさせたのも彼です。」

「ない。」

「知つてる筈がないとは、どう言ふ意味なんだ？」

「どう言ふ意味つて、それは……」

彼は黙つてしばらく考へ込んだ。疑ひもなく、言つた所で不利ではないと確めるためだつた。やがて途中で切つた言葉をつないで云つた。

「何故なら、シメオン爺は私たちの味方だつたんですから。」

「何を言ふ、お前は？」と、パトリスが叫んだ。今度は彼が吃驚りする番になつた。

「私は言ふんです、誓つて申します。シメオンは私たちの味方だつたのです。彼奴は私たちの部下です。エッサアレ・ベイの秘密の策戦を私たちに内通した者は、シメオンだつたのです。あの夜の九時に私共へ電話をかけて、エッサアレが古い温室の暖爐に火を入れて、烽火の信號をこれからやると知らせて呉れたのも彼奴です。私共のために門の戸を開けて呉れたのも彼奴です。そして彼奴は、私共に勿論、わざと手抗ふやうな振りをしながら、手足を縛らせたり、門番小屋に放り込ませたりしたのです。それから最後に、男の召使共に金

「でも、フアキイ大佐はシメオンに、敵同志のやうな言葉使ひをして居たではないか？」

「お芝居ですよ。エッサアレの眼を眩ますためですよ。お芝居の一とくさりですよ」

「だが、どうしてシメオンが、エッサアレにそんな裏切りをした？ たゞ金のためかい？」

「いや、憎悪からです。彼奴はエッサアレに對して、我々も何度となく戦慄したほどの憎悪心を持つて居ました」

「何が原因なのかね？」

「知りません。シメオンは無口の男でしてね。尤もズツと昔は非常に甲高な聲でしたが」

「あの男は金貨の隠匿所を知つて居たか知ら？」とデマリオン氏が訊いた。

「いえ、そして主人に裏切つたのも、金貨を探し出す目的ではなかつた！ どうして穴庫から袋を運び出したかも、彼は知らなかつたのです。穴庫は、たゞ一時的の隠匿所だつたのですからね。」

「それで、いつも袋は地下室から出て行く事になつてゐるのに、今度に限つて、それを見なかつたのは一體どうした譯かね……」

「今度は、私共も屋外を猫のいる隙もなく見張つて居たのですが、見えなかつた。シメオン一人では眼が届かないですからね」

パトリスが質問を發した。

「シメオンに就て、その他に知つてる事はないかい……」

「もう何も知つて居ません。あゝ！一寸お待ちなさい！もう一つ、ちよいと面白いお話があるんです、あの日の午後、或る特別な用事で、シメオンが私に手紙を呉れたのです。その同じ封筒に、他人に宛てた手紙が遺つて居ましたよ。これは明かに、どうかした拍子に間違つたものに違ひない。何故なら書いてある事が、非常に重大な事だったのです。」

「どんな事が書いてあつた？」と、パトリスは焦つて訊いた。

「始めから終ひまで、鍵の事が書いてありました」

「詳しく文面をおぼえて居ないかい？」

「手紙は有ります。シメオンに返へして、間違ひを警告してやるつもりで、棄てずに置いたのです。これは確かに彼の男の手ですよ……」

パトリスは、手帖を引き裂いた紙片を受取つた。そして、最初、彼の眼を射たものは、彼自身の名であつた。手紙は果して、彼に宛てたものであつた。

「パトリス殿。」

御身は今夕、一個の鍵を受取るべく候。鍵は、川岸に向ふ小徑の中ほどなる、二つの木戸を開くものにて候。木戸の一つ、右手に在るものは御身が愛する婦人の庭園に入るべく、左手に在るものは又、他の庭園に通ずる木戸にて、来る四月十四日午前九時を期して、予は此の庭園に於て御身と面談致したく心得居り候。彼女も亦立會ひ候ふべし。その節、御身は予の何人なるかを知り、予の期する目的のほども理解なさるべく候。お二人とも、むかしの事の數々を聴え上げ候へば、それにて尙一層

のわりなさを得られむこと必定と存じ候。

今宵始まる争闘は、来る十四日まで怖しき矛を互に收めまじく候。されば、もしそれまでに予が身の上に萬一の事有之候は、御身が愛する彼の婦人の安全保す可らず。パトリス殿、何とぞ彼女の上を御警衛專一になさるべく候。たとへ一刻たりとも、警衛の眼を許さば萬事休すべし候。されど、予は其の萬一の事に就て警戒を怠らす候へば、必ずしく、お二人の上に福音を齎らせ参らす可く候。此の福音こそ、御身たちのために予が限りなく久しき以前より、調度を急ぎ居り候ものに御座候。終りに、最高の愛を御身の上に捧げ候。

「署名がない」とブウルネフが言つた。「が、くだいやうですが、これはシメオンの字ですよ。此所に書いてある婦人と云ふのは、確かにエツサアレ夫人の事です。」

「だが、どんな危険でも彼女の安全が期し難いのか？」とパトリスは不安げに叫んだ。「エツサアレが死んだ以上は、何にも怖れるものは無い筈だが」

「私はさうは思はない。エツサアレには、何か殺す仕掛けがあるかも知れません」

「誰に復讐を遺言するのだらう？ 誰が彼奴の仕事を繼承すると云ふのだ？」

「私は知りません。併し、不思議なことですね」

パトリスは、これ以上何も聞きたいとは思はなかつた。手紙をデマリオンの手に押し付けると何も聞く氣がなく其所を遁れ出た。

「レイヌアール街へ。出来るだけ早く」と辻自動車に飛び乗るが早い、彼は命じた。

早く歸り付きたさで、彼はいらくした。老シメオンが言つた危険が、突然、コラライに手を掛けたやうな氣がした。

既に敵はパトリスの留守を機として、戀人を襲つて居るかも知れないのだ。そして、誰が彼女を助ける事が出来るか？

「もし予が身の上に、萬一の事も有之候はば」とシメオンが言つて居るのだ。そして、その萬一のこと、半ば實現されて居る。即ちシメオンの頭が狂つて了つた。

「いや、はや」とパトリスは呟いた。「これは根も葉もない事

だ……幻想だ……何の理由もない……」

だが、彼の精神的苦痛は刻々に増して来る一方だった。ひそかに思へば、老シメオンがあの警告的の手紙を書いたのは、まだ全然、意識の確かな時だった。又思ふ、鍵が、コラリイの扉木戸を開ける事を、わざと老シメオンが知らせて来たのは、彼、パトリスがいつでも必要な時に入出し得て、効果ある警衛をするやうにさせるためでは無いか。

彼は、前方を行くシメオンの背後を認めた。もう日は次第に暮れて居た。老人は家路を辿つて居るのであつた。パトリスが彼を追ひ超したのは、丁度、門番小屋の傍で、老人は鼻歌などを唸つて居た。

パトリスは立番の兵隊に訊いた。

「別に變つた事はないか？」

「有りません」

「小母さまのコラリイは？」

「庭を散歩して、三十分ほど前に二階にお歸りでありました」

「ヤ・ボンとは？」

「ヤ・ボンは、コラリイさんに伴つて二階に行つたのであります。コラリイさんの部屋の、扉口の前に居る筈であります」

パトリスは、非常に安心して、二階に上つて行つた。だが、階段を上りきつた時、電燈が消えて居るので、ハットした。スキツチをひねると、彼は見た。廊下の端に、コラリイの部屋の前に、ヤ・ボンが頭を壁に凭れさせながら、膝まづいて居る。部屋の扉は開かれて居た。

「其所で何をしてるんだ？」彼は怒鳴りながら走り寄つた。

ヤ・ボンは答へを發しなかつた。見ると、彼の上衣の肩に血が流れて居る。瞬間、セネガアレ兵はぐたくと床の上に倒れた。

「大變だ！ 負傷してる！ 死んだか！」

彼はヤ・ボンの上を飛び越えて、部屋の中に入ると、直ぐ電線のスキツチを捻つた。

コラリイは、長椅子の上で手足を伸ばし切つて倒れて居た。頸のまはりに、あの怖い赤い絹紐が絡み付いて居る。然もまだ、パトリスは、我々が取返しに付かぬ災厄に出會つた時

感じる、あの氣も顛倒するやうな絶望を味はなかつた。まだコラリイの顔は、痛ましい死相を浮べては居ないやうに見えるたのである。ほんとに、彼女はまだ呼吸して居る。

「死んでは居ない……死んでは居ない」パトリスは自分自身に言い聞かせた。「死にかけて居るのでもない。確かだぞ……ヤ・ボンだつて死んでは居ない……攻撃は失敗だつたぞ」

彼は紐をゆるめてやつた。

二三秒後、コラリイは重々しい吐息を吐いて、意識を恢復した。彼を見てニツコリ、笑つた。

が、忽ち思ひ出して、まだそんなにも弱々しい腕を投げ、彼の身に縋り付いた。

「お、パトリス」ふるふるで彼女が云つた。「びつくりしましたわ……びつくりしましたわ、貴方のために！」

「何を吃驚りしたの、コラリイさん！ 誰です、貴方を吃驚りさせた畜生は？」

「誰でしたか、見ませんでしたの……いきなり灯を消して、妾の喉首を掴むと、斯う囁いたので「貴様をさきに……今度には貴様の戀人を殺す番だ！」つて……お、パトリスさ

ん。貴方がお殺されなすつたらと思つて……妾、びつくりしましたわ！……」

危地へ

パトリスは爲すべき事を、咄嗟のうちに決心した。彼はコラリイを抱き上げて、彼女の寢臺の上に寝せつけて、身動きもせず、叫び聲も立てないやうに頼んでおいた。それから、ヤ・ボンの傷が、さして深手でないのを確めた。最後に、彼は激しく鈴を鳴らした。彼が、家中の所々に設らへておいた柱の鈴が、一度に鳴り響き渡つた。

人々は大きく走り付けた。彼は言つた。

「貴様たち、大莫迦者共が！ 誰が居つたのだ。小母さまのコラリイとヤ・ボンは、もちつとで殺される所だつたぞ……」

彼らは聲高く反抗した。

「黙れ！」と彼は命令した。「貴様たちは、みんなで、隠れん坊でもするが好い。たつた一つの條件で、俺は許してやら

う。その條件は斯うだ、今夜中、小母さまのコラリイは死んだと言ひ觸らす事だ」

すると一人が抗議した。

「ですが、誰にそんな話をするのでありますか？ 此所には話さうにも相手がありません」

「なに、居るぢやないか、莫迦者共。小母さまのコラリイと、ヤ・ボンが攻撃を受けた以上、誰かゝ居る筈ぢやないか。もし攻撃したものが、お前たちの中の一人でなかつたらね？……違ふかい？……さうだらうともね……ぢや、もう冗談は止しにしよう。他人に話すと云ふのは問題ぢやない、お前たちお互ひに話し合ふのが主眼だ……それよりも、心でさう思ふことだ、口に出さずにね。何處かに、お前たちの言ふ事を、ヂツと聴耳立て、居る者がある。探偵して居る者がある。お前たちの言ふことを聴き、言はない事を想像する者が居る。それで、コラリイも、明日までは、部屋から出ないやうにする。お前たちも亦、順々に彼女を警護しなくちやならない。警護の順番でないものは、夕食が済むと直ぐ寢室に退くことだ。家の中を動きまはらないこと。分つたかい？ 絶

對の沈黙と静寂だ」

「で、シメオン爺は？」

「彼奴の居る部屋から、目を放さないことだ。何しろ氣が狂つてゐるから、危険極まる奴だ。彼奴共は彼奴の氣が狂つてゐるのを利用して、入つて来る扉を開かせるのかも知れない。監視して置け！」

パトリスの此計畫は、單純である。敵の奴は、コラリイが瀕死だと信じて、彼女に、パトリスをも殺すつもりで居ると言ふ計畫を打明けたのだ。して見ると、敵は自分の策を察知したり、自分を警戒したりする者なしに、自由に行動が採れる者のやうに自惚れて居るに違ひない。だから敵は自ら渦中に投じ来り、自ら穿に掛るものに違ひない。渾身の力をこめ争闘に應じる前に、先づパトリスはヤ・ボンの負傷を調べて、ほんの輕傷であるのを確め、コラリイと同様に彼にも、色々と質す所があつた。彼らの答へは、一々符合した。それに依るとコラリイは、少しばかり疲勞をおぼえて、横になつたまま、何か讀んで居た。ヤ・ボンは、廊下の、開かれた扉の前の床に、アラビヤ

型に跨つて居た。誰も怪しい物音らしい物は聴かなかつた。と、突然ヤ・ボンは自分と灯かけとの間、廊下の上へ一個の人影を認めた。此の灯かけは、電燈から洩れるものだつたが、寢室の燈火が消えると正に同時に消えてしまつた。ヤ・ボンは、半ば立上りかけた瞬間、背ろから頸根を、イヤと言ふほど打たれて、そのまま昏倒した。コラリイも、自分の私室から通れようとしたが、扉が開かない。キヤツと叫び出した時、急に掴まへられて、その場に倒されてしまつた。これらはすべて、只の數秒間のうちに起つた事だつた。これが二人の符合する答へである。

たゞ、それに依つてパトリスが捉へた暗示は、兇漢は階段からは來ない、女中部屋から忍び込んだのに違ひない、と言ふことだつた。女中部屋には、女中部屋だけの、小さな階段があつて、料理器具室を通つて、臺所に通じて居る、これが、レイヌアール街から、商人の出入する勝手口になつて居るのだつた。

これは往來に面した扉であつて、パトリスが見ると鍵が掛けてあつた。けれども、誰かゝ、その鍵を容易く手に入れる

事が出来たものに違ひない。

夕ぐれ、パトリスは漸くコラリイの容子を見に這入つて來た。それから、九時に、自分の寢室に退いた。これは、コラリイの部屋から少し低めの所で、同じ側にある一室であつた。エツサアレ・ベイの生きて居る時は、彼の喫煙室になつて居たものである。

それほど強い効果のある攻撃は、まさか夜中以前に來やう筈はなかつたので、パトリスは壁際の寫事机の前に坐りながら、日記帳を取出した。最近の事件を詳細に書き留めて居る日記帳である。彼は三十分もかゝつて書き終つて、帳面を閉ぢようとした、その時だ、彼はもし神経が極度の緊張状態に居なかつたら、とても聴き取り得なかつたらう程の、いと微かな摩擦音を聴いたやうな氣がした。そして、先日コラリイと一緒に射撃された日のことを思ひ出した。

併し今は窓の扉は明け放しても、又半開きにも成つて居ない。で、彼は又、顧みもしないで書きつけて行つた。そし

て、今注意力を喚起して居るのを氣取られるやうな動作は、何もしなかつた。殆ど無意識に、彼は自分の焦心して居る行動に就て書き終つた。

「彼奴が来て居る。俺を見守つて居る。何をしようとするのか、不思議だ。窓硝子を砕いて、俺を射撃する氣かも知れぬ。彼奴は前にも一度それを試みて、不確實で不成功な方法だと知つて居る筈だ。いや、彼奴の目的は、もつと違つた、もつと悋口な考へでなくちや見付け出せんぞ。彼奴は、それよりも、俺の就寝を待つて居るらしいな。眠つたのを見済まして忍び込まうと言ふのだ、忍び込む方法は俺にも分らないが。『とは言ふものゝ、彼奴の目が、今現在俺を見詰めて居るんだと思ふと、素晴らしく面白いわい。彼奴は俺を憎悪して居る。その憎悪がだん／＼と俺の憎悪に近寄つて来る。まるで、一つの劍が相手の劍と、丁々、火花を散らす前に互に近寄つて行くやうだ。闇中に身を潜めて、何所に牙を當てゝやらうかと、獲物を狙ふ野獸のやうに、俺を狙つて居る。いや然し、獲物は俺ではない、彼奴だ。彼奴こそ敗北と破滅の運命に臨んで居る。小刀を磨ぎ、赤紐を伸して居るが好い。争鬭の幕

を閉ぢるものは、俺の此の両手だ。強くそして力に溢れた此の手は既に凱歌を唱つて居る、必ず勝つ此の手……」

パトリスは机の抽斗を閉めた。そして、就寝前のいつもの習慣で巻煙草に火を點け、靜かに燻らせた。それから衣服を脱ぎ、それを丁寧にたゝんで、椅子の凭れに掛け、時計を巻いて、寢臺の中にもぐり込んだ。そして灯りを消す。

「たうとう」と彼は獨語した。『今に眞相が分るだらう。彼奴が誰であるかも知分る。誰か、エツサアレの友人が、彼の爲事を引繼いでやつてるのかも知れぬ。だが、どうして斯うコラリイを憎悪するのか？ 俺をも一緒に殺さうとしてゐる所を見ると、彼女に惚れてゐるのかな？ 今に分る……直ぐ分る……』

とは言へ、一時間、二時間と時は経つて行つた。が、その間、窓の方からは何事も起つて來なかつた。只一度、机のそばの邊から、軋きするやうな音が聽えた。が、これは言ふまでもなく、我々が能く靜かな眞夜中に聽く、家具の軋めきであらう。

パトリスは、そんなにも鼓舞された希望をゆるめかけた。結局、コラリイの死と言ふ、丹念に作り上げた嘘も何の役にも立たないらしい。そして敵の奴、そんな事で穿に陥るなどは、眞平と位思つてゐるに違ひない。寧ろ消え入るやうな思ひで、彼はうつら／＼と眠りかけた。と、その時、さつきと同じ位置に當つて、同じ軋めきの音を聽いた。

やつ付けろ、と彼は飛び起きた。灯を點けた。すべての状態が、就寝前と同じ事である。何一つ、怪しい事の起つた跡はない。

「宜し」とパトリスは言つた。『確かに俺が不可なかつたのだ。敵は鼠の臭ひを嗅いで、俺の置いた穿を感付いた。眠らう。今夜は何事もないぞ』

實際、その夜は何の騒ぎもなかつた。次の朝、窓を調べてると、敷地の上方に石の出張りが付いてあつて、それが庭の全面に傍つて家を繞つて居るのが目に付いた。此の出張りは、露臺や雨樋に觸ると、人間がその上を歩く事も出来るほどの廣さであつた。彼は、石の出張りが、連絡する限りの、あらゆる部屋を調

べて見た。その中に、シメオンの部屋はなかつた。

「彼奴は多分、一步も出歩きはしなかつたらうな？」と、彼はシメオン警衛に當つてゐる二人の兵隊に訊いた。

「出なかつたと思ひます。どんな事があつても、扉の鍵は外しませんでしたから」

パトリスは中に這入つて行つたが、まだ冷たくなつてゐる煙管を、口から放さない老爺の方は見向きもせず、部屋の中を探査した、敵は必ず此の部屋の中に隠れてゐると言ふ見込みからだつた。

誰もゐなかつた。彼が発見した物は、壁の押入の中にあつた色々の物だけであつた。これは、デマリオン氏の部下の調査の際には見付からなかつた物である。色々の物とは、鋼梯子と、鉛管の一卷と、勿論これは瓦斯管だ、その他、半田著けの小ランプとである。

『みんな碌でもない屑物だ』と彼は獨語した。『こんな物が、どうして此所に舞ひ込んだのだらう？ シメオンが、別にこれと言ふ目的もなしに、機械的に寄せ集めたものか知ら？ それともシメオンは、單に敵の奴にあやつられる手先きに過

ぎない、と考へるべきだらうか？ 彼は正氣でゐた時は、敵をチャンと知つてゐた。で、今でも、その影響を受けて居るのかも知れない」

シメオンは室内に背を向けて、窓際に立つてゐた。パトリスはその側に行つて吃驚りした。老人は黒と白の玉で出来た、佛供用の花を持つてゐた。それには日附けが付けてある。「千九百十五年、四月十四日」と。そしてこれが、シメオンが亡き友人の墓の上に捧げる、第二十回目の花環であつた。

「此奴、墓に供へるつもりだな」とパトリスは聲に出して言つた。報復の友としての本能、それが此の男の生涯の方向を導いて行つたのだ。そして、氣違ひになつても、やはりその本能は残つて居る。墓に手向けるのだらう。さうだらう、シメオン。違ふかい、明日手向けるのだね？ 何故つて、明日こそ、四月十四日だ、祥月命日だ……」

彼は正體を失つた人間の上に、凭れ掛つた。此の男こそ、あらゆる計畫、あらゆる對抗策を知つて居る。解き難き謎のドラマを組立てる、あらゆる叛逆と善行とを知る鍵を握つて

咄嗟のうちに、心中二つの思想のつながりを結び付けながら言つた。

「左様。どうして、そんな事を言ふ？」
「何でもありません……一寸いま思ひ出した事があるんですが……」

彼はもちつとの事で、四月十四日に關係した事實のすべてと、老シメオンの不思議な人柄に就てのすべてとを、デマリオン氏に打明けようとした。言はなかつたのは、別にこれと言ふ理由もない、が多分、此の際事件は彼獨力でやつて退けたいのと、又恐らくは、デマリオン氏に、過去の秘密を一切さらけ出すのも恥しいやうな氣持ちがしたのと、此の二つの理由からだつたらう。彼は何も言はなかつた。そこで訊いた。

「此の手紙に就て、どう考へます？」
「正直な話、どう考へて好いか判らない。何かを助長するための警告かも知れない。我々の探査作業の方向を、一方から他方に轉せしめる奇策かも知れない。ブルルネフに話して見ようと思ふのです」

居るのだ。シメオンはパトリスに花環を取られると思つたか、我が胸にそれをヒシと押し付け吃驚りした容子を見せた。

「心配するな。」とパトリスが言つた。「取りはしないよ。明日だ、シメオン、明日だ、コラリーと俺とは、お前の示して呉れた約束を固く守るよ。で明日こそ、多分昔の怖い記憶は、お前の胸中に蘇るだらう」

その日は、パトリスには長い一日だつた。彼は、八方暗黒のうちに、一道の光明を投じる何物かを待つ心に堪へなかつたのである。で、今やその光明は、四月十四日の第二十回忌の到着と共に點ぜられんとする。

午後の日もかける頃、デマリオン氏が、レイヌアール街に訪れて來た。

「たつた今、僕が受取つた物を見給へ」と彼はパトリスに言つた。「これは一寸奇妙だ。偽筆の匿名の手紙なのだ。讀むよ、拜啓、御存じの、金貨流出の件につき御警戒ありたし。明日、佛蘭西の友人より」
「そして明日とは四月十四日のことですね」とパトリスは、

「ブルルネフの方には、變つたことはありませんか？」

「無い。また、別に變つた事が起らうとも豫期しません。當時、犯罪地以外に居たと言ふ、あの男の陳述はほんたつた。彼奴や彼奴の仲間、臨時雇ひの役者で、もう出る幕は濟んだのだ」

話して居るうちに、日附の合致と言ふことばかりが、パトリスの心を騒がせて居た。

デマリオン氏と彼とが別々に辿つて居た二つの道は、あんなに長い間色々のちがつた宿命に分れて居たものが、今突然出逢つた譯だつた。過去と現世とが將に結び付けられやうとする、大詰の幕切れは手近まで來た。四月十四日といふ日は金貨が國外に消え去る日であると同時に、怪しの聲の招きに從つてパトリスとコラリーとが、二十年前、二人の父と母とが相逢うた同じ逢引の場所へ赴く日でもある。

そして翌日、それは四月の十四日であつた。
朝の九時、パトリスは、老シメオンの容子を訊いた。
「出て行きましたよ。貴方が命令をお取消しになりましたから」

パトリスは部屋の中に這入った。珠数の花環を探したが其所には無かつた。そればかりか、他に戸棚の中の三つの物、細梯子も、鉛管の一卷も、硝子のランプも、其所には無くなつて居た。

彼は訊いた。

「シメオンは、何か持つて出たかい？」

「はア、珠数の花環を」

「その他には何も？」

「いゝえ、大尉殿」

窓を開けて見た。三つの物は此所から外に運び出されたのだ、パトリスは、老爺が共謀者であるといふ假説から、さう結論を付けた。

十時少し前に、コラリイは庭でパトリスと落ち合った。パトリスは、最近の出来ごとを彼女に話して聞かせた。彼女は蒼ざめ、心配さうな顔をした。

二人は芝生の上を、人に知られぬやうに歩きまはつて、背の低い灌木のしげみで隠れた小徑の木戸まで来た。パトリスがその木戸を開けた。

もう一つの戸を開けようとした時、ふと彼は躊躇した。デマリオン氏に話さなかつたこと、今斯うして自分とコラリイとが、或る暗示に依つて危険だと豫告された巡禮を、たつた二人でして居ること、それが悲しく感じられたのであつた。だが、そんな悪夢は拂ひ落とした。二つの拳銃を持つて来て居る。何を怖れることがあらう？

「這入つて見なさい？ コラリイさん」

「えゝ」と彼女は答へた。

「何だか、躊躇してゐるやうに思はれるが、心配なの？」

「……」

「それはさうですわ」と若い女は言つた。「何だか空怖しくて」

「何故？ 怖いのか？」

「いゝえ。けど、矢張りさうか知ら。今日は怖くないのですけど、何となく昔がね、妻は氣の毒な阿母さんのことを思つてますの。阿母さんも矢張り、妻が今して居るやうに、或る年の四月の朝、此の木戸を通つて行つたのですわね。阿母さんはまるで幸福でしたのね、戀人に逢ひに行つたのですもの。」

……そして今、妻は、その阿母さんを抱き止めて、斯う叫び出した。いやな氣がしますの、「這つて行かないで下さい……行けば屹度殺されます……這入つて行かないで下さい……」と今叫び出したのです。そして、その怖れに震へた聲を聴く者が妻なんですわ。その聲が耳の中で鳴り渡ります。その聲を聴く者は妻です、そして、中に這入つて行くことが出来ません。怖いのです」

「ちやア、引返さう。コラリイさん」

彼女は只彼の腕を掴んだだけであつた。

「いゝえ」と彼女はキツパリ言つた。「歩きつゞけませう。妻、祈りたい。そして氣持も沈まるでせうから」

勇を鼓して、彼女は曾て母親がたどつた小路を進んで行つた。そして、もつれた雑草と、入亂れた枝をくゞつて、斜面をのぼつた。二人はやがて左手に離小舎を見ながら、自分たちの親を埋めた庵の前に出た。そして直ぐ、先づ眼についたのが、あの第二十回目の花環であつた。

「シメオンはもう来て居る」とパトリスが言つた。「どんな事でも自然にさせる本能が、彼を此所に導いたのだ、まだ此の

邊に居る筈だ」

コラリイが墓石の側らに膝まつた時、一方パトリスは、庭の周りの八方を捜しまはつて、庭の真中まで来た。もう捜す所とは、小舎まで行く他はない。だが、それは明らかに彼等がまだ演じ残して居る怖い行動である。怖しさからでなくとも、少くとも死と犯罪の場所に入らうとする人間を抱き止める、あの嚴肅なる恐怖から、演じ残して居るものに違ひない。

その行動を探らうとする合圖を示したものは、今度も矢張りコラリイであつた。

「いらつしやい」と彼女は云つた。

どうして離小舎の中に入つて入つて好いか、すべての入口が閉ざされて居るやうに見えたため、パトリスには判らなかつた。が、近付いて見ると、庭に面した裏口が、大きく開いて居た。だから、直ぐ、中でシメオンが二人を待つて居るのだと思つた。

離小舎の入口をくゞつた時は、正に十時であつた。片側は臺所に通じる小さな部屋で、片側が寢室になつて居る。問題

の部屋はその向う側になければならない。戸が開け放してある。おどろとした囁きで、コラリーが言った。

『あの部屋が、事の起つた部屋に違ひありません……ズツと昔に』

『さうだ。あそこにシメオンが居るでせう。然し、コラリーさん、もし怖くて厭なら、止しても好いんですよ』

決然たる意志の力が彼女を支へた。どんな事があらうとも、もう彼女を止まらせる事は出来ない。

彼女は歩みをつづけた。

部屋は大きかつたが、家具の置き工合で頗る居心地の好い印象を與へた。長椅子、安樂椅子、敷物掛物、すべてが氣持ち好さを添へるものである。そして、いつも此處を使つて居たあの二人の、悲劇的な死があつた日以来、何の變化もなく保存されて居るやうに見えた。部屋の様子はやや書室に似て居る。それも、天井の眞中の天窗に、空の光が満ち溢れて居るからであつた。その光は此所まで落ちて来て居る。ほかに、窓が二つあつた。が、二つとも窓掛で蔽はれて居た。『シメオンは此所にも居ない』パトリスは言った。

コラリーは答へなかつた。家具といふ家具から喚び起こされる情緒に浸りながら、彼女は八方を見まはすのである。澤山の書物が置いてあつた。だが、みんな前世紀に屬するものばかりであつた。中には、青や黄の包み紙の上に鉛筆で『コラリー』と記されたものもある。半ば出来上つた刺繻の裂れや裁縫用の桿や、羊毛の糸をつけた針がまだぶらさがつて居る壁布の裂れなどもあつた。そしてパトリスと署名した本もあつて、その上に、葉巻箱と、吸取紙の臺と、インキ壺とペン軸とがあつた。それから、小さな額に挟んだ肖像畫がある。

それが二人の子供、パトリスとコラリーの肖像であつた。斯うして、遠い昔の生活は今もなほ流れて止まぬのである。互に激しく急速な熱情を以て相愛した戀人二人の生活のみならず、靜かに偕白髪までの行末を疑はずに此所に住み馴れた二つの存在の生活も。

『お、妾のなつかしの、なつかしの阿母様！』コラリーは囁いた。

記念を新しく見るごとに、彼女の感動は昂つて行く。そして、パトリスの肩に、おのゝきなながら凭れ掛つた。

『出よう』と彼が言った。

『さうね、貴方、出て行く方が好いんですわ。又もう一度來ることも出来るのですから……何度も阿母さんたちに逢ひに來ることが出来るのです……妾たちは、あの方たちが見残した戀の夢を、今に返へして見るのですわね。今日はこれで歸りませう。もう妾には何の力もありません』

だが、二三歩行つたばかりで、彼等はハツとして立止つた。

扉が開つて居る。

二人の目は逢つた、不安に溢れながら、

『入る時、締めはしなかつたね？ 閉めたか知ら？』と彼が訊いた。

『いゝえ、閉めませんわ』

彼は開けようとしたが、扉には何の把手も鍵穴もないのに氣が付いた。

單なる一枚の扉で、部厚な材木が、如何にも固くて實質的に見えた。たしかに、非常に固い櫛の一枚板で出来て居るらしい。ペンキも假漆も塗つてなかつた。昔、誰かが、何か道

具を以て引掻いたものらしく、所々に擦傷が付いて居た。

そして、……そして、……右の方を見よ、次のやうな數箇の文字が鉛筆で記されてある。

『パトリスとコラリー……千八百九十五年四月十四日。神は我らのために復讐をなし給はん』

これらの文字の下に、十字架が一つ描いてあつて、その十字架の下に、又、他の日付けが記されてある。だが今度は違つた手蹟で、そしてもつと眞新しい書き振りで、

『千九百十五年四月十四日』

『千九百十五年……千九百十五年……』とパトリスは叫んだ。これは大變だ。今日の日附けだ！ 誰が書いたのだ？ たつた今書いたばかりの字だ。お、怖しい！ おいで、おいで、何にしても、とても、此處には……』

彼は窓の一つに走り寄つて、おほひの窓掛を跳ねのけると、格子を引開けた。アツと彼は叫んだ。窓は壁で蓋をされて居た。硝子と鐵戸の間を石で埋めて、蓋されて了つて居る

のであつた。

もう一つの方の窓にも突進して行つたが、矢張り同じ障壁を發見しただけであつた。

二つの扉があつた。一つは右手、多分寢室に通じてるのであらう、もう一つは左手、臺所の隣室に臨むものらしい。

彼は手早くそれを開けた。

が、扉口は両方とも、壁でふさがれて居る。

あらゆる方向に、彼は走つた。それは恐怖がまだ最初のうちのことであつた。次に、彼は三つのうちの第一の扉に飛び掛つて、打ち破らうと焦つた。

扉は動かなかつた。さながら不動の盤石かと思はれた。

そこで、もう一度、二人は恐怖にみちた目を見合せた。そして、同じ怖しい考へが、お互の心を満たした。昔起つた通りの物事が、再び此所に繰返へされんとする！

悲劇は第二回目の演出に移らうとするのだ。父と、母とのそのあとに、

これは今、息子と娘との順番である。昨日の戀の一對の如く、今日の一對も亦封じ込められた。敵の力強き掌中に落ちて、さうして疑ひもなく、今將に彼等は、彼等自身が如何にして

死ぬるかを目のあたりに見ることに依つて、彼等の父母が如何に死んだかを知るのであらう……千八百九十五年四月十四日……而して千九百十五年四月十四日……

リユパンの勝利

黄金三角

後篇

恐怖

『あゝ！ なに糞！』とパトリスは叫んだ。『こんな事、何でもない！』

彼は身を以て窓や扉口に突當つた。暖爐の薪臺を引外して、戸板や石壁を撲りまはした。甲斐ない努力！ 曾て彼の父が甲斐なく試みて、戸板や石壁の上に徒らな掻き傷を残したのと同じ絶望的な努力であつた。

『あゝ！ コラリイさん、コラリイさん』とパトリスは絶望的な叫びをあげた。『私が悪かつた。こんな穴の中へ連れ込んだのは私だつた！ だが、私ひとりで闘はうと思つたのが狂気の沙汰だつたのです。誰か、もつと賢い熟練した人の助力を乞はねばならなかつたのに……いや、その位の事は自分

でも出来ると思つたので……許して下さい、コラリイさん』
若い彼女は、肘掛椅子の中に埋もれるやうに坐つて居た……
……彼は膝まづきながら、その彼女を掻き抱いて許しを乞うた。

彼女は、につこりした。男を鎮めながら、やさしく口を開いた。

『まあ、あなた、そんなに力を落とさないで下さいませよ。きつと何かの思ひがちがひですわ……兎に角、ちよつとした間違ひから、斯うなつたと申す外はないのですもの！』

『あの日附けは！』と彼は云つた。『今年の日附けです、今日の日附けです、然も別の手蹟で書いてある！ 最初の日附けは私たちの阿父さんと阿母さんの手蹟だが……それなのに此方は、コラリイさん、最後の此日附けは、私たちが殺さうとする奴の長い計畫と執念を表はした手蹟ではないですか

「彼女がぎよつとした。それでも、まだ彼を願います望みを捨てないで、

「さうかも知れませんが。でも結局、そんな事、ないでせう。敵もある代りに、味方だつてありますもの……その方たちが、直ぐ探しに来て下さるわ……」

「探しに来て呉れるでせう、でも、どうして私たちの居どころが分るのです？ 私たちは行方を人に知らさぬやうに、あらゆる手段をとつただけだから。それに誰も、此の家を知らないのですからね」

「シメオン爺が知つてませう？」

「シメオンは来た、そして花環を捧げた。が、シメオンと一緒に、もう一人来た者がある、其奴がシメオンを操り、これまで散々諛らかして、自由自在に使つて居たのです」

「そして、それで、パトリスさん？」

彼女をそんなにも狼狽させたのを悟ると、彼も自身の意氣地なさを取直した。彼は云つた。「待ちませう。要する

『さアこれで』と彼は云つた。『落ちつきませう。どんな敵だつて、出て来次第に、打殺しますさ』

併し、過去の記憶が、力強い重みを以て二人の上をひしひしと壓迫して来た。現在只今、彼らが云ふ言葉、彼らが爲す動作は、曾つて在りし日の親たちが、同じ境遇の下に、同じ恐怖と、同じ思念を以て云つたこと、行つたことであつた。パトリスの父は、同じく拳銃を擬して待つたであらう。

コラリイの母は、亦同じく手をしぼつて祈念したであらう。どちらの二人も同じやうに、扉口を塞いだのだつた。どちらの二人も同じやうに、壁を叩き、敷物をめくつたのであつた。

何といふ悲惨であらう、同じ一つの悲惨を重ねて、昔を今に返へすとは！

恐怖觀念を拂ひ退けるために、昔、親たちが愛讀した小説、豆本の類を繰つて見た。頁の所々、章や巻の終りなどに、文字が書き入れている。それは、パトリスの父とコラリイの母とが取交はした手紙の文句であつた。

に攻撃が此所に届く筈はない、封じ込まれたからつて、必しも殺される證しではない。だが、どつちにしても、開けなければならぬでせう。さうでせう？ 信じて下さい、私には、まだ力もあれば思慮もある。待ちませう。コラリイさんは、働ませう。何よりも大切なのは、意外な方面から攻撃者が入つて来はしないか、何かそんな入口はないか、それを調べておく事です」

一時間も調べて見たが、これと云ふ入り口らしい物もなかつた。壁は、どこを叩いても同じ音を立てた。敷物もめくつて見たが、下は瓦張りである。その瓦板にも何ら變つた所は見えなかつた。

確かに、例の扉のほかに、何の出入口もないのが分つた。だが、その扉は外側へ引いて開くやうになつて居る。だから、外側から開けるのは、防ぎやうがない。それで、扉の前に、殆どある限りの家具を重ね、侵入者を防ぐ障壁の代りにした。

それからパトリスは拳銃を二挺、十分しらべたのち、手近に置いた。

(妾の愛するパトリスさま。昨日の生活を繰返へし、明日の日を夢みるために、今朝もまた、あたし此所に参りましたのよ。妾よりさきに此所へいらつしやるのでしたら、此の手紙をお読みになるでせう。愛すると云ふ妾の心をお読みになるでせう……)

また、ほかの本に、
(愛するコラリイよ。

たうとう行つちまつたね。明日までは逢へないのだ。二人の戀が澤山の樂しみを味つた此かくれ家を、私はもう一度あなたと話すことなしに立去る氣には、どうしてもなれないのだ)

斯うして、本の大部分は涉つて見たが、さし迫つて求める手掛りは何一つなく、たゞ昔の戀人同志の愛撫と情熱に出會ふだけであつた。

二時間餘りは、いつか過ぎた、刻々迫る危険の期待と苦惱の裡に。

「何も来ないらしい」とパトリスは云つた。何も来ない。それが何よりも怖い事だ。何故つて、何事もないと云ふのは、つまり私たちは牢獄に投げ込まれたも同様のものだから。もしさうだとすれば……」

パトリスが云ひかけてきた云はぬ結論は、コラリイに直ぐ分つた。二人が餓死する幻が二人の心を同時に脅し付けた。然し、パトリスは叫んだ。

「いや、いや、決して怖しがる事はない。なアに、我々の年頃では、餓死するまでにはだいたい日数が掛る。少くとも三日や四日は掛りますよ。それまでには、誰か助けて来て呉れます」

「どうしてとすの？」

「どうしてつて？ 我々の部下か、ヤ・ボンか・デマリオン氏か、誰か来ますよ。私たちが今晚になつて歸つて行かないとすると、みんな心配し出すからね」

「でも、さつきも御自身で仰言つたやありませんか、妾たちの居所は決して分るまいと」

「きつと探してあてますよ。何でもない事です。此家の庭とあ

なたの邸との間は、小路ひとすじ隔てて居るだけだし、私の今迄の行動は詳細に日記につけて机の抽斗の中に藏つてあります。ヤ・ボンが日記帳の在所を知つて居るから、デマリオン氏にきつと教へるでせう。それから……それから、そこにシメオンも居る。彼奴、どうしたんでせうね？ 彼奴が往つたり来たりするのに、みんなが氣附かぬ筈はない。彼奴から何かの糸口を引張り出さないでおくものですか？」

けれども、そのやうな言葉も、彼らを慰める力はなかつた。たとひ餓死しないにしても、敵は必、他の方法を考へ出すだらう。何とも手の出しやうがない、それが拷問の苦痛であつた。ふと起つた氣紛れに誘はれて、パトリスは氣持を變へながら、再び探索を始め出した。

まだ涉り残した本がある。一八九五年新刊の書物であつた。パトリスがそれを開けて見ると、二つの頁が隅の方を同様に折つたまゝになつて居た。その折目をかへして見ると、中に數行の文字が記してある。それは、彼に宛て、彼の父が書いた手紙だつた。

（パトリスよ、我が子よ。どんな機會からお前が此の覺え

書きを發見せぬものとも限らない。もしお前がこれを読んだなら、我々を惨殺した者の犯行が晦まされずに済むであらう。これを讀んだら、パトリスよ、我々の死がどうした死であるかを究めるために、二つの窓の中間の壁の上に記す真相を探し出して呉れ。これから私はそれを記しておかう。まだそれだけの時間はあるだらうから）

このやうに、昔の二人の犠牲者も亦、身に迫る悲劇を豫想したのでつた。パトリスの父とコラリイの母と、彼らも亦此部屋に來た瞬間、おちかゝる危難を悟つたのだつた。

壁の上にパトリスの父が、果してその計畫を實行して居るかどうか、今はそれを探して見るばかりである。

窓と窓との間には、他の部分同様に、假漆塗の羽目板張りが、一つの軒蛇腹まで、二メートルの高さで張つてある。軒蛇腹の上は、粗末な漆喰塗だつた。パトリスもコラリイも先刻から大して氣にも留めず知つて居た事だが、その窓の間の板張だけは、ほかと違つて色が新しい。パトリスは、暖爐の薪臺を壁の代りにして、軒蛇腹を壊し、最初の羽目板を持

上げて見た。

板はたやすく折れた。その裏側の漆喰壁の上には、數行の文字が書かれてある。

「シメオン爺がいつもやる手だ。最初壁の上に書いた上を、板や漆喰で隠して了つたのだな」

ほかの羽目板も順々に外して行くと、下から文字の全行が現はれて來た。鉛筆の走り書きで、時間が恐しく切迫して來たのがよく分る。

どんな感動を以て、パトリスはそれを讀んだであらう！ 死が身近かに手を伸して來る瞬間に、父はこれを書いたのだつた。書いて數時間の後には、もはや此世を去つて居たのである。それこそ、父の苦惱の墓標であつた、それこそ、彼を殺し、彼の愛人を殺した敵に對する呪咀の聲であつた。

低い聲で、彼は讀んだ。

（此所に書き残す所以は、悪漢の計畫を遂行せしめず、彼に報罰を免れしめぬためである。成程、コラリイと俺とは死ぬるであらう。然し、我々の死因を後の人に知らしめる

事なしには、俺は死なれないのだ。

(数日前、彼奴はコラリイに次のやうな事を云つた。

(貴様は俺の愛情をよくも踏み付け居つた。よし、殺してやるぞ、貴様と貴様の色男を殺してやるぞ。そして俺は殺人罪の嫌疑からは免れたいから、いかにも貴様たちが自殺したやうに世間をごまかす方法を探つてやる。用意はすつかり出来てる。覺悟して居ろよ、コラリイ!)と。

(實際、用意はすつかり出来て居た。彼奴は俺の顔は知らない。だが、コラリイが此所で俺と密會するのを知つたに違ひないのだ。それで、此小屋を、我々の墓場に擇んだのであらう。

(まだ、どういふ風にして殺されるのか分らない。だが、疑ひもなく、餓死させられるのであらう。此所に二人が封じ込まれてから四時間になる。我々は固く閉ざされた扉の中に居る。部厚な扉である。彼奴が夜のうちに取付けた物に相違ない。窓も他の戸口も、一切の出入口が、同じやうに石とセメントで塞がれてある。どうしたつて逃げ出せはしない。これから、どうなり行くのかも分らない)

現はれた文句は、それで終つて居る。パトリスは云つた。

「ごらん、コラリイ、阿父さんたちも、私たちの今と同じ立場に居たのだ。同じやうに餓死するのを怖れて居たのです。永い間、手を拱いて待つ苛責を豫知し、その苛責を紛らすために、せめてこんな事を書き付けたのでせう」

パトリスは、ちよつと言葉を切つて、素早く壁を調べながら「父は信じたのです——そして實際、信じた通りになつたのだが——殺人者もこんな書き物には決して気が付くまいと信じた。ごらん、窓と窓との間に、中間の壁をとほつて、一本の窓帷竿が渡してあるでせう。つまり、昔二つの窓に共通した大きな一枚の窓帷が垂れて、中間の壁をかくして居たに違ひないのです。阿父さんたちが死んだあとで、誰もその窓帷をめくる者がなかつた。それで、シメオンが発見するまでは、誰も壁の字を知らなかつたのです。用心ぶかいシメオンの事だから、発見すると直ぐ、その上を羽目板でかくし、窓

帷を捨て、新しく一枚の窓帷をあてがつておいた。だから、表面、怪しい點は少しもなくなつた譯でせう」

パトリスは再び板はづしの爲事をつゞけて行つた。すると、又もや數行の文句が出た。

(あゝ! 私ひとり苦しみ、私ひとりが死ぬるのだつたら! たゞの俺の怖れるのはコラリイをも一緒に死に誘つたことばかりだ。今彼女は氣を失ひ、昏倒して居る。包むに餘る恐怖に襲はれて居るのだ。あはれな、愛人よ! 俺は見る、あの優しい顔の上には、既に既に蒼白めた死の影がたゞよふのを。許して呉れ、許して呉れ、私の愛人!)

パトリスとコラリイは顔を見合はせた。彼らを惑亂させる同じ憂慮、同じ情愛に溢れ、そして、互ひに相手の苦痛を思ふ同じ自己没却に陥ちた。

パトリスは囁いた。「私が貴女を愛するの、父が貴女の阿母さんを愛したのと、すつかり同じ工合だ。私だつて、死ぬる事など怖れて居

ない。これまでだつて、何度、微笑して死に對したか分らない! だが、あなたの、あなたのために、私は心は苛まれて居る……」

彼は部屋中を歩きまはつた。が再び怒りが湧いて来た。

「私は必ず貴女を救はう、誓つて救ふ。もしその上に復讐してやれたら、どんなに愉快だらう。私たちにしたと同様な、ひどい目に會はせてやるのだ! コラリイ! 彼奴に殺された此部屋の中で、やつ付けてやる……此所で、あゝ! 憎悪の有りつたけを吐き出さずにおくものか!」

昔と状態の同じ争闘が起るのなら、成るべく有利なことを知つておかなければならぬ。さう思つて彼は再び羽目板をめぐつた。

然し、現れた文句は、たつた今、彼が叫んだと同じ復讐の誓に過ぎなかつた。

(コラリイ、報罰は必ず彼の上に来る。たとひ我々の手に掛らなくても、神明の力が下るだらう。いや、あのやうな外道の望みが協ふ筈がない。こんなに幸福と歡喜に浸つて

居る我々が、自殺したなど、信じる者があらうか。彼奴の
犯行は直ぐ判る。私は今刻々に、犯罪の動かすべからざる
證據を此處に彫り残して置くのだ)

「此の言葉! 此の言葉!」とパトリスは憤激して叫んだ。

「恐怖と悲痛の言葉。けれど、我々が助かる道を教へて呉れ
る言葉ではない。阿父さん、あなたのコラリイさんの娘を助
け出す方法を教へては下さらないのですか? あなたの場合
が不幸に終つても、せめて私の場合だけでも、阿父さん!
助けて下さい! 教へて下さい!」

けれども、父が答へるのは、哀訴と絶望の言葉だけであつ
た。

(誰が我々を救つて呉れる? 我々は生きながら此墓穴に
葬られ、脱出を封ぜられた刑臺にあるのだ。卓上には拳銃
がある。が、何になる。敵は攻撃して来ない。彼奴は攻撃
の時間を持つて居る、たゞ一人で殺し得るだけの時間を持
つて居る。愛するコラリイを救ふ者は誰だらう?)

闘だ……此の苦しい沈黙より、此の果しもない不安より、
寧ろ争闘の方が、どれだけ望ましい安心であることか!
(然り!……正に然り!……確かに物音が……もう一つ、
鶴嘴で誰か土を掘る音がする。誰か土を掘つて居る、
家の前ではない、右手の臺所の近くらしい)

パトリスは勇氣を二倍にした。コラリイも寄つて来て手
傳つた。今度は窓掛の隅の板が持ち上つたやうな氣がした。
そして文音が續くのである。

(やがて一時間、物音と静寂が交互につづく……土を掘る
音が止むと、何者か何らかの爲事に熱中するらしい静寂
がそのあとにつづくのである。

(しばらくすると、誰か控の部屋に入つて来た……たつた
一人である……疑ひもなく彼奴だ。我々は彼奴の足音を聽
きわけける……彼奴は足音を忍ばせもせずに歩いて居る……
やがて、臺所の方へ行つた。今まで通りに鶴嘴で叩く。だ
が今度は石の上をだ。ガラ／＼と硝子の壊れる音がした。

此の怖ろしい境遇にあつて、彼らは既に思はしい悲劇を感
得して居た。曾つて彼ら自身を、既に一度死んで来たもの、
やうに感じた。昔他の二人が感じた恐怖は、今又此の二人が
感じる恐怖でなければならなかつた。他の二人——彼らの父
と母が、逃れる術なくして陥ちたあの境遇と同じ境遇の下
に、同じ恐怖を感じるのであつた。彼らと、その父母と、同
じ懊惱の二つである。そして、第二の懊惱が今始まらうとす
るのであつた。

コラリイは、消え入るやうに、泣き出した。その涙を見
て、パトリスは胸が張裂けるやうだつた。そして、力をこめ
て羽目板に當つたけれど、棧に固められた板は、びくともし
なかつた。

でも、たうとう剥ぎ取つて、續きを讀んだ。

(誰だ? 庭の正面を誰か歩いて居るやうな氣がする。
窓を塞いだ石壁に耳を押しあて、聴くと、足音がする。そ
んな事があるか知ら? おゝ! もしさうだつたら! 争

(それから又、外へ出て行つた。と、家中をゆすぶるやう
な音がした。悪魔が、愈々計畫を實行するために餘儀なく
するやうに、家の上に攀ち登るらしい音が、ギシ／＼と家
を鳴らし始めた……)

パトリスは讀むのを止めて、あたりを見まはした。

二人は共に、耳を敏てた。彼は低い聲で云つた。

「お聴き……」

「え、え」と彼女が答へた。「聴えますわ……家の外で……
家の前で、庭の中で、足音が……」

彼も彼女も、互に一つの窓べに走り寄つた。窓は石壁で塞
がれたまゝ、戸は閉してない。二人は耳を敏てた。

確かに、人が歩いて居る。敵が接近して来る氣配は、却つ
て彼らにも、親たちが感じたと同様の安心を感じせしめた。

敵は家のぐるりを二度まはつた。だが、二人は、親たちと
違つて、その足音の主が誰であるかを知らなかつた。知らぬ
男か、でなければ誰かいつもの歩調を變へて歩くのか。
それから、暫くの間は何事もなく過ぎた。そして突然、ち

がつた音が響き出した。内心では既に豫想して居た音ながら、二人は流石に、氣も顛倒した。二十年前に、父が書き残した言葉を思ひ出して、パトリスは絶え入るやうに云つた。「鶴嘴で土を掘る音だ。」

さうだ、實にその通りであつた。誰か土を掘つて居る。家の前ではない、右手の臺所の近くである。

今、悲劇の呪はしい奇蹟が、再び昔の通りに展開されるのである。昔の通り單純に、然しながら不吉な繰返しでなければならぬ。何故なら、今日の悲劇は昔の演出の複製であり、昔豫告した殺人の豫告であり準備であるからである。

一時間はずきた。爲事は忙しくなつたりまた静かになつたりして續いた。墓を掘つて居るやうな氣持ち、墓堀りは決して急がない。時に休息し、時にまた爲事にかへる。パトリスとコラリーイは立ちつくして、手と手を握り、眼と眼を合はせながら、その音を聞いた。

「仕事を始め居つたな……」とパトリスが云つた。「ええ。ですけれど、何だか……」と彼女が答へた。「さうだ、コラリーイ。玄關へ入つて来たやうだな……あゝ！」

「さうだ、コラリーイ。玄關へ入つて来たやうだな……あゝ！」

りも規則正しくこまやかな、密計、然もそれは二十年の昔よりの連續である！

敵は家の中に歸つて来た。すると、扉口の下方に當つて、軽い摩擦音が起つた。戸板の折目の所へ丹念に何物かを塗り潰すやうな物音であつた。それが済むと、今度は二つの隣室のなかで、壁塗りの扉を叩くらしい亂暴な音がし、ついで、同じ音が、外の方、窓の石壁と鐵戸との間で起つた。そして遂に、屋根の上に移つた。

二人は眼をあげた。遂に今、終局が来た事を観念する時が来た。少くとも大詰の幕である。頭上の屋根は、天井の中央に當り、硝子張りの天窓が設けてあり、其所から此の部屋を明るくする只一すじの光線が落ちるのである。

胸にこびり付いて、絶えず二人を苦しめる一つの疑問がある。着々として、彼は何をなすのか？ 敵は天窓の所まで近づいて、顔を覗かせるであらうが、さうして遂に本性を知らしめるのだらうか？

屋根の上での仕事は、まだ長く續いた。足音は、屋根を葺く亜鉛板を踏み亂しながら、家の右方へ、次第に天窓の方へ

もう何も聴いて居る必要はない……記憶を辿るだけのことで……ね……（臺所の方へ行つた。今まで通りに鶴嘴で掘る。だが今度は石の上をだ……）と書いてあるでせう。では、その次ぎは……その次ぎは……おゝ！ コラリーイ。矢張り又、ガラ／＼と硝子の壊れる音が……」

遂に追想の通りである。悲しい現實に、錯雜し混合する過去の追想である。現在と過去とが合して一體となつた。敵が爲事を開始する瞬間に、彼らはその仕事の成行を先見し得るのであつた。

敵は又外に出て行つた。そして忽ち（家中をゆすぶるやうな音。悪魔が計畫を實行するために餘儀なくするやうに、家の上に攀ち登る音がした……）

そしてその次ぎは……その次ぎは……どうなるのだらう？ 彼らは、もはや壁の上の文字には聞かうとは思はなかつた。いや、恐らくさうするのも嫌になつたのだらう。暫くは彼ら

の一切の注意力が、見る事の出来ぬ行動の上に、そして、今はまだ不可解な、あの戸外で着々と進捗して居る仕事の上に集中された。それこそ、陰險な、不斷の努力、時計の刻みよ

近づいて行つた。

突然、此の天窓が、と云ふよりは天窓の一部分の、正方形の硝子板が、非常に軽々と持ち上げられた。と、一つの手が、その持ち上げた硝子板を、暫くの間少し開いたまゝで置

くための、支柱をつつ掛けた。

そして、敵は再び屋根を踏んで、下の方に降りて来た。一種裏切られたやうな氣持ちから、次に起るべき事を知りたい心が、猛烈に起つた。それ故、パトリスは最後の羽目板

をめくつて、餓えた者が最後の一片を貪るやうに文書の最後の數行を求めた。

その文書は、たつた今彼らの通過した刻々の事を、そのまま描寫する物に他ならなかつた。屋内への敵の再来、扉口の上や、壁張りの窓の上の摩擦音、屋上の物音、少し開いたままの天窓、あらゆる事が、同じ順序で書き並べてあつた。そして、此所までは、時間まで同じ區切りを取つて昔も行はれたのである。パトリスの父とコラリーイの母とは、同じ氣持ちを味つて居る。運命の同じ小路を辿りながら、同じ足どりを踏み、同じ終局に行きつかねばならないのだつた。

さうして、文句は續く。

（彼奴は登る……登る……屋根の上に、又も足音がする……天窓の方へ近づく……顔を覗かせるつもりか？……憎むべき顔を見せるだらうか？……）

「登つて来ますわ……登つて来ますわ」とコラリイはパトリスに身を寄せ付けながら、囁いた。敵の足音が、屋根板を踏み散らした。

「成程」とパトリスは云つた。「……昔の通りに、又のぼつて来たのです。プログラム通りに、ただ、昔と違つて、彼奴が何者かは分つて居ない。私たちは、誰だか知らないのです……私たちの両親は敵の名を知つて居たのに」
彼女が、昔自分の母親を殺した者の顔を、幻影に泛べて、全身を震はせた。そして訊いた。

「あの男ではないではないでせうか？」
「さうです。彼奴です……父が、あの男の名を壁に書いて居る」

レの手蹟で、こんな文句が書いてあつた。

（もしコラリイが一人だけ、上つて来るなら、彼女の命は助けてやる。十分間、考へる猶豫を與へてやらう。もし諾かなければ……）

「あゝ！」とパトリスは立上りながら、「よしその通りやらうと云ふんだな、そして、それらしい細梯子は……それらしい細梯子が、シメオン爺の部屋の押入れにあつたのを、見たつけ」

コラリイは、足音が天窓の近くでするので、上を見上げたまゝ眼を放さなかつた。頭上の足音は、ふと止んだ。パトリスもコラリイも、慄々その瞬間の來たことを疑はなかつた。今こそ、敵の顔を見るのだ、と感じながら……

そしてパトリスは、低く、囁れた聲で、
「誰？ 昔演ぜられた通りに、此の芝居の役をしこなせる者は、たつた三人しかない筈だ。そのうち、エツサアレと親父との二人は死んでしまつて居る。三人目のもう一人はシメオンだが、これは氣狂だ。氣狂でありながら、こんな仕組みを

パトリスは、文言の殆ど全部を現はさせた。

そして、半ば身を屈めるやうにしながら、それを指さして、
「ごらん……此の名をお讀みなさい……エツサアレ……見たの……？ これが、父が書残した最後の言葉だ……お讀みなさい、コラリイ」

（天窓が、更らに一層大きく開けられた……一本の手がそれを持上げたのだ……そして、我々は見た……彼奴は笑ひながら我々を見下ろした……あゝ！ 悪魔……エツサアレ……エツサアレ……）

（それから、天窓の開き口から、何物か降りて來た。そして、その何物かは、部屋の中央の我々の頭の邊まで降りて、空間にぶら下がつた……梯子だ……細梯子だ……（何の意味か、我々には分らなかつた……梯子は、我々の眼のさきに、ぶら／＼して居る……そして、遂に、我々は合點した……梯子の端に、一片の紙が、ピンで止めながら巻き付けてある……そして、その紙片の上には、エツサア

踏襲する事が出来るか知ら？ 然し、あのやうに正確に昔の通りの眞似が出来ると想像出来るか？ 違ふ……違ふ……他の人間だ、シメオンを手先に使つた奴が、まだ黒幕にかれて居るのに相違ない」
彼は、自分の腕の上に、コラリイの指のわなゝきを感じた。

「静かに。來てますわ……」
「違ふ……違ふ……」と彼が云つた。

「でも……妾、確かに……」
彼女は、手筈の調つた他の仕事を心待ちに待つた。果して、昔の通りに、天窓が更らに大きく開かれた……一本の手が持ち上げたのである。そして、突然、彼らは見た。彼らは見た。開いた天窓から、覗き込んだ顔を見た。

シメオン爺の顔である。
實際、その顔を見ても、別に驚かないで済んだ。此の數週間以來、この男が恰も好きな戯曲に登場する役者のやうに二人の生活の中に立入つて來たのを考へると、今日二人を拷問するのが、シメオン以外の者であらうとは、寧ろ信じられない

い。此男は、二六時中至る所で、神秘な不思議な役を勤めて居るのである。無意識な共謀か？ 盲目的な運命の力か？ どつちでも好い！ 彼は亂行し、無鐵砲に攻撃して、相手に防衛の道を與へぬ男である。

パトリスは口ごもつた。
「氣狂め……氣狂め……」

だが、コラリイは反對した。

「いゝえ、決して氣狂ぢやありません……氣の狂つてる筈がありませんもの」

彼女は震へた。とめどもなく、わな／＼と身を震はせた。

上から、あの男が二人を見下ろして居る。黄色の眼鏡にかくれて、その表情は憎悪か、歡びか分らなかつた。

「コラリイ」とパトリスは聲を低めて云つた。「……私のする通りにね……そつちへ……」

しづかに彼女を側らに押しやつた。彼女をつれて、肘掛椅子の方へ移らせると見せ掛けるのである。本心は、ほかにある。さう見せ掛けながら、机の方へ寄つて行き、拳銃を握むや否、直ぐ打つてやらうと云ふ考へだけであつた。

希望は長く續かなかつた。屋根の上では、再び音がし始めた。

それから、昔のやうに、今、生々と（そして彼等も實際昔そんな物を見た事があるやうな氣がした）昔の通りに（天窓の開口口から、何物か降りて來た。そして、その何物かは部屋の中央を、彼らの頭の邊まで降りて、空間にぶら下がつた……梯子だ……細梯子だ……そして、それはパトリスが會つてシメオン爺の押入の中で見たあの細梯子であつた。

昔の二人がしたやうに、彼らはそれを眺めた。昔と今と、嚴格に、さながら鎖で繋がれたやうに、一々相應して演じ出されるのを彼らは既に知つて居る。だから、彼らの目はいち早く、細梯子に必ずピンで留めてなければならぬ紙片を求めた。

紙片はあつた。ぐる／＼巻きになつた紙、黄いろに、乾からび、古びて居る。

二十年前に書いたエツサアの文字がまだ残る、昔の紙片である。彼が、昔、誘惑と脅迫に用ゐた紙片であつた。

「もしコラリイが一人だけ、上つて來るなら、彼女の命は助

シメオンは身動きもしない。暴風雨を放つ邪念に燃える雷神のやうに……コラリイは、上から見おろす眼から、身をかくす事も出来なかつた。

「いけません」と彼女は、パトリスの計畫が、却つて怖れて居る終局を早めはせぬかと慮つて押し止めながら、呟いた。「いけません、そんな事しては……」

だが、彼の決心はそれ以上だつた。彼は目的に猪突した。勇氣を奮ひ起すと、素早く彼の手は拳銃を握んだ。

瞬間、狙ひは定まつた。一發、拳銃を放つた。轟然と反響した。

上の顔は、隠れた。

「あゝ！」とコラリイは叫んだ。「いけない事ですわ、パトリス。きつと返報しますわ……」

「なアに……そんな事はない……」とパトリスは拳銃を握り締めながら「彈丸が當つたかも知れぬ！……一つ天窓の格子を傷付けた彈丸があります。それは彈丸で、だから……」

二人は手と手を組みながら、一條の希望を以つて待ち置けた。

けてやる。十分間、考へる猶豫を與へてやらう。もし諾かなければ……」

棺に響く釘

「もし諾かなければ……無意識に、幾度も幾度も、パトリスは此言葉を繰返した。もしコラリイが敵の要求に應じなかつたら、もし彼女が此の牢獄の鍵を持つ者に身を任せなかつたら乃ちそれは死である。

その瞬間、二人の胸に溢れたものは、此所に陥つた破局の事でも、死其物の事でもなかつた。

考へるのは、唯「別れてしまへ」と言ふ敵の命令に就てばかりである。別れて一人は生き、一人は死ぬる。パトリスを捨てよ、コラリイは救はれるであらう。だが、どんな條件にしろ、こんな約束が結ばれやうか？ そして、斯る犠牲を償ふ物が何所にある？

若い二人の戀人の間には、苦しい不安と焦燥の長い沈黙が續いた。彼等の心中には、何物か攪み合ひ、相争つた。戀

人を犠牲にしなれば、もう戯曲は最後の幕になるのだつた。それは、彼等自身の間で、正に解決さるべき問題ではないか。そして、又彼等は解決する力を持つてゐる。それが惨ましい問題で無くて何であらう。昔のコラリイの身の上にも同じ事が起つた。然しコラリイは戀人を見捨てずに、戀人と一緒に死んで了つたのである。

彼は氣を取直した。

パトリスは壁の文句を讀んだ。字體は早書きされて、明瞭では無かつた。

(俺はコラリイに俺を捨て、呉れと深く懇願した……彼女が俺の膝の上へ、身を投げ掛けた。彼女は俺と一緒に、死に度いと言ふ……)

パトリスはコラリイの方を向いた。これだけの文句は口の内で讀んだから、殆ど彼女に聞えなかつた。ふと、思ひ餘つて彼女をシツカリと自分の方へ引き寄せながら叫んだ。
『コラリイ！ お前はどうしても別れて出て行かなければなら

『何故です！ 何故そんなに君は頑固なのだ？ 私はどうしてあげる事も出来ないのだよ。それに何故此處にゐようと言ふんです？』

『だつて妾、貴郎を愛してゐるのですもの、妾のパトリス！』

彼は呆然とした。彼女が自分に戀してゐる事も知つてゐた、又彼から彼女に戀を打明けた事もあつた。併し、彼女は一緒に死なうと言ふ。それほど戀されてゐたとは、思ひ掛けもない事であつた。思へば、云ひ知れぬ喜びが込み上げて来る。

『あゝ、君は私を愛してゐる。コラリイは私を愛してゐる！』

『さうですわ、妾のパトリス！ 妾、貴方を愛します！』

彼女は、男の頸に縋り付いた。此の抱擁の魅力に打ち克てやうか。だが、どうしても、彼女の生命は助けなければならぬ、彼は決心して、抱擁を拒げた。

『もし私を愛するのなら、どうぞ私の言ふ通りにして下さい。君を送つれにして死ぬことこそ私には苦痛だ。お願ひだ

らない！ 今まで私が斯う言はなかつたのは、決して、躊躇してゐた爲めではない。いや、單に……彼女の提議に就いて、考へ、君の身の上を考へると恐ろしかったからだ……彼奴が君に求めてゐるものは、實に怖い事です。君を助けようと云つてゐるのは、彼奴が君を戀してゐるからなんだ。それで、かう分つて見れば……いや、それでも君はどうしても行つた方が好い……君は命を助けて貰はなければならぬのだ。……さあ、お行きなさい！ 十分間待つてゐる事はない！ 彼奴の心が變つたら、私と同じやうに殺されて了ふのだから！ コラリイ！ さあ、お行き！ さあ、直ぐお行きなさい！』

『厭ですわ』彼女は簡單に答へた。

彼は驚いた。
『そんな馬鹿な事はない！ 何故そんな詰らない犠牲に、成らうと言ふの？ 身を任せたあとで言ひ出す事が恐ろしいの？』

『いえ、私、此處にゐますわ』

から、私一人死なして下さい。私一人、死んだとて何の恨みがあるらう、君さへ、助つて呉れると思へば』と彼は言つた。闘じて、彼女はそれに従はなかつた。さうして、長いあひだ、今の今まで、心の底ふかく秘めてゐた戀の告白を、いと嬉しさにするるのであつた。

『ねえ、パトリス。初めてお目に掛つた時から、妾は貴方を愛して居ましたの、貴方も、妾を愛して下さつてゐたのは、知つてゐましたわ。妾が貴方のお目付きを見ます時、その度に、打ち明けたい心が、こみ上げて来るのでしたわ。でも、妾は機會を待ちました。そして、今、二人は墓の前に立つてゐるのです。今こそ打ち明ける時が來ました。ね、どうぞ、妾の言ふ通りになすつて下さい。パトリス！ 身も心も貴方の物なんですわ、お別れするのは、死ぬるより、ズツトズツト悲しいの』

彼は、彼女の抱擁から身を引きながら、
『いけない！ 出て行くのは、君の義務だ』

身を引くと、彼女の手を執りながら、彼は言つた。
『行くのは、君の義務なのだ。さきに助かつて、それから私

を助ける方法を講じて呉れても好いのです」

「まア、何てことを仰言るの、貴方は、パトリス？」

「さうだ、私を助けて下さい。君が彼奴の手から遁れる事は出来るのだ。そして、友達に此の事を話して、助けに来て貰つて下さい。何かの方法で屹度出来る事だ。彼奴をベテンにかける事も出来るのだ」と彼は繰り返して云つた。

パトリスが、到底出来さうもない事を言つてゐるので、彼女は悲しげに微笑みながら顔を見詰めた。

「パトリス！ それは私を誤魔化さうとしていらつしやるのよ。御自身お仰言る事で、御自身の心を欺く事は出来ないでせう。妾だつてさうですわ。ねえ、パトリス！ 考へて御覽なさいまし。あの男に妾が降参したら、きつと何處かの隠れ家へ連れて行かれて、手足を縛られて貴郎の最後の息を引き取るまで幽閉されるのに定まつてゐますわ！」

「君もさう考へてゐるの？」

「え、貴郎と同じ考へですわ。さうしてその後につて来る事に就いても、きつと貴郎と意見が一致しますわ！」

「其の後に、どんな事が起ると言ふの？」

「パトリス！ あの男が私を助けようと言ふのは、寛大な心からでは決してないのですわ。私がああ男の手に捕へられてから、どうされるか、御存じないの？ 私の命が助かる爲めにはどんな事をしなければならぬか、御存じないの？ どうせ數時間の後には、私も殺されて了ふんですもの、何故今貴郎のお手に抱かれて……貴郎と一緒に、そして接吻しながら死なして下さらないの？ え、それは眞實な死に方なんでしょう！ いゝえ、一瞬間のうちにいちばん幸福な生を享樂する事なんですわ！」

彼は彼女の抱擁の手から逃れようとした。だが、彼女から接吻を迫つて來られた時はに、もう何の意志の力も失くなつた。

「然し、恐い事だよ。君はまだ若いのだから、まだく之れから幸福な生活はいくらでも作れるのだ。それに私と一緒に犠牲になつて死んで了ふなんて、どうしてそんな事が私に堪へられやう？」

「若し貴郎が此世にいらつしやらなくなつたら、妾は生甲斐のない年月を重ねるばかりですわ」

「コラリイ、どうぞ命だけはとり止めて下さい。お願いだ。どうぞ私の云ふ通りになつて下さい！ それが私の最後のお願なんだ！」

「妾、貴郎がいらつしやらなければ、どうしても生きて行けないの、ねえ、パトリス！ あなたは妾のたつた一つの幸福の源なんですもの。貴郎を戀してゐなかつたら、私の一生は無意義ですわ。貴郎が妾に戀といふものを教へて下さつたのよ！ 妾、ほんとうに貴郎に戀してゐるの」

この信實な言葉！ 此の言葉が四方の壁に反響したのは、これが二十年後の二度目であつた。今娘の言つた言葉は、同じ母親の昔言つた言葉ではないか。さうして同じ心持ちで、恐ろしい運命を、母も娘も、喜んで受けたのであつた。昔の死を考へ、今將に來るべき死を思ふ時、同じ言葉も一層神聖の度を増して來るのである。

コラリイはこれらの言葉を、何物をも恐れず發したのであつた。恐怖は、戀の喜びで打ち消された。聲が震へ、眼が曇るのは、戀ゆゑである、決して恐れのためではなかつた。パトリスは恍惚と、彼女を眺めた。眺めながら彼女と共に

死ぬ事は、どんなにか意義のある事だらう。併し、も一度最後の努力をした。

「では、若し君に出て行けと命令したら、どうする？」

「貴郎が私にあの男の所へ行けて仰言るんですか？ それが貴郎のお望みなんですの？ ねえ、パトリス！」

パトリスに取つては、斯んな考へが、堪へられる筈はなかつた。

「考へてもゾットする！ あの男に——あの男に……君が、私のコラリイが——而も何物にも汚されてゐない純潔な女が——あゝ！」

あの男。だが二人共にまだそのシメオンらしい姿を、想像して見る事も出来ない。先き程天窓の所で、憎々しい姿を一寸見せたゞけだ、どんな男だか分らない。敵は多分、シメオンであらう。それとも、シメオンの手先きに使はれてゐる男かも知れない。兎も角、二人の頭上に身構へ、二人の上に呪ひを掛け、若い女を醜惡な慾望で追求する鬼。それが二人の敵なのに違ひなかつた。

パトリスはも一度、尋ねて見た。

「シメオンが交際を求めに来るやうな風はなかつたの？」
「いえ、一度も。シメオンはどちらかと云へば、避けるやうにしてゐますわ」

「成る程、彼奴は氣狂なんだから……」

「氣狂ぢやありませんわ。屹度復讐のつもりなんですよ」

「そんな事はない。彼奴は親父の友達だつた。彼奴の一生は、我々を育て上げる爲めに費されたのだ。氣狂ひでなかつたら、譯も無く、僕等を殺して了ふやうな事は無い筈だ」

「私には分りませんわ、パトリス！ 少しも見當が、付かないですもの……」

「彼等は此の事に就いては、もう議論しなかつた。シメオンであらうと無からうと、別に大した事は無い。誰であらうとも、死を齎らして来る者と争闘するのが、一番緊要な事だ。然し、誰が「死」に双向つて勝つ事が出来よう？」

「妾の言つた事に同意して下さいさる？ ねえ、好いでせう？」

と低い聲でコラリイは尋ねた。

「では、もう行かない事にしますわ。でも妾と同じ心になつて下さい」

「ねえ、好いでせう？」

「妾の言つた事に同意して下さいさる？」

と低い聲でコラリイは尋ねた。

「では、もう行かない事にしますわ。でも妾と同じ心になつて下さい」

「ねえ、好いでせう？」

は唯コラリイにだけ、安全の機會を提供したものだつたのに。そして彼はその機會を一擲して、さうするのが萬策の盡くる所と觀じたのだらうか？ 一分間、二分間過ぎて行く。梯子は再び掛けられたのか、手答へあつてキツチリと中間にさがつて居る。

「ねえ、パトリス！ 今更ら、どうしようとなさるの？」とコラリイは繩り付いてなだめた。

どうしてやらう、懸命に彼は身のまはりをも、そして頭上を見まはした。亡き父が異常に意志を緊張させて、梯子に繩り付いた時、どんなに苦惱したか、その記憶をたづねて聞き出すかのやうに、彼は我が心の中に計畫を探し求めた。

突然、飛び上ると、彼は細梯子の五段目の段に足を掛けるや否や、しがみ付いて、登りあがらうとした。

愚かな、試み！ 梯子を登るのか？ 天窓にたどり付くのか？ 敵を掴み捉へて、それで自ら逃れ、コラリイを救ふつもりか？ そんな事が出来ようか？ 彼の父が曾つて失敗した事が、彼だけに成功出来るだらうか？

三秒にして失敗した。ドシリと、パトリスは落下した。細

て下さいましねえ。それだけは呉れ呉れも、お願ひしますわ。貴郎がお苦しみになると思ふと、とても耐りませんもの。貴郎のお苦しみを、半分別けて下さしましたね。好いでせう。好いと貴郎の口から言つて」

「あゝ好いとも」

「まあ、嬉しい事。ぢや兩方のおてゝを兩手で握らせて下さ

いませう。そして私の眼を見て下さいませう。笑ひませうよ、妾のパトリス」

愛と憧憬で、暫くは夢見るやうな氣持。それから彼女は「

「どうかなさつて？ パトリス。貴郎はまた厭な顔して居ら

つしやるのね。」

「ごらん……見てごらん！」

聲が詰つた。彼が今見る事は確かな事實であつた。

細梯子が上へ引き上げられるのだ。もう、十分間は経過したのであつた。

彼は飛上つて、細梯子の一端を捉へた。

彼は石のやうに動かなかつた。

何をしようとするのだ？ 彼自身にも分らなかつた。梯子

梯子諸共にである。

同時に、カラ／＼と笑ふ聲が、屋上に響いた。直ぐ、何かしら物音がした。天窓がピタリと蓋された。

パトリスは猛然と立上つた。敵を激しく罵ると共に、憤怒が迸つて思はず短銃を二發撃つた。然し、夫れは單に天窓の硝子を壊したに過ぎなかつた。彼は狂氣のやうに薪臺を取上げると、激しく床や床を撲り廻はし、嘲笑つてゐる敵に拳固を向けたりした。暫く撲つてゐたが、突然止めなければならなくなつた。何か厚い覆が頭上の天窓へ掛けられたのである。部屋は暗くなつた。敵のした爲事は、直ぐ解つた。天窓に覆をかぶせて隙間を塞いで了つたのだ。

「パトリス！ パトリス！ 何處にいらつしやるの？ 私怖くなつたわ！ 何處にいらつしやるの？」コラリイは急に暗くなつた爲め、心の平静を失つて叫んだ。

彼らは二人の盲人のやうに、手探りでお互を探し合つた。

そんなにも眞暗の中で、互に離れてゐるのは死ぬよりつらかつた。

「パトリス！ おゝ妾のパトリス！ 何處にいらつしやる

の？」

二人の手は觸れ合つた。コラリイの冷たい小さい指と、パトリスの熱に燃えた指と。さうしてまだ互に生きてゐる事を試すやうにひしと握り合つた。

『もうお離しになつちや厭よ！ ねえ、パトリス』とコラリイは嘆願するやうに言つた。

『私は此處にゐるよ。怖ろしからなくても好い。彼奴だつて我々を引き離す事は出来ない』と彼は答へた。

『さうよ。あの人達だつて二人を引き離す事は出来ませんわねえ、もう妾たちは墓の内にゐるんですもの』

墓の内に、その言葉は胸を抉る。コラリイの言ひ方さへ此上もなく悲しげに聴えた。パトリスは言葉を強めた。

『何を言ふんです？ 大丈夫！ 我々は最後の瞬間まで決して失望してはならない』と叫んだ。

片方の手だけ離して、短銃を狙つた。二三筋の光線が天窓の裂目から漏れて来る。それを目掛けて彼は三度撃つた。彈丸が天窓に當る音。とその度にカラ／＼と嘲笑ふ敵。覆は何か金属で裏打ちされたのか、穴さへ出来ない。

だ、斯んな風になつて了つたのだから、憐憫などがどうして、身の上に取り得よう……命は完全に敵の手に握られて、而も刻一刻魔手に近附いてゐる。敵は死の神その者である。さうして藻掻き苦しむパトリスの上に挑みかゝつて来るのだ。

『妾の側からお離れになつちや厭よ！ ねえ、どうぞ側にゐて下さいよ……』コラリイは泣きながら言つた。

『二分間だけ……どうしても誰かに復讐させてやらなけりやならないから』と彼は言つた。

『もう何をなすつても何にもなりませんわ！ もうどんな事をしたつて絶対に駄目ですわ』

彼は、四五本しか入つてゐないマッチ箱を取り上げて、一本づつ灯しながら、文句を書き列ねられてゐる壁の所へコラリイを連れて行つた。

『どうしようと思つていらつしやるの』と彼女は尋ねた。『私はどうしても、自殺したやうに見せかけられるのは厭だ、丁度我々の親達かしたやうに、僕等も未來の爲めに書き残さうと思ふのです。此所へ遺言を書いて置いたら誰かが亦

やがて、敵は天窓の裂け目を詰めはじめた。戸や窓にしたと同じやうに、するのである。完全に詰るので、仕事が非常に手間取つた。それから今度は覆をとつて天窓の枠へ釘付けにし出した。

凄惨な音！ 鐵槌の音はかゝるく、速く、二人の脳髓ふかく沁み入るやうに響く！ 二人の棺に打込む釘である。巨大な棺の上は、びたりとばかり蓋されたのである。最後だ！ 運

れる道があらうか！ 鐵槌の響きのひとつ／＼が、暗黒の牢獄を閉して、彼等と世界との間に、いかなる人力を以てしても到底破り能はぬ、嚴然なる障壁を築き固めたのであつた。

『パトリス！ 恐いわ！……あの音が頭に響いて堪まらないわ……』

彼女はパトリスの腕の中に身を投げ掛けた。彼女の頬を傳つて流れる涙が、彼の腕に落ちて来るのが感じられた。

その間に、上の方の爲事は、全部終つた。二人は丁度死刑囚がその最後に感じるやうな、經驗を感じなければならなかつた。殺人の道具立ては全部終つた。電池も檢べ終つたのだ。彼等は着々最後の結果に取り急いでゐる。もう絶體絶命

復讐して呉れる事もあるだらう』

彼はポケットの中から鉛筆を取り出して、身をかぶめた。窓硝子の下の方に、丁度屈強の場所があつた。

彼は次のやうに書いた。

(パトリス・ベルグル及び許嫁のコラリイは屍を並べて一九一五年四月十四日シメオン・デオドキスのために殺された)

然し、丁度書き終つた時に、彼の父が書いた言葉を見つけた、隅の方に書かれてゐたので今迄は一寸目に止まらなかつたのである。

『も一本マッチを出して……親父が最後に書いた言葉があるから。君も見たら？』

彼女がマッチに火を點ける。チラ／＼する光りで、彼は父が最後に書いた、惨ましい文字を見た。走り書きで、二字書いてあつた。

(窒息……酸素が……)

マツチは消えた。二人は静かに立ち上つた。窒息、それで殺されるのか。彼等の親たちが、それによつて死んだ、さうして今彼等がそれによつて殺されるのだ、萬事は分つた。どうして息が窒まるのか、分らないのはそれだけである。斯うな、大きな部屋で、空気が缺乏して窒息するまでにはよほどの時日が掛かる。

「少くとも空気の性質を變へなければ……その結果が……」
彼は一寸言葉を切つた。それから、ふと、

「さうだ、あれを使ふのだな！」
ふと泛んで来た恐怖を、彼はコラリイに話した。恐怖と言ふよりも、實際身に迫つて来る物に就ての確實な想像であつた。

シメオン爺の押入れに、今の繩梯子のほかに一巻の鉛管があつたではないか。二人を此處に閉ち込めてから、シメオンが小屋のまはりを中心心に檢べまはつたこと、壁や屋根の上の、どんな小さな隙間でも詰めたこと、それらは彼の意志の何處にあるかを明確に物語つて居る。シメオンは臺所の瓦斯

メートルに鉛管を取り付け更らにそれを壁や屋上に引いて殺人の準備を整へたのである。

だから、親たちと同じやうに、瓦斯で窒息、死に致らしめられるのだ。

頭は怖れに渦巻いた。意志も思慮も失くなつた。手と手を組みながら、部屋中走りめぐる他に、どうする事も出来なかつた。

コラリイは譯も分らぬ事を口走る。宥めようとするパトリ自身も、暗黒の中で死の神に手を引かれる恐ろしさで氣も顛倒した。骨髄にまで沁み渡る寒む氣から逃れたい。彼は焦つた。逃げなければならぬ。だが何處へ？ どこから？ 壁は頭丈である。壁より固い此の暗黒であるものを。

もはや精盡き、力果てた。立ち止ると、さながら注ぐ水のやうな音が、どこからともなく聴えて来た。とほりの悪い閉栓から、送られる瓦斯の音である。耳を澄ますと、どうやら天井から洩れて来るらしい。

斯うして梯間は始まつたのである。
「もうせいゝ三十分か、永くて一時間の命だよ」とパトリ

スは暗く呟いた。

コラリイは、漸く氣を取り直して、

「元氣を出しませうよ」と云つた。

「あゝ、若し僕一人なら……たゞ君が可哀さうだ」

「苦しくも何ともありませんわ」と彼女は非常に低い聲で言つた。

「君のやうな、か弱い者が苦しむとは！」

「弱ければ弱いだけ、苦しみは少いのですわ。ですから妾たちは苦しまなくて好いのよ、ねえパトリス！」

彼女は、急に平靜な心に歸つたやうに見えた。

二人は指と指とを絡み合せながら、靜かに椅子に腰を下ろした。刻々に最後が近付いて来る今、ヒシ／＼と身に迫る靜寂を、二人は靜かに味つた。此の靜寂の境は諦らめである、取りも直さず抗し得られぬ力を甘受する諦めである。二人のやうな人間は、逃れ難い運命を自覺し、祈りと服従の外、取るべき途のない場合には、決して見苦しい反抗をする者ではない。

彼女はパトリスの頸を抱き締めた。

「妾、貴郎の妻ですわ！ 神様のお許を受けてゐるんですもの。神様、どうぞ二人が夫婦になる事をお許し下さいませ」

此のやさしさを見て、パトリスは泣いた。彼女はその涙を接吻しながら、肩で拭ひ取つた。さうして相手の肩を求めて接吻した。

「あゝ！」と彼は言つた。

「その通りだ。かうして死ぬることが、生きる事なのだ」

靜寂に包まれて、二人は坐つてゐた。瓦斯は追々下の方へ漲つて来た、もう彼等の坐つてゐる所で臭がする。然し二人にとつて、何の怖れる所があらう。

「最後の瞬間まで、親たちと同じ道を辿つたのだね、コラリイ！ 君のお母さんと僕のお父さんとは、君と私のやうに戀し合つてゐて、お互に手を取り合つて、接吻しながら死んで行つた。さうして我々を夫婦にする心で一杯になりながら」

「妾たちの墓場もきつと、お父様や阿母さんの側へ出來ますわ」

意識が次第に朦朧として来た。霞を通して物を見る氣持

ち。何も食べて居なかつたので、空腹が増した。瓦斯の酔で眩暈がする上に、餓しさがあるので、だん／＼気が遠くなつた。気が遠くなれば、不安も怖れも忘れた。死を怖れぬ法悦、安息が来た。

先づさきに、コラリイが氣を失つた。彼女は思ひ掛けもない囁語を言つて、パトリスをギョツとさせた。
『あら、妾のあなた、飛んで行くわ、花が、薔薇の花が、おほ！ 美しいこと！』

だが、直ぐに、彼も矢張り、優しさ、歡ばしさ、心躍り、それから迷る、同じ祝福と同じ忘我の境に浸つた。

何の怖れもなく、彼は腕の中に身を投げ掛つた彼女を感じた。身に靈光を浴びながら、いつしか二人は廣漠たる淵に泛ぶ。そして、うつら／＼と幸福の國へ、降りて行くやうな氣持だつた。

數分間、或は數時間が過ぎたらう。二人は下へ、下へと降りて行く。良人の手に腰を抱かれた彼女である。彼女は少し取亂しながら、眼は閉ち、口には微笑を含んで居た。彼は思ひ出す、いつか、神の夫婦が、このやうにして蒼穹を滑走す

る様を想像したことを、さうして光彩と大氣に酔ひながら、彼は幸福の國の上空に、大きく輪を畫きながら飛んで居るのではないか知ら。

だん／＼近づいた時、全身に疲労を感じた。腕を抱くコラリイが堪へ難いほど重くなつた。降りて行く速度は急に加はつた。光りの波が忽ち暗くなる。重苦しい雲が湧いて、またあとから来る密雲と重なり、其所に暗冥な渦巻が出来た。突然に疲労が加はつた。額を瀧のやうな汗が流れる。身體は激しい熱の悪寒を感じる。さうして彼は大きく、黒い穴の内、パツタリ倒れた。

奇怪な人

まだ眞の死ではなかつた。瀕死の境に、ひとと取纏る意識が、現實の世界と、彼の住む幻想の世界を混じ合せる悪夢を見せたのだつた。幻想の世界、すなはち死の世界に他ならぬ。もはや此の世界には、コラリイは住まないのである。彼女

がなくなつた爲めの、彼の悲嘆であつた。だが閉ぢた眼の前に、チラ／＼と人の影が映る。誰かが出入りする。足音が聞えるやうな氣もした。

之れと云ふ確かな理由もないが、此の人こそシメオンに相違ない、二人の死を確かめに來たのだと云ふ氣がした。コラリイを、何處かへ連れて行つたあとで、今度はパトリスを何處かへ捨て去るために、伴れに來たのではあるまいか。然し是等の事が餘りに理窟のある考へなので、パトリスは自己に意識があるのか、それとも無いのか、全然見當がつかなくなつた。

二三時間過ぎた……或は數分間であつたかも知れない。深い眼りに陥つてゐた事に、ヤット氣が付いた。その眼りは丁度地獄の眼りのやうに、覺めたあとの肉體にまた精神に、亡者の苦惱を感じしめた。彼は、眞暗な墓穴の中に凭れてゐた。さうして、海に陥ち込んだ者が浮び上らうとして死に物狂ひになるやうに、彼も亦其處から抜け出さうとして懸命に藻掻いてゐたのだつた。水を掻き分けて表面へ出ようとする者のやうに、自分を窒息させる空氣の中から、苦しみ惱みな

がら抜け出ようとしてゐるのだつた。どんな頼りない物でも手足を掛けて浮み上らなければならなかつた。何にも引つ掛りのない繩梯子でも、とは言へ兎に角、あの部屋から抜け出した事は確かだつた。

追々と暗闇が明るくなつて來た。蒼白い僅かばかりの光線が、闇の中に入交つた。パトリスは何かの壓迫から解放されるやうな感じがするのだつた。半ば目を開いて、澤山の深い呼吸をしながら邊りを眺めて見た。見ると、開け放しになつてゐる戸のそばで、野天の下の長椅子の上に、寝てゐるので喫驚した。

自分の長椅子に並んだ長椅子の上にコラリイも亦寝かされてゐた。彼女は絶えず苦しさに藻掻いてゐた。

彼は思つた。
『暗闇から抜け出たのだ、一生懸命に藻掻いて浮上つたのだ。俺と同じやうに苦しんで……可哀さうに』
二人の間には小さい机が置いてあつた。その上には水の入つたコップが二つ載せてあつた。非常に喉が潤いて居たので、コップを取上げた。でも、直ぐ飲まうと云ふ氣にはなれ

なかつた。その時、開け放しの戸の中から、誰か出て来た。あの離小屋の戸である事が、パトリスにも分つた。近寄つて来た男は、先刻から想像して居たシメオン爺ではなかつた。まだ一度も見た事のない男である。

「俺は眠つてゐるのではない……確かに眠つては居ない。此人は味方に相違ない」さう考へて、もつと大きな聲でたしかめようと思つたが、そんな元氣はなかつた。

見知らぬ男は、そばへ来て、やさしく言つた。
「いけませんよ、疲れてゐるのに。もう大丈夫です。さア、どうぞ水を召し上げ」

見知らぬ男にコップを渡されて、パトリスはもう躊躇しなかつた。ぐつと一息にそれを飲む。コラリーも同じやうに飲んで居る。彼は非常に嬉しくなつた。

「さうだ。もう大丈夫だ。生は實に美しい！ コラリーも生きて居るぢやありませんか？」
その返事も聞かないうちに、うとく又睡りに陥つた。

睡りから覺めた時には、もう危険な症状は過ぎて居た。然し頭がグラ／＼して、呼吸に少し困難を覺えるだけだつた。

であつた。

パトリスは此の男の顔をシゲ／＼と眺めた。肩幅はあるが瘦せ形の少し浅黒い男で、細い鬚を生やし、頭髮は大分白くなつてゐる。そろ／＼五十に手が届きさうな年恰好であつた。衣物から察すると中々派手者らしい。パトリスは覗き込んで本の表題を見ると「ペンジャミン・フランクリンの思ひ出」とあつた。芝生に轉つてゐる帽子の裏側に書いてある頭文字はL・Pとしてある。

「此の人が助けて呉れたんだ。見覚えがある。我々二人を部屋の外へ連れ出して介抱までして呉れたあのんだ。然しどうして、こんな、不可思議な事になつたんだらう。誰が此の人を助けによこしたのだ？」

彼は軽くその男の肩を叩いた。男は直ぐに立ち上つて、ニコリと笑つて、

「やあ、大尉、誠に失敬しました。いや、いつも大變忙がしいものだから、私は暇が出来る度びに所嫌はず居睡りするのが癖なんです。ナポレオンの眞似をしてね……いや、ナポレオンの眞似が私には得意でないことも無いのですが……」

それでも彼は立ち上つてみた。それで自分の感覚が確かな事や、そばの戸が離小屋の戸である事や、コラリーが二杯目の水を飲んだ事や、靜かに寢て居る事などが確實に解つて来た。

「生は實に美しい！」と彼は繰り返し繰り返し言つた。

彼は動き度くなつた、戸は開いてゐたが、例の部屋へは行かなかつた。墓場の庵の縁を通つて歩いて見た。然しまださうする理由も目的も分らない、たゞ足の向くまゝに歩いて行くのだつた。さうしてゐる裡に何時の間にか小屋を一周して小屋の向ひ側へまはつて来た。そして突然立つた。家から二三間離れた坂道の大きな木の根下に、一人の男が、顔を木の影に隠し、足を日向に出しながら椅子に倚り掛つてゐるのを見た。この男は居睡をしてゐる。膝の上に本が展げたまゝになつてゐる。

此の時はじめて、パトリスは、彼とコラリーが助けられて現實に生きてゐるのだ、さうして助けられたのは全く此の男の御蔭だと云ふ事がはつきり分つた。居睡りをしてゐる男の顔に満足さうな表情が漂つてゐる。それが何よりの好い證據

私の事は兎に角、どうです、御氣分は？

「奥さんは……あのコラリーさんはだん／＼好い方なんですか？ 僕は部屋を掃除して、君達を連れ出して置いてから、起さない方が好いと思ひましてね。必要な事は、スツカリして置きましたから、安心してゐましたよ。助かつたんですから、あとは新鮮な空氣に任せておいた方が好いと思ひましてね」

パトリスが、非常に困惑してゐるのを見て彼は吹き出した、彼の微笑は樂し／＼な笑ひに變つてゐた。

「さう／＼、スツカリ忘れてゐましたよ。君は、私を誰だか御存じないでせう。君に出した私の手紙が途中で誰かに取られて了つたんです。だから、私自身で君に御紹介させよう。ドン・ルイ・ブレンナと云ふ者です。スペインの由緒正しい貴族なんです。(譯者註「虎の牙」参照) 身分證明書は持つてゐますがね……いや然しそんな下らない物はお見せしたつて仕方がないですが……」彼は樂し／＼に言葉を續けて行つた。「ヤ・ボンが半月ほど前の夜、私の名を町の壁に書いた時には、異つた名を書きましたかね。あゝ、だん／＼解つて來ましたな……さう、君が助けを求めたその男ですよ。本名

を明かしませうかね？ 大尉、實は……アルセエヌ・リュパンがお役に立つたんですよ」

パトリスは、ハツとした。さうだ、ヤ・ボンがあんな提議をしたつけ。それを、あんな工合に賛成してやつて、ともかく、自分たちの味方に、有名な大冒険家を引入れて居たのではないか？ すつかり忘れて居たうちに、彼は奇蹟のやうに、自分とコラリイを、あの釘づけの棺の中から救ひ出して呉れたのだつた。それが、アルセエヌ・リュパンである。アルセエヌ・リュパンが、今彼の面前に立つて居るのだつた。彼は握手を求めながら云つた。

「誠に、お禮の申しやうもありません」

「いや、お禮には及びませんよ。握手しませう。それで澤山ですよ。君が握手しても差支へない人間です。大尉、私を信じて下さい。私は、良心に疚ましい所もあるんですがね、然し一方で又仲々好い事もしてゐるんです。それで紳士間にも相當尊敬されてゐる……いや、それから私の……」

彼は一寸言葉を切つて、ふと何かに心付いたやうな風をした。パトリスの上衣の釦の所を握まへ、

「動いちやいけませんよ。私たちは見張りされてゐるんですよ」

「一體誰に？」

「庭の丁度右の端れ、荷揚場に誰かゐるんですよ。その所の塀は餘り高くなく、鐵格子が上の方に付いてゐる。その格子から我々を見張つてゐるんですよ」

「どうしてそんな事を知つてゐるんです？ 貴方は荷揚げ場の方へ背を向けてゐるぢやありませんか。それに、樹木が澤山生え茂つてゐますが」

「静かに」

「あの方向では何にも聞えませんが……」

「ああ、機械の音が……車を止める音が、彼處で車を止めるのはをかしい。荷揚げ場の塀の向ひ側には家なんか一軒もありませんからね」

「そんな事をするのは一體誰なんです？」

「そりやシメオン爺に定つてゐるぢやないですか、何故？」

「え？ シメオン爺なんですか？」

「さうですとも、君等が實際助かつたか見に来てゐるんですよ」

よ」

「ぢや、彼奴は氣狂ぢやないんですね？」

「氣狂？ いや、我々と同じやうに氣なんか狂つてやしません」

「だが……」

「つまりシメオンが今迄君等に親切にしてゐた事。それから君等二人を育て上げた事を云ふのでせう。庭の戸の錠を渡したりして居りながらあんな事をしたから氣狂だと云ふんでせう」

「どうしてそんな事を御承知なんです？」

「そりや知つてゐますよ、若し知らなかつたら、どうして君等を助ける事が出来ます？」

「然し、若し彼奴が攻撃しに歸つて來たら、何にか對策を講じなくても好いですか？ 小屋へ歸りませう。コラリイがたつた一人でゐますから」と心配さうに言ふ。

「危険は少しもありませんよ」

「何故ですか？」

「私が此處に控へてゐますから」

パトリスは前より一層吃驚した。

「それぢやシメオンは、貴方を知つてゐるんですか？ そして又、此處にゐられる事も知つてゐるんですか？」

「さうです。私はヤ・ボンに君宛ての手紙を托したんです。それを彼奴が横取りして了つたんですよ。今出掛けますと、その手紙の内に書いて置いたんです。それで彼奴が大急ぎで仕度に取掛つたのです。斯んな場合には何時も私はさうです

が、二三時間早く出掛けて來たんです。それで彼奴の仕事最中にブツ付かつたわけで」

「その時まで彼奴が悪漢だと云ふ事も知らなかつたんですか？」

「全く何にも知らなかつたんですよ」

「それは今朝でしたか？」

「いや、午後ですよ。丁度二時十五分前でした」

パトリスは時計を取り出した。

「四時ですなあ。それでは丁度二時間……」

「違ひますよ、私が此處へ來てからまだ一時間しか経つてゐません」

「ヤ・ボンからお聞になつたんですか？」
「いや、私は君が思つてゐるよりもつと有効に時間を費ひますよ。ヤ・ボンから君が、ゐないと云ふ事を聞いて吃驚したんです。」

「それから？」
「それで君等を探し廻つたんです。」

「どうして？」
「僕は第一番に、君の部屋を探しに行きました。君の圓机の後に罅がありました。丁度それが隣の部屋の壁の穴と向き合つてゐるんです。それを私が例の調子で見付け出したんです。それで、近頃君はどんな事をしてゐるのか知つて置く必要があるのです。其所から君の日記帳を引き出す事が出来たんです。僕ばかりぢやないシメオンも此處から君の日記帳を引き出しては君のしてゐる事をチャンと知つてゐた譯なんです。それで、四月十四日に君等が此所へ来る計畫がある事を彼奴が知つたのです。昨晚の事、彼奴は、君が何か書いてゐるのを見て、君を攻撃する前に、君が何を書いてゐるのかを見て置かうと思つたんです。日記を見てから君に、仲々隙

がないものだから一先づ攻撃を差し控へたんです。斯んな風に凡て極簡單なんです。若しデマリオン氏が、君がゐなくなつた事を心配するのだつたら氏の成功は明朝に至つて立派に現れたでせうよ」

「遅くなり過ぎると云ふ譯ですわね」

「まあそんな譯です。僕は警察なんか干渉されたく無かつたものですから、君の部下にも怪しい事があつても、黙つてゐるやうに頼んで置いたんです。さうするとデマリオン氏にも怪しまれませんか。君の日記から必要な事は總て讀んで了つたので、安心してヤ・ボンを連れて庭の中へ入つて來たんです」

「戸は開いてみましたか？」

「いえ、丁度その時、シメオンの奴が出て來るのにぶつつかつたんです。運が悪い奴じやありませんか。その機をはずさず上手くやつたんです。私は窓に手を掛けて無理に入つて行つたんです。彼奴は極力それを止めようとしなかつた。彼奴は確かに私だと云ふ事は知つてゐたんですが」
「然し、貴方はその時、彼奴が悪者だと云ふ事は知らなかつ

たのですか？」

「私が何にも知らなかつた？ 日記にはどう書いてあつたんです？」

「私には少しもさう云ふ考へが……」

「然し、大尉、日記のどの頁を見ても、彼奴の糺弾ばかり書いてあつたぢやないですか。どんな鎖細な事でも常に彼奴が關係してゐるし、どんな罪惡でも彼奴が企及しないものはないんです」

「それなら直ぐに捉へておやりになれば好いのですのに」

「若しそんな事をしてゐては、何にも仕事は出来ませんよ。え、彼奴をヒツ掴へて泥を吐かせるんですか？ いや、彼奴を自由にして置いて、逃がさないやうにするんです。ジリ／＼と攻め殺す戦法です。彼奴は、家から出て行かないで、ごらんの通り小屋の側を彷徨つてゐるでせう。私は機會を失してはならなかつたのです……それと、第一に君等を助けに掛かつたんです。ヤ・ボンと一緒に直ぐ、小屋の戸の所へ走つて行つたんです。その戸は開いてゐましたが、書齋の方の戸は錠が下ろされてゐて、おまけに門が入つて

みました。其所で私は門をヒツ外したんです。錠前を引きチギル事なんかは二人には朝飯前の仕事ですからねえ。

「その時に瓦斯の臭がブン／＼して來ましたから、直ぐにどんな事が起つてゐるか解りましたよ。シメオンの奴が外側の瓦斯管に古いメートル器を据ゑ付けて、其所から部屋の中へ瓦斯を送り込んで、君等を窒息ささうといふ算段だつたんです。其の後の事はもう大抵解るでせうね。君等を部屋の外へ連れ出して靜かに寝かせて置いて、摩擦したり人工呼吸法などをやつて見たんです。それでまあ君等二人は助かつたと云ふ譯なんです」

「彼奴は、殺人道具はスツカリ形付けてみましたか？」とパトリスは尋ねた。

「いやその儘でしたよ。出直して來て、證據を湮滅しようと思つてゐたのに相違ないんです。それで、證據さへ湮滅さして置けば君等は原因不明の自殺をした事になつて了ひます。丁度、君の御尊父や、ユラリイさんのお母様が、自殺したんだと、世間が信じ切つてゐる、それと同じ風になつて了ふと考へたものらしいですね」

「では貴方はあの事まで御存じなんですか?……」
 「どうして? チャンと眼が顔にクツ付いてゐますからね。
 読みましたよ。壁に書いてある文句は御尊父の告白ぢやない
 ですか? 君と同じやうに知つてゐるんですよ。大尉……或
 はそれ以上に知つてゐるんですよ」

「え? それ以上に?」
 「勿論の話です。僕は自分そんな事には経験を積んでゐます
 からね。普通の人には見當も付かないやうな難問題があつて
 も、僕なんかには極簡単なものです。解り過ぎる位よく解り
 ますね。だから……」

ドン・ルイは、それから先きを話すのを躊躇してゐるやう
 に見受けられた。

「いや、只今の所はお話ししない方が好いかも知れません。
 だんく分つて來ますよ。まあ暫らくお待ちなさい。今の所
 では……」

彼は再び切つて、耳を欬てゐた。

「彼奴は君の姿を見たのに相違ない。それで今度も又何か企
 らんでゐますよ。何處かへ出掛けたな」

パトリスはダンノノ昂奮して來た。
 「何處かへ出て行つたつて? ヒツ捕へて置いて下さると好
 かつたのに。又彼奴を探し出さなけりやなりませんもの。然
 しヒツ擱へて復讐する事が出来るか知ら?」

ドン・ルイは心靜かに笑つた。

「そんなに悪く仰言るが夫れでも彼奴は二十年間も君の事は
 かり考へてゐたんですよ。君と小母ちやまのコライイさんと
 を育て上げて來たんだから云はば君等の恩人と云ふ譯でせ
 う」

「そんな事私の知つた事ぢやありません。あゝ、何んだか頭
 が混亂して解らなくなつた。然し私は彼奴を悪まないでは
 られない……又何處かへ出て行つた、あゝ僕は氣狂になり
 さうだ……どんな事があつても、今度こそは拷問に掛けて
 やるんだ、それから……」

彼はスツカリ失望して了つて兩手で頭を抱へてゐた。

「そんなに怖がる事はないですよ。君、もう彼奴の没落は近
 づいてゐるのだから、御心配には及びません。此の木の葉を
 擱つてゐるやうに、彼奴だつて私の手の内にヒツ擱まへてゐ

るやうなものですから」

「一體どうして?」

「彼奴を乗せて行く男は僕の部下なんだから、君!」

「部下だつて? 一體それはどんな譯なんですか?」

「僕の部下の奴を運轉手に仕立て、通路の側へ自動車を持た
 せて置いたんですよ。それでシメオンの奴が畏に掛つてその
 自動車へ乗つて行つたんですよ。」

「と云ふのは想像なんでせう」とパトリスは前より一層吃驚
 して尋ねた。

「君にあゝ云つた時、庭の後で自動車の音がしたんですよ。そ
 の自動車の音は僕にはよく分つてゐるんですよ。」

「屹度貴方の部下が乗つてゐる自動車なんですか?」

「さうですよ。」
 「然しそんな事が何になるんですよ? シメオンの奴が巴里か
 ら遠く離れた所で、貴方の部下の背中を突き刺したら……若
 しそんな事が起つたら、彼奴の行動を誰が知らして呉れるん
 ですよ?」

「戦時ですよ。君は旅行許可證を持つてゐないで巴里の郊外

へ自動車で行けるとでも、思つてゐるんですか? 否、若し

シメオンが巴里を離れようと思へば何處かの停車場へ行くの
 に定まつてゐますよ。もう二十分と経てば萬事分つて來るん
 です。それから私たちが直ぐ追跡と出れば好いんですよ。」

「乗物は?」

「勿論自動車ですよ。」

「では貴方は許可證を持つてらつしやるんですよ?」

「佛蘭西全體に通用する許可證を持つてゐます。」

「どうしてなんですか?」

「そりや君、ドン・ルイ・ブレンナの名宛で内務大臣が署名
 して居る奴を持つて居ます。その上に……」

「その上に?」

「佛蘭西大統領の副署があるんですよ。」

パトリスは非常に吃驚したが、やがて夫れが非常な興奮に
 變つて來た。今迄命懸けの冒險を試みても、いつも敵の執念
 深い意志に壓迫されて、未だに敵を壓服するどころか、反つ
 て敵の爲めに散々な目に合され、命さへ危険に迫まつてゐた
 のだつた。然し突然彼に力強い男が味方して呉れに來たの

だ。形勢は一變した。無風帯に彷徨してゐる船が、程好い風を帆に孕んで、針路を一變して、無事に港を指すと同じやうな形勢に變つたのである。

「しつかりなさい、大尉、君はコライイさんのやうに泣き出しさうになつて來ましたな。君の神経は極度に興奮してゐる。腹が減つてゐるんでせう。何所かで飯でも食ひませう。まあ僕についていらつしやい。」とドン・ルイは言つた。

彼は、パトリスを、靜かに、小屋の方へ連れて行きながら嚴肅な調子で、

「此の事件に就いては、どこまでも秘密を守つて頂き度いのです。アフリカで私が命を助けて貰つたヤ・ボンと二三の友人是等の以外には僕の本名を知る人はフランスにはないのです。僕は今ドン・ルイ・プレナと云ふ名を使つてゐるのです。私がモロツコへ從軍した時、或る中立國の君主に一寸した事でお役に立つたんですが、それでその君主が蔭ながら私の熱心な味方になつて下さつたのです。その方が、私を佛蘭西へ派遣した事になつてゐたんです。それで私の爲めに身分證明書を作つて下さつて、さつきお話しした許可證もその

時に貰つて下さつたのでした。役目は二三日経てば終了しますから、直ぐ歸る事にして居ます。そこで、戦時中、佛蘭西軍のために活動する考へです。決して悪い男ではないんです。信じて下さい、何日かは誰れにでも解つて來るでせうが。」

二人はコライイの寝てゐる長椅子の所へやつて來た。ドン・ルイはパトリスの腕を掴んで、

「大尉、も一つ云つて置き度い事があるんです。私は滞在してゐる間は自國の爲めに力の及ぶ限り盡さうと決心してゐるんです。それで、君には非常に同情はしてゐるものゝ、若し千八百袋の金貨を發見したら、もう一分間も君の爲めに滞在する事は出來ないと言ふことです。ヤ・ボンが言つてよこした事を、承諾したのはそれが爲めだつたのです。金貨が手に入れば、遅くも、明晩あたりにでも、出發しようかと思つてゐます。所が、二つの探求が、偶然にも一致してゐるんです。それで、一方を解決すれば他の方で、自然に、解決が出來ると云ふ事になつてゐます。それだけ言つて置けばもう澤山なんです。コライイさんに紹介して下さい、それからポツ

ポツ爲事に取り掛りませう。あゝそれから大尉、何にもコライイさんには隠す必要はありませんよ。どうか僕の本名で紹介して下さい。何にも恐れませんよ。アルセエヌ・リュパンはどんな婦人にでも好かれて居るんですからね。」と彼は笑ひながら言つた。

四十分程のちである、充分の注意を以てコライイはもとの部屋へ連れて行かれた。パトリスが食事をしてゐる間、ドン・ルイは煙草をふかしながら臺地を行つたり來たりしてゐた。

「もう濟みましたか？ 大尉。出掛ける事にしませう。」彼は時計を見た。

「五時半か。まだ日暮れまで一時間程ある。それだけあれば充分だ。」

「それだけの時間で充分だつて？ 貴方の爲事をタツタ一時間位で、形付けて了ふ心算でゐるんですか？」

「爲事？ 私がやらうとしてゐる事はね……もつと早く出來ますよ。一時間位で？ え、何故？ いや、もう少しするとよく解つて來ますよ。」

ドン・ルイは書齋の下のエツサアレが金貨の袋を一時藏し

て居た穴倉へ、パトリスと一緒に رفت。

「此の通風口から金貨の袋を下ろしたんでせうか？」

「さうです。」

「外に出口はありませんか？」

「書齋から段梯子の方へ行くのと、も一つ、通風口に行くのと二つしかありませんよ。」

「臺地の方へ通じてゐますか？」

「え、通じてゐます。」

「解つた。金貨の袋は、第一の通風口から入れて第二の方から取り出したんです。」

「然し……」

「然しなんて云ふ事はありませんよ。それに違ひないんです。さうで無かつたら、どう云ふんです？ 御承知の通り、大抵の人は物事を餘り複雑に考へるから、判断が間違つて來る。」

二人は臺地の方へ歸つて來た。ドン・ルイは通風口の近くに行つて其の邊の土地を調べ始めた。書齋の窓から四ヤード程離れた所に小さい水盤がある。まん中に小供の像が立つてゐる。

て、その角笛から水を噴き出してゐた。
ドン・ルイは、水盤の所へ行つてよく調べた。それで、彼は及び腰になつて子供の像を掴むとその軸を右から左に動かしてみた。それと同時に、像の臺が四分の一、まはつたのに気が付いた。

「あゝ、それだ」と彼は言ひながら元の姿勢に歸つた。

「何んですつて？」

「水盤の水は無くなりませうよ」

彼の云つた事は確かであつた。水盤の水はダント／＼減つて、底が見えるやうになつて来た。

彼は水盤の中へ入つて腰を屈げて蹲んだ。水盤の内側は大石を組み合せて赤や白の模様細工をした壁になつてゐた。中央の邊の模様細工の所に鐵の輪がはめてあつた。それをドン・ルイは引つ張つたり上の方へ上げたりしてゐた。すると壁全體の模様が、十時乃至十二時位づゝの穴を彼の引いたり差したりする努力に応じて開閉するのである。

「此所へも金塊が入れてあつたんです。針金を釣に懸けて置いてその上を滑らして行つたんでせう。見給へ、此處に針金

が置いてある。」

「それに違ない！ 不思議な方法で解決しましたね！ 然し針金をどうして傳はらせるのです？ 針金の端はどこでせう？」

「いや、何所が端だか、それが分れば我々の目的は達せられるんです。大尉、家と直角の方向を執つて庭の下の堀まで行つて下さい。其處へ行つたら、君の丈より少し高い、木の枝を切つて下さい。あゝ、忘れてゐた。僕は、庭の小徑から出て行かなければならぬ。鍵を持つてゐますか？ あれば一寸借して下さい。」

パトリスは鍵を渡して荷揚げ場の近くの堀の所へ行つた。「もう一寸右の方へ寄つて。あゝもう少し。あゝそれで宜しい。暫く其所で待つてゐて下さい。」

とドン・ルイは彼に指圖した。

彼は庭の小徑から外へ出て荷揚げ場の方へ来て堀の外側から、

「大尉、其所なんですか？」

「えゝ」

「その枝を、高く縛り付けておいて下さい。此所から見えるやうに」

パトリスはドン・ルイの所に行つた。

セーヌ河の方を見ると舟の荷物を積み込んだり、荷上げたりの小棧橋が河岸に澤山並んでゐる。運送船が横着けになつてゐて、申の貨物を下ろしたり、又新しい貨物を積み込んだりしてゐた。その運送船のあとから、又同じやうな船が繋留される。

パトリスとドン・ルイが階段を下りて行くと、荷揚小屋が澤山並んで居た。初めに入つて行つた小屋は競争以來仕事を休んで居るらしい。其所には、使用に堪えない材料の中に、煉瓦や土臺石が雑然と積んであつた。窓硝子のこはれた小屋掛の建物や、蒸気起重機の臺などもあつた。柱に看板が掛つて「ベルトウ荷揚場構内」と書いてある。

ドン・ルイは三四メートル高くなつて居る岩壁を傳つて行つた。岩壁の上に荷揚場が、臺地の形をなして居る。

その臺地の半分は砂山である。岩壁の中に門があつて鐵格子が付いて居る。板で支へた砂が、その内側の大部分をかく

して居た。

ドン・ルイは鐵格子を開けながら、冗談めかして、「今度の冒険はどうです、どの門も、どの門も閉めてなかつた……どうぞ、これからの門も開きますやうに。」

その假説は證明された。すべてはドン・ルイが云つた通りであつた。彼は門を入ると、人足共が道具を散らかして居る休息所の方へ進んで行つた。

「此所までは、怪しい點は少しもない。」彼はさう言ひながら懐中電燈を灯して「パケツに、鶴嘴、手推車、梯子……ああ！ あゝ！ 私の思つた通りだ。レイルまであるぞ、小さな手推車のレイルが、ちやんと一揃ひある……大尉、一寸手を貸して下さい。此の背ろの方を片付けて見ませう……ああそれで好い。」

鐵格子の門と向ひ合つた所に、丁度水盤のと同じ位の開口が、長方形にあって居る。その上には針金が渡してあつて、無數の釣がかゝつて居る。

「此所まで袋が来る。つまりその隅の手推車の中へ袋が落ちると云ふ段取りですね。レイルを敷きのばして、勿論夜中

に、河岸をつたつて荷おろしの運送船の中に搬入した……はね板で積み込むだけの簡単な仕事だ！」

「さうしたら？」

「さうして佛蘭西の金貨が此處から……勝手な所へ……何所か外國へ行つたんです。」

「では最後の千八百袋の金貨も、もう送られて了つたと云ふんですか？」

「え、まあそんな事でせう。」

「では、もう手後れになつたと云ふんですね？」

ドン・ルイは何にも答へないで、暫く考へ込んで居た。パトリスは自分が少しも想像しなかつた事件の成り行きに呆然とした。そしてドン・ルイが、極かの時間で到底解りさうもない錯雑した出来事をドシ／＼形付けて行く手並には驚かすには居られなかつた。

「これは全く不思議だ！ 一體どうして出来たんだらう。」と彼は言った。

ドン・ルイは、黙つて、ポケットから本を取り出した。それは先刻の膝の上に展げて置いてあつたのをパトリスが見た

あの『ベンジャミン・フランクリンの思ひ出』であつた。彼はその中の一行を指で壓へて相手に讀ませた。ルイ十六世の治世の終り頃に書かれた記事である。

（その日頃、私共は毎日、宅の近くのパツシイの村へ出掛けて行つた。美しい公園があつて、無数の人々が水浴して居た。巧妙に掘られた運河が、四方八方に通じて、流れとなり溜となつて居る。

（人も知る如く、私は巧妙な機械仕掛に道樂的な趣味を持つ男だ。それで、四方の水が流れて一つに落ちる水盤を見せて貰つた。水盤の真中に小さな立像があつて、それを四分の一圓だけ左方にまはせば、内壁に穴が開いて水が水道に流れ落ち、一直線にセーヌ河に注ぎ出る仕掛けになつて居た。）

パトリスは本を閉じた。ドン・ルイは説明を續けた。

「それから大分物事が變りましたよ。エツサアレが仕掛けを變へたのですね。彼の細工で水は、今日では他の方向へ流れて行くのです。そして此の水道は只、金を流出させる爲めば

かりに使つてゐたんですね。その上に、セーヌ河の河底も大分狭くなつてゐます。荷揚げ場が作られてから運河は此下を通るやうになつてゐます。私だつて此の本に教へられたので、別に六ヶ敷いことぢやないのですよ」

「え、でも、その本を讀むのに氣が付いたのは、えらいですな。」

「ほんの一寸したハズミでね、シメオンの部屋で見付けたんですよ。それで失敬してポケットの中へ入れて来たのですが、それも、彼奴が、その本を何故讀むのか、知り度くつて堪らなかつたものですから。」

「それですよ、彼奴は必つと、その本で、エツサアレ・ペイの秘密を探知したのに相違ないのです。それ迄は、その秘密を知らなかつたんですね。所が、彼奴が主人の本棚の中から見付け出してから初めて知つたんですよ。どうお考へですか？ 私の意見に賛成出来ないますか？ 私とは少し考へが違ふやうですな。ぢや一つ見解を聞かして下さい。」

ドン・ルイは夫れに返答しなかつた。彼は凝つと河の上を注視してゐた。波止場の近くで、荷揚げ小屋から少し離れた

所に人氣もなさうな運送船が繋留されてゐた。だが、煙が糸のやうに甲板の上の管から立ち昇つてゐる。

「をかしいな。あの船へ行つて調べて見ませう」

運送船には

ラ・ノンシャラント・トロイエ

と書いてあつた。

彼等は波止場から、運送船の上へ超えて行つた。甲板の上の澤山の綱や桶の上を踏んで歩かなければならなかつた。昇降口から船室のやうな所へ入つて行くと、そこは、寢室と臺所を兼ねた、一種異様な部屋だつた。頑丈な肩幅の廣い、黒い髪の毛が立つてゐた。その男の着物は、綿の上衣に、補綴ぎの洋袴である。

ドン・ルイは二十フランの紙幣を、彼に渡した。男はピツクリして受取つた。

「船長！ 一寸訊きたい事があるんだがねえ。近頃ベルトウの波止場に碇泊してゐた運送船を見なかつたかい？」

「うん、あの發動機の運送船ですか。昨日出帆しましたよ。」

「船の名は何て云ふんだい？」

「ベル・エレヌてんだ。船に乗つてゐたのは男二人と女一人
でね。手唐ですぜ。俺らは話してゐたのが何處の言葉か知ら
ねえが……多分英語か西語でせう……何んにしても
俺ら解らなかつた。」

「然し、ベルトウの波止場は、休んでゐるぢやないか？そ
れとも仕事してゐるのかね？」

「うん、大將が戦争に行つたのでね……人足長も行つたのだ
さうだ。俺らも仲間も矢張り召集を待つてゐるので……心臓
が悪からうがどうだらうが」

「然し休んでゐるのに一體その船は何してゐたんだい。」

「知らない。然しその人は夜びつて働いてゐましたよ。荷揚
げ場にレールを敷いてね。手推車を押してさ。何か知らぬが
大分荷物を積んだやうですよ。だが、朝早く出帆してしまつ
た。」

「どちらの方へ行つた？」

「河下のマントの方へ。」

「船長、有り難う。聞き度かつたのはその事なんだ。」

彼等がエツサアレ家へ歸つたのはそれから十分程後であつた。パトリスとドン・ルイは、シメオンがドン・ルイと出合つた後直ぐ乗つて行つたあの自動車の運転手に會つた。彼の話によるとドン・ルイが想像してゐた通り、シメオンは運転手に命じてサンラザアル街の停車場へ車を走らせて、其處で切符を買つたと言ふ。

「何處までの？」とドン・ルイが訊いた。

「運轉手は答へた。」

「マントまでの！」

「ベル・エレヌ」號

「今度こそ間違ひはないぞ」とパトリスは叫んだ。「金貨は送り出されたとデマリオン氏へ来た情報……夜中に、何の準備もなしに、同じ船の船員の手で、仕事をやられたあの手早さも……外國人だつた事も……船のとつた方向も……何から何まで一致する。多分、金貨を投げ込んだ穴庫と、それを最後に貯ひ込んだ隠し場所との間には、金貨を一時とどまらせる

ための中宿があるに違ひない。でなければ、千八百袋の金貨が、艀割の中の端から端まで並んで吊られて、船で運ばれるのを待つて居たのか？……」

「それは兎も角、もつと重要な事は、ベル・エレヌ號が何所に隠れて機會を待つて居るのか、それを知る事だ。昔エツサアレは秘密の洩れるのを怖れて、火花の雨を信號に用ゐて居た。今度はそのエツサアレの仕事を繼承して居るシメオンだから、彼奴もきつと、船の者に何か合圖したのにきまつて居る。それで、金貨の袋がルウアンかアーヴルの方へ運ばれ、そこから何所かへ……東洋の方へ送られるのだらう。つまり、石炭の下で、船艀の底へ、何十噸積まうが、大した事ぢありませんからね。違ひますかね？私には、さう信じる理由があるんですが……」

「それから、マントです。彼奴は其所までの切符を買つた。だからベル・エレヌ號もそちへ行くと。マントです。そこで金貨の受渡しもやれば、そして水夫かなんかに變装して、船の中に乗込む事も出来る。……見る者も、語る者もない……金貨と大泥棒は消え失せる。どうです？間違ひないでせ

う？」

再び、ドン・ルイは、パトリスの言葉に答へなかつた。然し、パトリスの理屈には同意したのか、暫らくして彼は言つた。

「宜ろしい。調べて來ませう。彼は運轉手の方を向いて『おい、車庫へ急いで行つて、八十馬力の自動車に乗つて來て呉れ。俺はマントまで、一時間足らずで行き度いんだ。大尉、君は……』
と言つた。

「私も一緒に行きませう」

「では誰が……看視するんです？」

「コラリーをですか？ 彼はもう大丈夫、危険な事はありませんよ。シメオンは、自分の計畫が失敗したのだから今度は自身を守らなければならぬ……それに金塊の袋と。」

「どうしても行かうと云ふんですか？」

「え、どうしても」

「どちらにした方が好いか、然し、これは君の事件にも關係してゐるんだから、ぢや一緒に行きませう……然し、用心の

爲めに』と彼は、大きな聲をして『ヤ・ボン！』

セネガアレ兵は急いでやつて来た。

ヤ・ボンはバトリスに對して犬のやうな忠實な感情を持つてゐると共に、ドン・ルイに對しては更に宗教的高拜のやうなものを感じてゐた。此の冒險家の一寸した行動でも、彼には非常な法悦を興へた。彼は、偉大な御主人の前でも、決して笑ひ止まなかつた。

『ヤ・ボン、此頃はもう好くなつたのかい？ 怪我は癒つた？ 勞れは？ 好し、それでは俺れと一緒に来い？』

彼は、ヤ・ボンをベルトウの荷上場から少し離れた小棧橋へ連れて行つた。

『今晚の九時に、此の椅子に腰掛けてゐて、此處を見張りして居て呉れ。それから何か食ふ物や飲むものを持つて来な。下の方で起る事には特別に氣を付けるんだよ。多分何事も起らないだらうと思ふんだが 何心配しなくなつても好いよ。然し、俺が歸つて来るまで……それともお前の手を煩らはすやうな事があつたら格別だが、其處にジツとしてゐて呉れ。』

暫く休んでそれから又、

『ヤ・ボン、シメオンには特に氣を付けてくれ。君に怪我させた奴は彼奴なんだから。若し、彼奴の姿を見たら、咽喉首へ飛び付いて……此所まで引張つて来て置け……然し殺してはならないやうに氣を付けるよ！ 今、そんな馬鹿な事をされちやあ 堪らないんだ、彼奴の死骸には用事がないんだ。生きてゐる彼奴に一寸用事があるんだから、ヤ・ボン解つたか？』

バトリスは、少し不安になつて来た。

『その方面で何か氣になる事があるんですか？ もう問題にする必要がないと思ひますがね？ もう彼奴は行つて了つたのですから。』

『いや大尉、良い大將は、敵の追撃する時には占領した土地を再び敵に荒らされないやうに、要塞の内に守備兵を必ず残して置くものですよ。ベルトウの波止場は、確かに敵の策源地なんです。だから見張をして置くのですよ。』

ドン・ルイはコラリイに就いても亦充分の注意を拂つた。彼女の神経は極度に緊張してゐるから休息と誰かの看病が必

要だ。彼等は、彼女を自動車の中へ連れ込んで、全速力で巴里の中心に車を走しらし、マイオ街の分院へ連れ込んだ。其所で看護婦の手に彼女を預けて、醫者と呼んで貰つた。それから、看護長に一切面會人を謝絶するやうに、又バトリス大尉と云ふ署名の手紙の外、一切返事を彼女に書かせないやうに嚴命して置いた。

九時頃サン・ゼルマンと、マントとの間の道を、自動車が全力で走つて行つた。バトリスはドン・ルイの側に坐つて、途途色々考へて見たが、事件はどこから見ても確實な物となつて来た。従つて、彼の心には勝利の喜びがひしひしと込み上げて来るのであつた。然し、又考へて見ると、今迄ドン・ルイが人の説にも二もなく賛成した事も、疑へば不可解な點だつたので、ふと疑惑が湧いて来た。

『私に、二つ解らない所があるんです。第一、四月四日七時十九分にエツサアレに殺された人は誰れなんです？ 私は斷末魔の悲鳴を聞いたんです。一體誰れが殺されたのですか？ 死骸はどうなつたんです？』

ドン・ルイが、黙つてゐるので、バトリスは續けて、

『第二の點は、もつと不思議なんです。シメオンの事ですがね、彼奴の友達ベルワルの惨殺に對する復讐を畢生の目的とし、一方では、コラリイと僕との幸福を願ふ事を唯一の目的としてゐた。そして、どう考へてもその目的に不純な分子があらうとは思へない。それが、或る日の事、彼の敵であつたエツサアレ・ベイの存在が見えなくなると同時に、ガラリと態度を變へて急にコラリイと私とを迫害するやうになつた。そして會つてエツサアレ・ベイが私の親に用ひたと同じあの怖ろしい企みを私たちの上にするやうになつた。』

『實際貴方だつて此の變化には一驚するでせうね。金の爲めに催眠術にでも權つたとしても云ふのでせうか？ 單に莫大な財産をせしめる秘密を知つた爲めに此の罪惡を行つて居るものだと説明しても差支無いでせうか？ 突然に起る衝動に驅られて、立派な男が急に惡漢に變つて了ふものでせうか？ どう云ふ風にお考へになります？』

ドン・ルイはまだ沈黙を續けてゐた。バトリスは、此等の謎を、此の有名な冒險家の手で、瞬間の裡に解決して貰はうと期待して居たので、少々癢にも觸り、又意外でもあつた。然

し、彼は最後の努力を試みた。

「で、黄金の三角？ これも、一つの不思議として考へるべきでせうか。兎に角、我々が今迄見た物の中には、三角は影も形もありませんでした。金の三角は何所にあるんでせう？それがどう云ふ意味か、何か御意見がありませんか？」

ドン・ルイはまだ黙つて居た。

「では、何です？ 御返事はないのですか……え？ 何だか思案に餘つてらつしやるやうですね。」

「結局、さうですね。」

「どうして？」

「どうしてつて事もなしに」

「然し……」

「私は少し深入りし過ぎたやうに思ふのです。」

「何が、深入りし過ぎたのです？」

「此の、我々の事件にね。」

パトリスが反問しない間に、ドン・ルイは説明を始めた。

「大尉、私は君に大きな共鳴を持つ者です。そして、君に利害のある所には私はどんな事でも興味を持つて居るんです。」

グランドホテルへ泊る事にした。

彼は翌朝遅く起きた。ドン・ルイから電話が掛つて来た。

シメオンは郵便局へ行つた後セイヌの方へ降りて行きそれから又停車場の方へ引き返して、其所で厚いヴェエルで顔を隠した、一寸氣の利いた風をした婦人と會つて、ホテルへ一緒に歸つた。そして此二人の男女は三階の部屋で食事をしたといふ報せだつた。

四時頃ドン・ルイは再び電話をかけて、セイヌ河に面して居る或る場末のカフェーへ至急に來て呉れと云つた。二人はそのカフェーからシメオンが荷揚げ場に居るのを見た。彼は手を背へ廻はして、何の的もなしに散歩して居る恰好であつた。

「頸巻、眼鏡、いつもの衣物、一寸も姿を變へてゐないですな。見て御覽なさい。何にも知らぬ顔をしてゐるが、彼の眼はベル・エレヌ號が來る筈の方向の河面へ向いてゐますよ。」とパトリスは言つた。

「さうですな。おや女が來ましたよ。」ドン・ルイが言つた。「あゝ、あの女だ？ 僕はこれ迄二三度會つた事がありまし

だが、此所に私以外には誰れにも關係して貰ひ度くない問題があるんです。そして又僕が現在全力を盡してゐる目的がある。それは、佛蘭西が盗まれた金貨の袋を探し出す事なんです。で、此の金貨は、どうしても見逃し度くないのです。君の點ではもう成功したのですが、まだ、私の方は駄目なんです。君等は、二人共助かつたが、私の方の千八百袋の金貨はまだ手に入らない。私は、それが手に入りたいのです……どうしても取り返し度いのです。」

「もう在り所が知れたんですから、取り返したのも同然でせう。」

「いや屹度取り返せませす、目の前に金塊がちら付いて來ればね。だが、實際さうなるまでは何にも申し上げない方が好い。」

マントへ行つて餘り永い間、尋ね歩く必要はなかつた。老シメオンの人相そつくりの旅人が三帝ホテルの三階の部屋に寝てゐる事が直ぐ解つた。

ドン・ルイはそのホテルの一番下の部屋へ泊る事にしたが、パトリスは跛足で敵の目に著き易いと云ふ所から、彼は

た。」とパトリスは言つた。塵除けの外套の上からでも、女は好く肥つて居ると云ふより、完全に發達した體格の持主だと云ふ事がよく解る。そして毛皮の帽子の縁から厚いヴェエルを下ろしてゐた。彼女はシメオンに電報を渡して暫く立ち話をしをしてゐたが、カフェーの前を通り過ぎて少し下手の方で立止つた。

シメオンは、此所で紙切れへ何か書いて彼女に渡した。彼女は別れて町の方へ行つて了つた。シメオンは相變らず河の上を眺めてゐた。

「大尉、君は此所にゐて下さい。」

とドン・ルイは言つた。

「だが、敵は用心してゐませんよ。決して振り向いて見ないですから。」とパトリスは抗議するやうに言つた。

「大尉、物事は常に慎重な態度でなけりや、駄目ですよ。シメオンが何を書いたのか知らないなんて随分情けない話です！」

「私が……」

「女の後を随けると云ふんですか？ いけませんよ、大尉、

甚だ失禮な言ひ分ですが、君に一寸適しない仕事ですよ。私
みたいな者に丁度好い仕事です。』
彼は出て行つて了つた。

パトリスは待つてゐた、數隻の小船が河を上つたり下つた
りしてゐた。たゞ機械的に彼はそれらの船の名を讀んだ。ド
ン・ルイが出て行つてから三十分程して、強力な機關の音が
聞えた。それは數年前から運送船によく取り付けられてゐる
機關の音だ。

河の彎曲して居る所から一隻の運送船が顯れて來た。彼の
前を通り過ぎる時にその船名をよく見れば、パトリスは、ハ
ツとした。『ベル・エレヌ』だ！

ベル・エレヌ號は、發動汽船特有の、規則正しい音を立て
ながら美しい河面を滑るやうに進んで行く。可なり大きい、
そして舟幅も相當あつて、何にも貨物は積んでゐる様子は見
受けられない。然し船底は深く水の中に沈んでゐるやうであ
る。

パトリスは甲板の上に水夫が二人無心に坐つて煙草を喫ん
でゐるのを見た。傳馬が舳舳で引張られながら後から隨いて

行く。
舟は曲り角の所で、もう見えなくなつて了つた。パトリス
はドン・ルイが歸つて來るまでまだ一時間も待たなければな
らなかつた。彼は直ぐに、

『やア！ベル・エレヌは？』
『ええ、此所から二キロメートル程上手の所で傳馬を出し
て、シメオンを待ちましたよ。』

『で彼奴、乗つて行つて了つたんですか？』
『さうです』
『何にも疑はないで？』

『根柢り葉柢りよく色々な事を尋ねますね、大尉！』
『氣に掛けないで下さい！もう我々は勝利を得たんです！
我々は自動車で追つ驅けて、彼奴等を追ひ越して、ヴェルノ
ン邊で軍隊か、それとも警察へ通報して船に乗つて居る奴輩
を逮捕して貰ひませう。』

『大尉、誰れにも知らせない心算ですよ。こんな小つぽけ
な事件なんか我々の手で形付けて了はうと思ふんです。』
『それは又どうして？ 確かに……』

二人は互に顔を見合はせた。パトリスは心に起つて來る感
情をどうしても置す事が出来なかつた。

ドン・ルイは相手の心中を見透さなかつた。

『私が三億の金を持つて逃げて了ふんぢやないかなんて心配
してゐるんですか？ 莫迦らしい！ 三億の金を置すやうな
大きなポケットは何所にあります？』

『だが、それならどう云ふやうにするつもりなんです？』

『大尉、暫らくその返事は、少なくとも我々が完全に勝利を
得るまで待つて下さい。今の所は、も一度あの運送船を探し
出す事が何によりの急務なんですよ。』

彼等は三帝ホテルへ歸つて、それからヴェルノンへ向つて
自動車を走らせた。今度は二人共黙り込んでゐて、何にも話
しはしなかつた。

河と道路とは、數哩下手の方のロスニイからすつと續い
て、小山の裾を、並行しゐる。彼等がロスニイへ着いた丁度
その時に、ベル・エレヌ號はラ・ロツシユ・グイヨンの方へ曲
つた河筋に入つてゐた。其所から又河筋と道路は別々になつ
て又ボンニイルで再び一緒になる。船がボンニイルへ行き着

くまでは、どうしても、三時間要るが、自動車で小山の上を
走つて行けば十五分もあれば行ける。

彼等は村を通り抜けて疾走した。村の右手の外れに一寸し
た宿屋があつたので、ドン・ルイは運轉手に止まるやうに命
じた。

『若し俺等が、今晚十二時までには此處へ歸つて來なかつたら
パリへ歸つて呉れ。大尉、君は私と一緒に來ますかね。』

パトリスは彼に隨いて行つた。右手の方の道路は河岸に續
いてゐる。その道を、十五分程歩いた時、ドン・ルイは何か

探してゐたものを見付け出したと云ふ様子である。窓を堅く
鎖した別荘の極近くで、一隻のボートが木材に繋がれてゐ
た。ドン・ルイは綱を外した。

丁度、七時過ぎ、夜も大分暮れかゝつてゐた。然し眞晝の
やうに、月明りが四方の景色を照らしてゐた。

『先づ手筈を説明して置きますが、第一に我々は此所で運送
船を待つのです。十時頃には此の邊を通るでせう。その時、
我々はその船に停船を命令してやる。月の光りや僕の懐中電
燈で、君の軍服を見たら、彼等は必つと言ふ事を聞きます

よ。そしたら樂に甲板の上に昇つて行けます。」

「若し拒絶したら？」

「そんな時にはもう力づくでやりませう。彼奴等は三人でしやう、僕等は二人なんですから、何んでも……」

「そして、それから？」

「それからですか？ あの船にゐる人夫等はシメオンが臨時に雇つたものです。で、荷物はどんなものか、何にも知らなにいに定まつてゐますよ。私たちがシメオンの奴を取つ締めて置いて、彼奴等に鼻薬を喰はせて置けば、思ふ所へ船を引張つて行つて呉れます……ええ、そこが焦點ですよ、船はもうこちらの意志通りに動くんです、それで適當な時、船の荷物をおろすまでの話なんです。それが私の戦利品、まあ報酬と云つたやうなものですなあ。これは私以外には誰れも要求する權利は有りませんから。」

パトリスは立ち止まつた。

「私はそんな事には賛成出来ませんね。」

「宜しい、そんなら別に君に關係した仕事じやないんだから秘密を守ると云ふ事だけは誓つて下さい。誓つて下されば、

此所でお別れませう。私は獨りで甲板へ斬り込むし、君は君で御自身の仕事に取り掛つたら好いでせう。然し私は直ぐに返答なさいとは言ひませんよ。どちらが君の得になるか、名譽と良心の命する儘に、考へて下さい。まだ決心するのに時間の餘裕はあげますよ。

「私の方としても、弱點を知られてゐるんですからね。まだ私には餘裕がありますから、一寸失敬して睡らして貰ひませう。大尉、お寢み！」

ドン・ルイは、それ以上の事は何にも言はないで、外套を引つ被るとボオトの中へ飛び込んで横になつた。

パトリスは激しい憤怒を押し靜める、非常な努力をしなければならなかつた。ドン・ルイの沈靜で、皮肉な、又抑鬱してゐるやうな聲は、頭にしみ込んだ。パトリスは多少彼に怖れをなしてゐた上に、彼の助力がなければ何に事も出来ないのだ。それに、コラリイと彼の命の恩人だと云ふ事を忘れる事はどうしても出来ないであつた。

沈靜の裡に時間が過ぎて行く。冷たい夜氣に曝らされてドン・ルイは靜かに睡つて居る。パトリスはどうして好いか解

らない。シメオンを掴まへて毒手を作し、又同時にドン・ルイが莫大な寶に手を掛けるのを阻止する方法は無いかと考へてみた。兎に角、彼の共謀者となるのは、考へても不愉快な事だつた。而も遠くの方から發動機の音が聞えて来る。ドン・ルイが起きた時、パトリスはもう決心した。彼と行動を共にする爲めに彼の側へ行つた。二人共言葉を交さなかつた。村の大時計が十一時を報じた。ベル・エレヌ號はだんだん近づいて来る。

パトリスは次第に興奮して來た。ベル・エレヌ號を拿捕することそれはシメオンを掴へる事だ。巨萬の富の奪還だ、コラリイを危険から救ふ事だ、怖ろしい悪夢から逃れ出す事だ。エツサアレの仕事の終焉だ。機關の音は愈々近くなつて來て、靜かなセエヌの流れを驚かしてゐる。

ドン・ルイは、櫂を取り出して河の中央の方へ一生懸命に漕いで行つた。

遠くの方から月明りに照らされながら黒い姿が動いて來る。十四五分経つとベル・エレヌ號は、彼等の眼の先きまで來た。

「お手傳しなくても好いですか？ 流れが強いので漕ぎにくいやうに見えますが。」

「何大した事はありませんよ」と言つた。その時からドン・ルイは機嫌が好くなつて來た。

「然し……」

ボオトの方向が變つて岸の方へ向くやうになつたので、パトリスは喫驚した。

「これは又！ 一體どうしたんです？ 引き返すんですか？ もう諦めてしまつたんですか？……私には何の事だか解らない。……私等が二人で、彼奴等が三人だから恐くなつたんですか？」

ドン・ルイは河岸に飛び上つてパトリスの方へ手を差し出した。パトリスは夫れを跳ね退けて腹立たしさうに、

「どうした事なんです、一應説明して下さい！」

「説明して居ては時間が費つて仕方がない問題だ。君、シメオンの部屋で私が見付け出した本があるでせう、君が捜査した時にもそのベンジヤミン・フランクリンの本はありましたか。」

「そんな事でグヅ／＼して居れない。耐らないよ。」

「それが今の重大問題なんです。大尉」

「そんな本はありませんでした」

「何！ さうか！ 熟考したのに。見事計略の裏をかゝれてしまつた。出来るだけ早く出掛けませう、直ぐに。」

パトリスはまだボオトの中にもゐた。彼は突然ボオトを岸から離して襪を上げた。そして

「俺が生きてゐる限り、乞食野郎が馬鹿にしつゝけて居ると吐いた。」

そして十碼ほど岸から離れながら、

「怖ろしいんでしたら私一人で行きませう。助けて貰はなくて好いから」

「承知しました、大尉、ぢや僕はこれから直ぐ宿屋へ歸つて待つてゐませう」

パトリスの仕事は、別に大した困難にも出遭はなかつた。彼は命令するやうな口調でベル・エレヌ號の停まるやうに叫んだ。彼は何事もなく甲板の上へ昇つて行つた。船頭は可成

り年とつた、バスク海岸の土人だつた。彼は陸軍官憲の者だと告げて、先づ彼れ等を威壓して置いた。船にはシメオンの姿も又金貨の袋らしいものも見當らなかつた。船内は空になつてゐた。それで應答も餘り永く續かなかつた。

「何處へ行くんだ？」

「ルアンへ参ります。補充徴發を受けましたので」

「然し、誰か途中で乗せたものがあるだらう？」

「はい、マントでお乗せ申しました」

「何と云ふ人を乗せたんだ」

「シメオン・デイオドキスと云ふ人です」

「で、その男は何處へ行つた？」

「暫らくして船から下りて、汽車へ乗ると云つて出て行きました。」

「何しに來たんだ？」

「勘定を拂つて呉れに來たんです」

「何の勘定を？」

「二日前巴里で積んだ荷物の積み賃です」

「袋か？」

「左様で御座います」

「何の袋だ？」

「一向存じませんが。充分お鳥目を頂いてゐましたので何にもお尋ね致しませんでした」

「其の荷物はどうした？」

「昨晚パツシイの下流で此の船へ小さい汽船が横付けになりましたね。荷物をその方へ積み變へて了つたんです。」

「汽船の名は何て云ふんだ？」

「シヤモア號と云ひまして、乗組員は六人で御座います。」

「今その船は何所にゐる？」

「此の船のズット先きの方へ参りました。急いで航行してゐましたから、今頃はもうルアンに着いてゐませう。シメオン・デイオドキスがそこで落合ふ筈で……」

「シメオン・デイオドキスとは前からの近づきか？」

「いえ、初めてで御座いますが、エツサアレさんに使はれてゐる人と云ふ事は知つて居りました。」

「おゝ、ぢやお前等はエツサアレの仕事の時々するの？」

「へい、時々は……いつも同じ賃仕事を、それからいつも同じ航路を」

「ぢや信號でお前等を呼び寄せるのか？ 違ふかい？」

「左様で御座います。古い温室の煙突へいつも火を點けます。」

「いつでも袋を取つのだらう？」

「左様です。中味は何にか一向存じませんが、いつも好いお金を頂きます。」

パトリスはそれ以上何にも訊ねなかつた。彼は直ぐにボオトへ飛び乗つて河岸へ着くとドン・ルイは甘さうに食事をし居た。

「早く／＼！ 荷物はシヤモアと云ふ船へ積み變へられましたよ。ルアンとルアーブルとの間で追付く事が出来ませう」

ドン・ルイは立ち上つてパトリスに白い紙包みを渡した。

「サンドウイッチが二つありますよ、大尉、今晚は骨が折れるんです。君は私のやうに寝てゐないからお氣の毒ですよ、行きませう。今度は僕が運轉させよう。大尉、僕の側へ坐りませんか？」

二人は自動車へ乗った。運転手は彼等の後に席を占めた。自動車が走り出すと直ぐ、パトリスは、
 『やゝ、何方へ行くんです？ 方向が違ひますよ。これでは、マントやバリの方へ行つて了ふぢやありませんか！』
 『えゝ、その方へ行かうと思つてゐるんです』とドン・ルイは笑ひながら言つた。

『え？ 何に？ バリだつて？』

『えゝ、勿論！』

『それは馬鹿氣てゐる！ さつきも船頭の話では……』

『あの船頭は君を誤魔化したんですよ』

『人夫は荷物が……』

『荷物？ 荷物さ』

『然しシヤモア……』

『シヤモア？ 船だ、大尉、繰返して言ふが私達は横道に夢中だつたんですよ。シメオン爺は實に偉い奴だ！ 相手にとつて不足はない。老シメオン！ 彼奴の展げた畏に、こつちが首まで突込んだわけです。面白い！ 少しがふかな？ 上等の冗談つて物には限りがある。だから、お笑ひは此所ら

で切り上げよう！』

『だが……』

『大尉、君はまだ信じないんですか？ ペル・エレヌ號で失敗して、又シヤモアを攻撃しようと思ふんですか？ おやいなさい。じゃあマントで下り給へ。だが注意して置きますがね、シメオンの奴は私たちよりも三四時間も前に巴りに着いてゐますよ』

パトリスは震へ上つた。彼奴が巴りに居るとは！ 巴りに

はコライイが、誰れにも番して貰はないで獨りである！ 彼

はもう反對しなかつた。ドン・ルイは車を走らせてゐる。

『おゝ、あの畜生奴！ 實際上手くやりやがつたな、畜生！』

『ベンジャミン・フランクリンの思ひ出』には參つたね！ 私

が此事件に參加したと知ると彼奴は『アルセエヌ・リュバン？

こいつは劍呑だぞ。彼奴の事だから、きつと謎を釋き、罷り

違へば金貨もろとも、此俺までが彼奴のポケットに捻ぢ込ま

れるぞ。彼奴をまくのはたつた一つの方法がある、はじめ

は本筋を追つ掛けさせるさ。夢中になつて追つ掛けて、ほか

に氣の行かぬ頃を狙つて、急に傍路にそらしてやる、それに

限る』とでも考へたのだらう。狡い奴ですね？ それだから、フランクリンの本が釣針の餌のやうに、わざと置かれてあつたのだ。わざと、お誂え向きの頁が開くやうな工合にね。だから、あんなに易々と抜穴を發見したのは、全く彼奴の思ふ處にはまつた譯ですよ。お負けに、御丁寧な針金にまで釣られて、穴庫からベルトウの波止場まで行くなど、私は全くシメオンの案内に従つた柔順な子供だつたのですね。でも、そこまでは、まだ好い、これからのお話が面白いのだ！ ベルトウの波止場に男が居た。ぼつねんと荷揚場に横着けになつた船がある。そこで聞かせては持つて來いの道具立てだ。聞かせて、聞かせ得たと私に自惚れさせるためなのです。そして私は自惚れた。聞くと同時に、私は有頂天になつたのです！

『そんならあの男は……？』

『え！ さうです、さうです。勿論シメオンの一味なんです。シメオンはサン・ラザルア街まで随けられると思つたので、その男に、今度は、彼奴がマントへ行つたと言つて置くと、二度も入れ智恵したんです。』

『マントで我々が喜劇を演じたんですよ。シメオンと金塊の袋とを乗せてペル・エレヌが通つて居つた。それで我々がペル・エレヌの後を一生懸命に追ひ掛けたんですが、船の中にはシメオンや金塊なんか乗せてあるものですか？ シヤモアの後を追ひ掛けてごらん。シヤモアから又他の船へ積み變へられてありますよ。シヤモアからラルアブル、それから世界の端まで追ひ掛けるが好い、その結果は先づ疲れ儘けと云ふ事になるんです。シヤモアなんて船があるかどうか分りませんよ、然しそのシヤモアと云ふ船で我々から逃れて了つたと思はせる間に、彼奴が仕事をしようとするんです。金貨は何處かへ行つて、シメオンの姿を見失つた揚句、諦めて、我が計畫を放棄する他はなくなる。彼奴が狙つたのは其所ですよ。狙ひは巧くあたりましたよ。けれど……』

自動車は全速力で走つた。時々、名も知らぬ村々で停車する。地方検査所である。旅行許可證の請求である。そして再び、志す道をまつしぐらに驀進する。

『然し……それにしても……』パトリスは半信半疑で訊いた。『どんな端緒で、失敗だと氣が付いたのです？』

「マントにあんな女が居たからですよ。尤も、それはまだハツキリしない端緒でしたがね、然し突然私は、最初我々が探りに行つたノンシヤラントといふ運送船に居た男を思ひ出した……覚えて居ますか……さう！ その男の顔……別にこれと云ふ理由はないんですがね、その男は女が變装してゐるんじゃないかと云ふ氣がしてならなかつたんです。その印象がこびり付いてはなれない。それでマントで見た女と比較してみたんです……すると……すると……稲妻のやうに私の頭に……」

ドン・ルイは何か考へてゐたのを罷めて、更に聲を低めて先きを話した。

「然しその悪黨が女なんて一寸受け取れませんか？ 誰れだらう」

沈黙は暫らく続いた。パトリスは理性の上からと云ふよりも寧ろ直覺的に、

「私はグレゴアールぢやないかと思ひますがねえ。」

「え？ 何？ グレゴアール？」

「ええ、グレゴアールは女ですよ」

クリン、金貨の抜け道、連続した針金、ひとりでに露見するやうに仕組んだ逃走、それからマントで出會ふ男、そんな物に浮か／＼乗つたら、打棄りを食つたのだ。今は平時ではない、戦時だ、旅行券、檢閲、その他色々……シメオン程の男が、そんな關所の誤魔化せないのを知らぬ事があるものか。臭いと思つて、大尉、私もちやんとヤ・ボンに見張らせて置いたんですよ。一泊劇は必ず波止場が中心だ、さう思つた私が間違ひか知ら？ リュバン氏ともある者、何で嗅覺が衰へて居よう。誓つて明晩は出直します。お話しした通りで、勝つか負けるか、決戦だ……でも必ず勝利はこつちの物ですよ。……萬事氷解……神祕なし……金三角だつて何でもないのであ……！ 然し私は貴金屬の三角を御覽に入れると言ふのぢやありませんよ。言葉の暗示に眩惑されては不可ない。金貨の袋を三角形に積んだといふ幾何學的外形でせう……それで土地を三角形に掘つたと言ふのかも知れない。何だつて好い！ 兎に角だね、金貨の袋は私の物だ。そして君とコラリイさんは、市長さんの前に出る、私の祝福を受ける、子供をどし／＼授かるのです」

「君は何を言つて居るんです？」

「確かに女ですよ。覚えて居るでせう？ ほら、カフェーの入口で彼等を逮捕してやつた時、仲間の者がさう云ひましたよ」

「どうして、そんな事を日記に書かなかつたんです？」

「ええ、ほんとですわねえ……微細な事だから書かなかつたんですが」

「微細な事？ 微細な事だなんて言ふんですか？ そりや重大事なんです。大尉、若しそんな事が分つて居たら、あの男がグレゴアールであることは直ぐ氣が付くんです。そして一晩中斯んな馬鹿な眞似はしなかつたのに、馬鹿らしい。」

けれども、ドン・ルイの機嫌は益々よかつた。パトリスが豫感に脅えて追々憂鬱になるのに反しドン・ルイは勝利者のやうな顔になつてゐた。

「さア、有難いぞ！ 戦争は愈々激烈だ！ 今までは激しくても間のびがして居てね、だから此リュバンは少々うんざりしたのだ。あんな工合に物事が進行すると思ふのが間違ひさ。あんな筋の運び方があるかね？ ベンジャミン・フラン

彼等は巴里の入口に着いた。パトリスはダン／＼興奮の度が増して来た。

「もう危険は無いでせうか？」

「ないとは云へない。お芝居はまだ／＼大詰に來ない。あの瓦斯の場を三幕目とすれば四幕、五幕目が屹度あります。敵もさる者、決して武器を捨てるやうな事はない」

二人は荷揚場に沿つて歩いた。

「下りて見ませう」とドン・ルイは言つた。

彼は口笛を小さく吹いてみた。三度許り繰り返した。

「返事が無い。ヤ・ボンはゐないな。いよく戦が始まつたんだ。」と彼は言つた。

「然しコラリイは……」

「コラリイさんの事をどうして心配するんです。シメオンは居所を知らないですよ」

ベルトウの波止場にも又荷揚げ場の下にも、人影は見えないかつたが、月の光で透して見ると運送船ノンシヤラントが繫留されて居る。

「甲板へ昇つて行きませう。グレゴアールと云ふ女が其處で

生活してゐるんぢや無いかとも思へますがねえ。僕等がル
アールの方へ行つたと思つて歸つて居るかも知れません。
どうかさうあつて欲しい。若しそうだとするとヤ・ボンは屹
度其處へ行つたのに違ないのです。そして何にか信號になる
ものを置いて行つてゐますよ。一緒に行きませう。さあ、大
尉」

「成る程。だが何んだか變ですなあ。氣味が悪くなつて來ま
したよ」

「何にが？」ドン・ルイは彼が言ふ事を察するだけの心に餘
裕があつたが、一寸訊いて見た。

「どんな事になるでせう？」

「どんな事にもなりませんよ！」

二人共懐中電燈を點けてピストルの柄を握つた。海岸と舟
との間に渡してある板を渡つて、船室の方へ歩いて行くと、
戸に錠が下りてゐた。

「おい、開けて呉れないか」

返事がないから破らなければならなかつた。普通のと違つ
て、部厚な扉だつたので破るのは困難だつた。

でも錠は外された。

「おや／＼！ 誰れか先に入つた者があるぞ、思ひ掛けも無
い事だ」とドン・ルイは言つた。

「何んです？」

「見給へ！ グレゴアールと云はれてゐる女ですよ。どうも
死んでゐるらしい。」

彼女は小さい鐵の寢臺の上へ仰向けになつて倒れてゐた。
男物の上衣を着てゐたが、上の方がまくれて彼女の胸が露れ
てゐた。死顔には恐怖の相がアリ／＼残つてゐる。船室が散
らかつて居る所から見れば激しい格闘が演ぜられたに定まつ
てゐる。

「矢張り僕の眼は高かつた。彼女の側に、マントで着てゐた
衣物がある。然し、大尉、君はどうしたんです？」

「パトリスは叫び度いのを鎮めて、

「そこに……向ふ側……窓の上に……」
川面に向つて小さい窓があつた。その窓硝子が壊れ外が見
えて居る。

「成る程！ 何？ ああそうだ、誰か此處から投げ出された

な。」

「ヴェエルが……青いヴェエルが……看護婦のヴェエル……
コラリイの……」とパトリスは吃つて云つた。

ドン・ルイは少し癡に障つて、

「そんな馬鹿な事！ そんな事があるものですか！ コラリ
イさんの居所は誰れも知つてゐる者が無いんですよ！」

「然し……」

「然しどうしたんです？ コラリイさんへ手紙でも書いたん
ですか？ 電報でも打つたんですか？」

「ええ……電報を打つたんです……マントから……」

……」

「何といふ事だらう？ 氣をつけたまへ！ まるで正氣ぢや
ない！ まさか眞實に電報を打つたんぢや無いでせう？」

「いや、確かに打つたんです。」

「マントの郵便局から打つたんですか？」

「さうです」

「郵便局に誰れか居ましたか？」

「ええ、女が一人」

「どんな女？ 此所に殺されてゐる女？」

「さうです」

「然し君が書いたのを女は横から読みはしなかつたです
か？」

「いゝえ、然し私は二度書き直したんです。」

「ぢや君は書き潰しを床の上へでも棄てたんですな。だか
ら、……しき寫しを見せるやうな物で……ち、ほんとに大
尉、君は飛んだことを……」

そこでパトリスはもう走つて居た、全速力で自動車の方へ
行つた。
三十分程して行つてみるとコラリイの机の上に二通の電報
が置いてあつた。一通は彼が打つたものだ。

「都合よく運びました。部屋の内静かにしてゐて下さい。
愛するものよ。」

パトリス大尉

も一通は確かにシメオンが打つたものだ。
「形勢險惡。それで計畫を變更した。直ぐ歸る。今晚九時に

貴女の庭木戸の所でお待ちします。パトリス大尉」

二番目の電報は八時頃受け取つて居る。それでコラリイは直ぐに出掛けた譯であつた。

第四幕

「大尉、君は可成り大きな間違を二つもして呉れたんです。第一はグレゴアールが女だと云ふ事を話して呉れなかつた事。第二には……」とドン・ルイが言つた。

然しドン・ルイは、パトリスが責任を感じて非常に落膽してゐるのを見たので、急に彼の肩に手を掛けて、

「そんなに失望しちゃ駄目ですよ、君が考へてゐる程悪い形勢ぢやないのだから」

「コラリイは逃れる際に、窓から身を投げたんです。」とパトリスは小聲で言つた。

「ただ生命には別條ない。シメオンの手に捕へられれば居るが、まだ殺されてゐるやうな事は斷じてないです」とド

う。これは至極簡単なんです。さうです、だから……」

「え？」

「コラリイさんは九時に指定された所へ行つたんです。シメオンは、女の相棒を連れて其處へ行つた、二人は腹を合はしてコラリイさんを扱つて此處へ連れて来たのです。悪企みをするのには此處が屈強な場所だと考へたのでせう、此處は、ほんの一夜だけの假りの宿で、コラリイさんは相棒に任せ、永久に幽閉して置く場所を探しに行つたのです。然し、幸ひな事には、——是れに就いては僕は自慢しても差支へないと思ふ——ヤ・ボンが其處にゐたのです。彼は椅子に腰掛けながら暗がりを見張つてゐたんです。すると土手を横切つて行く二人の姿と、其の後からシメオンが付けて行くのを見つけたの違ひないのです。」

「そこで、彼はシメオンの後を追つて敵と同時に此の船の甲板の上へ飛び上つたので、彼奴らは船室に鏡を下ろす暇が無かつたものと見えます。斯んな眞暗らがり、而も狭い所に四人も入つたんですから激しい争闘が始まつた事は容易に想像が付きまします。僕はヤ・ボンの力をよく知つてゐます。あの

ン・ルイは肩を聳やかしながら言つた。

「何故？ どうしてそんな事が解るんです？ 彼奴の手に捕へられたら死んだも同然ぢやないですか？ どう考へて見ても殺されたと同じ事です。違ひますか？」

「それや、殺されると云ふ危険は充分あります。然し、間に合ひさへすれば殺されるやうな事はありませんよ。そして充分間に合ふんですもの。」

「何か手掛りでもあると云ふんですか？」

「私が安閑としてゐると思つてゐるんですか？ 私のやうな経験の積んだ者が、此の船室の有様を見てゐながら二三分の裡に、此の不可解の出来事を、解決出来ないと思ひますか？」

「ちや直ぐに行きませう。敵の本陣へ乗り込みませう。」とパトリスは一刻も早く敵と取つ組み合ひ度いやうに叫んだ。

「まだ、周章てちやいけません、まあ聞いて下さい。私が知つてゐる丈の事をお話しませう。だが大尉、私が推理して行つた過程や、證據にする事柄などを云ふと、反つて君の頭を混亂さすかも知れないから、手取早くお話しませ

男は斯んな時には滅法強いんですよ。然し不幸な事には、用捨のない彼の腕で引つ捕へたのはシメオンの頸ぢやなくて……女の頸だつたんですよ。シメオンは此の機會を上手に利用したんです。彼は、コラリイさんを掴まへてゐて放さなかつたんです。そして、コラリイさんを小脇に抱き込んで明り取りの所から甲板へ跳ね上るヤ・ボンと女が争つてゐる裡に、外から船室の扉に鏡を下ろして了つたのでせう。」

「ちや何ですか？ その女を殺したのはシメオンで無くて、ヤ・ボンだと言ふんですか？」

「僕はさう思ひますがね。若し外にもつと有力な證據が無ければどうしてもさうです。女の喉が握り潰されてるのが、ヤ・ボンの仕業の何よりの證據です。たゞ僕に解らない事はヤ・ボンが何故自分の身體で戸を破つてシメオンの後を逐つて行かなかつたかと言ふ事です。きつと何處か怪我したのでそんな元氣が無かつたのかも知れない。女は直ぐに息を引き取らなかつたものと見えます、そして、シメオンが彼女を庇つて呉れるどころか、放つたらかして逃げて行つたのが續に觸つてシメオンの事を喋つて了つたのでせう。それで、ヤ・ボ

男は斯んな時には滅法強いんですよ。然し不幸な事には、用捨のない彼の腕で引つ捕へたのはシメオンの頸ぢやなくて……女の頸だつたんですよ。シメオンは此の機會を上手に利用したんです。彼は、コラリイさんを掴まへてゐて放さなかつたんです。そして、コラリイさんを小脇に抱き込んで明り取りの所から甲板へ跳ね上るヤ・ボンと女が争つてゐる裡に、外から船室の扉に鏡を下ろして了つたのでせう。」

ンが扉を破つて……きつとさうですよ」
「片手で然も負傷した男が、セーヌ河へ飛び込んで泳いで行つたと仰言るのですか？」とパトリスは訊いた。

「さうぢやない。窓に沿つて出張りがあるから、其所へ乗つて、それから外へ行つたんです」

「なる程、さうですかね。然し十分か二十分位はシオメンより後れて行つた譯でせうね？」

「そんな事はどうでも好い事なんです。女は息を引き取るまで時間があつた。だからシメオンの隠れ家をつくと饒舌つたでせう。」

「どうしてそんな事が解りますか？」

「君と斯うして話してゐる時にも二六時中注意して手掛りを探してゐるんです……そしてたつた今、その事が解つたんです」

「此所で？」

「たつた今の先まで、私はヤ・ボンから手掛りを得ようなんて少しも考へて居なかつたんですよ。女は此の船室の或る所をヤ・ボンに指した。その開け放しになつてゐる抽出しを指

したのでせう、多分——ヤ・ボンが探すと住所を刷り込んだ名刺があつたのです。ヤ・ボンは其の名刺を取つて、我々に知らせる爲めに向ふのカアテンの所へピンで突き刺しといたんです。私も今突き刺してゐるピンに氣が付いたんです。それは私がモロツコ十字章を、いつかヤ・ボンの胸へ付けてやつた時に使つた金のピンなんです。」

「住所は？」

「ギマル街、十八番地。アメデ・ワシユロオと書いてありますよ。ギマル街は此所から直ぐなんです、だから彼等が歩いて行つた路筋は大抵見當が付きます」

女の死骸などは打捨て置いて二人は直ぐ出掛けた。ドン・ルイの言ふ通り女の後始末は警察の仕事なのだから。

ベルトウの波止場を渡ると、ドン・ルイは

「梯子がありません。斯うした些細な事でも覺えて置かなければならない物です。シメオンの奴これで逃げたな。頭かくして尻かくさずの失敗ばかりする男です」

彼等は自働車でギマル街へ行つた。此の街はパツシイにある小さい町だつた。十八番地に可成り古い大きな貸間の家

があつて何か音がした。それは彼等が案内を乞ふた時に鳴つた午前二時の時計の音であつた。

餘程たつてから戸が開いた。車寄せから入つて行つた時、門番らしい男が窓の外へ首を出してゐた。

「誰方ですか？」と彼は訊いて。

「アメデ・ワシユロオ君に急用があつて會ひ度いのです。」

「アメデ・ワシユロオは私です」

「あゝ、君か？」

「ええ、私です。私は門番です。然し一體どんな事で……？」

「？」

「警視廳の命令で」とドン・ルイは怪しい徽章を見せながら言つた。

二人は家の中へ入つて行つた。アメデ・ワシユロオは背の低い、白い頬鬚を生やした善良さうな男だつた。小吏でも務め上げて来たやうな風だつた。

「俺れの訊問する事を隠さずに言つて貰ひ度いんだ。變な隠しだてなんかしては不可ないぜ。シメオン・デイオドキスと云ふ男を俺達は探してゐるんだが」と聲高かにドン・ルイは

言つた。

門番は飛び上るほど驚いた。

「あの人をどうかしようと思ふですか？ 若しそんな事をなさるなら、いくらお尋ねになつたつて駄目ですよ。あの御親切なシメオンさんがどうかされるんだつたら、私が責め苛まれる方がましです」

ドン・ルイは急に優しい聲で

「どうかするつて？ そりや全く反對だ、僕等がシメオン君の役に立たうと言ふんだ、シメオン君が今非常に危険に瀕してゐるからそれを助けに来たんだよ。」

「え？ 危険に瀕してゐる？ いや、さうでせうね。私はあの人が今日のやうに周章て居らしたのは今迄見た事がありません。」

「ぢや此處にゐたのか？」

「ええ、先刻まで」

「そんなら此處にゐないんだね？」

「いゝえ、只今はお留守です」

パトリスは非常に失望した様子で訊ねた。

「然し誰か一人置いて行つたらう？」
「いいえ、誰れか連れて來るといつてゐらつしやいましたよ。」

「女の人の？」とパトリスは勢ひ込んだ。

「ワシユロオは一寸躊躇した。」

ドン・ルイは上手に取つてくろつて、

「シメオン君が大切にして居る女の人のために、非常に苦勞して居るのは、よく知つてゐるんだよ。」

「御婦人のお名前は何んとお仰るんです？」と彼はまだ用心深さうに訊ねた。

「勿論エツサアレの奥さんだ。シメオン君が秘書をして居た銀行家の未亡人だよ。エツサアレの奥さんが敵から迫害を受けてゐる。それで、エツサアレの奥さんを敵の手に權らないやうに禦いでゐるんだ。で、俺達二人もその助力をしようと思つて、此の犯罪事件に關係してゐるんだ。それでどうしても言つて置かなければならぬのは君が——」

「あゝさうですか？」と彼はもう充分に信用したやうな口振りで言つた。「私は随分以前からシメオン・デイオドキスさん

を知つて居ります。私は元指物職でしたがその時分から随分よくして下さいました。お金も随分貸して下さいました。今の門番の職もあの方のお世話なんです。それで、時々私のお家へお出で下さつて、私の部屋へ腰を下ろして色々な事を話して下さいましたよ。……」

「それはシメオン君とエツサアレ・ベイとの關係だらう？ 成程ね、パトリス・ベルブルに就いての計畫だらうな？」

「色んな事。ええ、あの方はほんたうに好い方ですよ。それに今迄には随分好い事をしてゐらつしやいますよ。それから我々のやうな者にでも仕事させて、目をかけて、よく使つて下さいます。今度又エツサアレの奥さんの爲めに危険な事をお始めになつたんです」と彼は一寸躊躇しながら言つた。

「何？ もつと先を話して呉れ。エツサアレ・ベイが死んでからシメオンと會つた事があるか？」

「いいえ、今度が始めてですよ。一時頃に被在しました。スツカリ息を切らして、通りの方に氣を配つて低い聲で「俺は今追ひ掛けられてゐるんだ。追つ掛けられて」と仰言つたんです。それで私が「誰れに？」と申しましたら、「お前の知

らない男だ……片腕しか無い男なんだ。だがその片方の腕はペラ棒に強いんだよ。お前の頸の骨をヘシ折る位は朝飯前だよ」と其所まで仰言つて言葉をお切りになつたんです。それから極小さい聲で、私にはよく聞き取れなかつたんですが、

「まあ聞け、お前は俺と一緒に來るか。エツサアレの奥さんを連れに行くんだ。彼奴等は奥さんを殺さうとしてゐるんだ。それで巧く奥さんを隠したんだが、氣絶して居る。だからさげて來なければならぬ……いや、俺一人で行く、俺だけだ。どうか連れて來よ。だが、俺の部屋は空いてゐるか？ 夫れが知り度いんだ」と仰言いましたよ。申して置かなければなりませんが、あの方は姿をお隠しにならなければならぬ事になつた時から、此處で小さい部屋をお借りになつてゐらつしやるんです。それで時々姿をお隠しになる時は屹度此の部屋へ被在しやるんです。その部屋は他の下宿人からズット離れた處にあるんですよ。」

「それからどうしたんだ？」パトリスは心配さうに訊いた。

「それから出て被在つたんです。」

「ぢや何故歸つて來ないんだ？」

「それが心配なんです。何か危険が起つたんぢやないかとも思ふんです。後を付けて來た奴が攻撃したか、それとも奥さんの方に何か變つた事が起つたかしたのぢやないかと思ふんです。」

「奥さんに何か變つた事がつて？」

「何か變つた事が起つたんぢやないかと心配して居るんですよ。奥さんをお連れする道を最初教へて頂いた時、シメオンさんは「早くしろ、急がなければならぬぞ。奥さんを助ける爲めに穴の中へ入れて置かなければならぬかつたんだ。二三時間位なら好いけれど、それ以上入れて置くと奥さんが窒息してしまふ。空氣の缺乏が——」と仰言つたんです。」

パトリスは此の老人に飛び付いた。コラライが病氣で勞れ切つて居る上に、恐怖と苦痛との餌食になつて、見知らぬ處で殺されかけてゐるのだと考へると夢中にならずに居れなかつた。

「やい、直ぐに白狀しろ！ 奥さんは何處にゐるんだ！ さあ白狀しろ！ おい、俺達を此れ以上馬鹿にしようと思つたつて駄目だぞ！ おい何處にゐるんだ。貴様は知つてゐる筈

だ！ 彼奴から聞いてゐる筈だ！」
彼はワシユロオの肩を引搦んで激しく揺つた。さうして極度の憤怒を此の男の面上に激しく投げ付けた。

片方でドン・ルイは笑ひながら立つてゐた。
「やつたぞ！ 大尉、美事！ 仲々上手くやつた！ 君は私と一緒に仕事をやり出してから一段と進歩しましたな。ワシユロオはもう生かさうと殺さうと我々の儘ですよ。」
「え、僕が此奴に白状させるか、させないか見てゐて下さい」とパトリスは大きな聲で叫んだ。

「それはいくらしたつて駄目ですぜ」と彼は落着いて言つた。「お前さん等は、わしを欺したんだ。お前さん等はシメオンさんの敵だな。よろしい。わしはもう此れ以上の事は一口だつて言やしないから。」

「どうしても言はないか？ やい？ きつと言はないか？」
怒りに任せてパトリスはピストルを男に向けた。

「三つ數へるだけ猶豫してやらう、その時まで貴様の決心が付かんやうだつたら、此パトリス・ベルグルがどんな男か貴様に見せてやらう！」

門番は飛び上る程喫驚した。

「ええ、あんたがパトリス大尉？ ほんとうにあんたがパトリス・ベルグルかい？」

「さうだ爺さん。それが何か貴様の胸に思ひ當る事でもあるのかい？」

「あなたはほんとにパトリス大尉かい？ パトリス・ベルグルかい？」

「勝手にしろ、今から二秒間の裡に云はなけりや……」

「パトリス・ベルグル！ あんたがシメオンさんの敵だつて？ シメオンさんを……」

「俺はシメオンのやうな奴は野良狗同様にしてやるんだ！ 彼奴の相棒の貴様も同じ事だ！ 二人ともお揃ひの悪黨だ……」

「……おい、もう決心が付いたかい？」
「氣の毒な人だなあ。ほんとに氣の毒なお人。あんたは自分のやる事に氣が付かないのだな。シメオンさんを殺す！ 而もあんたが、ほんとにあんたが！ どんな悪黨だつて、とてそんな事は出来やしない！」

「それがどうしたんだい？ やい斃り損ひ！ 話すのか話さないか？」

ないのか？」

「あんたが、あのシメオンさんを殺す？ あのパトリスが？」

「あ、お前が？ パトリス大尉が？」

「それが何是悪いんだ！ 早く云つちまへ、此の野郎！ 何が悪いんだ！」

「あんたはシメオンさんの息子なんだ」

コラリイが、シメオンの手に捕へられ、墓穴のやうな處へ入れられてゐる事を聞いて一時に發した憤激や、胸の張り裂けるやうな心配は、此の一語を聞いた瞬間にスツカリ失くなつた。非常に滑稽な感じがして、パトリスは吹き出してしまつた。

「シメオンの息子だと？ 斃り損ひ！ 何を云つてゐるやがるんだ？ おい、それを言へば萬能だと思つてゐるんだな。さうだ、貴様は彼奴を助け度い心で一杯だな。やい、斃り損ひの大悪黨、そりや貴様の手だぞ。シメオンを殺しちやいけません、そりやお前さんのお父さんだ！ 俺の親父は悪黨のシメオン！ シメオン・デイオドキスがパトリス・ベルグルの親父！ 笑はせやがらあ！ やい、笑談も大抵にして置け

ないのか？」

！

ドン・ルイは黙つて聞いてゐた。彼はパトリスに一寸目くばせして、

「大尉、私に此の爲事を解決させて呉れ給へ。何、四五分もあれば片付きますよ。きつとお手間は取らせません」

彼はパトリスの返事を待たないで、此の老人の方へ向き直ると緩くりと、

「ワシユロオ君、その話を残らず話して貰はうぢやないか。そりや大變な事なんだから。重大な事なんだから、餘計な事を云はずに手取り早く言つて呉れないか。お前さんの云ふ事を何時までも聞いてゐる譯には行かないのだからね。シメオン・デイオドキスと云ふのはお前の主人の本名じやあるまい」

「いいえ、それが本名ですよ」

「彼奴はアルマン・ベルグルと云ふんだ。彼奴に惚れてゐた女がいつも彼奴の名をパトリスと呼んでゐたんじやないか？」

「ええ、息子と同じやうにね」

「然し此のアルマン・ベルグは惚れてゐた女と、同じやうな方法で殺されたんだらう、コラリイ・エツサアレのお母さんと同じ方法だね」

「ええ、コラリイ・エツサアレのお母さんは死にしましたが、男のアルマン・ベルグさんの方はまだ生きてゐるんです」

「そりや、千八百九十五年の四月十四日の事だなあ」

「ええ、千八百九十五年の四月十四日ですよ」

パトリスはドン・ルイの腕を掴んだ。そして、

「あなた、コラリイはもう殺される、悪黨に葬られて了ふ。それだけが一番大切な事件ですよ」

「では、その悪黨が君のお父さんだと信じないんですか？」とドン・ルイは訊いた。

「そんな莫迦な事！」

「大尉、それはさうと、君は震へてますね！……」

「そ、さうでせうよ……コラリイの事を考へるからなんですよ！ ええ、その爲めになんですよ……私はその男が何を言つてゐるんだか聞いてゐやしなかつたんです……その男の

言葉はみんな悪夢のやうです！ 言つて呉れなかつたら！ 黙つて呉れてたら！ あの野郎の頸の骨をへし折る事が出来たのに！」

椅子に、ドツカリ腰を下ろして、肘を机の上に掛けた両手で彼は頭を支へてゐた。どれ程怖ろしい災難でも、彼をそんなにまで苦しめるやうな事はあるまい。それほど無氣力になつて了つた。

ドン・ルイは一寸パトリスの方を向いたが再び門番に話しかけた。

「おい、グシユロオ君、スツカリ話して呉れないか？ 厭か？ 出来るだけ簡單にな。餘計な事は要らん。餘計な事は後からでも緩く聞くよ。千八百九十五年の四月十四日の事を俺は今聞きたいんだ……」

「千八百九十五年四月十四日に、公證人の書生と、立合ひの警部が私の親方の家へ来て、二つの棺を直ぐに造るやうに言つて来ました。丁度その時は、店の者總掛りで直ぐ爲事はやりました。夜十時頃親方に私と友達と三人してレイヌアール街へ行きました。其處の庭に建つてゐる離れ小屋の處まで」

「口が利けなかつたんです。もう私は石のやうに硬くなつてゐました。男がダン／＼意識を回復して兩眼を開くまで見てゐたんです。男が一番最初に言つた事は「彼女は死んで了つたかな？」それから直ぐに「此の事は誰にも話して呉れるな。俺は、死んだと皆に思はせるんだから、それが好い事なんだから」と言つたので、私は同意したんです。斯んな不思議な出来事に全く魂を奪はれて了つたので、子供のやうに言ふ事を聞いたんです……彼はヤツと立上つて、女の棺に凭れて、經帷巾を外しながら死んだ女の顔を幾度も接吻して囁きました。貴女の爲めに復讐させよう、今後、貴女の爲めに復讐する事と、貴女のお望み通り我々の子供、パトリスとコラリイを夫婦にする事に、私の一生を捧げる事にします。左様なら、永久に！」それから私に手傳つて呉れと言ひました。それで私共は、棺から女の死骸を引出して、隣りの寢室へ運んで行きました。それから庭へ出て大きな石を拾つて男の棺の中へ身代りに入れたんです。それが済んでから、私は棺を釘付けにし、それから尼さんを叩き起して歸りました。男は寢室に鏡を下して女の死骸を守りながら隠れてゐまし

「」

「そりや知つてゐるよ。それから……」

「小屋の中で死骸を二つ、經帷巾に包み棺の中に納めました。十一時頃、親方と友達は歸つて行つたので、尼さんと二人限りになつたんです。もう爲事は、棺を釘付けにするだけになつて居ました。眼さうにお經を讀んで居た尼さんは、たうとうグツスリ眠つた。その時起つた事は……考へても胸震ひがする。私は總身に水を浴びせかけられたやうに思ひましたよ……その時の恐さはとても一生忘れられません。餘り怖かなかつたんでたうとう腰が抜けて了つたんですよ……お、男の死骸が動き出したんです。男は生き返つて來たんです」

「ぢやその男が殺されたんだと云ふ事は知らなかつたのか？

その男の殺された話は知らなかつたのか？」

「二人共、瓦斯で窒息して、自殺を遂げたんだと聞きまし

た……一時間程すると男は意識が明瞭になつたんです。然し

毒氣には當てられてゐましたが」

「その事を何故尼さんに言はなかつたんだ！」

へた。

彼は顛顛の處を拳を固めてゴリ／＼押へてゐた。

「私は小屋に閉め込まれた時天窓を覗く彼の顔を夕暗に透かして一度だけ見た事がある……我々が死んで行くのを喜んで見てゐた顔を。憎悪に燃え、氣狂のやうになつた顔を……エッサアレよりズツト激しい憎悪を表はしたあの顔……」

「そりや大きな間違だ！ 幻だ！」と老人は反抗した。

「氣でも狂つてゐたらう」とパトリスは呟いた。

だが突然發作的に起つた怒から、パトリスは拳固で強く机を撲つた。

「嘘つけ！ そんな馬鹿な事があつて堪るものか！ 俺の父親ではない。そんな大悪黨……」

部屋の中を歩き廻つて彼はドン・ルイの前でふと立ち止つた。そして大聲で、

「さ行きませう。でないと僕は氣が狂つて了ふ。悪夢！ 腦髓がデン繰り返へる、物事が間違つて了ふ、まるで悪夢だ！ さ、行きませう。コラリイが危い。大事な事はそれだけなんですから」

老人は頭を振つた。

「私が心配するのは……」

「何を心配して居るんだ？」とパトリスは怒鳴り付けた。

「心配なのは、私の旦那が追かけて来た男に引摺まへられたんぢやないかと思ふんです……それからエッサアレの奥さん

をどうして助けるかと思ふんです。お氣の毒に、忙しくて息も碌々出来ない有様だと云つてゐられましたから」

「息も碌々出来ないだらうさ。だから、コラリイも今が斷末魔か……」

パトリスは酔拂ひのやうな足付きでドン・ルイの腕に寄掛りながら門番の家を出て行つた。

「斷じてそんな事は無いです。シメオンは、君のやうに熱に浮かされてゐます。彼の危険は迫つてゐる。彼奴こそ、恐ろしさに震へてゐるでせう。あんな言葉でびく／＼する必要はない。まあ、僕の云ふ事を信じ給へ。今の處ではコラリイさんに危険は有りませんよ。まだ／＼時間があるから大丈夫です」

「然しヤ・ポンは？ 若しヤ・ポンが彼奴の喉に手をかけた

ら」

「僕は、ヤ・ポンにどんな事があつても、彼奴を殺すなど、言つて置きましたから、シメオンは必ず生きてゐますよ。それが大事な事なんです。シメオンが生きてゐる限り危険は有りませんよ。決してコラリイさんを殺さうなんて思つてやしませんから」

「彼女を憎んでゐるのに、何故殺さないと云ふんです？ 何故？ 彼奴の心の中に在るものは一體何んです？ 我々の戀愛事件の爲めに彼奴は生命を捧げてゐた、それが成立した次の瞬間からは、もう呪ひに變つて了つたのです」

彼はドン・ルイの腕を固く握りながら囁き掛つて、

「彼奴が僕の親父だと信じますか？」

「それだね……何しろよく話が合つてる所があるしね、どうしたつて……」

「あゝ、どうぞ、そんな眞綿で首をしめないで、ハッキリ言つて下さい」

「シメオン・デイオドキスは君のお父さんですよ、大尉」とドン・ルイは答へた。

「あゝ、どうぞそんな事を言はないで下さい！ 何卒！ それは餘りに怖ろしい事だ。あゝ、神様！ 我々は五里霧中に在るんです！」

「然し、その霧は少しづつ晴れて来たんですよ。プシコロオと我々が話してゐる裡に、少し許りの光明が差し込んで来たのです」

「一體どんな事なんです？」

然しパトリス・ベルグルの頭は熱に浮かされて考へに何の統一も無かつた。突然立止つて、

「シメオンは門番の家へ歸つて行つたかも知れない……私たちがもう此處に居ないのだから其處へコラリイを連れて来るかも知れない！」

「そんな事はない、若しそんな事が出来るならズツト以前にやつて居ますよ。彼奴の處へ押し付けて行かなければ」

「ぢや何處へ？」

「勿論、總ての戦が行はれた所へ……金貨のある所へですよ。敵は黄金の在處を中心として動いてゐるんです。假令戦に負けても、其處から離れるやうな事は決してありません」